
プロジェクト・メガル3

DirtyTom

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

プロジェクト・メガル3

【Nコード】

N4886C

【作者名】

DirtyTom

【あらすじ】

人類を滅ぼすべき存在と特定し、発動した太古のプログラム。彼方から押し寄せる魔獣の群に対抗できるのは、大国の軍事力をも凌駕する大いなる力だけだった。人類対非人類、人間同士の空虚な争いの中、水面下で新たなプロジェクトが進行する。などと小難しくあおるほどのものではありませんが、よろしかったらのぞいてみてください。

第一話 『海より来たる禍』

OP

それは何の前触れもなく起こった。

突然の海底火山の爆発は辺り一面を白濁させる。

霧のように立ち込める水蒸気の壁の中からのぞく一対の光は、弛緩しきった人類に警鐘を鳴らすかのように爛々と妖しくうごめき続けた。

この世の誰も見たことのない、狂猛なまなざしだった。

「たった今ガイアからプログラムの発動を確認しました。カウントダウンが始まっています」

オペレーターの声に一人の男が振り返る。その両眼にはすでに覚悟を宿していた。

「ベリアルか！ バールか！」

「いえ、アスモデウスのようです。先回とは比較にならないほどの巨大な反応です」

「ついに、やってきましたな」

かたわらで別の男が呟く。遠く海の彼方へ視線を泳がせながらつないだ。

「人類の未来を脅かすわざわいが……」

それを受け、最初の男が重々しく頷く。

そしてその男、風野守人は、震源地から遠く千二百キロメートルを隔てた砦の中でそれを宣言した。

「これよりオペレーション・アスモデウスを開始する！」

第一話 『海より来たる禍』

1

私立山凌学園高等学校の講堂では入学式が催されていた。

中総半島沿岸部に位置する人口約十万の工業都市、山凌市の高台に置かれたこの高校は、今年度で開校八年目をむかえる。全校生徒数約千二百人。新設校ながら文武両道を掲げ、有名大学への進学率と、近年では全国大会へ進出する運動部も出始めたため、周辺地域では人気校だった。屋上からは街を一望でき、遠く海の彼方まで臨める絶景でもあった。

校長に招かれ、新任教師が壇上へとのぼる。

「樹神陵太郎先生は我が校の記念すべき第一回卒業生であり……」

一人の少年があくびをし、講堂の窓から空を仰ぎ見た。

澄み渡る青空と鳥達のさえずりが春眠を誘うようだった。

「穂村君」

中庭で後ろから肩を叩かれ、先の少年が振り返る。その顔ぶれを確認し、穂村光輔は安心したように笑ってみせた。

「篠原か」

「篠原か、じゃないよ。なんで先に行っちゃうの。みんな待ってたのに」

気のないそぶりの光輔に、呼び止めた少女、篠原みずきは不服そうに口をとがらせてみせた。

「だって、俺、みんなとクラス違うしさ。校舎まで別なんだぜ」

「ぼやくな、ぼやくな」みずきのそばにいた少年が合いの手を入れる。「昼休みになったら相手してやるから」

「おまえはいいよな、祐作と同じだし。俺のクラス、同じ中学の奴いないんだよな」

「さびちいんだ」みずきがからかう。ツートールを楽しそうに揺らした。

コノヤローという表情で、みずきを見下ろす光輔。はあ、とため息をついた。

「別にさびしくないよな。俺がいるから」

聞き覚えのある声に振り返る光輔。それから嬉しそうに笑った。

「りょうちゃん」

光輔にそう呼ばれると、スーツ姿の長身の青年、樹神陵太郎は少しバツが悪そうな顔になった。

「こらこら、学校じゃこだま先生と呼べ」にやりと笑う。「ちなみに俺がおまえのクラスの副担だ」

「マジかよ。やりにくいな」

「いいだろ、もともとおまえの保護者みたいなものだしな」

「ははっ、また言ってる」

「だってそうだろうが」その太い腕で光輔の首をホールドした。「泣き虫光輔君」

「うげえ……」

楽しそうな二人を怪訝そうに眺め、みずきがおそるおそる口にする。

「穂村君、先生と知り合いなの？」

「ああ」みずき達を放ったらかしにしていたことに気づき、光輔が顔を向けた。「前に話したろ。昔施設で一緒だったんだ。その時は先生じゃなくてただのりょうちゃんだったけど。ま、今でもりょうちゃんか」

「樹神先生だ」

「だって……」

ははっと陵太郎が笑う。懐かしそうに光輔を眺めた。

「おまえ、本当に今のままでいいのか。せっかくまた一緒に暮らせると思ったのにな」

「いいよ、俺は。あんまりりょうちゃん達に甘えるわけにもいかな

いし」

「遠慮することなんかないんだぞ。俺も雅も最初からそのつもりだったんだからな。雅、淋しがっていたぞ。おまえのことをずっと気にかけていたから。おまえの部屋まで用意してたりな。なんだっただけからだって……」

「ありがとう、りょうちゃん。でもやっぱりやめとくよ。このままりょうちゃん達の世話になったら、俺、駄目になりそうな気がする。財団からの援助があるだけでもありがたいのに、その上そんなことしてたら他のみんなに申し訳なくて。ちょうど一人暮らしもしてみなかったし」

「そんなこと気にしなくてもいいのにな……」 陵太郎が少しだけ淋しそうな顔になった。「ま、いつでも気が変わったら言ってこい」

「ああ、わかったよ、りょうちゃん、……じゃなくて、こだま先生」

「そうだ。その調子だ」 光輔を優しく見守るまなざしには常に強い力が宿っていた。みずき達へ振り返る。「すまなかったな、邪魔をして。こいつは俺の弟みたいなものだから、みんなよろしく頼むぞ」

「はあ……」

「だが安心しろ。絶対にひいきはしない。むしろ厳しくくらいに扱うから」

すると光輔の顔色が豹変した。

「教育委員会に訴えるぞ！」

「訴えろ、訴えろ。いつでも受けてたつぞ」

「変わらないな、りょうちゃんは……」 苦笑い。

それを受けて嬉しそうに陵太郎が笑った。

「光輔。今日、学校終わったら俺のアパートへ来い。飯くらい食わせてやるから。まあ、これから毎日、嫌でも顔を合わせなくちゃならんわけだな」

「うん。わかった。行けたら行くよ」

「行けたらじゃない。必ずだ」

「じゃ必ず行けたら行く」

「そんな日本語はないぞ」

「りょうちゃんの勉強不足だよ」

「お、校長と同じことを言いやがったな」

「こんなところで油売ってたなら、また校長に怒られるよ」

「おう、そうだった。いかんいかん」

「頑張れよ、こだま先生」

光輔がそう言うのと、満足そうな顔をして陵太郎は立ち去って行った。

「あ」

みずきの声に光輔が振り向く。

「今、すっごく綺麗な人がこっち見てたよ」

どれどれと周囲を見まわす男性陣。

「もう行っちゃったけど」

「早く言えっての。なあ、光輔」

「……」

「光、輔……」

放課後、光輔は集合住宅が建ち並ぶ一角にいた。学校と海岸の境にあるこの場所からは海は見えない。

それでも潮の香りは光輔の鼻腔をこちよく刺激した。

陵太郎から手渡されたメモとにらめっこし、顔をしかめた。小学生が書いたような地図の端に、携帯電話の番号とへたくそな似顔絵が添えてある。吹き出しの中には『絶対来い！』と書かれていた。

「これじゃわかんないって。りょうちゃん、絵心なしだな」

きよろきよろと辺りを見回し、ようやくそれらしい建物を見つける。

まだ建ってさほど間もないだろう三階建てのアパートを見上げる。光輔の下宿とは違って貧相な様子もなく、一大家族は住めそうだった。光輔が表情を曇らせる。

何とはなしに、そこへいてはならないような気がしていた。

ポケットへメモをしまい、静かに背を向ける光輔。
足もとを風が吹き抜けた。

「おい」

ふいに呼び止められ光輔が振り返る。

声の主を確認し、呟いた。

「礼也……」

「何しに来たんだ」

光輔より目線二つ分背が高い、礼也と呼ばれる少年は、そのスマートな外観に似合わない鋭いまなざしで光輔を睨みつけた。

「別に、何も……」

軽く受け流そうとする光輔を礼也は許さなかった。

両手で胸倉をつかみ締めあげる。それは見た目以上に力強く、激しかった。

「やめろって、苦しいから」

光輔の表情が苦痛にゆがむ。

「今さらどのツラ下げてやってきやがった」噛みしめた歯と歯の間から荒々しい吐息がほとばしる。「ここから出て行け。おまえがいるとろくなことがない」

「なんで出ていかなくちゃならないんだよ。おまえには関係ないだろ……」

ノーモーションから礼也が光輔を殴り飛ばす。

数メートルも吹き飛び、光輔がぐったりとアパートの塀にもたれかかった。

「関係ねえとは言わせねえぞ！」

「なんのことだか、さっぱり……」

「だと！」

激高し、弾かれたように礼也が猛ダッシュをする。

先よりも数段硬い拳が光輔の顔面に突き刺さろうとしていた。

逃げ場を失い光輔が歯がみする。が、その両眼が光を放つや、バネのように体を跳ね上げ、礼也をも凌駕するスピードで襲いくる左

拳をかいくぐっていった。勢いそのまま、カウンター気味の右フックを礼也の頬に叩き込む。

今度は礼也の体が宙に舞う番だった。

両足をふらつかせながらも踏みとどまり、光輔が礼也を静かに見下ろす。

激しく尻もちをついた礼也が、口もとの血をぬぐい立ち上がった。

「上等だ、この野郎」

「いい加減にしろよ」

「できるかって、んなもん……」

その時だった。

「礼也君、やめて！」

少女の呼びかけに礼也の表情が反応する。

聞き覚えのあるその声に、ちっ、と舌打ちし、振り返ることもなく礼也はその場から立ち去って行った。

光輔が声の主に顔を向けた。

「みやび……」

とまどうように自分を見つめる光輔ににっこり笑いかけて、その少女、樹神雅は言った。

「久しぶりだね、光ちゃん」

環境保全対策機関メガルは、街の中心から十キロメートル以上も離れた沿岸に位置していた。半島の先端から海を監視するように。

ガイアー財団と政府の共同出資で成り立つこの研究所は、表向きは海洋開発の平和的利用という趣だった。

だが山凌市をはじめとする国民の大半は知らない。

それが別名、『迎撃要塞メガル』と呼ばれていることを。

「カウンター・ゼロまで二時間を切りました。国防省はすでに動き出した模様。我々へは静観せよとの通達がありました」

オペレーターの報告に、司令室の最後尾に腰を下ろした最高責任者が重々しく頷き、すつくと立ち上がる。

その瞬間、煩雑な司令室全体が水を打ったように静まり返った。

そして、火刈聖宜は静かにそれを宣言した。

「オペレーション・アスモデウス展開。メック・トルーパー出撃準備。エネミー・スリーパーにはメガルの防護を優先させろ」

「了解」

「それから」一呼吸置く。「三竜王のオビディエンサー達を招集しろ」

「風野博士の許可を得なくてもよろしいのですか？」

「かまわん」火刈が眉間に皺を寄せた。「奴らは、三竜王の力なくしては撃退不可能だ」

「どうして連絡くれなかったの？」

雅に問われ、光輔が口ごもる。

責めているわけではない。むしろ子供を見守る母親のように、雅は光輔を見つめ続けた。

口もとに笑みをたたえ優しく覗き込むと、ふっと笑った。

「言いたくないんだったら仕方ないね」

「……ごめん」

「別に謝らなくてもいいよ。ちょっと淋しかったけどね。あたしもだけど、お兄ちゃんの方がもつとかな」

歩き出す雅。背中であとめた髪が風に揺れた。

その様子を光輔は静かに眺めていた。

坂の途中で雅が立ち止まる。街をとおして海がよく見えた。潮風になぶられ踊る前髪を気持ちよさそうにかき上げる。

雅も光輔達と同じ学校の制服を着用していた。光輔より二つ年上の三年生。ちなみに霧崎礼也は二年生だった。

くるりと振り返り、光輔の顔をまじまじと眺める雅。

礼也に殴られた頬が膨らんでいた。

「だいぶ腫れてきたね。痛いでしょう？」

「ああ、らいしょうぶ」

「言えてないって」おもしろそうに笑った。

「ひでえな、笑わなくてもいいじゃんか」

「ごめん、ごめん」目じりの涙を指でぬぐう。「でもすごいね、光ちゃん。礼也君、ボクシングやってて、プロの人にも勝っちゃうくらいなのに。何かやってるの？」

「……サッカー」

「関係ないよね？　ね？　それって」笑う。また涙が滲み出した。

光輔もふっと笑う。懐かしい気持ちが心に広がり始めていた。

「なんだか変だよ。久しぶりに会ったのに、あたし達どうでもいい話ばかりしてる」

「……」

「でもそれでいいんだよね。どうでもよくない話なんて、ろくなことじゃないもの」遠くを見つめるように海を見下ろした。「平和だから、それがどれだけ素敵なことかなんて気づかないんだよ、きつと」

光輔へ振り返った。

「ごめんね、さっきからあたし一人でしゃべってる」

「……雅、あのさ」

「わかってるよ」

「……」

ふいに雅の表情がかわる。

「光ちゃん、あたし達とはいられないんですよ。わかるんだ、光ちゃんの気持ち。あたしも役立たずだから」

「雅……」

「光ちゃんがメガルから出て行った後でね、あたしも用無し認定されちゃったの。だから正直複雑なんだ。今もまだ財団からの援助受けてるのって。お兄ちゃんは気にするなって言ってくれてるけど。断ってお兄ちゃんへの負担増やすのもなんだし、高校くらいは出ておけってうるさいしね。別に光ちゃんが役立たずだってわけじゃないんだけど」

光輔には雅の気持ちが痛いほどわかった。雅はずっと一人ぼっちだったのだ。淋しかったのだ。

「あのさ、雅……」

光輔が雅に何かを告げようとした時だった。

突然大地を揺るがすほどの大地震が起きたのは。

「きゃっ！」

「うあっ！」

立つこともままならず、ガードレールの支柱へ抱きつく雅。

それをかばうように光輔が覆い被さった。

雅は目と口を固く結び、恐怖に耐えていた。

「大丈夫、すぐに収まるから……」

地震は約十秒間続いた。だが光輔達にとっては何時間にも匹敵するほど長く感じられた。

おそろおそろ雅が目を開ける。

まだ光輔が覆い被さったままだった。

「光ちゃん」

光輔も瞼を開く。雅と目が合い、弾かれるように起き上がった。

「ごめんっ」

「すごい地震だったね」雅が立ち上がる。嬉しそうに笑いながら光輔を見つめた。「ありがと。光ちゃん」

「いや、別に……」

けたたましいサイレンの音に光輔の声がかき消される。

津波の警戒警報が発令され、消防関連の車両が市中を駆け回っていた。

途端に街がざわめき始める。

水を注ぎ込まれた巣穴から蟻達が慌てて飛び出すように、人の群れが入り乱れていた。

その様子を瞬きもせずに見下ろす二人。

「津波だって。ここまでするのかな」

「おかしいよ」光輔に振り返らずに雅が呟く。「手際がよすぎる」

「え……」

「まるで最初から地震がくるのがわかってたみたい……」

「あれ」光輔が海の方角を指さす。海岸沿いの県道に自衛隊の車両が集結し始めていた。「なんで津波がくるってのに、あんなところに自衛隊が。災害に備えてかな」

「災害に備えて戦車が来るなんて変だよ。それも何十台も。あたしにはよくわからないけど、光ちゃんなら見えない？」

「何が」

「あの人達が武器を持ってるの」

「……」

着信に気づき、雅が携帯電話を取り出す。

陵太郎からだった。

「うん。うん。違う、光ちゃんも一緒。うん。わかった。すぐに学校に行く。大丈夫だよ。うん。お兄ちゃんも気をつけて」通話を終え、光輔へ向き直った。「光ちゃん、すぐに学校に行こう。あそこ

なら安全だから」

「学校って、今から？　そこまで行かなくても大丈夫だろ。津波って言ったって……」

光輔が言葉を失う。雅の表情が先までとはまるで違っていたからだった。

「違うよ。もっと怖いものがやって来る」神妙な様子で海を眺め続ける。「海から……」

津波が迫りつつあった。

何の変哲もない波しぶきは街道に乗り上げると、決して何かを奪い去ることなくその場にとどまった。

やがて太陽の光をともないながら、キラキラと輝く透明な人の形がのっそりと立ち上がった。

第一話 『海より来たる禍』

3

それは巨大な人型のロボットだった。

全長約六メートル、総重量三トン弱。中世ヨーロッパの鎧騎士を思わせる風貌で、エプロンを地響きを立てながら歩き始める。

三体のロボットを眺めながら、柊桔平はいぶかしげに眉を寄せた。カーキ色の戦闘服を身にまとい、肩からサブマシンガンを吊り下げていた。

「ついに出勤ですね」

部下の声に桔平が顔を向ける。

「しかし、何故今まで彼らには何も知らされていなかったのでしょうか」

「さあな……」表情も変えずにタバコの煙を吐き出す。「司令官にでも聞いてみるよ」

「俺らじゃ相手にもしてもらえませんよ」

「……俺も同じだったの」

「エスはどうしたんですかね」

「メガルの警護を優先させるってよ。バケモノ退治は俺達だけにやらせるつもりだ」

振り返り、メガル司令部がある辺りを桔平は見上げた。

「バケモノ、か……」

光輔と雅は人気のなくなった街中を駆け抜けていた。

いつもなら多くの若者達でにぎわう通りも、行列ができる洋菓子屋も、まるで映画のセットのように人の匂いが感じられない。駅も、コンビニも、学校も、アミューズメントも、工事現場も、すべてが放棄された状態だった。

街中いたる場所で車が乗り捨てられ、煩雑な雑多音がなければこれほど静かなのかと驚かされる。

バスや鉄道など、すでにあらゆる交通網が停止していた。

「雅」光輔の額に浮き上がる汗は疲労や暑さとは別の類のものだった。「なんなんだよ、あれ。人の形してたぞ」

「プログラムが発動したみたい」

光輔の問いかけに顔も向けずに雅が答える。呼吸はせわしかったが浮き足立つ光輔とは対照的に、雅は冷静にそれを受け止めていた。「プログラム……。なんだよ、それ？」

「詳しくはわからない。でも地球を汚染しすぎた人類を排除するためにつくられたものらしいの」

「……。誰が？」

「ずっと昔の人。人間かどうかもわからない。光ちゃんは知らないだろうけれど、一年前にも同じようなことがあったの」雅の表情が曇る。「その時メガルは、壊滅するところだった」

「……」

「でも腑に落ちないことがある。プログラムが発動する時には、ガイア・カウンターって呼ばれるセンサーみたいなものが反応するか前もってわかるはずなのに、私達には知らされていなかった。メガルを守るために働いている人達ですら知らないみたい。今回も、前回も……」

「！」

耳をつんざくような砲撃音に二人が立ち止まる。

そこいら中から機銃の音が鳴り響いていた。

「始まった……」

「普通の装備じゃ通用しないよ。あれには」

「……」

「急ごう、光ちゃん。早く学校まで行かなくちゃ」

「学校って。そんなところに逃げたって……」

「大丈夫。私達の高校、そのためにつくられたの。財団の要請でね」

「え……」

「ぎゃあああー！」

悲鳴に身をすくませる光輔と雅。二人からかなり近い場所のようだった。

「ここも危ない……」

「逃げるぞ、雅」

光輔が雅の手をしっかりと握りしめる。覚悟を決めた表情だった。黙って頷く雅。

その時、視界の隅をロケット弾がかすめ飛んでいくのを確認し、雅が光輔を突き飛ばした。

「光ちゃん、危ない！」

制服のプリーツが波のように揺れる。

「雅ーっ！」

すさまじい爆発音と衝撃。

光輔がおそろおそろ目を開けると、粉塵にまみれた雅の体が覆い被さっていた。痙攣するようにその全身が震えている。

「雅、大丈夫か！」

光輔が雅の肩をつかんでゆさぶる。すると苦痛に顔をゆがめながら雅が目を開いた。

「……光ちゃん。ケガなかった？」

「ああ」

「そう、よかった……」

ぐらりとする雅。瞳が裏返り、頭から後ろへ倒れ込むのを光輔が支えた。

「雅、雅、しっかりしろ！ 雅！」

陵太郎はコクピットの中にいた。

海竜王と呼ばれる人型のロボットの内部の。

ライダースーツのような戦闘服を着込み、ゴーグルとヘッドホン型無線機を装着する。

陵太郎が操縦桿を握り、ゆっくりと海竜王が歩行を開始した。
女性オペレーターからの通信を受け入れる。

『あと距離約千でエネミーと遭遇します。自衛隊はほぼ壊滅状態。
残った部隊も撤退を始めています。コイルガンの準備を』

「コイルガンは駄目だ。磁気が漏れて使い物にならない」

『そんなはずは。ガンには五重ものシーリングが施されているのに』
「だが実際そうなんだから仕方がない。先週テストした時は良好だったのに変だけどな」わずかにも取り乱した様子はない。「多弾倉
マシガンに装備を変更するよ」

『了解しました。健闘を祈ります』

「了解、波野さん」無線のチャンネルを切り替える。「これより戦
闘領域に入る。バックアップよろしく」

『了解だ、任せろ！』それからその声はおもしろそうに笑いながら
つないだ。『シヨンベンちびんじゃねえぞ、陵太郎』

するとそれまで張りつめていた陵太郎の表情がふっと和む。振り
返ると、遠くに桔平の意地悪そうな笑顔が見えた。

ゴグルは頭部のメインカメラと連動し、直接陵太郎の目で見る
ような視界が得られるようになっていた。

「勘弁してくださいよ、桔平さん。俺今日からガツコの先生すよ」

『そうだったな。まったくなんて日に発動しやがんだろうな』

「仕方ないですよ。奴らにこっちの事情わかって方が無理ですか
らね」

『よりもよって、今度は基地の反対側とはな』

「メガルだけが目的じゃないみたいですね、奴ら」

『ああ。それにおかしいことだらけだ。おまえら三竜王のオビイに
一切連絡が取れてなかったことや、まだ動かすのがやっとの竜王に
突然出撃命令を出したりとかな。今日の今日、発動したってのも疑
わしいわけだが、何か別の思惑が存在していると思えん』

「疑い出したらきりがありませんよ。今は信じられるものだけをし
っかり信じていきましょう」

『ま、んなこたあ、わかりきってることだがな』

「はは」

桔平の話に相づちをうちながら、陵太郎が真顔になる。

「とにかくだ」せわしく動き回る部下達を横目で見ながら、桔平はタバコに火を点けた。「あんまり無茶はするな。ヤバそうところは俺達メックに任せておけ」

『でも、この時のために俺達は財団に……』

「バカ野郎。そんなずんぐりむつくりに飛んだり跳ねたりできるわきゃねーだろが。これがいい機会だ。凧野のオッサンにわからせてやるよ」

『……』

「はなからおまえらのことなんて、あてにしてねえからな。おまえらは自分が生きて帰ることだけを考えてりゃいいんだ。あとは俺らの足手まといにならないようにおとなしくしてろ」

『相変わらず口が悪いすね、桔平さんは。だから夕季に嫌われるんすよ』

「うるっせえ、突然痛いところくんじゃねえ。別に嫌われてるわけじゃない。好かれてないだけだ」

『同じでしょ。いくらちよっかいかけても、あいつは簡単にはなつきませんよ』

「やかましい、クソガキ！」

桔平が無線機に向かって怒鳴りつける。周囲にいた部下達が反応した。

「ははっ」海竜王の中でおもしろそうに陵太郎が笑う。

『陵太郎』桔平が声のトーンを変えた。『冗談抜きだ。この戦いは俺達の戦いじゃない。無駄死にだけはするな』

その真意をくみ取り、陵太郎も真摯な態度で受け答えた。

「わかってますよ、それくらい。俺だってまだまだやりたいことが山ほどありますからね」

『初任給でみっちゃんに服買ってやるんだろ？』

「あれ、なんで知ってるんすか。まあ、詳しくは買わされるって方が正確なんですがね」

『喜んでたぞ、みっちゃん。なんだか、もう一人家族が増えるとかも言ってたな』

「……そんなことまで話したのか、あのおしゃべりは」

『頼りにされてんだ、おまえは。俺から見たらまだまだウンコタレだな』

「鼻タレ、でしょ？」

『同じだ、同じ』

「ははっ、かなわないな、桔平さんには」

『あんないい娘、泣かせるような真似するな』

「わかってますって。あんなのでも可愛い妹ですからね」

『終わったら飲みに行くぞ』

「今日は駄目です」

『何!』

「その例の新しい家族が来るんすよ。俺の弟が」

『……。なら仕方がないな』

「陵太郎が嬉しそうに笑った。

『今度オゴれ!』

「ええ、初任給でね」

ははっと笑いながら桔平が無線を切った。

「陵太郎が大きく息を吐き出し、表情を整えた。その両眼は、まだ見えざる敵を見据えているようだった。

携帯電話の着信に気づき目をやる。雅との連絡を取るためにこっそり隠し持っていたそこには、見覚えのない番号が表示されていた。何かを予感しながら手に取る陵太郎。

『りようちゃん!』

光輔からだった。

「どうした、光輔」

『雅が、雅が!……』

光輔は街道の坂から街を見下ろしていた。

怒号と爆音。

いたるところで火の手が上がり、街はすでに焼け野原と化していた。銃弾や迫撃砲が途切れることなく飛び交う。

後退しながら砲撃を続けていた戦車が、突然黒煙を噴き上げ立ち往生する。ハッチから慌てて乗員が飛び出した直後に爆発した。

それはテレビで見る戦争の映像と酷似していた。

ただ一つ、一方からの感情がまるで伝わってこないこと以外は。

視力のいい光輔が見ても、彼らが何と戦っているのかわからなかったのである。

透明な何か。

きらきらと光り輝く何か。

人の形をした何か。

彼らの倍はあろうかという大きさの何か。

それが人の力では決してはかりきれないものであることは容易に想像できた。

「うっ……」

雅のうめき声に光輔が振り返る。

雅は背中と右足にケガを負っていた。深手ではないが自らの足で逃げるのはつらそうだった。ここまで光輔が担いできたのだ。

まだ学校までは二キロメートル近くはある。

「雅、痛むか？」

光輔が顔を覗き込む。

あぶら汗を浮かべながら雅が笑ってみせた。

「大丈夫……」

「もう少しの辛抱だよ。りょうちゃん来てくれるってさ」

「来ないよ」

「……」

「お兄ちゃんにはもっと大切な仕事があるから」

「大切な仕事って……」光輔が拳を握りしめる。「大切な仕事ってなんだよ。これより大切なことって、他に何があるんだよ!」

感情を抑えきれずにつめ寄る光輔。

眉一つ動かすことなくそれを受け止め、雅は穏やかに笑ってみせた。

「大切なことだよ。これ以上、光ちゃんみたいな悲しい人達をつくらないための」

「……」

「光ちゃん、一人で逃げて」

「!」思いがけない雅の言葉に光輔が目を見開く。「何言ってるんだよ、おまえ」

「あたしがいると足手まといになるから。光ちゃんだけでも逃げて……」

「バカなこと言うな! そんなことできるかよ!」

雅の肩をがっしりつかみ、ゆさぶる。

雅が苦痛に顔をゆがめた。

「あ、ごめん……」

苦しそうな表情のまま何とか目を開ける雅。平静を装い、光輔へ笑顔を向けた。

「前に約束したじゃない、ひかるちゃんのお墓の前で。あたし達が光ちゃん守るってね」

「そんな関係ないだろ!」

「駄目だよ。光ちゃんに何かあったら、あたし、ひかるちゃんに顔向けできない。お兄ちゃんにも……」

「……」

ガガガガッ!

すぐそばで戦闘が始まったようだった。大口径の機銃を乱射する轟音と、何かが弾ける音が聞こえてくる。

バシャン、バシャンと大量の水をぶちまけたような音も。ゴトツ！

何モノかが光輔達のもとに近づきつつあった。

悪意をもつと思われる何かが。

雅の表情が一変する。焦ったように言い放った。

「光ちゃん、逃げて。早く！」

「嫌だ」

「……」

「逃げるなら一緒にでなきゃ嫌だ。俺は絶対におまえを連れて行く」

「光ちゃん……」

光輔が雅を隠すように身をかがめる。きろきろと辺りを見回した。

その時。

「！」

ガードレールをわしづかみにして、それが姿を現す。身の丈三メートルはあろうかという巨体を揺らしながら。

ぬっと顔を出したそれは透明にゆらめく人の形をしていた。

「くそっ、何体いるんだ」

海竜王のкокピット内で陵太郎が吐き捨てた。

きらきらと光る透明の巨人をマシンガンで撃ち続けるが、それはバシャンと音を立てて飛び散るや、すぐに集束し人の姿を形作った。弾倉を交換し、続けざまに撃ち放つ。

巨人の頭部には青い球体があり、そこに弾丸が当たるやただの水たまりへと姿を変えた。

後部に衝撃を感じ陵太郎が振り返る。

別の一体が海竜王を背後から攻撃していた。腕の先を鋭く尖らせ、槍のように突き刺す。それはすさまじい圧力で撃ち出される、水の

弾丸だった。

「うおおおーっ！」

マシンガンの集中攻撃を受け、巨人が粉々に砕け散った。

水の入った風船を真上から地面に叩きつけたような光景だった。

「？」

呼び出しに応じ、陵太郎が無線を受ける。

桔平だった。

『バカ野郎、てめえどこにいやがる！ ポイントを全然はずれてんぞ！』

「すみません。民間人を見かけたもので」

『そっちにゃインプどもがうじゃうじゃいるんだぞ。早くこっちに戻って来い！』

「しかし民間人が……」

『放つとけ。おまえまで死んじまうぞ』

「……」

『……。くそつたれ！ すぐそっちに行くから、それまで無茶すんじゃないぞ！』

「すみません、桔平さん」

『やかましい！ おまえと海竜王を守るのが俺達の任務なんだ！』

そんな危険な場所に好き好んで行くか、バカたれ！』

「ありがとうございます」 陵太郎が笑う。「二回おごりますから」

『アホ！ 十回おごれ！ 借金してでもおごれ！ 死ぬ気でおごれ！』

「わかりました。死ぬ気でおごります」

『つたりめーだ！』

通信を終了し、街の一角から山のような坂を見上げる。

光輔の言うとおりに、この坂の反対側に二人がいるはずだった。

「！」

街道の側面から壁づたいに、巨人が坂の頂上目がけて這い上がるうとしていた。

マシンガンポイントを、弾切れであることに気づく。予備の弾装もすでに使い果たしていた。

急いで追いかけようとする陵太郎。しかし二、三步進んだ後、海竜王がふいその動きを止める。

コクピット内の照明が照度を落とし、無線やゴーグルへ電力を供給する補助電源に切り替わったことを陵太郎は知った。先の巨人の攻撃で燃料パイプが切断されたのだ。

「くっ」

海竜王に膝をつかせ、胸のハッチを開ける。

サブマシンガンを手を持ち、陵太郎はコクピットから飛び降りた。海竜王を見上げ、すまなさそうに呟く。

「悪いな、相棒。せっかく俺を選んでくれたのに、おまえの信頼に応えることができなくて」

陵太郎が坂の頂上目がけて走り出した。

光輔と雅は工事看板の裏で息をひそめていた。

透明な巨人との距離は約二十メートル。目と鼻の先だった。

巨人は周辺を探るように、何度も頭を振った。それが本当に頭なのかはわからなかったが、中心には野球の硬式ボールほどの青色の球体があり、まるで目玉のごとくに四方八方に動き回っていた。

獲物を探し求めて。

一歩動くと、人形のフレームの中で水が波うち踊った。光に反射してゆらめく。それが影となり、表情や感情を映し出すように光輔には見えた。

インプと呼ばれる彼らの正体は雅から聞いていた。プログラム発動によって召喚された使い魔。成分はいくら調べても海水以外の何ものでもなかったらしい。ただ一年前とまるきり違っていたのは、そのサイズと数だった。

かつての倍近い身の丈と、比較できないほどの大群が、すべてをたいらげながらメガルを目指していた。

物音を察知しインプが高圧水流を撃ち放つ。

それは猫が逃げ去った場所に直径五十センチの大穴を穿った。

弾き飛ばされたアスファルトのかけらが、雅の傷ついた足を痛打する。

「うっ！」

雅の声にインプが振り返る。

ギロギロと青い目玉を動かし、二人の居場所を特定したようだった。

「くそっ！」

決意のまなざしで光輔が立ち上がる。鉄パイプを手に持ち、雅をかばうようにインプの前に立ちはだかった。

インプは狙いを定めるや、わずか二歩でトップスピードとなり、光輔目がけて飛びかかってきた。

「駄目、光ちゃん、逃げてっ！」悲痛なる雅の絶叫。「殺される、早く逃げて、逃げてーっ！」

涙が波しぶきのように飛び散った。

光輔は瞬きもせずにインプを睨みつけていた。鉄パイプを両手でかまえ振るかぶる。

何もかもが遅すぎた。

だが自分の体が貫かれるその寸前まで、光輔は決してインプから目をそらそうとはしなかった。

「光ちゃんっ！」

バシヤッ！

光輔の全身に大量の海水が降りかかる。

インプの姿は消滅していた。

「……」

わけがわからずに辺りをきょろきょろと見回す光輔。

ようやく坂の上からサブマシンガンをかまえる陵太郎の姿を確認した。

緊迫した状況に銃撃音さえ聞こえなかったのだ。

「何とか間に合ったな」にやりと笑う。「どうした、雨にでも降られたのか、光輔」

「りょう、ちゃん……」

ほっとした途端に力が抜け、膝から崩れ落ちる光輔。鉄パイプで体を支えた。

「お兄ちゃん……」雅がぼろぼろと涙をこぼし始める。張りつめていた状況から解放され、心よりの安堵から出たものだった。それから嬉しそうに笑った。「駄目じゃない。こんなところで油売ってちゃ」

「また桔平さんに怒られるな。たまらんな、いい歳して毎度、毎度。ま、慣れっただけだな」

光輔も笑った。

太陽を背に受け、陵太郎が二人へと近づいて来る。

その姿が眩しくて光輔は直視できなかった。

光輔が目細めて。何より陵太郎の笑顔が眩しかった。

陵太郎の言葉を光輔は心の内で思い返していた。

『これからはいつでも一緒だからな』

光輔の目からじわりと涙が滲み出た。喜びの涙。光と希望がそこにはあった。

「りょうちゃん……」

バシッ！

ふいに何かが弾けるような音が鳴り渡り、陵太郎は前のめりに倒れていった。

「くそっ、次から次へ、うじゃうじゃうじゃと」

桔平がサブマシンガンでインプを蹴散らす。

「キリがねえ！」

目の前にぬうつとインプが現れ、青色のコアをうごめかせる。それは無力な人間達をあざ笑っているようにも見えた。

眉も動かさずに見据え、桔平がコアを正確に撃ち抜く。

声一つ立てずにインプが四散し、土砂降りにあつたように周辺が水びたしになった。

桔平が車両の無線を受ける。

陵太郎からだった。

「どうした、陵太郎。……。おう。……。……。ああ、わかった。

……。ああ、すぐに行く。心配するな。……。ああ。……。そんなことどうでもいい。待ってろ。すぐ行くからな」

無線を切る桔平。

その表情からは先までの余裕が消え失せていた。

「これでいい……」 陵太郎が無線機をかたわらに置く。横たわる自分を心配そうに覗き込む雅に告げた。「もう安心だ。桔平さんがすぐ近くまで来ているらしい。よかった……」

「ごめんなさい、あたしのせいで……」

雅が苦しそうに声を絞り出す。

それを気遣うように陵太郎は笑いかけた。

「そうじゃない。俺が甘かったただけだ。桔平さんにもよく言われていたんだ。詰めが甘いつてな。……おまえは何も悪くない」

「お兄ちゃん……」

雅の後ろで、光輔が立ったまま二人を見守っていた。

光輔の目から見ても、陵太郎がかなりの深手であろうことは察することができた。

考えたくもない結末が脳裏をよぎる。それが顔に出ないように歯を食いしばって耐えていた。

陵太郎が光輔に目をやる。

光輔は陵太郎のサブマシンガンを両手で保持したまま立ちつくしていた。

眩しそうに目を細める陵太郎。

インプの攻撃は背中から陵太郎の体を貫いていた。

陵太郎が倒れた後、光輔が銃を拾い上げ、二体目のインプを撃ち取ったのである。

「まさか、おまえに助けられるとはな……」

陵太郎の優しげな声に、張りつめていた光輔の表情が崩れていく。

「……りょうちゃん……」

「なんて顔してるんだ。せっかく久しぶりに三人一緒になれたってのに」

陵太郎の声がかすれ始める。

「これからは嫌でも顔を合わせなけりゃならんわけだがな……」

声を出すのもやっとだった。それでも二人を心配させまいと陵太郎は懸命に笑ってみせた。

「雅。おまえ、桔平さんに全部話したろ。服買ってやることとか。

俺、今のであの人二十回酒をおごらなけりゃならなくなった。金欠もいいとこなのにな。でも心配するな。借金してでも約束は守る。頑張ったご褒美に、おまえにももう一着服買ってやるよ。なあに、死ぬ気になりゃ、なんだってできる。死ぬ気になれば、なんだって……。怖い目にあわせてすまなかったな。頼りない兄貴で……」ぐっ、とうめき、血を吐き出す。

「お兄ちゃん、もうしゃべらないで」

重い瞼をこじ開け、陵太郎が雅の頭をいとおしげに撫でる。それ

から光輔に目をやった。

「光輔、ありがとうな。雅を守ってくれて」

「りようちゃん……」

「おまえ、強くなったんだな。もう俺が心配しなくたって大丈夫そうだ。もし俺に何かあったら、これからこいつのこと……」目を閉じ、満足そうに笑った。「頼む……。……」

そして陵太郎は何も言わなくなった。

「お兄ちゃ、ん……」

硬直する雅の体。すぐにすべてを理解し、陵太郎の体に覆い被さり、大声で泣きわめき始めた。

受け入れ難い現実を拒絶するように。

「お兄ちゃん！ お兄ちゃん！ お兄ちゃん……」

光輔の体が打ち震えていた。

「なんだよ、それ。なんだよ……。いつでも会えるって言ったのに。これからは嫌でも毎日顔を合わせなきゃならないって、ふざけんなよ……」拳を握りしめ、子供のようにはろはろと涙をこぼす。「どうやって、顔合わせりゃいいんだよ！」

光輔が歯を食いしばる。もつとつらいのは雅の方なのだから。

今朝家を出る時、雅と陵太郎はたわいもない日常会話を交わしたにすぎない。また生きて会えることを当然のように思っていたのだから。

光輔も同じだった。ほんの数時間前までは、永久に陵太郎に会えなくなるなどとは考えもしえなかったことなのだ。

日常に平和を感じ取ることは難しい。

だがそれがどれだけいとおしいものだったかを、今改めて思い知ったのである。

ぐいと涙をぬぐい取った。光輔にはまだやらなければならないことがある。

陵太郎との約束だった。

「雅、行こう。ここにいちや危険だから」

平静を装い、光輔が上ずるような声を絞り出す。

雅からの反応はなかった。

「雅……」

「嫌っ！」

肩にかけた光輔の手を雅が振り払う。

振り向きもせずに雅が告げた。

「ここにいる」

「でも」

「光ちゃん一人で行っていいよ。あたしここにいるから」涙と嗚咽でその声が聞き取りづらくなる。「お兄ちゃん、一人でかわいそうなもの。もう少し一緒にいてあげたい。だから……」

光輔にはわかっていた。こんな時、雅はてこでも動かないことを。たとえどんな危険が迫ったとしても。

ごそごそという物音に気づき、光輔がガードレールへと身を乗り出す。

下の街からインプの大群が迫りつつあった。

それは街全体を覆いつくし、すべてが海の中に閉じ込められたかのように妖しくゆらめいていた。

雅へ振り返る。

その結末は容易に想像できた。

キーン！

「！」

ふいに誰かに呼ばれた気がして光輔が辺りを見回す。

巨大な音叉を激しく震わせたような呼びかけは、坂の下から響き続けていた。

ゆっくりと坂を下って行く光輔。

そこには陵太郎が乗り捨て、抜け殻となった海竜王の姿があった。

キーン！ キーン！ キーン！

主を失い、泣いているようにも思えた。

「おまえにもわかるのか。主人がいなくなったことが……」

光輔が海竜王に手をかける。

するとそれはいつそう激しく主張し始めた。

キーン！ キーン！ キーン！ キーン！ キーン！

しだいに光輔の鼓動が高まっていった。

桔平は陵太郎達の待つ場所へと急いでいた。

数えきれないほどのインプに足止めを食らい、それらを駆逐しながら前進する。

援軍は望めず、予備の銃弾もつきかけていた。

それでも進まなければならなかった。

陵太郎達を助けるために。

「急げ、くそ、間に合わねえのか……」

特殊車両を駆り、自問自答を繰り返すも、焦りばかりが積み重なっていった。

「あさみ……」思わず声もれ落ちる。その後の言葉を飲み込んだ。

『本当にそれでいいのか……』

ガサガサ！

気配を察知し銃口を向ける桔平。

陵太郎達のことに関を取られ、わずかに反応が遅れた。

「ちっ！」

己の失策を痛感し舌打ちする。

しかし街路樹を割って飛び込んで来たインプは、桔平がトリガーを引き切る以前にその眼前で粉々に砕け散ったのである。

大量の水を高所からぶちまけたような破碎音をともない、すさまじいまでの衝撃はインプの姿を霧状に昇華させた。

「！」

白煙のごとき濃霧の彼方に光が宿る。

一対の黄色い輝き。

やがてその光の主は、霧の中から人の形を浮き上がらせた。

それは全長六メートルの黒い人影。

「……海、竜王……」

桔平が我が目を疑う。それもそのはず、甲冑はすべてはずされ、漆黒のように深い藍色の姿を初めて目にしたからだった。

インプを澄み渡る鮮やかな海の青だとすれば、さしずめ海竜王は深海の暗闇を映し出す青だった。

「これが本当の海竜王の姿なのか……」

鎧を取りはずした海竜王のフォルムは、もとより一回りもシャープで獐猛な容貌をさらけ出していた。

甲虫類、或いは甲殻を持つ節足動物を思わせる艶やかな外殻。触觉のような一對の角からとがった顎のラインは鋭利な刃物を連想させ、切れ上がった両眼は上向きの両肩と相まって、攻撃的なイメージを存分に刻みつけていく。

オリハルコンで形成されたボディは時に妖しくゆらめき、見る者を惑わせた。

桔平ですら、目の前のこの巨人が、本当に自分達の味方か否か疑ったほどに。

桔平の脳裏に浮かんできたのは、『魔人』という言葉だった。

海竜王の足もとに目を向けると、洪水の後のように水が積み重なっている。それはおびただしい数のインプを撃滅したことを物語っていた。

「陵太郎……」

はっと思い返す。取り残されているはずの雅を救い出さなければならぬ。

海竜王を横目で見ながら、桔平は街道の坂道を駆け上がって行った。

「！」

再び目を疑う桔平。

そこには冷たくなった陵太郎の亡骸と、そこから一步も動かずに見守る雅がいたからだ。

畏怖するように振り返る。

しかし、すでに海竜王の姿はなかった。

「一体誰が……」

インプの群れはメガルのすぐそばまで迫りつつあった。反対側の岸から上陸し、街をたいらげてここまで押し込んだのである。

基地の近隣の森林で二体の竜王が戦闘を続けていた。

陸竜王と空竜王である。

陵太郎の駆る海竜王よりもはるかにぎこちない動きのこの二体は、もっぱらメック・トルーパーの足かせとなっていた。

「くそっ……」陸竜王の中で一人の少年が歯がみする。光輔を殴り飛ばした少年、霧崎礼也だった。

『礼也、夕季、撤退しなさい。もうこれ以上は無理です』
オペレーターからの指示を受け取る。

「しかし……」

『あとはメックに任せなさい』

「……」自分の無力さが口惜しかった。だがこれ以上続ければバツクアップをするメックの存亡も危うい。「わかった。撤退するぞ、夕季」

『礼也』

「今の俺達じゃ、足手まといにしかない」

『……』

古閑夕季は空竜王のコクピット内で深く息を吐き出した。礼也同様、何もできずに後退しなければならないことが悔しくて仕方がなかった。撤退を告げられてもその強い目の光だけは失わずにいる。

明らかな劣勢だった。

メック・トルーパーの戦闘服は特殊な素材で作られており、至近距離から軍用ライフルの銃撃を受けても衝撃の大半を吸収する。装備も一見ただのサブマシンガンのようなだが、弾頭には一撃で車両を撃破するほどの炸薬が実装されていた。それがインプの攻撃の前には手も足も出ない。このままでは全滅も必至だった。

夕季が振り返る。木々の合間からメガルの上階の壁面が浮き上がっていた。

「エスは。エスはどうなっているの！」

『エスは動くことができません』オペレーターからの返答。『メガルの防衛を最優先するよう命令が出ています』

「メックを見捨てる気！」静かだが怒りは充分に伝わってきた。「最初からメガルだけを守るのが目的だったはずなのに何故。こうなることがわかって何故！」

『……夕季』オペレーターの口調にやりきれない感情が表れる。『司令の命令よ。仕方がないの』

「博士は！」

『博士は急な用事で砦埜島へ出向いたわ。連絡がとれないのよ』夕季がキツと口もとを結び、鋭い眼光でメガル最上階を睨みつけた。司令部があるだろう、その場所を。

「ぐあああーっ！」

悲鳴のした方向に目線を向ける。

一人の隊員が倒れ込むのを確認した。

空竜王が前進を開始する。

それに気づき、礼也が呼び止めた。

「夕季、何をしている、撤退だぞ。夕季、聞こえているのか！」

礼也の再三の呼びかけにようやく夕季が応じる。抑揚のない声で告げた。

『やっぱりみんなを置いていけない。礼也一人で帰って』

「……」ぐっ、と歯を食いしばり、礼也が吐き捨てた。「勝手にしろ！」

負傷した隊員の間近にインプが迫りつつあった。

マシンガンの連射がそのコアを吹き飛ばす。

銃を下ろし、傷ついた隊員の体をかばうように膝をついて、空竜王が胸のハッチを開いた。

「大丈夫。今助けるから」

「何をしている。早く、逃げろ……」

決死の形相で隊員が夕季を追い返そうとする。

それでも夕季は表情一つ変えなかった。

空竜王を取り囲むようににじり寄るインプの群。

それに夕季が気づいていないはずはなかった。

一斉に飛びかかるインプ達に振り返ることもなく、夕季は隊員へ手を差しのべた。

「くそ、夕季、夕季ー！」

陸竜王のコクピット内に礼也の絶叫がこだまする。

夕季の瞳は強い光を放ち続けていた。諦めではなく、すべてを覚悟するがごとく。

ゴーグルを上げ、夕季が静かに笑う。

隊員はそれに気づくと表情を整え、夕季の手をつかもうとした。

その刹那。

大量の海水が空竜王に降りかかる。

思わず顔を向けた夕季が見たものは、にわかには信じ難い光景だった。

そこには空竜王と隊員を守るように仁王立ちする、漆黒の巨人の姿があったからだ。

海竜王だった。

「陵太郎さん……」陸竜王の中、呆然と呟く礼也。

インプの群が海竜王目がけて襲いかかった。

すその広がった足首から高圧の圧縮空気を噴出させ、魔物達の間隙をホバークラフトのごとく海竜王が滑り抜けていく。

海竜王は両腕の突起部から伸びる長く鋭い爪状の武器を持ち、無数に押し寄せる高圧水流の矢もものともせず、手当たり次第に獲物を撃破していった。インプをはるかに凌駕するスピードで回り込み、鋭い爪を次々とコアに突き刺す。時には切り裂き、時には砕き折り、遠くの敵にはチェーンの付いた爪を射出して撃ち抜いた。

驚愕すべきは、通常兵器ではコアへの攻撃しか意味をなさなかつ

た魔獣達が、海竜王の前ではまるで実体を持つかのごとく、全身を弱点としてさらけ出したことだった。

体を真っ二つに引き裂かれたインプはコアを残したまま海水へと還っていった。

射出された爪で胸を貫かれたインプは、散々振り回されたあげくに別のインプに激突し霧散した。

その攻撃のすべてが、インプに対して有効打となったのだ。

魔物の軍勢を海竜王が軽々と蹴散らしていく。

礼也や夕季達は、声も出せずにその凄絶なる光景を見守るだけだった。

それはほんの数分の出来事だったに違いない。

数時間にわたって一つの街を壊滅状態に追い込んだ元凶を、海竜王は瞬く間に殲滅してしまったのである。

辺り一帯は土砂降りの後のような水浸し状態だった。

海竜王の全身が返り血のような海水にまみれていた。

それは海竜王の涙のようにも映った。

それぞれの機体から降り、勇者を出迎える礼也と夕季。

しかし海竜王はそれに応じることなく、二人の前から消え去っていった。

次の獲物を求めて新たな死地へ赴く、獰猛な狩人のごとくに。

脅威の消え去った静かなる廃墟で、桔平はいつまでも雅と陵太郎を見守っていた。

声をかけることすらできぬまま。

「！」

物音に気づき辺りを見回す。

いぶかしげな表情で坂を下って行くと、乗り捨てられた抜け殻のような海竜王の姿を確認した。

はっ、となり通りへ出る桔平。

海竜王を持ち出した人間は、まだ近くにいるはずだった。

だが桔平はその答えを見定めることはできなかった。

そこには肩を落とし、うなだれたように歩き去る少年の姿しかなかったのだから。

了

第二話 『風に折れない花』

OP

穂村光輔は何も言わず、ただ樹神雅の背中を見つめていた。

二人は薄暗い霊安室の中、雅の兄、陵太郎の亡骸の前で立ちつくしていた。

抑揚のない声で振り返りもせずに雅が告げる。

「財団が一生あたしの面倒みてくれるって。光ちゃんと同じだね。あたし、得しちゃったのかな……」

光輔はそれに答えず、遠い記憶に想いを巡らせていた。

『穂村』と刻まれた墓の前で幼い日の光輔が立ちつくす。拳をぎゅつと握りしめ、小さな体を震わせた。

後ろから肩を叩かれ、涙でくしゃくしゃになった顔を向けると、そこには陵太郎の姿があった。

「光輔、これからは俺達がおまえの兄弟だ。嫌がっても無駄だぞ。そう決まったんだ」白い歯を見せて笑う。それから顔を横へ向けた。「な」

「なんでも言ってね。遠慮しないで」一点の曇りもない雅の笑顔。光輔を気遣い、つつみ込むように笑いかけた。「あたしが光ちゃんのお姉さんになってあげるね」

「心配するな、光輔。おまえのことは……」

「あたしが守ったげるよ」

雅にセリフを奪われ、陵太郎が口をつぐむ。

「あたしが守ってあげる。お兄ちゃんじゃ頼りないから」

「おまつ、調子にのるな、ガキンちよが」

「ガキンちよじゃないよ。お姉さんだもん」

楽しそうに笑う雅をつかまえ、陵太郎も笑った。いつしか光輔の涙は止まっていた。

ひたすら二人の存在が聡明で眩しかった。
陵太郎の優しく強いまなざしが、いつまでも光輔の脳裏から離れ
なかった。

『これからはいつでも一緒だからな……』

「……うっく、ううっ……」

雅の嗚咽に気づき、光輔が目線を落とす。

「りょうちゃん……」

光輔の頬を涙が流れ落ちていった。

第二話 『風に折れない花』

1

柊桔平はあまり気乗りしない様子でメガル司令室へ入室した。

平常時コントロールセンターと呼ばれるこの場所へ、桔平や他の隊員達が足を踏み入れることはほとんどなかった。

呼び出しがあった場合を除いては。

高級ホテルのロビーほどもある広大なスペースで、多くの人間達が入り乱れる騒音の中、何十人ものスタッフが端末の前でおのこの仕事をこなしていた。

その中の一人に近づいて行く。

「次の発動まであとどれくらいだ？」

「四十五時間です」問いかけられた女性オペレーターは、まるでそれがわかっていたかのように冷静に受け答え振り返った。「柊主任」「きっちり百二十時間後ってわけか」

「ガイアはそう算出しています」その静かな口調とは対照的に髪はそびえ立ち、メイクも挑発的だった。

「相変わらずパンクだね、波野ちゃんは」

「恐縮です」桔平の軽口になやりとする。「柊さんはロックン・ロールですか？」

「あん？ ……俺のはただのレゲエだ」ボサボサの髪をかきむしった。「歌はアニキのしか聴かねえけどな」

「お兄さん、お二人いらっしやいましたっけ？」

「おうよ」

「同じご趣味なんですか……」

「いや、ありえねえ」

「は？」

「俺のアニキはイチロウアニキとツヨシアニキだけだ」

「は？」

「え？」

話が噛み合わず、それでも波野しぶきはおもしろそうに笑ってみせた。緊急時、司令部からの指示はほぼ彼女から伝えられる。

「礼也は？」

「一昨日から姿を見せません。招集命令も無視しっぱなしです」

「そうか」複雑そうに目を細めた。「ま、仕方ねえか……」

「いかがですか？」

高級チョコレートの箱をしぶきが差し出す。

途端に桔平の表情がきらめき始めた。

「お、ルイスじゃん。これたけえんだよな。サンキュ」ガバツとわしづかみし、口いっぱい桔平が頬張る。「う！ 苦っ！ これ苦っ！ でもウマッ！」ゴクンと音を立てて飲み込んだ。「やっぱ苦っ！」

「ええ、ふざけるなって感じですよね」

「そうそう、タマも縮むよって感じだよな」

「へ？」

「は？」

年季の入った腕時計をちらと見やり、覚悟を決めたように桔平が、ふう、と息を吐き出した。

「さてと、そろそろ行くか。もつとにげえモン食いに……」

「心中お察しいたします」淡々としぶき。「ご無事で」

「サンキュー、波野ちゃん。心に染みるね。口先だけだろうけど」

「はい、口先だけです」

「あ、やっぱり……」

「政府はすべて地震のせいにしたか……」

司令部上段の特設スペースで火刈聖宜が呟く。この場所からは部屋全体を見下ろすことができた。

表情もなく続ける。

「街の復興にもメガルの財力に頼りきりだ。次の襲撃をどう捌くか見ものだ」

風野守人は何も答えない。ただ難しそうな顔つきで、司令部正面のガラス張りから見渡せる海平線を眺め続けるだけだった。

波野からの連絡が入った。

『火刈局長、国防省がインプへの対応策の提示を求めています』
火刈がちらと風野を見やる。その後面倒くさそうに返答した。

「頭部への集中攻撃を心がけると言っておけ」

『わかりました。そう伝えておきます』

「火刈総司令」

ようやく風野が重々しい口を開く。

「何故、三竜王を同行させた」

火刈が振り返る。冷淡なまなざしを風野へ向けた。

「三竜王でなければ、あれらを倒せないだろうと判断したためです。事実、予想通りの展開となりましたが」

「貴重な第一オビディエンサーを一人失ったこともか」

「それはあくまでも結果です。あの時点ではああするより他に手段がなかった」

「エネミー・スイーパーも動かさなかったらしいな」

「メック・トルーパー部隊の指揮権は私にあります。有事の際の全権も政府から一任されています。私はメガルを守るのが最優先事項だと考えていますが。それとも博士は、ご自分が砦埜島から戻られた時にメガルが消滅していてもよろしかったとおっしゃられるのですか」

「……。何故発動が早まった」

睨みつけるような風野の視線ものともせず、長身の男、火刈は淡々とそれに受け答えた。

「それは私にもわかりかねます。太古のプログラムであることを考慮すれば、一日くらいの誤差は許容範囲だとすべきではないでしょうか」

「……」

「また大仰なものを持ち帰ってこられましたな」

口もとだけの笑みで火刈も窓の外に目をやる。

目線の先には、巨大なシートに包まれた高さ数十メートルはあるうかという物体があった。

「あれが本当に我々の切り札になればよろしいのだが……」

それが心からの言葉なのかは誰にもわからなかった。

再び波野からの連絡を受ける。

『柊主任が第一会議室に入室致しました』

二人は申し合わせる様子もなく、無言のまま司令室を退室した。

大会議室の中央に桔平の姿があった。

コの字型に並べられた机には大勢の幹部達の姿があり、桔平の正面に風野と火刈が腰を下ろしていた。

冷たく張りつめた空気が閑散とした部屋中に漂う。

「では樹神副主任が重傷を負いながらも海竜王を操縦し、インプ掃討後に生き絶えたと言うのだな」

火刈の横に座った男がぞんざいに問いかける。

桔平は戦闘服のまま起立し、それに応答した。

「はい。間違いありません」

「だがな、彼の死亡時刻とそれが一致しないのはどうということなのだ」

桔平が眉を寄せた。

「存じ上げません。しかし事実は事実です」

別の一人が横入りする。

「虚偽の報告は懲戒に値することは知っているな。それだけ君の発言の一つ一つには重い責任が課せられていることを忘れるな」

先の者に負けず劣らず、ぞんざいな口調だった。

「ならば逆にお聞きいたしますが、樹神陵太郎以外に他の誰があの海竜王を乗りこなせるのでしょうか。第一、何故私が嘘の報告

をしなければならぬのです」

「君の噂はいろいろと耳に届いている。あまりよくない噂もな」
さらに一人が参入してくる。これもまたぞんざいだった。

桔平の表情にわずかだが感情が浮かび上がった。

「ほう。それはどういった……」

「立場をわきまえたまえ！ 君は聞かれたことだけに答えればいい」
桔平をたしなめたのは二人目のぞんざいな男だった。

「……。正直なところ、私にも信じられないのです。樹神陵太郎が
何故あのような状態で海竜王を乗りこなせたのか。ひよっとしたら
海竜王自身に意思があるのでは……」

「君の憶測など必要はない！」

二人目の男が拳で机を叩く。

そこへ風野の声が重なった。

「本当にそう思うのか」

二人目の男の血の気が失せていく。慌てて拳を引き戻した。

「どういう意味です」

「海竜王に意思があり、或いは誰も搭乗しえない状態で動き出した、
と」

「非常に馬鹿げた憶測だと思います」

桔平の一言に会議室全体が凍りつく。

風野と火刈を除いて。

「だが、ありえない話じゃない」桔平が風野を睨みつけた。「あんな
達もあれを目の前で見りゃ、そう思うさ」

水を打ったような静けさの中、桔平と風野はいつまでも睨み合っ
ていた。

第二話 『風に折れない花』

2

桔平はメガル本部から離れ、格納庫へと歩を進めていた。

広大な敷地面積を誇るメガルには、本部を始めとする四棟の高層建造物の周囲に、ヘリや自家用機が離着陸できる滑走路が複数設置されている。海岸に面した部分は船舶の発着場になっており、排水量数万トンの大型船が何隻も並んでいた。それはさながら海兵隊の基幹基地を連想させるたたずまいだった。

敷地内でもっとも陰となる場所に、メック・トルーパー部隊の待機所兼事務所と三竜王の収納スペースが確保されていた。山々と高い防護壁に囲まれ、それらは外からは確認できない。ここでは総勢百名を超える機械化歩兵部隊、メック・トルーパーが交代で勤務していた。

煩雑な工事現場のような騒音と打撃音に振り返る。

エプロンで甲冑をまとった巨大な人型ロボットが動き回っているのが見えた。

空竜王と、そのオビディエンサー古閑夕季だった。あれ以来、夕季は寝る間も惜しんで空竜王を乗りこなそうと躍起になっていた。

複雑な連続機動に挑戦し何度も失敗する。

「野郎、またあんなところで……」

桔平がため息をつく。

それはどう見ても、あの日桔平が目の当たりにした海竜王の動きとは似ても似つかなかったからだ。

桔平は薄々感じ取っていた。

努力だけで手が届くものではないことを。

それを今夕季へ告げたところで無駄だろうことも。

格納庫の前で桔平が足を止める。

そこには上半身だけを立てた姿勢でベースにがっちり固定された海竜王の姿があった。本体にはまたあの野暮ったい防具が装着され、後任の搭乗者が最終訓練を終えるまで誰の手も触れることを禁じられていた。

隣には陸竜王が並ぶ。

複数の航空機が収納される別の格納庫の隣で、同じ割り当てのスペースの中にポツンと二体の竜王だけが鎮座する様は、異様な光景でもあった。薄暗い照明の下、本体の何倍ものメンテナンス機材が取り囲む。

コクピットが無防備な姿をさらしていた。

跳ね上げ式のハッチの裏面には、密閉時にシートを囲うように操作パネルが配置されており、そこにはスロットルと様々なスイッチ、計器類、警告ランプ等が見て取れた。

内部を覗き込む桔平。

搭乗者の体軀をすっかりホールドするシートの両脇に感圧式のステイックがある。それが操縦桿の役割をするとともに、微弱ながら操縦者の意思を信号化して制御回路に伝達する仕組みだった。

中は結構広いようで、前面パネルさえなければ細身な人間ならば重なうって押し込めるのではとも思わせた。

まるでコクピットに手足が付いただけの印象を受ける。

ほとんど機械部分も見当たらず、何故こんなものが動くのか不思議だった。

人外のモノ。

それ以外に表現する言葉が見つからなかった。

あの魔人のような動きを見てしまった以上はなおさら……

「おい」

明らかに敵意を持つ呼びかけに桔平が振り返る。

凶悪なまなざしが睨みつけていた。

エネミー・スイーパー隊長、木場雄一だった。

桔平とは違い、オリードラブの迷彩服を身にまとっている。

桔平は決して小柄な方ではない。それでも木場は桔平が見上げるほどに大きかった。そびえ立った頭髮がそれを一層際立たせる。

何ごともなかったように桔平が横を通り過ぎようとする。

するとすれ違いざまに木場が仕掛けてきた。

「柊、貴様何を考えている」

「ん？」ちらと目配せする。「腹減ったから自販機のハンバーガーでも食おうかなってよ。あのかぴかぴのやつ。あれで百五十円は正直イタイよな。いっそ腹決めて、あと五十円上乗せして食堂でカレー食った方が幸せに……」

「ふざけるな！」

「ふざけてねえよ。給料日前でピーピーなんだ。わりいけどおごってくれねえか。火曜日には返すから。来年の……」

木場が桔平の胸倉をつかみ、ぐいと締めあげた。

「とぼけるな！ 俺達のまわりをこそこそ嗅ぎまわりやがって。何が目的だ」

「とぼけてなんかねえって。失礼な言い方はよせや。俺はこそこそなんてしてないぜ」桔平が不敵に笑う。木場に体をあずけるように脱力した。「どうどうとやってるつもりだがな」

「貴様、ぬけぬけと！」

「おまえらこそ」ギロリと睨みつける。「何故出撃しなかった。おかげでこっちの戦力はガタガタだ。ひょっとして、それが目的だったんじゃないだろうな」

「馬鹿を言うな。それにどんな意味がある。俺達にはメガルを守るという優先目標があった。それにあの程度の状況で崩壊するようではなんのためのメックだ。我々ならあんな失態はない……」

途端に豹変する桔平の顔つき。木場の腕をつかみ、力を込める。

「もう一度言ってみろ、ぶち殺すぞ」

そのすさまじいまでの迫力に木場が退いた。

「彼は司令の指示に従っただけよ。落ち度はないわ」

救いの声に振り返る木場、と桔平。

その顔を確認し、桔平から表情が消え失せた。

「木場主任、持ち場へ戻りなさい」

くっ、と齒がみして木場が桔平を解放する。痺れる手首を押さえ、桔平を睨みつけるようにそこから立ち去って行った。

すでに木場のことなど眼中にない桔平に冷たい視線を投げかけ、幹部だけが着ることを許された制服に身をつつんだその女、進藤あさみはたしなめるように言った。

「柊主任。もう少し自重したらどう。あなたのしていることはそこいら中に筒抜けよ。メガル上層部にもね」

「マジか。しゃあねえ、ゴリラえもんのパソコン覗き見るのはもうやめとくわ。どうせたいしたモンも入ってねえしな」

まるで感情をともしなわれない受け答えの後、ぷいとそっぽを向いた。大音響の激突音とともに大地が震える。

二人が顔を向けると、空竜王が派手に転倒している姿が飛び込んできた。

桔平の顔が青ざめる。

「言っておくけどなあ！　ありゃ、俺がやらせたんじゃないからな。夕季のバカが勝手にやってるだけだ。あれほど場内でぶん回すなって言っと思ったのによお！　下ボコボコになっても俺のせいじゃねえからな！」

その様子にあさみがくすつと笑った。

「わかってるわ。私が許可をしたの。彼女にも早く戦力になって欲しいから」

「んだよ。聞いてねえぞ……」ふて腐れたようにまた横を向く。

「どうして昨日は来なかったの？」

「あん？　ありゃ、おまえらの葬式だ。こっちはこっちで勝手にやる」

「相変わらずね」

「そいつはどーも、だ」

「まあいいわ。でもことがこれ以上大きくなれば、あなた一人の問

題ではすまなくなるのよ」

「……そんなにおおごとにしなくてもいいだろ。ちょっとエッチな画像でもないかと探ってただけなのによ。もっとエグいの集めてるのかと思ったが、あいつにはガツカリだ……」

「知らないとは言わせないわ」

あさみの口調が厳しく責めたてるそれに変わった。

「あなたが自分の手の者を使っているいろいろと探りをいれていることくらい、こちらは先刻承知よ」

見透かしたような微笑みにもまるで動じることのない桔平。面倒くさそうに言葉を絞り出した。

「忠告か。何故敵の俺に」

「昔のよしみ、かしらね」

「いらん世話だ。ほっといてくれ」

「ふ」あさみが笑う。哀れみを込めてつないだ。「どおりで隊員達の心も離れていくはずね」

「離れたい奴は離れていけばいい」

「隊長としての資質を疑うわね。でもこれだけは覚えておくといい」艶やかな漆黒のショートカットとシャープなエッジを持つ輪郭は、対峙する者に緊張感を与える。何より、氷のように冷たいそのまなざしの行方を、誰も見定めることはできなかった。「あなたがこれ以上まだ愚かな行為を繰り返すというのなら、こちらもいつまでも黙って見ているわけにはいかない」

「ぶっ殺す、か？ いいよ、好きにしてくれりゃ」

「いい気にならないで。あなた一人どうこうするくらいたやすいことなのよ」

「陵太郎を見殺しにしたように、だよな」

「……」

「エスにはすべてわかっていたはずだ。俺達には下りてこないような情報も最初から全部。あいつを殺したのはおまえ達だ。俺は絶対におまえらを許さない。絶対だ」

「メガルを敵に回すことになってる？」

「はなから味方だなんて思っちゃいねえよ。メガルは俺からすべて奪っていった。おまえらと同じだ。俺はメガルもおまえらも許さない」

桔平があさみを睨みつける。その鋭い眼光に、パーフェクト・ワールドと比喻されたあさみの心がわずかに退いた。

「……そう。どうとってもらってもかまわない。あなたには心から失望しました。もっと賢い選択ができる人だと思っていたのに」

「賢くなくて結構だ。消えろよ。二度とそのツラを見たくない」

「お互い様ね」

二人は別々の方角に歩き始めた。

決して振り返ることもなく。

第二話 『風に折れない花』

3

光輔は肩を落とし落ち込んだ様子で、一人校門から出ようとしていた。

振り返り、校舎を眺める。

その表情からは何の期待もうかがえなかった。グラウンドで部活動に勤しむ生徒達の活発な声すら無機質に響き、わずかにも心を揺らさない。

「穂村君」

篠原みずきの声がし、光輔が顔を向ける。

するとみずきが息を切らせながら走り寄って来るのが見えた。真新しい紺色のブレザーとグレーのスカートがまだ馴染んでいない。

「どこに行ってたの。さっきまで曽我君達探してたよ」

「ああ……」

「……。こだま先生、残念だったね。いい人だったのに。地震で逃げ遅れた人を助けようとして飛び込んでくなくて、なかなかできないよ」

光輔が黙り込む。

気を遣ったつもりが地雷を踏んでしまい、慌てて話題を探すみずき。きよろきよろと辺りを見回した。何ごとかに気づき、声をあげる。

「あ、あの人だよ。前に穂村君見てた人って」

ちらと目線をやる光輔。少しだけ表情を曇らせた。

「こっちに来る」

光輔の顔を認め、その少女が近づいて来る。ゴールデンポイントでまとめたナチュラルブラウンの髪を揺らし、目の前で立ち止まった。

古閑夕季だった。

光輔もそれに合わせるように顔を向けた。

何も言わずに光輔を睨みつける夕季。その両眼の持つ力強さに、かたわらのみずきが退いた。

それから夕季は瞬き一つすることなく、光輔から顔をそむけ立ち去って行った。

「ふええ……」みずきが緊張から解放される。胸もとの赤いタイを撫でながら、光輔の顔を見上げた。「知り合いなの？」

「……いいや」

「何年の人かな。なんかかっこいいよね。穂村君に用があったんじゃないの？」

「……」

駅までの並木道を光輔とみずきは並んで歩いていた。

みずきが話しかけ、光輔が相づちをうつ。

少しずつ光輔の表情に明るさが戻り始めていた。

光輔とみずきは市外の中学校出身で、高校進学の際に光輔だけが山凌市へと越してきていた。

「じゃあね、穂村君。また明日」

みずきが手を振り、駅の構内へ向かう。二人が乗る列車は、別々の方角だった。

光輔も手を振ってそれに応えた。

乗車までにまだ時間がある。

暇つぶしに光輔は駅前のコンビニエンス・ストアへと立ち寄るところにした。

おもむろに週刊誌を手にとると、先の大津波の記事が載っていた。あの時すべての人間が避難していたとは到底思えない。自分達と同じように、惨状を目の当たりにした者も、少なからず存在するはずだった。

真実を限られた人間達の手のひらに封じ込め、あれだけの被害を

もみ消す力が働いていたことに、光輔はただならぬ背景を感じ取っていた。

「それ読んだら、ちびっとつき合ってくれねえかな」

ふいの呼びかけに光輔が振り返る。そばには他に誰もいなかったからだ。

「終わったら家まで送ってやるから」

駐車場の大型トレーラーを親指でさし示し、柊桔平は不敵な笑みを浮かべてみせた。

『海竜王が何者かによって持ち出されました』

波野からの連絡を受け、火刈は風野の顔をうかがった。

二人とも眉一つ動かさない。

「博士」

「ああ……」

まるですべてを予測していたかのように二人は落ち着き払っていた。

ふん、と鼻から息をもらし、火刈が立ち上がる。蛇のような目で

風野を見下ろした。

「少し気になったことが」

「なんだ」風野がじろりと見やる。

「いえね。樹神雅につき添ってやって来た少年のことですが、ガイアー財団からの支援を受けている子供の一人だったのです。それも特A扱いの」

火刈が資料を風野のデスクへ差し出す。

風野が眉を寄せた。

「穂村、光輔……」

夕刻、夕季は一人、格納庫へ向かう長い通路を歩いていた。空竜王に搭乗するために。

あの日見た海竜王の動きはまるで次元の違うものだった。

自分でも悔しいほどにわかっていた。あれは訓練しただけで扱えるようなものではないということ。

どうすればいいのかわからない。それでも空竜王に乗らずにはおれなかったのだ。

攻撃的なまなざしの底に、疲労だけが積み重なっていく。

このままではいつか限界を迎えるだろう。

それでも諦められなかった。

諦められない理由があった。

「！」

通路の反対側から一人の隊員がやって来る。

木場と同じ戦闘服を着た女性隊員だった。

その夕季によく似た顔立ちの長身の隊員は、束ねた黒髪を揺らしながら何ごともなかったように、冷たいコンクリートの通路を通りすぎて行った。

そこに誰もいないかのごとくに。

キツとなって夕季が振り返る。すさまじい形相で彼女の背中を睨み続けた。

その時、プログラムの発動を告げる警報が場内に鳴り渡った。

山の中腹にあるアスレチック公園の駐車場に、一台の大型トレーラーが停められていた。

荷台の上には巨大な人がたが上半身をやや起こすように設置されている。

海竜王だった。

平日で他に人影もなく、辺りはすでに暗くなりかけていた。

神妙な様子で立ちつくす光輔へ背を向け、桔平はくだけた調子でそれを切り出した。

「俺もついこないだまで知らなかったんだがな、もともとこのロボットは精神感応つてので動くらしいな。何を基準に感応指数なんてのを割り出してるのかは知らないがね。ただ簡単に思うようには動かない。で、操縦する奴らは、この周りに貼り付けられた鎧みたいなものを補助動力として、とりあえずロボットを動かしてるわけだ。ほら、あるだろ。手足にギプスみたいな装着して、女の子でもプロレスラーみたいな力が出せるようになるっての。あれと同じ原理だ。要は余計なものだ。本当のこいつはこんな宇宙服みたいなずんぐりむっくりじゃなくて、もっとスマートなんだぜ。こいつの本当の姿を知ってるのは、メガルでも上層部の人間達と一部の技術者だけって話だ。乗ってる奴らからして、実際見たこともねえんじゃないかな。でもよ、この補助具取っちゃったら、どこにも機械や燃料なんかがある場所が見あたらないんだよな。どうやって動くのか想像もつかねえ」

桔平が振り返る。その軽妙な口調とは正反対の鋭いまなざしで光輔を睨みつけた。

「こいつには裏スペックがあつてな。これがハンパねえ。いや、本

来のスペックとでも言うべきかな。動かすだけなら俺にだってできる。だが獣のように駆けずり回って、バケモノどもを蹴散らすなんて真似は到底不可能だ。俺が何を言いたいのか、わかるか？」

桔平の迫力に押され、尻込みする光輔。ごくりと生唾を飲み込んだ。

「いえ……」

「教えてくれねえかな」

「何を、ですか」

「こいつの動かし方」

「……」

「コードは解除しておいたから、今なら中に入れるぞ。さ、パパッとやってみせてくれよ」

「そんな、俺に言われても……」

「とぼけるな！」

突然の怒号に、瞬間的に光輔の体が縮み上がる。すぐに落ち着き払った表情になった。

それを見て桔平は、光輔が事情を飲み込んだことを知った。ほう、という顔つきになる。

「わかってるんだぜ。あの時こいつのそばにいたのはおまえだけだ。樹神陵太郎はすでに息を引き取っていたからな。おまえじゃなければ他に誰がいる。特定危険者リスト特Aランクの穂村光輔先生よ」

驚きの表情を浮かべ、光輔が動きを止める。

「……なんですか、それ？」

「ああ！」

桔平の恫喝に光輔が身をすくめる。しかしその表情の中に浮かんだ好奇心を桔平は見逃さなかった。

「おまえ、六年前に一度こいつに乗ったことがあるんだろ？」

「……知りません。こんなロボット見るの、初めてです」

桔平が眉を寄せる。

今日初めて見たというのは嘘だろう。だが六年前に乗っていない

という言葉は本当らしく思えた。

桔平の頭が混乱し始める。

すると今度は光輔の方から切り出してきた。

「確かに僕は六年前メガルにいました。でもそれは姉さんがメガルに必要とされていただけで、姉さんがいなくなってから、またもとの施設へ戻されたんです」

「……」考えを巡らせる桔平。何かを探るように光輔を凝視した。

「姉さんはどうした」

「死にました。メガルの中で。詳しくは教えてもらえなかったけど、何かの実験中に事故にあったみたいです」

「……。本当に知らないのか？」

「はい……」桔平の顔を見上げる。すがるような表情になった。「何があったんですか。教えてください。姉さんは何故……」

「そこまでは俺も知らないな」

「……」

「極秘扱いなんだろう。俺が知っているのは、おまえさんが昔メガルにやっかいになって、その後なんらかの理由で財団から一生を約束されたってことだけだ。てっきり搭乗者試験にリストアップしてるものだと思ったんだがな」

「そう、ですか……」

光輔が肩を落とす。

予想外の展開に桔平は困惑の色を隠せなかった。

「まあいい。それはそれだ。今俺が知りたいのは、あの時海竜王に乗っていたのが誰かってことだけだ。俺達はいいつに乘る人間をオビディエンサーって呼んでる。従属者って意味らしい。あくまでもこいつが王様で、俺達が家来だからだ。だがそんな王様を、王様とも思わずに自分の手足のようにぶん回しちゃった奴がいる」鋭い眼光で光輔を圧倒する。「おまえだろ、穂村光輔」

「僕じゃありません……」語尾が消え落ちる。

「じゃ、誰だ。おまえ、見てたんだろ。あの時、樹神雅と一緒にい

たはずだからな」

「……知りません」

「知りません、知りませんで通ると思ってんのか」

「本当に知らないんです。でもロボットなら見ました」

「……」

「ロボットが動き出すのは見えました。誰が乗っていたのかまでは知りません」

桔平が瞬きもせず光輔を睨みつける。タバコの煙を派手に吐き出した。

「おまえ、俺が雅達のところへ行った時、いなかったよな。どこへ行ってた」

光輔の体がビクッと反応する。

「隠れてました。バケモノがうじゃうじゃ出てきて、怖くて」

「動けない女の子一人置き去りにしてか」

「……はい」

「ふざけるな！」

桔平が光輔の胸倉をつかみ、その体が十センチも浮き上がる。

「適当なことばっか並べやがって。いい加減ムカついてしょーがねえぞ！」

「でも本当のことですから」

桔平から目をそらす光輔。おそろおそろ顔を向け、続けた。

「雅を置いて一人で逃げたことは言い訳できません。それが気に入らないんだったら、殴ってください」

その目は力強く輝いていた。

ちっ、と舌打ちし、桔平が光輔を解放する。

それは拒絶というよりは、かたくなに心を閉ざし、殻に閉じこもっているように桔平の目には映っていた。

「ち、クソが」

腹の虫が収まらず、桔平が悪態をつき始める。

「情けねえ！ 情けねえぞ！ こんなクズを助けようとして俺は走

り回ってたのか！」

近くにあったバケツを蹴飛ばした。

「あのバカ、こんなモン助けようとして死んじまいやがった！」

光輔が桔平に注目する。あのバカを示すのが陵太郎だということ
はすぐにピンときた。

「任務ほっぽり出して、逃げ遅れた間抜けな妹助けるためにてめえ
が死んでりゃ世話ねえな、ったくよ。こっちの身にもなれってんだ
！ なんの義理もねえクソガキども迎えに死ぬ覚悟で行ってみりゃ、
当の本人は隠れてましたってか。冗談じゃねえぞ。いい加減愛想も
つきたぜ、陵太郎よ！」

「！」

「最後の最後まで尻拭いばっかさせやがって、結局なんの恩返しも
しねえで死んじまいやがった。なんだったんだ、あいつは。人に迷
惑しかかけられねえのか、ボケ倒しが！」

「……やめろ」

押し殺したような光輔の声に桔平が振り返る。じろりと見やった。

「あん！」

「それ以上、あの人の悪口を言うな」光輔の全身がぶるぶると震え
ていた。怒りに染まった顔を上げ、桔平を睨みつける。「あの人を、
りようちゃんを侮辱したら、俺が許さない！」

「言ったらどうする？ 俺を殴るか？」表情もなく光輔を眺めた。

「それともあのロボットで引き裂いてみるか？」

光輔が背中を向けた。

「これ以上あんたと話すことは何もない。あんたはりようちゃん
のことを何も知らない。どんな気持ちで俺達を助けに来たのか。どん
なに悔しい思いをしながら死んでいったのか。それでも俺達を心配
させないようにつて、笑って死んでいったことも」

「知るか、ボケ！」冷たい口調で突き放す。「ろくにケツの毛もは
えそろってねえクソガキが、青臭え理屈偉そうに垂れ流してやがっ
て。何言ってるのかよくわからんが、俺がわかってるのは、あいつ

がいろいろやつかいなもんだけ残して、勝手に死んじゃったってことだけだ。後始末だなんだ、こっちに全部おつかぶせてな。たまったもんじゃねえ、ったくよ」

キツとなって振り返る光輔。

その表情からは怒りの度合いがありありと見てとれた。

「死んじゃう方は気楽でいいよな。何もしなくていいんだからよ。だがこっちは違う。あいつと知り合いってだけで、なんの役にも立たねえ妹まで押しつけられた。いい迷惑だ、まったくよ。でもあの娘も逆によかったのかも知れねえな。甲斐性なしの兄貴が死んだおかげで、一生働かないで食ってけるんだからな。うらやましいね」

「いい加減にしろ！」

「知るかって言ってるんだ。で、どうしたいんだおまえは」桔平の目が据わる。「こっちはさっきからずっと待ってるわけだが、来るのか来ねえのか、どっちだ」

「……」

「簡単には殴らせてやらねえぞ。俺はおまえが思っているより十倍強くて、百倍容赦がねえ。ガキだろうが女だろうが、向かってくる奴はボコボコに叩きのめす」

光輔の表情は変わらなかった。桔平の挑発も冷静に受け止める。

それに気づき、桔平がフンと鼻で息をつく。あきれ返るように光輔を追い払った。

「もういい、行け。とんだ見込み違いだった」

「……」

「バカがバカなりに命張って守った奴が、どんなもんかと期待して見に来てみりゃこのざまだ。こんな腰抜け守るために命捨てるとは、あいつも筋金入りの間抜け野郎だな」

「やめろ。俺はなんて言われてもかまわない。でもあの人のことだけは悪く言うな」

「おまえにゃ関係ねえだろ。こっちにもこっちの人間関係がある。あいつは俺にそう言われても仕方がないようなことしちまったんだ

よ」

「約束しろ」

桔平の言葉を受け流すように光輔が続ける。

「もう二度と、樹神陵太郎を侮辱するようなことは言わないと」

「知るか！」睨み返す桔平。「おまえ、あいつのなんなんだ。大の

仲良しか？ 親友か？ どうなってんだ、コラ！ あれか？ 大好

きなお兄様の悪口言うと、許さねえぞ、ってやつか？ べたべた

してて気持ちわりい野郎だな」

「……言葉になんてできない」

「はん！」

「そんな安っぽいものじゃない。あの人は、俺の希望だった……」

「……」

「俺だけじゃない。雅だって、礼也だってそうだ。あの人を侮辱されて黙ってるくらいなら、死んだ方がマシだ」

「簡単に死ぬ死ぬ言ってるじゃねえぞ。そういうのが安っぽいってんだ。ろくに腹も決まってるじゃねえくせしやがって。覚悟もねえのに、いっちょ前の口たたくんじゃねえ、クソガキが！ あいつのことだ。桜島でアニメソング絶叫しちゃうような、イタい兄貴だったんじゃないのか？ どうせ小遣いでも恵んでもらって抱き込まれてたんだろうがな。腰抜けの兄貴分はやっぱり腰抜けってことなん……」

桔平の言葉が途切れる。

光輔が思い切り殴りつけたからだだった。

それでも桔平は身じろぎ一つせずその場に踏みとどまった。

頬に拳をめり込ませながら、じろりと光輔を睨めつける。

「そんなもんか、おまえの覚悟ってのは」

「うああー！」

堰を切ったように二発、三発と光輔が桔平を殴り続ける。

六発目でついに桔平がよろめいた。

はっと我に返る光輔。両手のかまえを解き、桔平からの制裁を覚悟した。

「それで終わりか？」

「……」

「なら今日のところはこれでチャラにしておいてくれ。割に合わねえかもしれねえが」

桔平が何を言っているのか光輔にはわからなかった。呆然とその顔を見続ける。

「すまなかったな。くだらねえこと言っちゃまって。忘れてくれ。……あいつのこと、かばってくれてありがとうな」

ようやく桔平の真意に気づき、戸惑いの表情を浮かべる光輔。立ち去ろうとする桔平を追いかけるように投げかけた。

「あなたは、りょうちゃんのなんなんですか」

桔平が足を止めた。

「おまえさんと同じだよ。あいつは俺にとってかけがえのない親友だった。弟みたいなものかもな」何のためらいもなくそれを口にする。「あいつがどう思ってたかは知らないがな」

「……あ」

「ひいらぎだ」振り返り笑う。それから背中を向けた。「柊きっぺい。もう会うこともないだろうがな」

辺りはすっかり暗くなり、細かな表情までは読み取れなかったが、光輔には桔平が嬉しそうに笑っているように見えた。

「柊さん……」

「なあ、あいつは笑って死んでいったのか？」

「……はい」

「そうか……」少しだけ間を置く。「きっとおまえさんに何かを託したんだろうな。あのバカッたれの考えることはよくわからんが」しばらくしてまた立ち止まった。

「二度とメガルには近づくなよ」

それが自分の身を案じての言葉であることを知り、光輔は神妙な様子で頷いた。

「はい」

その時津波の発生を告げる警鐘が市中に鳴り渡った。
それはプログラムの発動を意味していた。

第二話 『風に折れない花』

5

信じがたい光景だった。

海からやって来ると思われていたインプが、山の中から現れ出たのである。

光輔と桔平に狙いをつけたように。

体長約二メートル。暗いため黒か茶色か判別しづらい本体の頭部には、先の個体とは違い赤い球体が揺らめいていた。黒ずくめの全身は、まるで人の影が起き上がってきたものかと錯覚するほどの容貌で、駐車場の薄灯かりの下、赤い一つ目だけが爛々と光を放っていた。

目測で数は二十体から三十体、或いはそれ以上。

くっ、と歯がみする桔平。

「乗れ！」

「はい」

間近に迫りつつあったインプ達を置き去りにし、桔平がトレーラーを急発進させる。

二人のかたわらをいくつもの砂の弾丸がかすめ飛んでいった。

焦ったように時刻を確認し、桔平が悪態をつく。

「くそっ、どうなってんだ。予定よりずいぶんはええじゃねえか！

地震もねえのに津波はおかしいだろ。焦って速報流してんじやねえだろうな、オッサン！ ああっ！」

「……」

車体に無数の衝撃を感知し、何度もハンドルをとられそうになる。特殊コーティングを施した外装がなければとくにスクラップになっているはずだった。

海竜王をつなぎ止めていたワイヤーが断裂し、巨大な人がたが荷

台から放り出された。海竜王は激しく地面に叩きつけられ、仰向けの状態で駐車場の片隅に放置されることとなった。

「！」眼前に踊り出た二つの人影を確認し、桔平が眉間に力を込める。一瞬で人外のものだと判別した。「しっかりつかまってる」

瞬きもせずに桔平を眺め、光輔が頷いた。

桔平が躊躇なくアクセルを踏み込む。

すさまじい衝撃をともない、トレーラーに弾き飛ばされる黒い人影。それらはインパクトの瞬間、大量の砂となってフロントグラスに覆い被さってきた。

「くそ、見えねえだろ！ いい加減にしとけて……」

「柊さん、前！」

「んあ！」

ワイパーをフル活動させると、徐々に露となる前方視界に突如としてコンクリートの斜面が飛び込んできた。

咄嗟に急制動を試みる桔平。しかし砂にまみれた車輪はそれを受け止め切れず、ロックと解除を繰り返しながら横滑りを始めたのだ。

「くあっ！」

「ちよっと！」

ハンドルをせわしく操作し危機を回避しようとする。が、コントロールを失った車体はくの字に折れ曲がり、懸架部分だけを壁面に激突させて動きを止めた。ジャックナイフ現象をおこし、さらに前輪が段差に乗り上げたため、車体は完全に身動きがとれなくなっていた。それでも最悪の状況に陥らずにすんだのは、桔平の人並みはずれた操縦技術によるものだった。

「あちちち……」ハンドルにつっぱんでいた桔平がしかめツラを光輔に向ける。「大丈夫か、坊主」

「何とか……」後頭部を押さえながら光輔が苦笑いしてみせた。「直前の記憶がかなり飛んでますけど……」

「そいつは都合がいい。嫌なことは忘れちまうに限る」

「はは……」

ふっと笑う桔平。それから後部の収納スペースからサブマシンガンを取り出し、光輔へ手渡した。

「おまえさん、これ持って逃げる。このレバーこっちに倒して引き金引きゃ、勝手に弾が出る。調子にのって撃ちすぎるなよ」

「柊さん……」

「ここをまっすぐ行けば出口だ。とにかく死にもの狂いで走れ。俺ができるだけ時間をかせぐ」ちらと外に目をやる。じりじりと無数のインプが近づきつつあった。「いよいよとなったら、そいつで自分の身を守れ」

「柊さんは」

「俺にはこいつがある」懐のホルスターから愛用の拳銃を抜いてみせる。「タマも腐るほどあるしな。あとは適当なところで逃げるさ」

「でも……」

「心配するな。俺よりもおまえの安全の方があやしいのは確定だ」ふいに申し訳なさそうな顔になった。「すまなかったな。危険な目にあわせちゃって」

取っ手に手をかけ、動きを止める桔平。感慨深げに左腕の時計を眺めると、それを手首からはずし光輔に手渡した。

「悪いが、これ、持ってくれないか。一品モノなんだ」

「……。高価な物なんですか」

「見てのとおり、どこでも売ってる安物だ。俺にとっちゃお宝だな」

「誰かの形見とかですか」

「……まあ、そんなところだ」何ごとかを思い返すように目を細める。真顔で光輔に向き直った。「さあ、行け！」

勢いよくドアを開け、桔平が走り始める。その行く先にはインプの群れが待ちかまえていた。

飛びかかってきた一体の赤いコア目がけて、銃弾を三発撃ち込む。弾頭に仕込まれた高性能の炸薬によってインプの体が四散した。大量の砂が桔平に降りかかる。

視界の片隅に光輔の走り去る姿を確認し、桔平がにやりと笑った。「さあ、とことんやろうじゃねえか、バケモノども……」

何かに取り憑かれたような表情。

それは絶望を払拭するために己を奮い立たせているふうでもあった。

素早い身のこなしで砂の弾幕をかくぐり、両手でホールドした拳銃で確実にインプを仕留めていく。かつて裏自衛隊特殊部隊で、並ぶ者なきつわものと畏れられた戦士の姿がそこにはあった。

複列弾倉の九ミリ炸裂弾十五発を撃ち終える前に、躊躇なくマガジンチェンジを行い、続けざまに攻撃を仕掛ける。トリプル・タツプを基本に、さらに一撃、また一撃を加え、桔平は次々と敵を蹴散らしていった。

サブマシンガンと同じ特殊実包を実装しているとはいえ、拳銃一挺で人外の敵を駆逐するさまは、さながら修羅のようだった。

それでも弾の数には限界がある。

退路どころか、しだいに桔平は山側へと押し込まれ始めていた。

九体目のインプを倒し、パウチから最後の予備弾倉を取り出し、銃に叩き込む。

振り向きざまに五発連射。

同時に放たれた砂の矢が桔平の右肩を貫いた。

トイレの壁に背中からもたれかかり、苦悶の表情を浮かべながら銃を左手に持ち替える桔平。

出血がひどく、意識が遠のき始めていた。

眼前のインプを弾き飛ばすと、砕け散った砂の向こうに赤く光る目が何十も見えてとれた。

残りの弾はあと数発。

桔平が肩で息をし出す。

じりじりとインプが迫りつつあった。

精も根もつき果て、がっくりとうなだれる桔平を取り囲むように。薄暗い常夜灯が照らし出す人類のテリトリーの中へ、それらは遠

慮なく踏み込もうとしていた。

正面の一匹が鞭のような腕を突き刺そうと振りかぶった。
その刹那。

それを待ち受けていたかのように桔平が顔を上げる。

両眼の光はいまだ消えてはいなかった。

「クソが、てめえらなんかに屈服してたまるか」あえぐように吐き捨てた。「たとえケツの毛一本になってもな！」

ガン、ガン、ガン、ガン！……

後退したままの状態でロックされるスライド。

弾切れだった。

それでも桔平は銃を下ろそうとはしなかった。目標を補足したまま、前だけを睨み続ける。

そこに眼前の敵以外の何かを見据えるように。

一斉に飛びかかるインプの群れ。

桔平は瞬きもせずはその状況に抗い続けていた。

ふと、一人の少女の顔が脳裏をよぎる。

それは眩いばかりの笑顔だった。

桔平が少しだけ目を細める。

その時だった。

桔平を切り裂こうと距離を詰めた数体のインプが、砂となって散らばったのである。

ブシャッ！

すさまじい破碎音に再び活目する桔平。

眼前に何モノかが立ちはだかっていた。

桔平の体をおおいつくすような、黒く巨大な影。

サソリのように毒々しく、ぬめりと光を放つ全長六メートルの漆黒の巨人は、鋭くとがった顎と一對の触覚のような角を持ち、そびえ立つ両肩と切れ上がった冷血なまなざしで魔獣達を威嚇していた。
海竜王だった。

「おまえ……」

たった今無粋な使い魔を切り裂いた、銀色に輝く長爪を真横に振り抜いた姿は、背中を預けた戦友を守ろうとする意志のあらわれのようだった。

無気味な光を放つ黄橙色の両眼が振り返る。

桔平が無事であることを確認したのか、海竜王は再びインプの群れと向き直った。

手首の隆起部に爪を収め、両手を広げたまま突き出す。すると手のひらからもうもうと霧が立ち込め、すべてを白くかき消していった。

それ以上桔平の目には何も映らなかった。

慌てふためくように逃げ惑うインプの気配と、短い間隔で聞こえ続ける破碎音だけが耳を刺激する。

ただ、うつすらと浮かび上がる海竜王のシルエットをкаろうじて認識していた。

「そうか、陵太郎……」せばまる視界、薄れゆく意識の中、桔平が心の内で呟いた。『これがおまえが託した希望なんだな……』

気がつくと目の前に光輔の顔があった。

「柊さん、しっかりしてください。柊さん！」

「……」桔平が正気を取り戻す。心配そうに光輔が覗き込んでいた。「今救急車を呼びましたから。もう少し我慢して……」

突然光輔の胸倉に手をかける桔平。ケガ人とは思えないほどの力で光輔の体をたぐり寄せた。

「いいか、これは俺の手柄だ。余計なこと言うんじゃないぞ。言ったらぶっ殺す！」

何かに取り憑かれたような表情で睨みつけ、光輔の体を放り出した。

「二度と俺の前に顔を出すな。その時は今度こそ、ぐっ……」傷にさわりうめく。最後の気力で声を絞り出した。「ボコボコにしてやる……」

その真意に気づき目を細める光輔。なごり惜しげに桔平を見つめ

た。

「わかってますよ。ありがとうございます。りょうちゃんのために……」

「うるせえ！」

光輔が去って行く。

メック・トルーパー部隊が桔平のもとへと集結しつつあった。

遠くにサイレンの音を聞きながら、桔平がふっと笑った。

愚かな三文芝居を嘲笑するように。

第二話 『風に折れない花』

6

病院の一室に桔平はいた。

光輔を思つての桔平の嘘はすぐにばれ、海竜王を勝手に持ち出した件と合わせて進退問題にまで発展しそうな勢이었다。

会議室で散々桔平を罵倒した男らが捨て台詞を残して帰って行く。何故か不思議なことに補助具をはずした海竜王の件には一切触れていなかった。

そのわけをぼんやりと考える。

かたわらで部下がまくしたてているのも上の空だった。

「柊、貴様俺達の隊長だろうが、何をしているんだ！」

目の前に髭面を突きつけられ、ようやく桔平の思考が現実へと戻る。

「すまん、鳳さん。あとはあんたに任せるよ。どうやら俺は首らしからな」

鳳と呼ばれた年配の男は憤慨しながら病室を出て行った。ハンガードアも閉めず、最後に振り返り、怒りをぶちまける。

「見損なつたぞ！」

眉一つ動かさずに桔平はその様子を受け止めていた。

目線を窓の外へ向ける。

開け放たれた窓からは心地よいそよ風が入り込み、小物入れの上の一輪挿しを揺らした。

淡いピンク色。

種類はわからないが、それは見ているだけで桔平の心を穏やかにさせた。

ふと陵太郎のことを思い出す。

以前陵太郎は、雅の他にもう一人兄弟がいると桔平に打ち明けた

ことがあった。

その時は光輔のことは知らなかったが、事故で亡くなった陵太郎の恋人の弟とだけ認識していた。

『俺にもし何かあったら、二人のことお願いできませんか……』

怪訝そうな顔つきの桔平に、陵太郎が笑顔を向ける。

それに反応したのは、桔平の隣にいた木場雄一だった。

「よし、全部俺に任せておけ。木場四兄弟の誕生だ」

無表情に陵太郎の顔を眺め、桔平が淡々と言葉を発した。

「ひかるって娘の弟か？」

「はい」

力強く頷く陵太郎に、桔平が複雑そうに眉を寄せた。

「ただかわいそうなだけだったらやめとけ。おまえがその娘のことを引きずっている限り、かえってそいつがつらい思いをするだけだぞ」

それが決して自分をくさして言っているわけではないことを陵太郎は知っていた。

心からの想いを桔平にぶつける。

「最初はそうだったんです。でも今ではあいつのことを本当の弟だと思っています。いつの間にか、俺のちっぽけな世界の中にあいつがいるんですよ。俺が守りたい大切なものの中に、あいつがしゃりいる。雅と同じように。あいつも、俺の希望の一つなんです」

その笑顔がひたすら眩しかった。

懐かしそうに花を眺める桔平。

ぼそりと呟く。

「どいつもこいつも、恥ずかしいこと平気で口にしゃがって……」
足音に気づき桔平が顔を向ける。

それが進藤あさみのものだわかるや、ちっ、と舌打ちした。
そんなことなどおかまいなしにあさみが勝手に話し始める。

「ずいぶんな失態を演じたものね。何故こんな馬鹿な真似を」

「たいした理由じゃない」顔も見ずに突き放した。「おまえに言わ

れたように少し賢く生きてみようと思ったただけだ。見積もりが甘すぎたけどな」

「意図がまるでわからないわ。まるで自分を窮地に陥れるために、わざとそんなことをしたとしか思えない。樹神陵太郎の弔い合戦のつもりなの？」

「男心のわからねえ奴には、何も言う気にはならねえな」

「よりにもよってあんな見え見えの嘘を。おかげでこちらは竜王に誘われてインプが現れるという仮説の裏づけをしていただけたわけだから、お礼を言わなくちゃいけないわね。それとも、インプがそこに現れるということがあらかじめわかっていたのかしら？」

「……」

「でもこれで本当にどこにも居場所がなくなったわね」

ようやくあさみに顔を向ける桔平。

「そんな嫌味を言いに来たのか」

「違う。あなたをスカウトしにきたの」妖しく笑いかける。「エスならあなたにもう一度チャンスを与えることができる。改めて言います。あなたをエネミー・スニーパーの隊長として迎え入れたいの」

「俺は隊長失格じゃなかったのか？」

「メックではそう。でもエスならば、あなたの使い道がある」

「……。木場は」

「彼は信用できない」

「俺なら信用できるってのか？」

その問いかけにあさみは答えなかった。

窓の外に目をやり、桔平がふっと笑いをもらす。

「渡りに船ってやつだな。魅力的すぎて思わずくらくらっときちまった」

瞬きもせず、桔平の横顔に注目するあさみ。

「わかってんだろ。言わなくても」

「……。すぐに答えを求めてはいけません。入院中にじっくり考えるといい」

「どれだけ考えても同じだ。俺はおまえ達の仲間にはならない」
「何か思い違いをしているみたいね。あなたには他に選択肢はないのよ」

「ああ、わかってる」

「ならば何故……」

「おまえと俺は敵同士だからだ」

桔平は振り返らない。

だがあさみにはその表情が手に取るようにわかっていた。

「……。そうだったわね」少しだけ淋しそうに笑い、背中を向けた。

「ずっと、前から」

あさみが立ち去ろうとした。

「ごめんなさい。お邪魔だったわね」

「……。……。あさみ」

ふいに呼び止められ、あさみが立ち止まる。

桔平が静かにつないだ。

「すまない」

あさみの表情が揺れる。

それは間近で見てもわからないような微妙な変化だった。

「あなたに謝られるようなことは何もないわ」

「いや……」ゆっくりと桔平が振り返る。申し訳なさそうに目を細

めた。「おまえから貰った時計、なくしちゃった」

あさみが背を向けたままなので互いの表情が伝わることはない。

むしろ二人は、それを知ることが拒むかのようにでもあった。

やがて振り向きもせずにあさみが押し出す。

「そう、別にかまわないけれど……」

風が吹きカーテンが揺れる。

花瓶の一輪挿しが向きを変えた。

了

第三話 『そこにある希望』

OP

柊桔平は何故自分がその場所にいないかならないのかも理解できないまま、ただ突き刺さるような雨にうたれ続けていた。

目の前に進藤あさみの姿があった。桔平同様、激しく降り注ぐ雨に身をさらしながら、何事かを懇願するように訴えている。

忘れ去られてしまったタバコが桔平の口もとで淋しそうに揺れていた。

重苦しい表情の理由を一向に解す様子もなく、懸命に説得を続けるあさみ。

桔平が眉を寄せ、あさみを眺めた。悲痛な表情で訴えかける瞳が、もはや自分を映さないことを知りながら。

脳裏をよぎる少女の顔。

その微笑みはあさみの中学生の頃のものであり、或いは高校生のものであり、いずれも眩いばかりの輝きがいまだ桔平の心をとらえて放さなかった。

まるで今そこにあるように、桔平が眩しそうに目を細める。それからゆっくりと首を横に振った。

その意志の強さを感じ取り、あさみが淋しげに眉を寄せる。震える口もとを、キッと固く結んだ。

「そう。ならば、もう私達は、……一緒にはいられない。今、ここから、……私達は敵同士だから……」

消え入りそうな声であさみがそう告げた。

雨空を見上げ、桔平が拳を握りしめる。

あさみから受け取った腕時計が濡れていた。

止められぬ時に抗えない、二人の血の涙にまみれるように。

「……ああ」

顔も向けずに桔平が呟く。心の中でそれにつないだ。

『これからもな……』

雨が強く降り続けていた。

二度と振り返ることのない背中をかき消す、絶望の雨が。

第三話 『そこにある希望』

1

古閑夕季は重い足取りで格納庫からの長い通路を歩いていた。

その表情には苦悩が浮かび上がる。

先のプログラム発動時には出動を告げられなかった。風野博士が承認しなかったためだ。

それを夕季は自分への期待の薄さのように感じていた。

一度目の発動時、インプの群れを全滅させたのは何者かが操った海竜王だった。また先日、明確な目撃情報こそないものの、別々インプのインプを海竜王が殲滅したという噂だった。

壁時計で今が深夜の三時過ぎだということを確認する。通路には夜でも十分な照度が得られていたが、夕季にとってそこは冷たく薄暗いイメージでしかなかった。

窓越しに月明かりを見上げる。

操縦技術では礼也や陵太郎に及ばない。その穴を埋めようと夕季は寝る間も惜しんで訓練に励んできた。

手応えはあった。

あの日、あの海竜王の躍動する姿を見るまでは。

今のままではどうしても越えられない壁。

努力だけでは埋められない何か。

おそらくは封印を解くための何らかの鍵があるのでと考えていた。

だがそれがどのようなものか皆目見当もつかない。

海竜王の操縦者に会い、直接確かめたかった。

何百人とリストアップされた候補者の中で、夕季は空竜王との相性をもっともよいと認められた。それが第一オビディエンサーに選ばれた理由でもある。

同じように、陸竜王には霧崎礼也が、海竜王には樹神陵太郎が選定されていた。

操縦桿を握るコンペティションを行えば、夕季より優れた搭乗者も数多く存在するのだろう。だがそういった能力面を重視せず、あくまでもオビディエンサーとしての資質に重きが置かれ、夕季が選ばれた。

誰よりも空竜王をうまく扱える可能性を持つと判断されたからだ。その期待を裏切るわけにはいかなかった。他に頼る身寄りもない自分が、必要だと求められるのはこの場所だけなのだから。

次の発動はおよそ一週間後であると囁かれていた。

コンクリートの壁に拳を叩きつける。

唇を噛みしめた。

自分が遠く及ばなかった陵太郎をさしおいて、オビディエンサーに選ばれなかった何者かが海竜王を手足のように操っている。

空竜王をよりうまく乗りこなせるだろう人間が存在する可能性を否定できずに、夕季は悔しさと胸が張り裂けそうだった。

「？」

足音が聞こえ、こんな時間に他に誰がいるのかと顔を向ける。

その人物を確認し、夕季の表情が一変した。

先回の発動前に夕季のかたわらを何も言わずに通り過ぎた、長身の女性隊員だった。

途端に夕季の両目がつり上がる。激情を隠そうともせず、突き刺すように夕季が睨みつけた。

しかし、木場と同じエネミー・スイーパーの戦闘服に身を包むその隊員は、前と同様夕季のことなど気にもとめない様子で通り過ぎようとした。

互いに視線の軸を修正することなくすれ違っていく二人。

夕季の横を通り抜け、五、六歩進んでから、ようやく彼女が足を止めた。

「ずいぶん熱心なのね。その割に成果はあがってないようだけれど」

振り向きもせず言う。

その言葉に過剰な反応を示し、夕季がキツとなって振り返った。

「あなたには関係ないでしょ！」

「関係ないなんて言わせないわよ」夕季とは対象的に、抑揚のない声で彼女が続ける。「竜王はプログラムに対抗する最終手段なのだから。それが使い物にならないければ私達メック・トルーパーが彼らと戦い続けなければならない。いくら世界最高峰の技術力を持つメガルでも、人外の脅威にいつまでも対抗しきれない……」

「そんなことわかってる！」

夕季の怒鳴り声に女性隊員がゆっくりと振り返る。その容姿は夕季によく似ていた。年齢が幾らか上で、夕季よりやや背が高い。

「わかっているならもっと努力しなさい。もともとエスはあなた達に頼るつもりもないけれど」冷たく突き放した。「どこかでまだ誰かの力をあてにしているんじゃないの。メックやエスがなんとかしてくれるんじゃないかって。それともまた海竜王が助けてくれるのを待つつもり……」

「うるさい！」

「わめくだけなら誰でもできる。悔しかったら一日でも早く竜王を乗りこなしてみせなさい」

「！」

「撤退命令を無視して他の隊員の救出に向かったそうね」

「だから、何」

「自分すら守れない人間が他人を救おうだなんて、身のほど知らずもいいところだって言っているの。自らの置かれた立場を理解しているのなら、そんなことできないはずよ。規律は自分を守るための鎧だと思いなさい。子供だからって特別扱いしてもらえなくても思ったら、大間違いよ」

「そんなこと思ってない！ 私は……」

「それだけじゃない。あなたがしたことは、彼らを侮辱したことになる」

「！」

「私達は軍隊じゃない。軍隊のように降伏することも許されない。自分の命は自分で守るしかないということくらい、メックの人間なら誰でも知っている。それだけの覚悟で危険に臨んでいるの。それなのにあなたは、余計なことをして彼らの気持ちを踏みにじった」

「でも……」

「私達にとって何よりも耐えがたい苦痛は、自分の失態のせいで仲間を危険にさらすこと。みんなそれがわかっていて助けても求めないし、誰もそれを恨まない。あなたがよかれと思ってしたことを、私達は誰一人として望んではいない。むしろ苦しいだけ」

「……」

「あなたは戦力として多くの人間達の中から選ばれた。選ばれなかった人達の想いも背負っている。なのに自分勝手な行動ばかりしてこれでは資格を剥奪されても仕方がないわね」

「……悔しいんでしょ」うなるように夕季がそれを口にした。「自分じゃなくて私が選ばれたことが。だからそんな嫌味を言う。いい気味だと思ってる。でもあなたより私の方が優れていることに変わりはない」

肩を震わせながら噛みつく夕季を冷静に眺め、女性隊員は少しだけ目を細めた。

「ここまで愚かな人間だとは思わなかった。まるで成長していないのね。そんな考えでは、いつか必ず、死ぬわよ」

「陵太郎さんみたいに？」

「！」

「あの人も愚かな人間だったって言いたいんでしょ？ だから死んだんだよね。だったら私も、愚かなままでいい」

「……その行為を尊いものだと感じているのなら好きにすればいい。誰かのために死を選んで、その誰かに悲しんでもらえることで満足できるのなら」

「私が死んでも悲しむ人なんてどこもない。でも喜ぶ人間なら知

っている」

「……。一ついいことを教えておいてあげる。私達エスには他のメックにはない特別な権限が与えられている。それは……」じろりと夕季を睨めつけた。「竜王の操縦者がメガルの意図に反する行動をとった場合、すみやかに操縦者を排除し、竜王の回収を優先すること。それがたとえ血のつながった姉妹であっても例外はない」

その言葉に別段驚く様子もみせず、夕季はぶすりと吐き捨てた。

「血のつながった姉妹だから、じゃないの？」

夕季の目が据わる。

「あいにくだけど、それを決めるのは私じゃない。でももし命令されれば、断る理由はない」

「やれるものなら、やってみれば」

憎しみを正面から受け止め、夕季の姉、古閑忍は揺るぎのないまなざしを向けた。

「覚えておくといい。メガルはあなた達の命なんて少しも尊重してはいない。あなた達の代わりはいくらでもいるから。竜王を守るためなら何でもする。それが今のメガル。あなたが考えている以上に非情で、汚い組織よ。それが嫌なら今すぐにやめなさい」

夕季が唇を噛みしめる。

姉の言葉ではなく、その存在すべてを否定するように睨み続けた。

第三話 『そこにある希望』

2

風野守人は気難しそうな表情で報告書に目を通していた。

司令室の奥にある待機室は風野の専用の部屋で、別名社長室とも呼ばれていた。司令室同様、ガラス越しに海岸線を見渡せる。部屋には十分なスペースがあったが、必要最低限の調度類しか置かれていなかった。

眉間に皺を寄せ何度も報告書を読み返す風野を、かたわらにいた長身の男、火刈聖宜がちらとうかがい見た。

「山から現れた赤いコアを持つ土色のインプですか。にわかに信じがたいことですな」

自分よりも年下の風野に敬語を遣う。

火刈は国防省から派遣され、有事の際のメガルの指揮権を一任されていた。

メガルは母体であるガイアー財団と政府の共同出資によって成り立つ。とは言え、政府の負担割合は微々たるもので、建前上単に武器を持つための口実として参加を要請していたにすぎなかった。その制限と干渉の割合は、出資の額よりはるかに大きかった。

メック・トルーパーの武器や兵装の大半は国外で展開する傘下企業によって開発され、その検閲を逃れるための手段とも言えた。

「柊主任の件ですが」

探るように火刈。

「その件ならもう済んだはずだ」じろりと火刈を睨めつけて言った。

「彼は解雇する」

「しかし……」

「竜王計画はメガルのプロジェクトの中でも最高機密に属する。その重要性も解さぬまま勝手に持ち出した罪は決して軽いものではない

い。本来ならばもっと重い処罰を科すところだ」

「それは重々に承知しておりますが、正直彼ほどのつわものを失うのはメックにとってかなりの痛手になりますな」

「本当に必要なのは力ではなく心だ。情勢を読み取れず判断を誤る心は、害にしかなりえない」

「実は、その報告書には記載されていない事項があるのですが」

火刈が意味ありげに風野を見下ろす。

「柊の口から直接確認を取ったわけではないので記載項目から除外しておきましたが、どうやらあの日彼は一人の人間にコンタクトを取っていたようなのです」

「……それがどうした」

風野の表情が微妙に変化したことを感じ取り、火刈が仕上げの段階に入った。

「駅前のコンビニエンス・ストアで一人の高校生に声をかけ、その後海竜王を積載したトレーラーとともに姿を消したとの証言が取れています。もしそれが、穂村光輔だとしたら？」

風野が火刈の顔を見上げる。

取りつく島のなかった風野に対して、火刈が余裕を崩さずにいられた理由がそれだった。

「前回と今回。二つの件に穂村光輔らしき人物が関与しています。おそらくは柊も何らかの意図を持って彼に接触をはかったものだと考えられますが」

「何故彼はそのことを我々に黙っている」

「確信がないか、或いは……」

「……」

「我々には報告できない何らかの真実を手に入れたと見るべきですな」

風野が報告書を凝視する。深く考えを巡らせた。

「彼は有能な男です。我々をも欺こうとしている。利用価値は充分にあると思われませんが。それにここまでメガルの内情を知る者を、

たとえ監視つきとはいえ野放しにするのは、かえって危険ではないでしょうか」

「……」

「財団の子供達ですか。博士のお気持ちがわからんでもありませんが、もっと広く裾野を広げられてもよろしいのではありませんか？ 政府にはより高等な教育と厳しい訓練を積み重ねた逸材が溢れ返るほど存在します。ここにいる幼い輩よりも成熟した心を持ち、オビディエンサーとしても相応のスペックを備えたスペシャリスト達です。そろそろ権限の私的な占有も限界なのではありませんか？」

「……」

「三階級の降格。それでよろしいですな」

風野はそれに答えようとはせず、ただ報告書を睨みつけていた。蛇のような目を向け、火刈が意味ありげに笑った。

「光ちゃん」

通学途中の並木道で樹神雅に肩を叩かれ、光輔が振り返る。

久々に学校を訪れた雅のその満面の微笑みに、光輔は戸惑いの色を隠せなかった。

「あ、おはよ……」

朝の陽射しと相まって、その顔を直視できずにいる光輔をおもしろそうに眺め、雅はほがらかな口調で続けた。

「何だ、何だ、元気がないなあ。すっこり寝不足かあ？」

「……」 どう対応すればいいのかわからない。

それを感じ取り、雅はふふっと笑ってみせた。

「心配かけちゃったね。もう大丈夫だから、あたし。ケガもたいしたことなかったしね」 包帯を巻いた右足でトントンと地面を蹴る。

「ん、ああ……」

「いつまでもうじうじしていられないものね。お兄ちゃんはおたし達にこの世界でしっかり生きてほしくて犠牲になったんだから。何もしないで立ち止まっていたら全部無駄になっちゃうよ」

「雅……」

ふいに雅が背中を向ける。

「約束して」

「！」

「危険なことしたりしないって。一人で悩まないで、あたしに何でも話してほしい。あたしもそうするから。もう二度と、どこへも行ったたりしないって約束して。お願い……」

雅の背中を眺める光輔。そこからは雅の悲しみと孤独がひしひしと伝わってきた。

雅にとって、今や光輔はたった一人の家族なのだ。

「なくんてね」振り返らず、取り繕うように陽気さを装う雅。「でもほんと、駄目だよ。光ちゃん何だか危なっかしいから。お姉さんとしては心配で心配で、もうね……」

光輔が表情を曇らせる。桔平からの助言どおり、二度とメガルには関わるまいと心に決めた。だのに何故だか雅を欺いているような罪悪感にずっととらわれていた。

ふと向けた目線の先に、光輔は知った顔を見かけた。

古閑夕季だった。

雅が笑顔で迎え入れる。

「あ、ゆうき、おはよう」

夕季はすたすたと近寄って来ると、雅の目の前で足を止めた。

「みやちゃん、もう学校に来てもいいの？」

「うん、大丈夫」

「そう……」夕季が視線を落とす。

その様子に気遣うように雅が笑ってみせた。

「やめてよ、夕季。別に夕季達のこと、どうとか思っていないよ」

「でも、あたし達がもっとしっかりしていれば……」

「これ以上しっかりしてどうするの。ただでさえあたしよりお姉さんみたいなのに」

夕季がはっとなって顔を向ける。

その勢いで鞭のような後ろ髪がピシヤリと光輔の顔にヒットした。
「でっ！……」頬に手を当て、恨めしげに夕季を見続ける。

雅が不思議そうに光輔を眺めた。

「どうしたの？ 光ちゃん」

「……いえ、何でも……」

光輔に目を向ける夕季。その表情は拒絶を意味していた。

「……。あ、夕季、何組だっけ？」

「A」

「光ちゃんは？」

無防備状態で突然振られ、光輔がしどろもどろになった。

「お、俺、G組……」

そんなことなどまるでおかまいなしに雅。

「残念だね。一緒のクラスだとよかったのに」

「それはないって」夕季に睨まれた格好になり、光輔が卑屈な笑みでその場をしのぐとする。「A組は選抜クラスだから、俺みたいな脳ミソ足りないのはGとかにしか……」

「G組は体育コースでしょ。一緒になれるわけじゃないじゃない」

冷たく言い放った夕季の言葉が、カウンターとなって光輔の心に突き刺さった。

「おっしゃるとおりでございます……」

すっかりしよげてしまった光輔を目の当たりにし、雅が怪訝そうに首を傾けた。

「何であなた達そんなに仲悪いの？ せっかく久しぶりに会ったのに」

「別に悪いわけじゃないけど……」

夕季が光輔の様子をうかがう。

光輔がさつと顔をそむけた。

「光輔があたしのことを避けてるみたいだから」

「何、俺別に……」濡れ衣をかけられたように弁解を始める光輔。

夕季と目が合うや、小動物のようにこそこそ逃げ出した。「……嫌

つてるのは夕季の方だろ」

「いつそんなこと言った」

その強い眼光で思い切り睨みつける夕季。

「言ってないけど……」 光輔がちらと夕季を見やった。「……すぐ
そうやって睨むし」

「睨んでない」

「どこが！」しれっと言い放つ夕季に、光輔が敢然と立ち向かう。
が、夕季に睨み返され、すぐに目をそらした。「……ほら、思い切
り睨んでるし」

「どこが！」

「そ、そこが……」

「やめなさいよ。何で普通に話せないの」

二人同時に振り返る。だってえ、という顔を雅に向けた。

雅が噴き出す。おかしくてたまらないといった表情だった。

「そう言えばいつもケンカばかりしてたよね」

「ケンカじゃなくて、俺が一方的にいじめられてただけ」

「いじめてない！」

「あつははは。光ちゃんよく泣いてたもんね。ダメージは同じくら
いなのに、泣かないから夕季の勝ちかなみたいな」

「あたし別に勝ったとか思ったことない」

「俺も勝った記憶がまったくない……」

「それだけ仲良かったってことだよ。光ちゃん、夕ちゃん、だった
じゃないの」

光輔と夕季が顔を見合わせる。すぐにバツが悪くなってそむけた。

「変わらないね、二人とも。ずっと一緒にいたみたい。あ、そうだ

……」 目尻の涙をぬぐい、思い出したように雅が切り出す。「桔平
さん入院したって本当？」

夕季が振り向いた。

「うん。こないだの発動でインプと戦って」

「信じられないね。桔平さんほどの人が」

「仕方ない。桔平さん一人だったから。それでもインプを全部倒したって、聞いた……」

夕季が口ごもる。真実は限られた人間にしか伝えられていなかった。

「やっぱりすごいな、あの人は。またお見舞いに行かなくちゃ。夕季、部屋の番号知ってたら教えて」

「……うん」

その時そわそわしながら二人の会話を盗み聞きしている光輔に気づいた。

「どうかしたの、光ちゃん」

「いや、別に……」

夕季は表情もなくその顔を眺めていた。

夕季は空竜王のハッチを開け、ふう、と深くため息をついた。
相変わらず手応えがつかめない。

これから雅と桔平の見舞いに行く約束をしており、帰ったらまた深夜まで訓練を続けるつもりだった。

次の発動で招集がかかるかどうかはわからない。だが姉忍が言うようにあてにされていないのだとしたら、これ以上の屈辱はない。せめて戦力として、メックとの共闘に参加したかった。

忍の顔を思い出す。

薄暗く広大な空間の中で、夕季は一人唇をきつく噛みしめた。

「頑張ってるな」

背後から呼びかけられ、夕季が振り返る。

格納庫の入り口からメック隊員が二人、夕季に笑いかけていた。

二人とも桔平と同じくらい背格好で、一人は短髪でガツチリしており、もう一人はやや髪が長めで優男風だった。

優男が箱の入ったビニール袋を夕季に差し出した。

「これ、食べてくれ」

状況がわからず怪訝そうに眺める夕季。

それを予想していたかのように、その隊員は笑いながら続けた。

「礼だよ。こないだ助けてもらった」

見覚えのある顔だった。記憶をたどる夕季。
思い出した。

陵太郎が亡くなった日、ケガを負った一人の隊員をかばったことを。

「……あたし、何もしていない。逆にメックの足でまといになってただけで、あの時だって海竜王が来なかったらどうなっていたか

……」

沈痛な面持ちでそう告げた夕季をつつみ込むように、その隊員は満面の笑みをみせた。

「そんなことどうだっていいんだ。おまえが自分の危険を顧みずに助けようとしてくれたことが嬉しかったんだから」

もう一人が乱入してくる。

「俺達の役目は命を張っておまえ達を守ることだ。死ぬのは覚悟の上だから誰も恨んだりはいないがね。そういう気持ちがありがたいんだよ。よこしまな考えにとらわれずに戦うことに専念できる。同じメックのエスが知らん顔なのに、おまえみたいな人間がいるだけで、何だか報われたような気になるよ」

「仕方ないだろ。仲間とは言っても、エスは俺達の中から枝分かれた、まったくの別物なんだから。命令系統も違うしな」

「あいつらはブラザーじゃない。自分達がエリート部隊だと勘違いしてやがる。ま、夕季に言っても仕方ないけどな」

「……」

「こら、そういう言い方するな。同じ仲間なんだから」

「お、悪い。そういうつもりはなかったんだけどな」

「……。別にいいけど……」

「まったくよ、こっちの女子高生の方がよっぽど頼りになるぜ。ま、命令違反までして俺達が助けてもらってちゃ意味ないけどな。上からたんまりおごってもらったんじゃないのか？」

「……たいしたことない」

「助けてもらっというて何だが、バツが悪いから今度からは気持ちだけにしておいてくれ」

優男が照れ臭そうに苦笑いする。

「こいつ、奥さんに怒られてやがんの。反対に助けられてどうするってよ」

「あ……」忍の言葉を思い出し、はっとなる夕季。うつむきながら申し訳なさそうな声を絞り出した。「ごめんなさい。余計なことし

て……」

「いや、そうじゃないんだって！」大げさに両手をばたばたさせて彼が否定する。「おまえは全然悪くない。俺がだらしがないのが確定なだけでさ」

「……」

「とりあえず、これ買ってきたから持って行って、さっき嫁さんがさ。レー何とかっていう店のシュークリーム。こないだ食ったけど結構うまかったよ」

「朝から並ばなきゃ買えないんだってさ」

「こら、言うな」

「……」

「嫁さん、すごく感謝してたよ。またちゃんとお礼がしたいから、こんど来てもらえって。無理になってわけじゃないけど」

夕季が戸惑うような表情になった。小声で言う。

「……ありがとう」

それを見てシュークリームを手渡した隊員は安心したように笑った。

「……。ケガ、大丈夫なの？」

「ん？ ああ。かすり傷だよ。勤務には支障ないレベル」

「それでも、しっかり労災出してやがんの」

「やかましい！」苦笑いをしてから、ほっとしたような顔になる。何かを思い返すように、噛みしめるようにそれを口にした。「本当のことを言うと内心ほっとしているんだ。半年前に子供が産まれてさ。最近は毎日無事に家に帰れることが、何よりもありがたく感じられるようになった」

夕季が表情を曇らせる。それを聞くべきか否か迷っていた。

「……。そんなに大事な人達がいるのに、どうしてこんな危険なことを続けてるの。怖くないの？」

優男風のその隊員が即答する。

「そりゃ怖いさ」

「だったらどうして。いつ死んでもおかしくないのに。二度と大切な人に会えなくなるかもしれないのに……」

知らず知らず夕季の表情に悲痛さが浮かび上がる。それを二人は好意的に受け止めた。

「大切な人だからそうしたいんだ。大切な人達だから、どんなことをしたって守りたいって思える」

「……」

「俺達は何も、世界の平和を守ったり、正義の味方になろうなんて大それたことは考えていない。ただ身近な人間だけは、自分の手で守りたいんだよ。おまえにだって守りたい人の一人や二人いるだろ？」

短髪の隊員が合いの手を入れた。「あたりまえだろ。でなきゃ、こんな得体のしれないもんに進んで乗るかよ。まあ逆にそういうのがいないからできるって奴もいるが」

「……あたしには、そんな人いない」

夕季がぼそりと告げた。

それを受けて二人が顔を見合わせる。ふっと笑った。

「夕季は違うよ。そんな人間が他人のために命を投げ出せるわけないだろ」

「そりゃそうだな。そんな奴ならいの一に逃げて出すはずだからな」
「きっと自分でもよくわかっていないだけだ」

絶句する夕季。彼らの解釈の中で美化された自分と、実際の自分とのギャップに後ろめたい気持ちになり始めていた。

沈んだような面持ちで箱を眺め続ける夕季を見て、二人も神妙な顔つきになった。

「すまないな。俺達にもっと力があれば、おまえらみたいな若いの、あてにしなくてすむんだが」

短髪の隊員の言葉が夕季の心呼び覚ます。目を見開いて顔を上げた。

二人は笑っていた。夕季が何より欲しがっていたものを惜しげも

なくさらけ出して。

「今度はちゃんとバックアップするからな」

「……」

「俺は駒田」短髪がウイंकをする。シュークリームを手渡した隊員を親指で指した。「こいつが……」

「南沢だ。覚えておいてくれ」

「いつまで一緒に仕事ができるかわからないけどな」

「こら、そういうことを言うな」

「じゃあな」

「頑張ってな」

「……うん」

二人が去って行く。夕季はその背中をいつまでも見送っていた。ふいに南沢が振り返った。

「あ、それ保冷剤融けちまってるから、すぐに食べないのなら冷蔵庫に入れといた方がいいぞ」

「バカ、おまえより百倍も頭いい奴に向かって言うことか」

「俺達よりも、だろ」

「俺はおまえの二割は頭いいぞ」

「嘘つけ」

笑い声の中、光射す通路に二人が消えて行く。

「無理するなよ」

夕季の心に信頼の二文字を刻みつけて。

メガルのゲート付近に夕季の姿があった。手には南沢から受け取った袋をぶら下げている。

雅と違い、夕季はメガルの敷地内にある宿舎で寝泊りしていた。駐屯基地並みの強固なゲート内でIDカードを提示し外へ出る。敷地外の茂みからゲートの様子をうかがうようにうろろしている、不信な人影を見かけた。

光輔だった。

光輔は夕季の姿を目にするや、そそくさと近寄って来た。

ちらと一瞥し、そのまま通り抜けようとする夕季。

それに気づき、焦ったように光輔が追いかけた。

「あ、の、柊さん、ケガどう？」

反応なし。

「……かなりひどそうだったみたいだけど」

足を止め、夕季がじろりと光輔を睨みつけた。

「どうしてそんなこと知ってるの」

「あ、いや、ちょっと……」

しどろもどろになった光輔を置き去りにして、夕季がまた歩き始める。

慌ててポケットから腕時計を取り出す光輔。桔平から預かったものだった。

「あのさ、柊さんがよくなってからでもいいんだけど、これ、あの人に渡しといってくれない」

差し出された時計を夕季がまじまじと眺める。

何も言わないのに光輔が勝手に補足説明を始めた。

「いや、別に何かあったってわけでもないんだけど、りょうちゃん

が俺のことあの人に話してたみたいで、ちょっとさ……」

「だったら自分で渡せば。あたし、あの人あまり好きじゃないから」
冷たく言い放ちスルーしようとする夕季を光輔が引き止める。「俺もうあの人の前に顔出せないんだよ。何だか怒らせちゃったみたいでさ。今度顔見せたらぼこになるまで殴られるらしい……」

「殴られればいいじゃない」

「そんなこと言わないでさ、頼むよ」無理やり夕季に時計を握らせた。「すごく大切なものらしいんだ。早く渡したくて。朝、雅とお見舞いに行くって話してたからさ、ちようどよかったかなって……」

「みやちゃんに渡せばいいのに」

「いや、雅にはちよつと頼みづらくて」

「あたしより？」

「え！ ……うゝん……」

「……。どうしてそんな大事なものを光輔に渡したまま忘れてくのぶすりと夕季。

とっさに光輔が取り繕う。

「あ、出勤命令があったからじゃないかな。その前に見せてもらってたんだけど」

「出勤命令？」

光輔が逃げ始める。緊張した面持ちでぶんぶんと手を振った。

「とにかく頼んだから」

光輔の背中を睨みつけながら、夕季はあきれたように鼻から息をもらした。

ノックの音がして桔平は病室のハンガードアに顔を向けた。

「どうぞ」隙間からのぞいた顔を見て、わざとらしく驚いた振りをする。「おおっと、びっくり！ タマゴロ」

すると何もリアクションをとることなく、ノックの主、夕季は部屋の中へ入って来た。

「めずらしいな。おまえさんが来るなんて。俺のこと嫌ってたくせ

に」

からかうような口調の桔平ものともせずに夕季。

「別に嫌ってるわけじゃない」

「好きでもない、だろ？」

「……。後でみやちゃんも来るから」

「何だ、一緒に来ればよかったのに」

その言葉には様々な意味合いが含まれていた。

無表情に桔平を眺めながら、夕季は光輔から預かった腕時計を差し出した。「これ」

桔平が目丸くする。今度は本当に驚いていた。

「何でこれをおまえが持ってるんだ？」

「穂村光輔が渡してくれて持ってきた。桔平さんの大切なものだからって」

「あの坊主、そんなこと言ったのか……」

桔平が嬉しそうに時計を手にする。

その様子を夕季は不思議そうに眺めていた。

「そんなに大切なもののなの」

すっかり夕季の存在を忘れていた桔平が振り返る。にやけた顔を向けた。

「ん？ 俺にとっては何。座れよ」

焦点を変えることなく、夕季がパイプ椅子に腰掛ける。

「どれくらい？」

今度は桔平が不思議そうに夕季を眺める番だった。妙に食いつきがいい。少なくとも桔平が知る夕季の中に、これほど興味を持って身を乗り出す姿はなかった。

「そうだな、絶対になくしたくないものの第一位ってところか。命の次に大事っつうか、むしろ命より大事っつうかな……」

「そんなに大事なものをどうして忘れていったの」

「……」一瞬キョトンとし、思わず笑う。「そりゃそうだ。スカしたこと言っというて、つじつま合わねえな」

ふいに夕季が複雑そうな表情になった。握りしめた拳を見つめ、戸惑いながらそれを口にする。

「……。あたしの大切なものって、何だろう……」

「そんなこともわかんねえのか？」

ゆっくり顔を向ける夕季。

「……わかるの？」

「バカ、俺にわかるわけねえだろ」即答。

「……」

「そんな人それぞれだからな。本当に大切なものなんて、本人にしかわからない。おまえの大切なものなんておまえにしかわかんねえよ。何言ってるんだ、やぶからぼうに。不思議少女ってガラでもねえだろが。ま、忘れちまったんならそのうち思い出すんじゃないか？ 風呂入ってる時とか、トイレで頑張ってる時とか、ぶりっとな。ちゃんとメモっとけよ。間違っって一緒に流すんじゃないぞ、ゲハハハハ！……」

眉を寄せ、夕季が桔平の顔を凝視する。

プレッシャーに耐え切れず、桔平が思わず目をそむけた。

「……そのネコ娘みたいなツラで睨むのはやめてくれ。タマが縮むじゃねえか」

「睨んでない」ふいに口をへの字に曲げた。「……でもバカはひどいと思う」

「ああ、そっち……」

「……。陵太郎さんが死んじゃった時は悲しかったけど、それとも何か違う気がする……」

桔平がふっと笑った。

「そんなこと俺に聞くために、一人でやって来たのか？」

口もとを真っ直ぐに結ぶ夕季。桔平の目をじっと見つめながら手に持った袋を突き出した。

「何だ、これ？」

「シュークリーム。桔平さん、甘いもの好きだって聞いてたから」

「お、レ、何とかってとこのやつじゃねえか。ここのうまいんだよな」

桔平の声が踊り出す。

「そんなにおいしいの？」

「バツカうまだ！ ……いや、おまえに言っただんじやないからな」
今日一番の即答。すぐに眉間をゆがめた。「おまえが買ってきたんじゃないのか？」

夕季が首を振った。素直に本当のことを打ち明ける。

「メックの人に貰った。この間あたしが助けようとしたからって」
桔平が、ははくん、という顔になった。

「おかしいと思ったよ。おまえが俺のためにこんなもの買ってくるわけないからな」

「……」

「嫌いなのか？ 甘いもの」

夕季がぶんぶんと首を振った。ずっと桔平の顔に注目したままだった。

「何となく受け取りづらくて。こんなもの貰えるようなこととしてないから……」

「気持ち重いんじゃないのか？」何気なく言う。心はすでに箱を開けることに夢中だった。

夕季の反応はない。

凶星だった。

桔平がおもしろそうに笑う。視線は菓子箱を開けることに集中したままだった。

「受け取ってやれよ。向こうはおまえがその気持ちをどう受け止めようと、何とも思っちゃいねえよ。押しつけようなんて気はさらさらなはずだ。いらなかったら捨てちまえ。もちろんまるごとスルーして俺によこすのもアリだ。意義アリだ！」嬉しそうに一つを手に取りかぶりついた。「お、抹茶だ。うめえな！」

夕季は同じ表情のまま、その様子を眺め続けていた。

桔平から目線をずらし、箱の中をそろっと覗き見る。

シュークリームをじっと見ている夕季に気づき、二つ目を口にくわえた桔平が箱を差し出した。

「ほれ」

「……」

中の一つを手に取り、夕季がかぷつと食いつく。レモンサワー味だった。

「うまいだろ」

夕季が小さく頷いた。「……うん」

ノックの音がして桔平は病室のドアに顔を向けた。

「どうぞ」隙間からのぞいた顔を見て、桔平が露骨に顔をゆがめてみせた。「おおっと、びっくり、タマブクロ……」

意味ありげな笑みを浮かべながら、進藤あさみが部屋の中へ入って来る。

手には花束を持っていた。

「相変わらずね」

「ほっとけ」

「元氣そうで何より」

「……。何しに来た」そっぽを向いてぶっきらぼうに桔平が吐き捨てる。

駄々っ子を見るようにあきれ顔で笑い、あさみは受け答えた。

「お見舞いに来たように見えない？」

「見えねえな。きな臭いにおいがぷんぷんする。おかげで入院が延びそうだ」

「そんなにのんびりしていてもいいの？」

「るせえ、いつまでもこんなところにいられるか。検査が終わったらすぐに退院してやる」

「自宅療養もいいけれど、しっかり治してからの方がいいんじゃない？ あなたのことから、じっとしているなんて無理でしょうし」
「思いがけないあさみの言葉に桔平が振り返る。」

あさみは桔平に背中を向けて何かを探していた。

「あら、この包み紙、レ、何とかっていうお店のじゃない。並んでもなかなか買えないのよね。まだある？」

「ない。ガッツリ食っちゃった」

「残念。あそこのシュークリームおいしいのに。特にレモンサワーの……」

「抹茶が激ウマだ！」

「あ、この花瓶、借りてもいいかしら？」

「ああ……」

花束の中身を花瓶に移しながら、あさみが続きを口にした。

「副局長として二つ、元メック・トルーパー隊長のあなたに伝えに来たの。私にはいい話なのか悪い話なのか判別できないけれど」

「何だ」

「一つはあなたの首がなくなったということ。ただし、三階級降格のおまけつきでね」

「上出来だろう。これで労災もおりるな」

「それはどうかしらね。命令違反には違いないから。ちなみに今度の賞与は全額カットらしいわよ」

「……」 桔平が悲しそうに窓の外を眺める。「頼むから、もう帰ってくれ……」

「あら、もっと大事なことが残っているのに」

桔平があさみに注目する。その含んだような口調が気になった。

「あなたの証言をもとに作成された報告書のことだけれど、やっぱり上層部は欺けなかったようね」

「……。どういう意味だ」

「意味はあなたの方がよくわかっているのじゃない。私はあくまでも聞いたことを伝えているだけよ」

「……」

作業を終えあさみが振り返る。思い通りの桔平のリアクションに満足げな笑みをみせた。

「海竜王のオビディエンサーの候補者として一人の少年がリストアップされたみたいね。近々メガルに招集して感応適正のテストを行う予定ですって」

「……誰だ、そいつは」

「さあ」にやりと笑う。「私にもわからない。知っているのは風野博士と火刈局長、あとはそのとりまきが何人かというところかしら」
「嘘つけ、副司令のおまえが知らないはずないだろ」

「もし知っていてもあなたには言わないけれど。あなたはそんな重要な機密を知る権利を持っていないから」

「さんざんぺらぺらしゃべつといてよく言うぜ。もともとこっちは何の情報も伝わってこないんだがな」

「だから言ったじゃない。あなたの方がよく知っているからって。私が考えているとおりなら、それで間違いないわ。あくまでもとぼけようっていうのなら、それはあなたの勝手だけれども。彼が二度までも海竜王を乗りこなし、インプを殲滅した人物だと上層部は睨んでいる」

「……」

桔平にはあさみの言わんとすることが手にとるようにわかった。その少年とは間違いなく穂村光輔のことを指している。

己の軽率な行動が光輔に危害を及ぼす結果を招いてしまったことに、桔平は痛烈に後悔の念を抱いていた。

「何を考えている、あさみ」

押し殺したような声を出し、桔平があさみを睨みつけた。

「何も」あさみが軽く受け流す。「私の使命はプログラムの排除。アスモデウスの消滅以外は考えていない。ただし」その瞳に陰が浮き上がった。「もし竜王がすべての元凶だと言うのなら、エネミー・スリーパーの名のもとに排斥しなければならない。たとえばそれが風野博士の意に反する結果になったとしても」

あさみの迫力に気圧される桔平。だがそれを黙ってやりすごすわけにはいかなかった。

桔平の覚悟を読み取ってか、あさみがふつと笑う。

「お邪魔してしまったみたいね。帰ります。早く治るといいわね」
「……」

あさみが机の上の腕時計を見つけた。

「その時計なくしたんじゃないの？」

「……引出しの奥に挟まっていたんだ。お袋が掃除してて見つけてくれた。あれだけ黙って部屋に入るなって言っただけだよ……」

「そう」事も無げに言う。「ぼろぼろじゃないの。もっといいもの買ってあげましようか？」

「いらねえよ。俺はこいつが気に入ってるんだ」

「でしょうね。いつまでも過去ばかりを引きずっているあなたには、お似合いかもしれないわね」

あさみがハンガードアのハンドルに手をかける。思い出したように振り返った。

「そうだ。今思い出したけれど、もう一つだけ教えておいてあげる。今度の発動の時に、海竜王をオビディエンサー抜きで同伴させるそうよ。あなたのおかげで」

「……何だ、そりゃ」

「あなたが証言したからに決まっているじゃないの。ごく少数だけれど、上層部の中にはあなたの報告書を額面どおり受け取る人達もいるみたいね。もし海竜王が本当に自らの意思を持つというのなら、メックを囷に見立てて、助けに現れるかどうかを確認したいんですって。私は馬鹿馬鹿しいと思うけれど、インプが竜王に導かれて現れることが証明されるならどちらでもいいわ。動かなければ、それはそれで穂村光輔が海竜王を動かしたという確証につながるわけだし」

「！」桔平が目を見開く。「おまえ、やっぱりあいつのことを！」

「あら、口がすべっちゃった。あなたもね」いたずらっぽく笑う。

その目だけは笑ってはいなかった。「穂村光輔とかなり親密な関係みたいね。これで彼が海竜王と何らかの関わりを持つことがはっきりした、のかな？」

「おい、これが最後だ」

ありったけの凄みを込めて桔平があさみを恫喝した。

「穂村光輔に何かしてしろ。おまえら全員、ぶっ殺す」

その迫力にさしものあさみも硬直する。気丈に睨み返した。

「本気でメガルと敵対するつもり？」

「メガルもクソもねえ。俺の敵は俺の大事なものを汚す奴らすべてだ」

「その結果、あなたがすべて失うことになってる？」

「これ以上、俺が何を失うって言うんだ。おまえらが俺の邪魔をするのなら容赦はしない。プログラムごとぶっ潰すだけだ」

「まだわからないの？ 竜王さえなくなればプログラムは何もしなくても消滅する。本当の敵はプログラムではなくて、それすらも己の野望のために利用しようとする誤った心。人類自らの手で構築した愚かな欲望。それさえなくなれば……」

「またもとに戻れるのか？ 俺もおまえも、木場も」

「……」眉を寄せるあさみ。「今さら、そんな都合のいい話、誰が納得できるの」

「……そうだったな」

あさみが背を向けた。

「私はあの男を許さない。私からすべて奪い取った、あの男を」決して融けない氷壁の彼方から聞こえるような声だった。

「……」

「……。残念だわ」あさみが部屋を出て行く。「私があなたの大事なもののの中に入っていないくて……」

桔平はいつまでもあさみが去った後のドアを睨みつけていた。

そこに愛する人間を奪ったかたきを投影するように。

アスモデウス・プログラムの三度目の発動を数時間後に控え、メガル内部は脈流のような慌しさだった。海底火山の噴火に伴う津波警報を発令し、すでに沿岸地域の住民は避難を完了していた。

国防省から自衛隊の出動を見合わせるとの通達を受理する。すべてがメガルにゆだねられることとなった。

今回もまた竜王の出動命令が下りることはなかった。

「私も連れて行って」

戦闘準備で慌しいメック・トルーパーの待機所で夕季が訴えかける。

だが隊員達を束ねる隊長格の男は、その声も耳に届かぬかのごとく、部下達に出撃前の指示を出し続けていた。

夕季が食い下がる。

「迷惑はかけないから」

恰幅のいい年配の髭面は、鬼のような形相で夕季を睨みつけた。

桔平から後事を引き継いだ、鳳という男だった。

「ガキの与太話につき合っている暇はない。目障りだ消えろ。室戸、駒田、さっさと自分の班をまとめろ。八木班はどうした!」

「邪魔なら見捨ててくれてもかまわない」

「消えろと言ったのが聞こえんか!」

夕季が眉間に力を込める。

「おかしいと思わないの。誰も乗っていない海竜王を連れて行くだけでエスは動かない。メックだけで戦うのは自殺行為だ」

「それがどうした!」

「みんな殺される……」

「おまえが来たくらいで何とかなるとでも思っているのか! うぬぼれるのもいい加減にしろ!」

鳳が憤慨して夕季の襟ぐりをつかむ。

それに負けじと夕季も睨み返した。肝の据わった顔だった。

「エスはメックも竜王も潰そうとしている。それでも、そんな命令に従う気なの」

「命令は命令だ。規律をおろそかにし、誰もが身勝手に振る舞えば、組織が簡単に崩壊することもわからんのか!」

「その規律がみんなの命を奪っても?」

「それが俺達の仕事だ!」

「エスは……」

「それ以上言うな!」目一杯の凄みを込める。「エスも俺達も同じ

メック・トルーパーだ。これ以上仲間を愚弄するようなことを言え
ば承知せんぞ！」

「……」

「何もできんガキがはねっ返りやがって。自分のプライドだけ押し
売りすればそれで満足か！」

二人が睨み合った。

互いに引く気配のないその様子を見て、二人の隊員が慌てて止め
に入ってくる。

駒田と南沢だった。

「鳳さん、違う。夕季はそんなつもりで言ったんじゃ……」

駒田の言葉をかき消して鳳。「平気で命令違反を犯すような奴を
信用できると思うか。命が預けられるのか。規律を守れない奴はと
つと組織から消えろ！」

夕季が口をへの字に結ぶ。悔しそうな表情だった。

夕季の全身が激しく打ち震えていた。

南沢がその肩を叩く。

「夕季、気を悪くするな。あの人も悪気があって言っているわけじ
ゃない。おまえの気持ちだってわかってはいるはずだ。きつとおまえ
を危険な目にあわせたくないんだよ」

それでも夕季は納得できなかった。

誰もいなくなった待機所で無線機を床に投げつける。

格納庫の空竜王に目をやると、整備クルーが忘れていったのか、
マスターキーが差し込まれた状態で放置されているのが確認できた。

夕季がぐっと顎を引き、空竜王を睨みつけた。

海からインプの群れが現れた。カウンターが算出した時刻もポイントもぴったりだった。

メガル基地から出動するメック部隊の後方には、木場雄一率いるエネミー・スニーパーの姿があった。ただし、海竜王を積載したトレーラーの護衛として。

メック・トルーパー部隊を出撃させるためには、事前に国防省に連絡し許可をえなければならぬ。しかしエスは部隊内の独立班として、制限を設けずにメガルが独自に動かせるよう認可されていた。その運用は司令に一任され、直接指揮をとるのは副司令の進藤あさみの権限だった。

木場が無線を受ける。

「ああ、わかっている。それはこちらで判断する。我々は海竜王の撤収に専念する……」

付近住民の避難を終えた海岸地帯で戦闘が始まった。一度目の襲撃ほどの規模ではないが、柱である桔平を欠くメックにとっては容易ならざる敵だった。

インプ対策は十二分に講じたものの、しだいにメックが押され始める。

その一キロメートルも後方から傍観する、エスが動く気配はなかった。

「ちくしょう！ エスはあくまでも動かないつもりか！」

隊員の一人がインプを粉碎しながらわめき散らす。

「知るか！ あいつらなんて最初からあてにはしてねえよ！」そばにいた同僚がトリガーを引きながら叫んだ。「奴らは俺達の仲間じゃない！」

「何で俺達だけこんなこと！」

「これで本当にいいのか！　ただ犬死にするだけじゃねえか！」

「バカ野郎！」鳳がどすのきいた声で仲間達を一喝した。「くだらないことに気をとられるな。戦闘に集中しろ！　俺達は目の前の敵を倒せばいいんだ。それ以外のことは考えるな！　エスも竜王もはなからいないものだと思え。俺達は俺達のために戦えばいいんだ！　奴らに常識は通用しない。当たらない、届かないは当然だと思え！」

鳳の放ったフルバーストにより、周囲のインプがすべて弾け飛ぶ。土砂降りのカーテンの向こうに、それ以上の数の青いコアが不気味にうごめくのが見えた。

「切りがねえな……」透明にゆらめく三メートルの人がたを見上げ、駒田が呟く。「やべ、レンタルの期日、今日までだった……」

「おまえ、親に延滞料金払わせる気かよ」インプを睨みつけたまま、南沢が真顔でたずねる。

「そいつは無理だ」

「エッチなやつか？」

「ああ」同じ方向を見据えながら、駒田が頷いた。「しかもかなりのマニアック系だ」

「……シャレにならないな」

「いっそ地球ごとなくなっちまえばいい」

「気持ちわかるが、なくなるのはおまえの部屋だけにしておいてくれ」

「ああ……。くそ、腹は決まったってのに、こんなことしか思いつかねえ。俺の人生、何だったんだ」

「それだけ充実してたってことだろ」

「ちきしょー、もっとエグいの借りておけばよかった」

「……ま、自業自得だな」

「何でやねん！」

サブマシンガンのマガジンを交換し、二人がインプ目がけて照準

を定める。

その時、耳をつんざくような豪音が鳴り響き、隊員達が一斉に空を見上げた。

地響きとともに、空から白い機影が舞い降りる。

空竜王だった。

空竜王は他の二体と異なり、背中にジェットパックを装着することで短時間だが飛行することができた。

鳳が厳しい表情で振り返った。

「空竜王です」波野しぶきが司令室で声を張る。「古閑夕季が命令違反を犯し、勝手に出撃しました」

司令室の特設スペースで火刈がその報告を受ける。風野をうかがい見た。

風野は連絡用のディスプレイを凝視したまま、何も言おうとはしなかった。

火刈が嘆息する。

「進藤副司令を呼んでくれ……」

「……了解した」本部からの司令を受け、木場が重々しく頷く。「ただちに遂行する……」

「隊長」

一歩前に進み出た隊員に目をやる木場。

古閑忍だった。

「何だ、古閑」

「私にやらせてください」

木場は眉一つ動かさずにその決意のまなざしを受け止めていた。

空竜王の参戦により、劣勢がくつがえりつつあった。

夕季は無駄のない動きで立ち回り、的確にインプを仕留めていく。ワイドレンジのコイルガンの予備弾倉を使い果たすと、腰に装着した二挺のサブマシンガンで続けざまにインプを粉碎していった。

補助具を外した海竜王の動きにははるかに及ばない。だが機体の

持つポテンシャルをほぼ最大まで発揮させていた。

いつしか夕季は、努力を積み重ねて到達しうる最高のレベルで、空竜王を操れるようになっていたのだ。

「やるじゃねえか」駒田が声をもらす。

鳳は瞬き一つせずにその様子を眺めていた。

水浸しの海岸道路で、インプを全滅させた空竜王をメック隊員達が迎え入れる。

歓喜の声の中、ハッチを開けた夕季に飛び込んできたのは、雷のような鳳の怒号だった。

「何を勝手なことをしている！」

夕季が顔を向け、表情もなく鳳を眺めた。

「また命令違反か。こんなことをして誉めてもらえんでも思ったら大間違いだ！」

「別に誉めてもらおうだなんて……」

「これで満足したか！ ならとっとと帰れ！ そして俺達の前に二度と顔を見せるな！」

「……」まるで取りつく島のない鳳に夕季が言葉を失う。すまなさそうに自分を見ている、南沢と駒田の姿が目映った。

夕季がメック隊員達を見渡す。

鳳以外の隊員達はみな複雑そうな表情だったが、感情を押し殺しているさまが夕季には拒絶のように思えた。

その様子をスコープ越しに眺め続ける人物がいた。忍だった。

『古閑』

海岸道路の森林の中に身を潜め、木場からの無線を忍が受ける。

「……はい」

『インプはすべて消滅した。命令は撤回だ』

「……了解しました」

忍が、ふう、と深く息を吐き出す。

それから夕季の心臓に照準を合わせたライフルを静かに下ろした。あぶら汗にまみれた額に手の甲をかざし、忍は疲れきった面持ちで

空を仰いだ。

少しでも眉を揺らし、夕季がハッチを閉める。

メック・トルーパーに背中を向け、空竜王が歩行を開始した。

「鳳さん……」

「言うな」南沢に振り返ることもなく、空竜王の後ろ姿を見送り続ける。「わかってる……」

その直後だった。

「大変です。またカウンターに反応が出ています！」司令部でしぶきが叫ぶ。「今度は空から……」

「何！ 空からだと！」

鳳が空を見上げる。

晴天だった空を雨雲が覆いつくしていた。それはメックに向かって集結し始めていた。

「何だ、ありゃ」駒田が驚きのあまり、口を閉じることすら忘れる。

「何て数だ……」

「鳳さん、撤退だ！ 今の俺達じゃ、あんなの相手にできっこない」南沢の声も耳に届かず、鳳は空を覆う翼を持った新たな敵を凝視していた。

雲のような白い人型のインプが翼をはためかせ近づいて来る。黒く見たたのはその無数の影が積み重なっていたためだった。

「鳳さん！」

「おまえら行け。俺は残る」

鳳の一言に隊員達が戦慄する。

「何を……」南沢が声を絞り出す。「無茶だ。あんた死ぬ気か！」

「応戦の指示が出ているのか！」駒田がつめ寄った。

「いや」

「だったら……」

「撤退命令も出ていない。俺の判断だ」

「……だったら指示を上げよ」

「その必要はない」

「な……」

「今俺達がすべきことは何だ」

「……」

「これから生きていく人間達に今の俺達の姿を見せてやることだ。」

どんな時でも屈しない姿勢を見せてやることだ。何があっても、見捨てず、逃げずに立ち向かう者がいることを教えてやることだ。たとえ一人でもな。必ずそれに応える人間はいる」エスのいる方角をちらと見た。「俺達は、それが必ずそこに存在するものだということを、正しい心を持つ者に信じさせてやらなければならない」

「だからって……」

「だからおまえ達は行け」

「……」

絶句する南沢に背中を向け、鳳は先につないだ。

「一人だって無駄死にをする必要はない。俺一人で充分だ」

「……どうでもいいけど規律はどうなったんだ？」

あきれ顔の駒田に鳳が言い放った。

「そんなもんクソツくらえだ！」

「……言っちゃまったよ」ちつと舌打ちする駒田。苦笑いしながら空を見上げた。「しゃあねえなあ、うちの隊長殿は……」

駒田が銃を手取る。他の隊員達もそれに続いた。

「一時の感情に流されるな。おまえ達は自分自身が正しいと思ったことをすればいい」

無然と言い切る鳳に、駒田が不本意そうに顔をゆがめてみせた。

「正しいも何も、今あんたが答えを出しちゃったじゃねえか」

「だから俺一人で充分だと……」

「あんた一人で何ができるよ」

「……」

「あんた一人残ったところでたいしたことできねえだろ。だったら犬死にみたいなもんだ」

「そうだよな」

他の隊員達が追従する。

「俺達は正しいことをしなくちゃなんのだろうが。何もできないうちに瞬殺されちゃったら、意味ないよな」

「言ってることが矛盾してるんだよな」

「さんざんカッコいいことぬかしといてよ」

「ツメが甘いんだよな」

「ま、昔からだけどな」

「おい、南沢、おまえは行け。一応ケガ人だし」

「おう、まだ可愛いガキとお別れするのは早すぎるからな」

「バカ言うな！」南沢が目を剥く。「こんなところで逃げたら、一生子供に顔向けできないだろ」

「バカ野郎！」

鳳の怒号に隊員達が身をすくませる。

鳳は隊員達に背中を向けたまままで押し殺した声を発した。

「これは遊びじゃねえんだ。残れば確実に死ぬ。くだらない体裁は捨てろ。むしろ引くことを勇気だと思え」

その問いかけに答える者はいなかった。みなにやにやと笑みを浮かべたまま、鳳の背中を見守っていた。

駒田が涼しげな笑みをたたえる。先までの軽い調子とは違い、静かにそれを口にした。

「俺達がここから逃げれば、奴らはまた街を襲うだろう。今度こそ多くの命が失われる。それだけは阻止しなけりゃならん」

同じ表情で南沢が続く。

「俺達が本当にしなければならんのは、仕事や命令に従うことじゃない。愛する者達をこの手で守ることだ」

「だな。それによ、みんなでやりゃ案外何とかなるかもしれねえしな」

「おお、ポジティブだな、おまえ。さすが元高校球児」

「ったりまえだ。あの地獄の猛特訓に比べりゃ、こんなの屁でもない」

「俺もだ。あの夏合宿を超える苦しみには、いまだかつて出あった記憶がない」

「おまえは卓球部だろうが」

「それは差別発言だぞ」

「……この、へなちよんぱどもが……」

ぐすんと鼻を鳴らす鳳。ようやく隊員達に顔を向けた。

「すまん、みんな」覚悟を決めた表情で笑った。「もし生き残れたら、好きなだけ飲ませてやる」

「あんたの言うことはあてにならんよ。ま、聞いただけ聞いとくが」
駒田の顔をじっと見る鳳。

二人がにやりとする。

他の隊員達も同じ顔になった。ケガや疲労で今にも倒れそうな体を気力で支えながら。

「できれば全員生き延びろよ。命令だ」

「無茶言うなって」

「柊さんにメールうつとか。DVD返しといて……」

「やめとけ。借りパクされるぞ。あの人も結構なマニアだから」

「なあ、へなちよんぱって何だ？」

「知るか！ おっさんに聞いとけ！」

ただならぬ気配を感じ取り、夕季が振り返った。

雨雲がもうもうと姿を変えながら、押し流されるのが見えた。
生暖かい風がさあっと吹き抜ける。

無線でしぶきを呼び出した。

『何が起ったの』

しぶきはそれには答えなかった。

「何でもありません。あなたは早くその場所から撤退しなさい」

『……』

「夕季」

『嫌だ』

「……」

『何かおかしい。今からそれを確かめに行く』

「夕季、これ以上の命令違反は……」

『切ります』

本部からの連絡を一方的に遮断する。

風野が立ち上がり、火刈に背中を向けた。

「仕方がありませんな」火刈が嘆息する。「今空竜王を失うわけにはいかない……」

「了解した……」木場が再度司令部から連絡を受け取る。

すうう、と深呼吸してから、忍を呼び出した。

「木場だ。古閑、命令は継続だ。すみやかに遂行しろ」

『……。了解』

木場が空を見上げる。

すべてを覆い隠そうとする暗闇が、空を埋めつくそうとしていた。

銀色のコアに夕陽を反射させながら、空を覆いつくすほどのインプの群れがメックに迫りつつあった。

夕季もそれを確認した。

空竜王の燃料は残り少なかった。飛行どころか、歩いてメックのもとまでたどり着くこともままならないほどに。

それでも夕季は前進をやめようとはしなかった。

たとえどれだけ罵倒されようと、彼らを見捨てることはできない。

「！」

ふいに空竜王の動きが緩慢になる。

一步、二歩と進み、空竜王は動かなくなった。

忍がバックパックを撃ち抜いたためだった。

何が起こったのかわからずにしゃにむに操縦桿を引き続ける夕季。

コクピット内部が暗くなり、ようやく燃料ゲージがゼロを示していることに気がついた。

「くっ！」

すでにメック隊員を肉眼で確認できる位置までたどり着いていた。しぶきからの連絡を受ける。

『夕季』

「波野さん……」

『燃料系統の故障のようです。すぐにエスを救援に向かわせますから、その場から離れないように』

「……」

『夕季、返事をしなさい』

「降ります」

『……。何を言って……』

「空竜王から降りて、メックと一緒に戦います。だから……」ギリ、と奥歯を噛みしめた。「狙撃はしないでください」

『夕季……』

「命令違反はわかっている。今さら弁解するつもりもない。でも、味方に殺されるのは嫌だ。戦う相手を間違えたまま、死ぬのは嫌だ……」

オープンチャンネルとなったその回線はあらゆる場所から確認されていた。

司令部を始め、エスにも、メックにも。

「隊長……」部下達が木場の顔色をうかがう。

「……サブマシンガンにはまだ残弾があるはずだ。万が一がある。注意を怠るな」

木場は少しだけ眉を動かしたが、その表情を崩すことはなかった。瞬きもせずに前だけを睨みつけ、特別回線の無線機を手に取った。

『古閑、空竜王はどうなっている？』

「はい」忍が受けて告げる。「動力ユニットは無効化しました。もう動けないはずです」

『オビディエンサーの確保は？』

「……まだです」

『……早くしろ』

「……。了解、しました……」

忍が空竜王目がけてポイントする。

今度は狙撃銃ではなく、パーム・バズーカをかまえていた。

プラズマ砲弾は空竜王の装甲を破壊できなくとも、当たり所が悪ければコクピット内部の人間に致命的なショックを与えうる。

忍のこめかみを伝う汗。トリガーにかかる指先がピクリとうごめいた。

『やめろ、夕季』

無線から聞こえてくる声にはっとなる夕季。そして忍。鳳だった。

「鳳……」コクピット内で夕季が呆けたような表情になる。すぐに口もとを引きしめた。

『来るな。おまえまで危険な目にあう必要はない。俺達はもう覚悟できている』

「でも！ 私も……」

『もういい。おまえの気持ちはわかった。それだけで充分だ』

「……。でも、でも……」コクピット内で夕季が唇を噛みしめる。メックのいる方角を睨みつけ、声をからさんばかりに叫び続けた。

「死んだら誰も守れない。みんな死んじゃったら、誰が大切な人達を守れば……」

『おまえがいる』

「！」

『おまえが俺達の希望だ。だからおまえまでこんなところで失うわけにはいかない。おまえも、俺達の大切な仲間だからな』

夕季の心をえぐる楔。同時に、後頭部を思い切り殴りつけられたような、鈍く重い衝撃を感じていた。

空竜王のハッチが静かに跳ね上がる。

「！」自ら即死領域に身をさらしたその覚悟の前に、忍は動揺を隠せなかった。

スコープ越しに映る夕季の凜としたまなざしに、忍の心が後退する。

脱力するようにかまえを解く忍。ぜえぜえと荒い呼吸が収まらなかった。

言葉もない夕季に、鳳は先までとはまるで違う優しげな口調で続けた。

「俺にもおまえと同じくらいの娘がいる。これがとんでもないはねっ返りでな、父親を父親とも思っていない。頭も顔も俺に似て悪いしな。おまえとは似ても似つかん。だがな、俺にとっては大事な娘なんだ。何があっても守ってやりたい」

それは父親が傷ついた娘を気遣う時と同じものだった。

「俺達はここに残る。だがまだ死ぬと決まったわけじゃないぞ。勘違いするなよ」

「何辛気臭いこと言ってるんだよ、おっさん」横から駒田がつっこみを入れる。

「バカ野郎、おまえ達のことを心配してやってるんだ、このへなちよんぱどもが！」

「俺らがそんな簡単にやられるかよ。って、へなちよんぱって何だ？」

『駒田さん……』囁くような夕季の声。

途端に血相を変えて駒田が無線機を奪い取る。きよろきよろと辺りを見回し、海岸道路の森林の陰になる場所で、空竜王のコクピットから身を乗り出す夕季の姿を確認した。

「お？ 名前覚えててくれたのか。嬉しいねえ」にんまりと笑う。

『……』

「心配するな。そう簡単にくたばったりしねえよ」

『……うん』

「じゃあな、夕季」

『え！』

「またなってことだ」

『……』

「俺にも貸せ」今度は南沢が乱入してきた。

「何すんだ、てめえ。今俺が……」

「いいから、貸せ！」

『！……南沢さん！』

揉み合いを辞め、二人が夕季の言葉に耳を傾ける。

『あ……』

「ん？」

『……シュークリーム、おいしかった……』

「……」瞬間ぽかんとし、すぐに南沢は嬉しそうに笑った。「ははっ、また買ってくからな」

『……うん』

「バカ、次は俺が買っていく番だ！」

「駄目だ、コマ。おまえにはセンスがない」

「おまえだって、さっちゃんに買わせたくせに！」

「今度は俺が直接行く！」

『約束……』

夕季の声が聞こえ、再び揉み合いを中断する駒田と南沢。夕季のいる方角に顔を向けた。

南沢が、ふっと笑った。「ああ、約束する」

「絶対にだ！」駒田が力強く頷いた。

『絶対に……、約束だから……』

「ああ、約束する。嫁さんと子供に誓って」

「俺はまだローンが残ってる愛車に誓う」

「んなもんに誓うな！」

「ほっとけ、俺の勝手だ！」

「いい加減にしろ、バカどもが！」鬼のような形相で鳳が二人から無線機をむしり取った。「いいか、もし俺達に何かあったら終に相談しろ。奴なら何とかするだろう」

『……うん』

歯切れの悪い夕季の様子に、鳳が目を細める。

まだ伝えなければならぬ言葉があった。しかし、鳳はどうしてもそれを口にすることができなかった。

「おまえはまだまだどうしようもない未熟者だ。何一つなっていない。帰ったら言いたいことが山ほどある。覚えておけ。だが……」

「……」

「今日この日に、おまえとともに戦えたことを俺達は誇りに思う」
鳳が敬礼をする。

「夕季。……明日、明日また会おう」

そこには目の前に確かに存在する希望を摘み取らないための優しさがあった。

それにならうように、一人、また一人と隊員達は夕季に向かって敬礼を始める。

満足げに笑う駒田の顔があった。

南沢は懷から一枚の写真を取り出し、嬉しそうに微笑んだ。

それが何かは判別できない。だが夕季にはわかっていて、彼が家族の写真を眺めていることが。

みな疲れきった表情だったが、悲壮感はなかった。

『さあ行け、夕季』

「……」

夕季の頬をくすぐる感情。

ふいに流れ出た一筋の涙にも、表情を変えはしなかった。

強き目の力で踏み止まり、唇を噛みしめる。

『……夕季』様子を探るように司令部からしづきが呼びかけてきた。

『夕季、聞こえているなら返事をしなさい』

「……ずるいよ。どうしてそんなこと言うの……」うなるように声を押し出す。「私には何もできないことわかってるくせに。誰も助けられないのに。みんなみたいに心配してくれる人も、守りたい人だっていないのに。明日なんて、どこにもないのに……」

『夕季……』

夕陽に染まるインプの大群を頭上に迎え、応戦を指示する鳳。

同時に空竜王の背後からエスの隊員達が近づきつつあった。夕季を排除するためである。

夕季の唇から血が滲み出す。

鼓動が響き始めていた。

夕季へと伝わる、空竜王からの鼓動が。

「どうしてみんな、そんなに簡単に納得できるの。誰かを守るために死ぬことがそんなに尊いことなの。どうしてなの。どうしてもつと生きたいって思っちゃいけないの。好きな人のために生きたいって思うことがそんなにいけないことなの。そんなにみつともないことなの。わかってるけど、それが正しいのかもしれないけれど……」

握りしめた両拳を腿に叩きつける。強い光を放つ瞳で涙を振り払い、誰にも届かない叫び声を絞り出した。「……誰も死なせたくない……」

激しく高まりゆく夕季の鼓動が、空竜王のそれと共鳴し始めていた。

淡い光につつまれる空竜王をエネミー・スイーパーが取り囲む。時を同じくして、白いインプの群れが一斉にメックに襲いかかった。

その刹那。

『ああああー！』

「夕季！」無線を通じて鳴り渡った夕季の絶叫を受け、はっとなるしぶき。すぐさま風野へ報告した。「空竜王からの連絡が完全に途絶えました……」

鳳が静かに目を開ける。

突然巻き起こった砂煙に視界を奪われたのだ。

死を覚悟した隊員達がそこで見たものは、おおよそ信じがたい光景だった。

薄まりゆく紛煙の中、切れ上った一對の青い光が輝きを放つ。徐々に存在を露呈する巨人の姿があった。

「何だ、ありゃ……」思わず声をもらす駒田。

鳳がごとりと生唾を飲み込んだ。「……空竜王」

そのシルエットは夕陽を浴びていつそうきらめいて見えた。反射の角度によってはパール状の光を放つ。

補助ユニットから解放された真なる空竜王の姿は、海竜王よりさらに上背があり、引き締まっていた。白く輝く機体の背中には幾重もの翼を従える。顔立ちはより鋭利で、頭頂には複数の触覚のような角を前後にそびえ立たせていた。海竜王が爪を装備していた箇所には同じく隆起部があり、そこから両刃の剣を携えていた。

勇壮な翼を天高くそびえさせ、指先を整えた腕を真っ直ぐに伸ばし、両足を揃えた姿勢で胸を張る白銀の天使。それは青き両眼の輝きとともに全身をぬめりと光らせるや、瞬く間に悪魔の顔へと変貌をとげた。

空気を切り裂く羽の音。

第二派が空竜王に狙いを定めていた。

放射を逆にたどるように空からインプ達が空竜王目かけて集束する。

それが凝縮した瞬間、星の消滅を連想させるような爆発が起こった。

粉々に碎け散り、瞬く間に大気へと還る白い使い魔達。

続く三派、四派も同じ運命をたどるだけだった。

上空を覆いつくす無数の白インプに向かい、空竜王が音も立てずに垂直上昇する。両手の剣すら羽と化し、インプを置き去りにしたままその頭上へと抜け出した。

夕陽を背に受け、雄々しく胸を張った姿勢で静止する。数瞬の後、落下エネルギーを利用し、真ッ逆さまに降下を始めた。

その一端に触れたものは瞬時に白い煙となって立ち消える。

地に足をつくやいなや、両腕を傘状に広げ、大地に剣先を這わせながら、鋭く尖った矢じりのごとく前傾姿勢で滑り抜けていった。目にも止まらぬ速さで敵を攪乱したかと思えば、急停止し直角に軌道を変える。時に背を向け、時に縦回転し、地上のインプ達を切り裂いていった。それは高速で回り続けるコマのようでもあった。

インプの放つ圧縮空気の弾丸をものともせず弾き返し、空竜王がメック隊員達に背を向けて大地に降り立つ。

剣を横になぎ払うと、扇状に展開した真空の刃が目の前のインプ達を粉碎した。

訪れる静粛。

それはすべての脅威の消滅を意味していた。

メック隊員達は瞬きすらできずにその光景を見守るだけだった。

みな導かれるようにそこに歩み寄り始めていた。

紅く燃える空の下、静かに振り返る空竜王。その青き両眼は、怒りとも哀しみとも取れる光を放ち続けた。

「何という雄姿だ……」 鳳が心を奪われ立ちつくす。

「俺達は間違っていないかったんだ……」

「ああ……」 駒田の言葉に頷く南沢。涙をぐいとぬぐい取った。「また今日も、家に帰れる……」

「古閑夕季の首はつながったというところですか」

メガル司令部で火刈が席を立つ。去り際に風野に振り返って言う

た。

「やはり海竜王は動かなかった。あなたの仮説は覆されましたな」
風野の視線はディスプレイの中の空竜王の雄姿に釘づけとなっていた。

ふん、と鼻を鳴らす火刈。退室しざまにぼそりと告げる。

「穂村光輔を呼んでおきます」

木場の前で神妙な様子でうなだれる忍の姿があった。

「申し訳ありません。任務遂行の責務を怠りました。処罰は覚悟しています」

木場が背を向ける。押し殺した声で静かに言った。

「もういい」

去って行く背中を忍はいつまでも眺め続けていた。

それからメック隊員に囲まれる空竜王に目をやった。

空がくすぶり始める。

夕暮れの暗雲に忍が顔を向けた。

不安そうな表情をあらわにしたまま。

激しい雷雨が戦場を跡形もなく洗い流す。

それは遠く海の彼方から響き渡る、アスモデウスの息吹のようでもあった。

了

第四話 『スパイラル』 OP

風を切り裂き、空竜王が乱舞する。

空では大気、陸では大地、沿岸では海へと使い魔達を還していった。

想定ポテンシャルをはるかに凌駕する機動に追従できず、上限まで振り切りつたままの計器類や警告灯が悲鳴をあげ続ける。

瞬きすらせず、古閑夕季は無限に湧き出る魔物達を撃破した。

青白い面差しに浮かび上がる険しいまなざし。

姉、忍の顔が脳裏をかすめた。

「あああー！」

己を鼓舞するかのごとき雄叫び。

逃げ惑うインプの群れを、獣のように執拗に追いつめ、ことごとく撃ち碎いた。

交錯する想い。

遠き日の記憶が次から次へ、浮かんでは消えていく。

それは目に涙を浮かべ、口もとをゆがめる、幼い日の夕季の姿だった。遠ざかる背中にはいくら追いかけても届かなかった。

両刃の剣でインプを真つ二つに叩き割る。

小学生の夕季がぽつんと立ちつくす。誰にも相手にされず、大人達に誉められる忍の姿をただ羨ましそうに眺めていた。

振り返る冷たい視線だけが深く突き刺さった。

「あああああー！」

人さし指を天高くかかげ、一気に振り下ろす空竜王。巻き起こる竜巻がインプ達を粉砕した。

中学生になった夕季が淋しげに佇む。周囲の人間達がすべて離れていっても、見つめる背中はまだ一人だけ。

しかし、消えていくその影は、もはや立ち止まることすらなかった。

夕季が激しく睨みつける。両眼に憎しみの炎を宿したままで。

「ああああーっ！　ああああーっ！」

何かに取り憑かれるように、一心不乱にインプの群れを切り刻み続ける夕季。

ただ瞳だけが異様な光を放っていた。

「うああああああーっ！」

滑らかならせんをなぞるように、空竜王が降下していく。

『あの人には、負けたくない……』

心の中でそう呟いた。

第四話 『スパイラル』 1

滑走路に降り立った空竜王をメック・トルーパー達が取り囲んだ。ヒーローを迎え入れるように。

ハッチを開け、膝立ちの空竜王から夕季が降りる。青白い顔があぶら汗にまみれていた。

「すげえな夕季、また一人でやっちゃまいがった」

歓喜の声をあげ、手放して小さな英雄を出迎える駒田。

南沢がそれに続いた。

「当たり前だ。夕季がいれば俺達はまだ負けない。どんな敵にだって」

「俺達には必要ない、の間違いじゃないのか？」

「は、は、違くない」

口々に夕季の奮闘ぶりを称え合う隊員達。

その様子を表情もなく眺める人物がいた。

古閑忍だった。

「行くぞ、古閑」

忍の隣には厳しい顔つきの木場雄一の姿があった。

「はい……」空竜王に心配そうなまなざしを向けた。

声一つ発することなく、隊員達の間をすり抜けていく夕季。

格納庫の手前でめまいがして立ち止まる。鉄柱にもたれかかり、

肩で息をし始めた。

「夕季」

聞き覚えのある呼びかけに夕季が振り返った。

髭面のメック隊長、鳳が仁王立ちしていた。その顔に笑みはない。ただ心配そうに夕季を見続けていた。

「おまえ今何キロある」

「量ったことないからわからない」上目遣いに鳳を眺め、淡々と答える夕季。

突然鳳が夕季の腕をつかみ、ぐいと持ち上げた。

「痛い、はなして……」

「何だ、この腕は。病人だってもっと太いぞ……」

「はなして!」

力任せに振りほどく夕季。鳳が解放したのは決して力負けしたわけではなく、その瞳に拒絶を感じ取ったからだだった。

「自分のことは自分が一番よくわかってる。他人にどうこう言われたくない」

鳳が眉を寄せる。「夕季……」

不思議そうな顔つきで駒田が近寄って来た。

「どうした。何かあったのか、鳳さん」

「いや、何でもない……」

「また夕季に余計な説教して嫌われたんじゃないのか?」

鳳は何も答えずに淋しげな表情で夕季を見つめていた。

いたたまれずに顔をそむける夕季。逃げるようにその場から立ち去って行った。

鳳の真剣な様子に気づき、駒田が表情を曇らせた。

「夕季がどうかしたのか?」

「何でもないと言ったろう」目を細め、力なく吐き捨てる。「あいつ自身の問題だ……」

薄暗い通路を重い足取りで歩いて行く夕季。

望んでいた力を手にし、多くの人間から信頼を得たというのに、決してその心が晴れることはなかった。

鳳が自分の身を案じて助言してくれたことはよくわかっていた。

それを素直に受け止められない心の貧しさに嫌悪感を覚える。

受け入れられない理由がわかっていたからなおさらだった。

こめかみを手で押さえる。

冷たい壁にもたれかかり、しばらくその場所から動くこともできなかつた。

第四話 『スパイラル』 1（後書き）

稚拙な内容におつきあいしていただきましてありがとうございます。久々に更新することができました。筆は先行しているのに、手直しばかりに手間どって、一向に完成に至りません。自己満足の極みで恐縮ですが、一人でも多くの方に読んでいただければいいなと思います。

第四話 『スパイラル』 2

「穂村君、おっはよー!」

寝ぼけ眼をこすりながら穂村光輔が振り返る。

通学路の並木道で、元気一杯の篠原みずきが一直線に飛び込んで来た。

「あ、篠原、おはよ……」 ふあああー、と大あくびの光輔。

「何? また夜遅くまでゲームやってたの?」

「うん……」

「駄目だよ。一人暮らしだからって油断しすぎ。もうすぐ中間テストだよ。ちゃんと勉強やってる?」

「あ、ああふあああー」

「ねえ、返事とあくびがコラボしちゃってるよ!」 ふわふわとツインテールを揺らした。

「しょうがねえよ、こいつ体育コースだから」

聞きなれた声に振り返る二人。

茶髪にピアスの長身の少年がそこにはいた。

「はなから勉強なんてする気ナシだ」

二人の友人、羽柴祐作だった。

「おう、祐作、おはよ」

「おす」

「しょーこー!」

祐作の隣にいた、細身で派手な顔立ちの少女を確認し、みずきがロケットのように飛びかかっていく。抱きついてくるくる回り始めた。

「久しぶりー、しょーこー。いつ以来だっけ!」

またかという顔で園馬祥子は答えた。「昨日の夕方以来だね」

「ええっ！ そんなに！」

「はいはいはいはい……」

たわいもないやりとりを眺め、楽しそうに祐作が笑う。

祐作は光輔の中学校からの友人だった。その時から祐作と交際していたのが祥子であり、祥子の友人だったみずきとは二人を通じて知り合いになったのだ。

「おーっす！」

校門の前で新たに二人の学友が合流する。六人は中学からの遊び仲間だった。

その一人、ツンツンすだれ頭の少年、曾我茂樹がからかうように出迎える。

「何だ、光輔。またゲームやってたのか？」

「うん……」

なかなか瞼が上がらない光輔。

みずきがやんわりとたしなめた。

「どうせろくなもの食べてないんでしょ。そんなんじゃ倒れちゃうよ」

「それはだいじょぶだよな」祐作がおもしろそうに笑う。「二日徹マンしてもこいつだけはピンピンしてたから」

「その後うちの便所で寝ちまって、三時間出て来なかったけどな」

茂樹に顔を向け、光輔がハハハと笑った。

「笑い事じゃねえ。俺が親父からどんだけ怒られた、か……」

ふいに茂樹が言葉を失う。

すぐそばを古閑夕季が通り抜けて行ったからだ。追いかけるようにマヌケヅラをスライドさせる。

光輔と夕季が向かい合う格好になった。いつもより低めのポイントで無造作に髪をまとめているため、普段とは違った印象を受ける。

「あ、お、はよ……」

すっかり目が覚め、焦ったように挨拶をする光輔。

が、夕季はちらと光輔の顔を見ると、何も言わずに行ってしまった

た。

「何、光輔、どういうことよ」茂樹が猛烈に食いつき始める。
みずきも参戦してきた。「そうよ、どういうことよ！」

「何でおまえがあんな美しい子と知り合いなんだよ！」

「美しい子って……。美しいかな？ 恐ろしいならわかるけど……」

「おまえ、目ん玉濁ってんじゃねえのか？」

「いやいや、おまえほど腐ってないって」

「おい！」

「まあ、淡白な顔してるから、そう見えるのかもな」

みずきと祥子が顔を見合わせた。「端正な顔の間違いじゃない？」

「どう見ても美人だろ、園馬や篠原よしか」

「おい！！」女ダブルつつこみ。

祐作が、ぷつと噴き出した。

すると意外な人物が参入してくる。光輔達より一回り小柄な少年、

宮田隆雄だった。

「あの子、A組の古閑って子だよ」

「おまえ知ってるのか？」

鼻息荒い茂樹の顔を冷静に見据え、のんびりとした口調で隆雄は続けた。

「有名だよ。俺クラス隣だから。よく合同授業で一緒になったりするんだけど、選抜クラスのA組の中でもぶっちぎりの成績で、セクター試験の問題をすらすら解いたとか聞いた。他にも剣道部で男の主将に一本勝ちしたとか、体育テストで握力が五十キロだったとか、五十メートル走で六秒台叩き出したとか、いろいろトドロいてる」

「……何だか都市伝説みたいだな」

「最後の方がほとんど身体能力なのがあいつらしいけど……」

「でもいつも怒ってるみたいだから、誰も近寄らないけど」

「何でそんなスゲエ子と光輔が知り合いなんだよ！」

「知り合いついていうか……」面倒くさそうに頭をかきむしる光輔。

「昔、小学校が一緒だったただけだよ。ただそれだけ」

「ただそれだけで、おまえだけ挨拶ができるってのはどういうことだ。何か許せんぞ！」

「てか、俺すっこりと無視されたんだけどね……」

「ぬぬぬぬう！ 紹介しろ、光輔！」

「どうしたの、こいつ？」

「さあね」 あきれたような顔を光輔に向ける隆雄。「また一目惚れしちゃったんじゃない？」

「細すぎるんじゃないの？ おまえ、前に巨乳が好みだって言ってたろ」

「何だと！」 茂樹が祐作を睨みつける。「言いがかりはよせ。俺の理想は洗濯板なんだ。それに干しぶどう二つあれば……」

「わかった、わかった」 受け入れ拒否状態のみずきと様子をちらと見る。「でもよ。きついぜ、ああいうタイプは」

苦笑いしながら、光輔が頷いた。

「やめといた方がいいな。あいつ結構凶暴だから、きつといじめられる」

「上等じゃねえか！」 鼻息を荒げ、勇ましく胸を張る。「こう見えても俺はエムだからな！」

みずきと様子が、さっと離れていく。

祐作がおもしろそうに笑った。

「いいんじゃないか。エスとエムで行って来いだし。ナイス・カット プリングだな、茂樹」

「おう、ドエスとドエムで投打のバランスもバッチリだしな」

「いつの間にかドエスとドエムになっちゃってるね」

光輔と隆雄が顔を見合わせた。

「その前に、こいつバカだろ……」

「何！」

「おっす、光ちゃん」

一斉に振り返る六人。

「あ、おはよ」

樹神雅だった。夕季とは正反対に、満面の笑みで雅は輪の中に飛び込んで来た。

「あ、光ちゃんのお友達だね。おはようございます」

「あ、あ、おはようございます！」茂樹が顔を赤らめる。緊張のあまり、背筋が真っ直ぐに伸びていた。

「何だ、何だ、またすっこり寝不足かあ、光ちゃん」

「うん。夜中までテスト勉強してて……」

「いったい、どの口がそういうこと言えるの！」

みずきのつつこみに振り返る雅。楽しげに笑った。

「始めまして、光輔の姉です。みなさん、弟をよろしくお願いします」

「やめろって、雅」

「こちらこそお願いいたします」

「おまえもやめろって、茂樹。て、何赤い顔しながら手握ってんだ！」

「だって……」

「わかんねえよ。だっての意味が！」

「いや、俺エムだから……」

「いったいどこにからめてんだよ！ だから、って何！」

「みなさん、ごめんなさいね。落ち着きのない子で」

「何それ！」

「いえいえ」

「だからおまえは何照れてんだって！」

「……エム……」

「ドエムなのはもうわかったって！」

「いや、ポエム……」

「ポエムか！ 今度はポエムって言い張るつもりか！ ポエムって何！ おまえの頭の中？」

「……」真顔になった茂樹が光輔の首を抱える。「光輔！」

「いてて、やめれ、バカ」

「何でおまえばっかり、あんな素敵な人達と知り合いなんだよ」
「知るか、いてて、はなせ……」

「穂村君にお姉さんがいたなんて、あたし知らなかった」
涼しげなまなざしで、みずきをつつみ込むように眺める雅。

「血はつながってないけどね。でも小さい時からずっと一緒だったから、本当の弟みたいにかえなくて」

「そうなんだ……」みずきがふんふんと頷く。「何だか、こだま先生も同じようなこと言ってたみたい……」

「篠原」

何気ないみずきの発言に反応する光輔。

みずきが顔を向ける。少しだけ淋しそうに雅が見つめていた。

「雅、りょうちゃんの妹なんだよ」

光輔のカミングアウトに、ようやく不用意な発言をしてしまったことに気づくみずき。焦ったように取り繕った。

「ごめんなさい、あたし知らなかったから……」

「いいのよ。別に気にしてないから」

好ましいものを見るように、みずきに微笑みかける雅。

「これからも光ちゃんのことよろしくね」

「はい」みずきが頷いた。

ふふっと笑う。その後雅は光輔に向き直った。

「光ちゃん」

「ん？」

「最近ちょっと夕季のことで気になることがあって」

「うん」神妙な顔で光輔も頷いた。「俺も……」

昼休みに夕季は校舎の屋上にいた。

瞬きもせずに陽射しを受け止め、足を投げ出して壁にもたれかかる。他の生徒達の話し声や、鳥のさえずりに耳を傾けることもなく、すっかりやつれてしまった面差しで、うつろな視線を海の彼方へ投げかけていた。

ふいに視界が閉ざされ、眼前の影をゆっくりと見上げる。
光輔だった。

「こんなところにいたのかよ」

「……。何？」

「何って、おまえ昼飯はどうしたんだよ。最近食ってないだろ」

「……。食べたくないから」

「食べたくないって……」

「ダイエット中。お昼抜くくらい、別にたいしたことじゃない」

またうつろなまなざしを泳がせた。

「……」光輔が口もとを結ぶ。「おまえ、毎日夜遅くまで訓練して
るんだって？ 何でそこまで頑張るんだよ」

顔も見ずにぶすりと言う。「光輔には関係ない……」

「関係ないのはわかってるよ。でも必要ないだろ」

「……。何が」

「おまえさ、空竜王ってやつ、自由に乗りこなせるようになったん
だろ。雅から聞いた」

「……」

「あのバケモノなんかがいくら来たって、へっちゃらなんだろ？
だったらもうそこまでしなくても……」

「……」

何を言っても夕季が心にとどめないことを感じ取り、光輔が口を
つぐむ。

気を取り直して続けた。

「おまえ、何かおかしいよ。雅、心配してたぞ。ちゃんと家でご飯
とか食べてるのか？」

「……食べてる」

「……。ならいいけど。あんまり無理するなよ」

「何で光輔にそんなこと言われなきゃいけないの」

「……っと。俺も、一応、心配だから、さ」

「嘘だ。心配してるとか、口先だけで言ってほしくない。見え透い

てるおせつかいは、迷惑……」

「何でそういう言い方するんだよ、おまえ」

光輔の口調に感情が表れる。

夕季がゆっくりと顔を向けた。

「もういいよ。俺は口先だけかもしれないけど、本当に心配してる人達の気持ちも考えてやれよな。雅だって、しいちゃんだって……」

「余計なお世話」

「……」口をへの字に曲げる光輔。ぷいと背中を向け、肩を怒らせながら屋上から出て行った。

夕季がため息をつく。

かたわらにある紙袋に気がついた。光輔が置いていったものだった。

何気なく手に取り、中を見る。売店でも人気の、焼きそばパンとカツサンドが入っていた。並んでもなかなか買えない代物である。

パックのフルーツ牛乳にストローを差し込み、ちゅうっと吸い込む。

それからうつろなまなざしのまま、紙袋をごそごそとさばくり始めた。

第四話 『スパイラル』 3

柊桔平は一ヶ月ぶりにメガル本部に足を踏み入れた。

情報は嫌と言うほど耳に届いていた。

メックが壊滅しかけたこと。夕季が空竜王を覚醒させたこと。そしてまた、容易ならざる脅威が迫りつつあること。

何より気がかりなのは、本来の敵に正面を向いたまま戦えない今の体制にあった。

ロータリーから本部を見上げ、睨みつけた。

「！」

向かい側から忍が歩いて来るのを認める。てっきり無視して通り過ぎるものと思っていた柊平の予想はずれ、忍はその目の前で立ち止まった。

「柊さん、もう、体はよろしいんですか？」

「ん？ ああ……」一瞬対応を迷い、柊平は当りさわりのない言葉だけを並べ立てた。「まだちゃんとかくっついてないけどな。そろそろ顔くらい出しかないと」

「そうですか」

「ああ」

「早く復帰できるといいですね」

「復帰してどうってわけでもないがな」

「そんなことはありません。柊さんがいるのといないのでは、まるで戦力が違ってきますから」

「そういう持ち上げ方は勘弁してくれ。何せ今の俺は、おまえさんより階級が下なんだからな」

「そんなことを気にする人だとは思ってませんが」

「ははっ、言ってくれるね……」

互いに心の内側を探り合っているふうでもあった。

「じゃあな」

「はい……」

何かを言いたそうに忍が顔を伏せる。

背を向けた桔平に静かに切り出した。

「……桔平さん」

桔平が立ち止まる。そろりと顔を向けた。

神妙な様子で訴えかける忍の姿があった。

「隊長を、木場さんを助けていただけませんか」

「……。何故俺に？」

「こんなことをお願いできるのは桔平さんしかいないんです。おそらく木場さんは近いうちに殺されます」

「……」

「そしてそのことを、あの人は知っています」

衝撃的な忍の告白にも、桔平は動揺することはなかった。まるであらかじめそれを知っていたかのごとくに。また忍もそれを承知の上で桔平に打ち明けたようにも受け取れた。

「だからって、俺がどうこうできることでもないだろう」

「でも桔平さんは木場さんの……」

「あいつ自身が決めたことだ。今さら俺が横入りするような話じゃない」

「……そう、ですか」 忍が拳を握りしめる。「すみませんでした。つまらないことをお話ししてしまつて」

忍がその場から立ち去ろうとする。

今度は桔平が呼び止める番だった。

「待て、忍」

黒髪を揺らし、忍が立ち止まる。

「おまえ、もっと身近に救わなきゃならない人間がいるんじゃないのか？」

「誰のことですか？」

「……」

「古閑夕季のことなら考え違いです」

すっぱり切り捨てる。

その背中が泣いているように桔平には見えた。

「私は自ら志願し、彼女に手をかけようとしたくらいですから……」

空竜王から降りる夕季。まだ午後八時前だったが、体調がすぐれずその日の訓練を打ち切ることにした。

格納庫からの通路を抜け外に出る。遠く本館を見上げると煌々と輝く光が視界に飛び込んできた。プログラム発動中の今、司令部から光が途絶えることはない。

同様に滑走路やエプロンでも、二十四時間体制で監視強化や整備が進められていた。

そこに表れる生物の息吹に溶け込めず、さほど眩しくもない光の渦から目を細め顔をそむける。二千五百メートルの滑走路を隔て、ドックの彼方に映し出される海面では、静かに波打つ淡い月光の広がりですら、己を拒んでいるように思えて仕方がなかった。

メガルのプロジェクトは、今や夕季と空竜王抜きでは語れなくなっていた。それを知る者すべてが期待し、託し、樂觀する。

夕季に与えられた選択は、振り返ることすら許されない一本道を進むことだけだった。

カウンターが示唆する次の発動は、不確定な要素を多分に含んだ脅威であると囁かれていた。初回の襲撃を遥かに上回る、そして未知の領域からの胎動であると。

夕季が思い返す。

あの日、夕季には空竜王の声が聞こえたような気がした。それから補助具を付けることなく空竜王を手足のごとく扱えるようになった。だがそれと引き換えに、徐々に己の命を削り取られていく気がしてならなかった。

オビディエンサー。

これこそが、従属者と呼ばれる者の宿命だということのか。

「うぐっ……」

気分が悪くなりうずくまる夕季。建物の片隅で胃の中のものをすべて吐き出した。

それでも夕季は後退するわけにはいかなかった。

息を荒げ、肩を上下させる。憔悴しきった全身の中で、その両眼だけが異様にぎらついていた。

「！」

何者かの足音を認め、夕季が神経を研ぎ澄ませる。

それが誰かはわかっていた。

その人物が哀れみを込めたまなざしで自分を見下ろしていることも。

顔も向けずに過剰な反応を示す夕季。

しかし、気配の主は何も言わずにそこから立ち去ろうとした。

「何も言わないの」

遠ざかる背中を追いかけるように、夕季が不安定な声を押し出す。足を止め、抑揚のない口調でその影、古閑忍が応答した。

「何か言ってほしいの？」

二人は背を向け合っていた。互いの顔を見ることを恐れるかのよう。

「あなたにできなかったこと、できるようになったよ」

「誉めてほしいの？　だったら……」

「悔しいなら悔しいって素直に言えばいいじゃない！」

夕季がキツとなって振り返る。目をつり上げて忍に噛みついた。

「私なんかにはできないって思ってたくせに。私のことを馬鹿にして、できるわけないって見下してたくせに。空竜王のトライアルで負けたことをずっと恨んでるんだよね。妬んでるんだよね。だからできないことを笑っていたんだ。いい気味だと思ってた。憎んでるから。嫌ってるから。ずっと……」

忍は微動だにせずにそれを受け止めていた。四方から照らされる

光がいくつもの影を作る。やがてまるで相容れぬものを振り払うように切り捨てた。

「何が言いたいのかよくわからないけれど、一つだけ当たっていることを教えてあげる。今のあなたが嫌いよ」

夕季がカッと目を見開く。鬼のような形相で忍を睨みつけた。

「やっと本音が出たね。わかった、そんなことくらい。私もあなたのことが大嫌い。ずっと前から大嫌いだった！」

「そう。気が合うわね」

「そうやって余裕ぶっていればいい。でももうあなたには負けない。あなたじゃ私には勝てない。二度と、そんな態度は許さない」

「そう、覚えておく」

忍は一度も夕季の顔を見ることなく、その場から立ち去って行った。

ギリギリと奥歯を噛みしめ、夕季は悔しそうな表情でその後ろ姿をいつまでも睨み続けていた。

光輔は神妙な様子でメガルの門前にやって来た。

環境保全対策機関メガル代表・風野守人からの手紙を手にとって。強固なゲート前で足を止め、遠く本部を見上げる。それは懐かしくもあり、忌まわしい感情もともなっていた。

「おう」

陽気な声に光輔が振り返る。

桔平だった。

「ようこそメガルへ」

そう言う桔平は意味ありげに笑ってみせた。

第四話 『スパイラル』 3 (後書き)

お読みいただきありがとうございます。古閑夕季三部作の折り返しとなります。どこまで続けられるかわかりませんが、もうしばらくおつき合いたいだけですよう、お願い申し上げます。

第四話 『スパイラル』 4

光輔と桔平はメガルの近くにある海岸へとやって来ていた。

海鳥の鳴き声と船舶のエンジン音が響き渡る防波堤に腰を下ろし、打ち寄せる白波を眺める。

「ほらよ」

桔平の声に顔を向ける光輔。陽の光に目を細め、差し出された缶コーヒーを受け取った。

「すいません」うかがうように桔平に目をやった。「ケガ、大丈夫ですか？」

「ん？」グビグビとコーヒーを飲みながらちらりと見やる。「ああ、もうバッチグーだ。まだ傷口は半分ふさがってないけどな」

「それって……」

「心配するな。四捨五入すれば完治だ」

「はは……」

緊張の面持ちを崩せないでいる光輔。桔平が何を考えているのか見当もつかなかった。不安を払拭するように冷たいコーヒーを一気に流し込む。

「うっ！」

「ん？ どうかしたか？」

「いや……。これ結構甘いすね」

桔平が申し訳なさそうな顔になった。「こっちのもっと甘いやつの方がよかったか？」

「……いえ、これでいいです」

「おまえさんには世話になったな」

何気ない一言に呼び戻される光輔の心。

「悪かったな。いろいろと」

「いえ」

桔平の顔に注目する光輔。口調は相変わらずだったが、その瞳の向こうで、見えない何かを見続けているように思えた。

「時計、ありがとうな。夕季からちゃんと受け取ったから」

桔平が笑う。それは信頼を向ける人間だけに見せる笑顔だった。

「あ」一瞬戸惑い、すぐに光輔も笑い返した。「返さないとボコボコにされると思ったから」

「するか！」苦笑い。「もうそのことは言うな。俺も充分反省した」
「ははっ」

二人がおもしろそうに笑い合う。すっかり緊張もほぐれていた。

「そろそろ俺行かないと」

「まだいいだろ」

「でも」

「風野のおっさんに呼ばれているんだろ。少しくらい待たしておけ」
「いや、そういうわけには……。いろいろとお世話にもなってるし」
「かまやしねえよ。産気づいた妊婦さん助けて、遅れたことにでもしておけ。俺もここに来てから、かれこれ四、五回は出産に立ち会ったことになってる」

「……」

「あいつら、イバリくさって気に入らねえ。俺達のことなんて、手駒くらいにしか思ってるんだ」

「あ、の、柊さん……」

「呼びにくいだろ？」光輔に目を向ける。ふっと笑った。「きつぺいでもいい」

「あ、はい。……桔平さん、俺、何で呼ばれたんですかね？」

「……」桔平が目を細める。波しぶきに視線を移した。「薄々はわかってるんだろ？」

「……はい」

「おまえが海竜王を動かしたことが奴らの耳に入っている。今日のテストでそれを確かめるつもりだ」

突然核心に入る桔平。

「そしたら俺、あのロボットに乗らされるわけですか？」

「そうだ」

「動かし方、わかりませんよ」

「そっちの動かし方じゃない」

「……」

「夕季が空竜王を自分の手足のように動かせるようになったらしい。おまえにもそれを求めている」

「……それができたら、俺あのロボットのパイロットになったりするんですかね」

「……」

桔平は光輔の問いかけに答えようとしなかった。

その真剣なまなざしを受け、それ以上の何かがあることを光輔は感じ取った。

やがて桔平が重々しく口を開く。

「何があっても海竜王を動かすな。おまえがどんな方法でアレを動かしているのかは知らんが、今言えることはそれだけだ」

「何故ですか？」

「……」

「プログラムっていうのが発動しているんですよね。人類を滅ぼそうとするものだって、そう雅から聞きました。よくわからないけど、あのロボットとメック・トルーパーがそれに対抗できる唯一の手段だって。俺見たんです。普通に戦ったって奴らには通用しない。あれだけの数の部隊があつと言う間に全滅してしまうなんて……」

「そこまで知ってたのか……」

桔平が空を見上げる。少しだけ淋しそうな表情になった。

「だったら、あのロボットに乗れる人間が増えれば、もっと楽になる……」

「そんな単純な話じゃないんだ」

桔平が光輔の顔を見る。その悲しげな瞳に光輔は言葉を奪われた。

「おまえ、そんな風に考えてやってきたのか？　メガルに入って、海竜王に乗って、みんなの役に立とうと？」

「はい」桔平を真っ直ぐに見つめ、光輔が頷く。「すごく悩みましたけど。でもその方がいいかなって思ってた」

光輔の目の下のクマに気づく桔平。

「せっかくだが、おまえのその気持ち、奴らがともに受け取るとは思えない」

「……何ですか、それ？」

一呼吸置く。それから覚悟を決めて桔平は語り始めた。

「メガルがガイアー財団と政府の共同出資で成り立っていることは知っているか？」

「はい」

「表向きは環境対策機関なんぞとうたっているが、実際は単なる武装集団だ。民間企業に武器を持たせるわけにはいかないから、政府の介入によって裏側からその許可をおろしている。たかが民間の一企業であるメガルにそんな権限を与えているのを、おかしいと思わないか？」

「言われてみれば、確かに変ですよ……」

「メガルの技術を政府が欲しがっているからだ。政府だけじゃない。世界中がメガルに注目している。おまえ、オリハルコンって聞いたことないか」

光輔が眉間に皺を寄せる。

「ゲームとかで少しは。どんな意味なのかはわかりませんが」

「精神感応合金ってやつだ。ダイヤモンドより硬くて、決して錆びたりしない、魔法の素材ってのが一般的な解釈みたいだな。昔の人間は真鍮のことをそう呼んでたって記述もある。ヒヒイロカネとか、ダマスカス鋼なんかと混同されることもあるが、ここでの定義とは少々異なる」

「……」

「一口にオリハルコンと言ってもいろいろな種類があってな、合金化

する時の相手側によって性質も用途も異なってくる。含有率の割合で硬度や効力も変わってくるしな。もっと極端な例だと、同じ材料でも配合割合によってまったく別の性質になることもあるらしい。オリジナルの素材自体がどんなものなのかは俺にはよくわからないが、それ単体じゃ何の役にも立たないらしい。合金化して初めて特性を発揮するんだ。合金化した後の物も全部ひくるめて、俺達はオリハルコンと呼んでいる。メガルはそいつの精製方法と、数知れない組み合わせのレシピを手に入れた。おい、ついてこれてるか？」

「はあ……」

光輔には桔平が何を説明しているのか理解できなかった。ただ雰囲気から読み取れたのは、オリハルコンという特別な金属が存在し、その製造方法をメガルだけが持っているということだった。

「竜王の本体に使われているのもそれだ。種類によって、装甲や精神伝達部、武装部分なんかに使われられているみたいだがな。その秘密はメガルでも解明できていない。ただ作り方は知っている。

風野博士が砦埜島で発見したからだ」

「砦埜島って……」

「ああ」光輔に注目したまま桔平が頷く。「三体の竜王を発掘した島だ。かつてそこでプログラムとの最終決戦が行われたと記録されている」

「……」

「話をもとに戻すぞ。とにかくメガルは、そのオリハルコンを政府を通じて世界中に供給することで対価を得て成り立っている。もちろんここで言うオリハルコンってのは、用途に応じて合金化した後の加工品を指しているわけだがな。山陵市にある工場の大半はメガルの息がかかった下請けさんだが、彼らは自分達は何を作っているのかなんて知らされていない。ぱっと見巧妙にカモフラージュされて自動車か何かの部品のようなだが、その実人類の技術レベルでは到底たどりつけない未知の素材を、その辺のおばちゃん達までが作られているんだ。笑っちゃうだろ。俺達が着ている戦闘服だってそ

こで作られたものだ。ただし材質は竜王のものと比べるとかなり落ちるがね。その資金をもとに全世界に展開するメガルの関連企業が武器の開発を行い、政府の承認のもと、この山凌市に届けられるって図式だ」

光輔が難しそうな顔をする。

桔平の話の意図がわからなかった。何故部外者である自分にこんな内情を暴露するのか。

「俺が何を言いたいのかわからないって顔だな」

ずばり言い当てられ、素直に光輔が頷く。するとおもしろそうに笑って桔平は続けた。

「このオリハルコンってやつ、見た目は銅とほとんど変わらないらしいな。どれだけ割合を変えても、何と混ぜても同じようにしか見えない。それどころか、いくら調べても銅の元素しか確認できない。一つの素材を相手の望んだ形で供給するまでには、おおむね数万もの工程が必要らしい。何百万とも何千万とも言われるレシピを、世界中に散らばった技術者達がバラバラに管理し、必要に応じて持ち寄るわけだが、その組み合わせパターンは無限だろうな。それがどの段階で特性を持った、いわゆるオリハルコンと呼ばれるものに化けるのかは、博士しか知らない。特性を発揮する時に、ヌラツと光るって話だが、用途に応じた使用方法を試してみるまでは、それが本当に望んだものなのか確認もできないんだ。触媒は完全にブラックボックス化されている上、再精製をしようとすればただの銅になっちゃまう。それをいいことに、メガルはよそに出荷する合金の質をかなり落としているらしい。特性を維持できる臨界点ギリギリまで下げてな。鑑定する方法はメガルにしかない。今政府が一番欲しがっている技術がそれだ。世界中の国のさまざまな機関がそれを手に入れようと、メガルにすり寄ったり、恫喝したりしてくる。だがもっと確実な方法がある。内部の人間達を取り込む方法だ」

「はあ……」

「わかんねえよな、こんな話。ま、メガルの秘密を提供することを

条件に、どこそこから多額の報酬が約束されている輩が、おもて面正義感を押し出して闊歩しているってことだ。それもかなりの数のな。奴らの目的は人類滅亡プログラムの消滅なんかじゃない。己の出世だけだ。オリハルコンに限らず、いろいろなアプローチが存在するようだがな。そして俺達は、その野望の踏み台に使われているにすぎない。俺達の命は、奴らの保身の値段よりはるかに安い。そしてそれを知りながら、より多くの人間達が自分の立場を守るために悪意を黙認する」

「それって……」

言葉を失い拳を震わせる光輔。その真意を桔平は見抜いていた。

「気づいたか？ そんな奴らの思惑に振り回されて、陵太郎は命を落としたようなもんだ……」

「!……」

光輔の静かな怒りを黙って受け止める桔平。それから言いたくなさそうに次の言葉をつないだ。

「薄汚ねえぬるま湯に、みんなどっぷり浸かり切ってる。どうしようもない渦に自分達が巻き込まれていることにも気づかねえでな。だが、そいつらはまだかわいい方だ」

「……」

「メガルには今言ったグループとは別に、もう一つ危険な集団が存在する」振り返り、メガル本部を仰ぎ見た。「竜王がすべての元凶だと考え、それに関わるものの一切を排除しようとする輩が……」

第四話 『スパイラル』 4（後書き）

読んでいただいてもありがとうございます。毎度毎度読みづらくて申し訳ありません。資料的な部分なので、後から振り返って見るくらいのもので思ってください。多謝。

第四話 『スパイラル』 5

メガル格納庫に、白いレーシング・スーツのような戦闘服に身を包んだ夕季の姿があった。コクピット内での動きを妨げないような体のラインにフィットしたセパレートのスーツは薄くて軽いが、衝撃吸収素材により外部からの衝撃に強く、メックの物のように心臓部に装着するトラウマプレートはないものの、刃物を通さず、拳銃弾程度ならば貫通を防ぐことができた。

空竜王の前に立ち、深く息を吐き出す。

出撃命令が下りていた。

覚醒の日以来、何度それを繰り返したことだろう。回をおうごとに襲撃の規模は拡大した。もはやメックだけでは大量のインプの軍勢に無太刀打ちできず、それらはすべて夕季が撃破した。メックは後方からのバックアップのみで、そのおかげで一人のケガ人を出すこともなくなった。

それは夕季が自ら望んだ選択ではある。

だがどうしてもそこに信頼を求めることができなかった。

戦えば戦うほど、せっかく得た大事なものを失っていくような気がしていたのである。

それは果てしなく続くらせん階段を、わき目も振らずに駆け下りる感覚にも似ていた。どこを向いているのかさえわからず、立ち止まれば転げ落ちていくだけ。

空竜王に乗り込むために移動式のステップに足をかける。

力が入らず、後方にのけぞった。

「！」

誰かに背中を支えられ振り返る。

口もとを固く結んだ鳳の姿があった。

「あ……」

何かを言いかけ、夕季が口をつぐむ。気まずそうに顔をそむけた。
「夕季、もうやめろ」

その言葉にはっとなり目を見開く夕季。ゆっくりと振り向いた。
「そんな状態じゃ無理だ。本当に死んでしまうぞ」

悲しげな瞳で夕季を見続ける鳳。それを受け入れてしまえば、心が折れてしまいそうだった。

奥歯を噛みしめ、夕季は黙って空竜王に向き直った。

「夕季……」

「他に誰がいるの」

顔も向けずに抑揚のない声を出す。

「私が行かなかったら、他に誰がやるの」

「俺達が何とかする」

「それじゃまた同じだ」

「……」

「みんな傷ついて、みんな死んでいって、残った人達が悲しむ。だったら、私がやった方がいい……」

突然後ろから肩をつかまれ、夕季の体が反転する。鳳が手を振りかざすのが見えた。

バシッと夕季のこめかみを平手で打ち払う鳳。

その勢いで夕季は尻もちをついた。

「何するの！」

鳳を睨みつける夕季。

鳳は夕季を見下ろしていた。哀れみを込めた口調で言う。

「立ってみろ、夕季」

ギリギリと歯がみし、鋭い眼光で鳳を睨み続ける。だが立ち上がることはできなかった。何度も力を込め、しかし腰が抜けてしまったようにがくがくと震えるだけだった。

「俺がどれだけの力で殴ったのか、おまえにもわかっているはずだ。たったあれだけで立つことすらできない。そんな奴を一人で戦わせ

て、のうのうと後ろで見物していられると思うか」

厳しく、そして慈愛に満ちた鳳の感情だった。

だがそれすらも夕季は素直に受け止められずにいた。

差し出された鳳の手を振り払う夕季。顔をそむけ、悔しそうに冷たいコンクリートの床を睨みつけた。

鳳が手を引いた。悲しげに眉を寄せる。

「夕季、殴ってすまなかった。だがわかってくれ。おまえを死なせたくないんだ。みんな同じ気持ちだ。おまえは俺達の仲間だ。大事な仲間が一人で苦しむ姿を、俺達は黙って見ていられない」

夕季が顔を上げる。

いつの間にか鳳の背後にメック隊員達が集結していた。みな心配そうに夕季の様子をうかがっている。

「夕季」駒田が切り出した。「おまえにも引けない事情があるのかもしれない。でも、死んじまったら何にもならない」

南沢がそれに続いた。

「おまえは俺達の命の恩人だ。だがそれ以上にかけがえのない仲間だと思っている。ほっとけないよ」

「でも、あたしはみんなを……」

「俺達を見ろ」

鳳の声に顔を向ける夕季。全員が真剣なまなざしで、夕季を心配そうに見つめていた。

「俺達が喜んでるように見えるか？」

「……」

「おまえは俺達に笑って欲しくて、そんな無理をしているんじゃないのか？　だが俺達は誰一人、そんなことを望んじやいない」

「……でも、あたしは……」込み上げる想いのどを詰まらせる。泣きそうな表情になった。「じゃ、どうすればいいの！」

「おまえの笑顔を見せろ」

「！」

夕季の顔を穏やかに見つめ、鳳が笑う。

「簡単なことだろ」

「……」

夕季の心が折れかける。目を丸くし、陰の取れた表情で隊員達を見続けた。

その声が聞こえるまでは。

「まだこんなところにいたの」

振り返るメック隊員達と夕季。

進藤あさみが蛇のようなまなざしを向けていた。

「もう時間がないのよ。早く空竜王に乗りなさい、夕季」

冷たく言い放つ。背後に木場と忍を従えていた。

「待ってくれ、副司令」鳳が慌てて訴えかける。「夕季は今出撃できる状態じゃない。今回は勘弁してやってくれ」

「なら誰がインプと戦うのですか」

「俺達が行く」

あさみが笑う。

「おもしろいことを言いますね。あなた達が役立たずだから、この子一人にすべてを託しているのではないのですか」

「何だと!」

「やめろ、駒田!」

いきり立つ駒田を声だけで制する鳳。

「何と言われても仕方がない。事実だからな。だが」目一杯の眼光であさみを睨みつけた。「今回は俺達に任せてくれ。必ず何とかする」

それすらも一笑にふすあさみ。感情のともなわない言葉を連ねていった。

「今さらあなた達の何を信用すればいいのかしら。柊隊長がいなくなっただけでガタガタなのに。もっとも彼がいたところでそれほど変わると思えないけれど。もう誰もメックなんて信じてはいない。エスだけあればメックは必要ない。上層部でもそういう意見が出始めています」

「ならちようどいい」

鳳が肝の据わった顔になる。パーフェクト・ワールドに一步も引く姿勢を見せなかった。

「もし俺達だけで奴らに勝てなかったら、メックは解散する」

「鳳さん……」南沢が呟く。すぐに腹を決め、あさみに向き直った。

あさみは表情もなくその様子を眺め続けていた。やがてにやりと笑う。

「いいでしょう。そこまでの覚悟があるのなら好きにきなさい」

まるで鳳の言葉を引き出したかのようにだった。

「待って」

夕季の声にそこにいた全員が振り返る。木場や忍も同じだった。

「私が行く。だから今の話はなかったことにして」

「夕季……」

心配そうに夕季を眺める駒田。

鳳に表情はなかった。

「私がやる。メックにはバックアップをしてほしい……」

決意のまなざし。

震える腕で体を支え、ゆっくりと立ち上がった。

「できるの？ 今のあなたに」

「……」

「最初に言っておくけれど、あなたにもしものことがあってもそれだけで作戦を変更できるほど、今の私達に余裕はない。最悪の場合、躊躇せずに空竜王の回収を優先します」

「何だと！」

駒田を手で制す鳳。

「それが嫌なら今すぐ空竜王の搭乗権限を返上しなさい。あとはこの人達に任せておけば、あなたは助かる。あなただけはね」

「今さらそんなこと。嫌ならとっくに降りてる」

あさみが夕季の顔に注目する。

あさみの表情から感情が消え失せていた。ふいに目尻が下がり、

切なそうに夕季を見つめた。

「悪いわね。あなたが無理をしていることは重々承知している。でも今の私達はあなたに頼らざるをえないの」夕季の肩に触れ、背中を向けた。「できることなら代わってあげたいけれど……」

夕季は一度もあさみに顔を向けなかった。

「あたしがやる」木場の後方でじつと様子をうかがっている忍の姿を真っ直ぐに見据える。「誰にも手出しはさせない……」

あさみの口もとが含むようにうごめいた。

司令部別室で風野守人は感応研究部からの報告書に目を通していった。

光輔のものだった。

メガネをかけ難しそうな顔をする。

「見込み違いでしたか」

視線だけをじろりと向ける。いつの間にか火刈聖宜が目の前にいた。

不敵に笑い火刈が言う。

「感応数値わずか五パーセント。オビディエンサーの序列で見れば、たかだか十三番目。リストから除外しても問題ない結果ですな」

「……」

「とは言え、気にはなりますがね」瞳の奥が妖しく光った。「六年前のあの事件を起こした人物と同じものとは考えがたい」

風野は何も答えようとはしなかった。

その心の内を見透かすように火刈がふつと笑う。

「発動の時刻が近づいています。出現予測ルートの範囲もすでに避難を完了しています。古閑夕季は出撃準備をすませているようですが、メックは動かしの方がよろしいですか？」

「好きにしたまえ」じろりと睨めつける。

「では、後方からの支援という形で配備させておきます。また出番はないでしょうが」

呼び出し音が鳴った。

インターホンを受け取る火刈。波野しぶきだった。

『司令、基地沿岸より千二百キロメートルのポイントにターゲットを確認いたしました』

「何、もうか？ 何故そんな遠くに。今度は何だ。空か、海か？」

『それが……』信じがたいという様子でしぶきは続けた。『本体のようです……』

第四話 『スパイラル』 5 (後書き)

読んでいただいてどうもありがとうございます。少しでもおもしろいものを、と心がけているつもりですが、頭の中の映像がうまく伝えられているのか心配になってしまいます。そろそろ内容的にも自分の中で限界をむかえそうな気配です。

第四話 『スパイラル』 6

山陵市に激震が走った。山陵市だけではない。突如として海上に現れた巨大な生物の姿は、見る者すべてに恐怖心を植えつけた。

もはや隠しとおせる範疇から逸脱していた。

上陸の可能性がある都市すべてに避難勧告がなされる。

航空自衛隊の戦闘機がスクランブル発進し、それを追いかけるように海上自衛隊の艦隊が討伐に向かった。

空自の最新鋭ステルス機は、わずか二分足らずで八機すべてを失うこととなった。

「何だ、あれは……」

その眩きを最後に、彼らからの交信が途絶える。

分厚い雲のような白インプ達の渦に巻き込まれ、何もできずに全機が海面に落下していった。

次に迎え撃った海自の護衛艦隊は、海下からわいて出た青インプ群の強襲の前に、ミサイル、砲弾を一度とて発射せぬまま、絶望の中海へと散っていった。

最後の砦は、メガルに託されることとなった。

メガル基地近郊の沿岸地帯で空竜王は戦いの時を待っていた。

海鳥の鳴き声と防波堤に打ち寄せる波の音だけが辺りに鳴り渡る。

空竜王の後方でメックが待機し、さらに距離を隔てた後方にエスが位置していた。

空は青く澄み渡り、海は静かに揺れ続けた。

ふいに海鳥の鳴き声がやんだ。

激しく波が打ち寄せ始める。

遠い空に暗雲が立ちこめていた。

近づきつつある。プログラムの本体、アスモデウスが。

「夕季」

かたわらの空竜王を見上げ、鳳が無線で夕季に呼びかけた。

「いいか、無茶はするな」

『わかってる』

「俺達を信頼してくれ。もう一度言っておく。俺達は仲間だ。勝手な真似は許さんぞ」

『……わかってる』

鳳が心配そうにコクピットの辺りを眺めた。

『……。……鳳さん』

夕季からの呼びかけに慌てて反応する鳳。

「何だ」

『……ありがとう』

「！何を、おまえ、こんな時に、何をバカな！」

『ずっと言いたかった。でもなかなか言えなくて……。』

「バカヤロウ！誰がそんなこと言ってくれと頼んだ！今度言ったら承知せんぞ！」鳳が鼻をすすする。それから嬉しそうに笑った。

「まったく、どうしようもないな、おまえは」

『……そんな言い方しなくても』

「誉め言葉だ。気にするな」

『うん……。』口ごもり、探るように夕季はそれを口にした。『こんな感じなのかな、って思っ』

「何がだ？」

『……。……お父さんって』

「おお！」嬉々とした表情。「うちの娘に聞かせてやりたいセリフだな」

『……。……ごめん』

「何故謝る？」

『……。』

「今さら娘が一人増えたところで、何を困ることがある。はねっ返

りが一人から二人になるだけだ。俺は一向にかまわんど。いつそうちの養女にでもなるか？」

『あ、う……』

「鳳、夕季か。悪くはないけど……」

いつの間にか鳳のそばで会話を盗み聞きしていた南沢が、遠くを見つめながら呟く。

その横で駒田が不快そうに顔をゆがめた。

「……どっかの歌劇団みたいな名前だな。こいつの場合、男役しかできないだろうけどな」

「ちよっと身長が足りないんじゃないのか？」

「あと笑顔な。やっぱ無理だわ」

『……』

「そういや、鳳って、名字だけはやけに格好いいな」

「おう、実物はメタボの髭ダルマなのによ……」

「やかましい、このへなちょんぱども！」鳳が二人に噛みつく。「何をふらふらしとるか！ 準備はもう済んだのか！」

「済んだよ。な、コマ」

「済んだ、済んだ」

「とっとと持ち場へ戻れ！」

「ずるいぞ、一人だけ」

「俺らも夕季とおしゃべりしたいのによ」

「やかましい、さっさと戻れ！」

「夕季、無理するなよ。あんまり頑張らなくていいからな」

「全部俺らに任せとけ。おまえはぷらぷら飛んでるだけでいいから」
『あ、……うん』

「おまえらはもっと頑張って無理しろ！」

鳳に怒鳴られ、にやにやと笑いながら二人が持ち場に帰っていく。その様子を無然と眺め、鳳がふんと鼻で息をついた。

「ぷらぷらぷらしやがって、どうしようもない奴らだ……」夕季の方を見上げ、優しげに笑いながら言った。「おい、今度うちに

来い。カミさんの得意料理食わせてやる」

『おいしいの?』

「俺のお墨付きだ。たらふく食べばおまえも俺や娘のようにぶくぶく太れるぞ」

『……ははっ』

「お?」鳳の目尻が下がる。「やっと笑ったな」

『……』

山から一斉に鳥達が飛び立つ。空が黒くよどみ始めていた。

『来た……。行きます』

「ああ……」言葉を飲み込む鳳。「必ず生きて帰って来い!」

『了解』

空竜王が無数の白い羽を広げ飛び立つ。ゆらゆらと光り輝く機体がいつそうきらめきを増した。

太陽に吸い込まれる白い機影。

光りある場所からあえて暗雲に臨む希望を、仲間達は心配そうに見守り続けた。

忍は空竜王が描いた軌跡を目で追い続けた。

複雑な表情で目を伏せる。

何者かの気配を感じ取り、顔を向けた。

木場だった。

「心配か?」

「いえ」すべてを振りきった表情。「私はエスの隊員です。部隊での目的を果たすこと以外に憂慮はありません」

「ならいいが。言っておくが、エスは動かんぞ」

「わかっています」忍が頷く。そこにあるのは強固な決意だった。

火山灰のように膨れ上がった雨雲を空竜王が切り裂いて進む。

イカズチは空竜王に襲いかかり、爆発と消滅を繰り返した。

足場の存在しない空中で大地を蹴り上げるかのごとく、縦横無尽

に回転と反転を続ける空竜王。

数え切れない白インプの群れを瞬く間に昇華させた。

後から後から湧き出る雑兵達に見切りをつけ、夕季が本体の討伐に向かう。

分厚い雲の向こうにそれはいるはずだった。

見つけた。

アスモデウスの本体。

それはまさに悪夢そのものだった。

仮面のような人の顔の両側に牛と羊の頭が並んでいる。巨大な蝙蝠の羽を広げ、足には水かきを持ち、尻尾は牙を剥く蛇。下腹部からは大型爬虫類の頭が生えていて、竜にまたがっているようにも見える。全身に無数の鞭毛とも触手ともつかない何かがかうごめいていた。

それぞれの手には槍を従え、片方は鋭い切先を毒々しくゆらめかせ、もう片方は巨大で透明な三角形の旗をはためかせていた。

覚醒時のコクピット内ではメインカメラに頼らなくても、ハッチの裏側に外の景色が映し出される。夕季はゴーグルシステムを装着することなく、ガラス一枚を隔てたような状態でそれを目の当たりにしていた。

「これが、アスモデウス……」

夕季の口からこぼれ出る絶望。その威圧感に呑み込まれそうだった。

それは見覚えのある生物のパーツの集合体でありながら、まるで生命としての鼓動や息吹を感じさせなかった。無機質な、ロボットかからくり人形であるような印象すら、夕季は持ち始めていた。

アスモデウスが空竜王を視界にとらえる。

途端に生の色を帯び始める魔獣。炎のようなオーラをまとい、全身を赤黒く燃え上がらせる。動物と爬虫類の持つ無感動な表情が、すべて憎悪のまなざしに変貌をとげ、空竜王を睨みつけた。

仮面の口もとが冷ややかに笑う。あらゆる口腔から紅蓮の炎を吐

き出し、空竜王の数倍はありそうな巨体をひるがえした。

「くっ！」

口もとを真っ直ぐ結び、夕季が敵を睨みつける。

アスモデウスを眼下にとらえ、一直線に空竜王が切りかかって行った。

第四話 『スパイラル』 6（後書き）

連投になります。語彙が乏しいのは致命的ですが、感謝の気持ち
はいつも変わらないということで勘弁してやって下さい。読んでい
ただきまして、どうもありがとうございます。

第四話 『スパイラル』 7

それは圧倒的な力の差だった。

アスモデウスの猛攻の前に、空竜王は一撃すら入れることができない。

剣での攻撃はすべて分厚い装甲に弾かれ、風刃やトルネードで頭部を狙っても左手に持った旗のような盾でガードされた。

遠方では三つの頭から吐き出される豪炎で焼かれ、ようやく懐に入れば竜の首と尻尾の蛇が噛みついてきた。

獰猛な噛み合せを後方への宙返りでかわす。幾重にも積み重なる白銀の翼を全開状態にし、エアブレーキをかけるように空中で踏み止まった。押し広げた両足で大気を踏みしめ、叩きつけた真空の刃も、強大な敵の前では塵のようだった。

いつの間にか海岸沿いまで押し込まれていた。

メックを始めとするメガルの全関係者達が見守る中、空竜王が上空から湾岸道路に叩きつけられる。

すさまじいエネルギーを放出し、地鳴りが起こった。

厚さ二十センチのアスファルトは、空竜王の落ちた地点を中心にクレーターのような大穴を穿つ。道路が折れ曲がり、周囲が隆起した。

心配そうに見守るメック隊員達の目の前で、空竜王はゆっくりと立ち上がった。

前後によるめき、倒れそうになるのを、退いた足で何とか踏みとどまった。

「無理だ。勝てっこない……」無意識に南沢の口について出た言葉だった。

「くそっ！」鳳が無線機を手取る。「もういい、夕季、やめろ！

すぐにそこから離脱しろ！　あとは俺達に任せるんだ！」

それが届いたかどうか、鳳には判別できなかった。

空竜王は振り返ることなく、また飛び立って行く。乳幼児とヘビ級のレスラーほどの体格差と、それ以上の実力差をくつがえす術すらないまま。

「くそ、せめて夕季の体調が万全だったら……」

「いや」駒田の声にかぶせる鳳。「たとえば体調が万全であったとしても、あいつには……」

「あああああー！」

決死の形相でアスモデウスに挑む夕季。その攻撃はことごとく跳ね返されていった。

海面に叩きつけられる空竜王。

頭部を起こし飛び立とうとする矢先に、高熱を帯びた巨体が飛び込んで来た。

水かきのついた足で空竜王を踏みつける。それは空竜王の全身を覆うほど巨大な足だった。

右手に持った槍を振りかざし、空竜王の頭部に狙いを定める狂猛なまなざし。

「くっ！」精神感応で動くはずの空竜王が思うように動かなかった。精神力の消耗は著しかったが、その無数の触手にまわりつかれるたびに、夕季は己の力を吸い取られるような気がしていた。その一つ一つが個別の生き物のごとくうごめく。牛の頭も、羊も、蛇も、それぞれが別個の意思を持った、複数の生物の融合体であるようだった。

無表情な仮面の口をくわと開くアスモデウス。

夕季の視界一杯に槍の尖先が迫りつつあった。

「！」

その刹那、複数の爆発音が鳴り渡り、わずかだがアスモデウスがのけぞる。

メックが一斉にロケット弾を放ったのだ。

それは夕季に危害を加える可能性もある、ぎりぎりの選択だった。一瞬の隙を逃さず、夕季が空竜王を飛び立たせる。後を追いかけるように水柱が天高く噴き上がった。

点となって消えていく空竜王にはわき目も振らず、アスモデウスが海岸のメックに狙いをつける。波をかき分け進み始めた。

湾岸道路は激しく打ち寄せられた波しぶきに呑み込まれそうだった。放置された駐車車両が、ペーパークラフトのように簡単に押し流され、ひしゃげる。

「よし、空竜王は無事離脱した。後は俺達の番だ。第二波、攻撃用意」

鳳の号令に隊員達が応える。何台もの大型車両の懸架部分に特装された多連装発射装置が、アスモデウスの正面に狙いを定めた。

「撃てえーっ！」

標的目がけ、今度は先の三倍ものロケット弾が牙を剥いた。

硝煙に埋もれるアスモデウス。

だが次の瞬間隊員達は、煙の中から無傷で姿を現したその凶悪な容貌を、さらに間近で見るとはめとなった。

「まるで効かないのか……」絶望的な南沢の表情。

「滑腔砲だ！ 駒田！」

「あいよ！」

中央の駒田の合図を受け、アスモデウスを中心に据え、九十度の範囲から十門を超える百二十ミリ滑腔砲が連続して放たれる。貫徹を目的としたオリハルコンヘッドの砲弾は、地球上に存在するあらゆる物体に対してオーバーキルであるはずだったが、アスモデウスの外皮に傷一つ刻むこともかなわなかった。

「冗談だろ……」

駒田の口について出た真実に、鳳が青ざめる。まばたきも忘れ、ごくりと唾を飲み込んだ。

粉塵をかき分け、アスモデウスがぬうっと現れる。その目と鼻の先に、鳳達の姿があった。

赤黒く巨大な質量は熱を帯び、圧力のように隊員達の体を締めつけた。

無機質な仮面の口がくわと開く。そこにあるすべてを焼きつくす、豪炎を吐き出すための予備動作だった。

鳳達は熱気と威圧を受け、蛇に睨まれた蛙のように硬直して動けなくなっていた。

「くそっ……」

ギリギリと奥歯を噛みしめる鳳。あぶら汗にまみれたその顔で、なおもアスモデウスを睨み続けた。

フィィィィーッ——

突然笛を吹き鳴らすような甲高い音を撒き散らし、空から何かが降って来る。

それはきりもみをしながら猛烈なスピードでアスモデウスの頭に落下し、その巨体を退かせた。

空竜王だった。

大質量の激突による爆発と大地をゆさぶる衝撃に、そこにいたすべてのものが弾かれる。

高空から垂直落下する勢いを利用して、夕季が両腕の剣を突き立てたのだ。

「夕季！」

「おい、退却だ！」

ようやく呪縛から解放され、撤退を始めるメック隊員達。

アスモデウスは仮面の額をざっくり割られ、苦しそうにのたうちまわっていた。

「効いてるぞ」

「ああ、勝てる！」

しかし希望を持ち始めた隊員達の目に飛び込んできたのは、動くこともままならずにくすぐまる空竜王の姿だった。

「あいつ……」駒田が目を見開く。「こうなることを承知で」

空竜王の中で夕季が悶絶していた。その衝撃を受け止めきれず、

ぶるぶると体を震わせる。

かはっ、とうめき、血を吐き出した。

激しい目まいがし、視界が大きく揺れる。もうろうとした意識の中、アスモデウスがゆっくりと立ち上がるのを認めていた。

「くっ！」歯を剥き出すように食いしぼる夕季。眼光が少しずつ失せ始めていた。「……」

アスモデウスは確実に距離を詰めつつあった。

夕季が力なくそれを眺める。

力が足らなかった。立ち上がるだけの力すら。

遠のく意識。眼球がぐるりと裏返りそうになるのを気力でこらえ続けた。

「！」

その時、夕季の眼前でアスモデウスの巨体が反り返った。

何者かの放った攻撃が仮面の傷口を直撃したのだ。

最後の力を振り絞り、夕季が立ち上がった。

バネのように弾け跳び、空竜王が全身全霊の力でアスモデウスの額を貫く。

するとアスモデウスは断末魔の悲鳴のごとく激しい叫び声をあげ、苦しげにのたうち回った。

その一端に触れた勢いで空竜王は吹き飛ばされ、背中から大地に叩きつけられ動かなくなった。

アスモデウスはくると背を向け、逃げ出すように海上へと飛び去って行った。

満身創痍の空竜王とメック・トルーパーには、もはやそれを追撃できるだけの余力は残されていなかった。

「夕季！」

誰かの呼ぶ声がして、夕季が重い瞼を持ち上げる。

それは外部から聞こえてくるようだった。

ハッチが開き、光の眩しさに目を細める。

「夕季、大丈夫か！」

「夕季、しっかりしろ」

「夕季、夕季！」

「夕季……」

鳳の顔が見えた。駒田と南沢もいる。他の隊員達もみな、心配そうに自分の顔を覗き込んでいた。

しだいに声が遠のき始める。

夕季はまた眠そうに瞼を閉じた。

了

第四話 『スパイラル』 7（後書き）

とっちらかった頭のまま、物語だけはちよつとずつ進んでいきます。もうしばらくおつき合いいただければ幸いです。

第五話 『届かぬ想い』 OP

幼い女の子のすすり泣く声がして古閑忍は振り返った。

妹、夕季が道端で転び、顔をゆがめていた。

駆け寄って、忍が優しく抱き起こす。

「ほら、泣かないの」

「うん、うん……」

服の汚れをはたき、笑いかける。

「大丈夫だよ。何ともないから」

するといつの間にか夕季は泣きやんでいた。

手をつなぎ、仲良さげに夕暮れの帰り道を歩く姉妹の姿があった。

忍は大人達に囲まれていた。また模試で好成绩を修めたのだ。

振り返ると小学生の夕季が淋しそうに眺めていた。

「どうした？ 夕季」

夕季を気遣いながら、そっと顔を覗き込む。

夕季は口をへの字に結び、ぐっと涙をこらえているように見えた。

つつみ込むように忍が笑いかけた。

「夕季、これあげるよ」

ゆっくりと顔を向ける夕季。

忍が褒美に貰った、菓子のようなものを差し出した。

「でも、これお姉ちゃんが……」

「いいよ、食べな。お姉ちゃんいいから」

夕季が頷く。涙をぬぐい、嬉しそうに笑った。

その様子を忍も嬉しそうに眺めていた。

心配そうな面持ちで忍が振り返る。

中学生になった夕季が、張りつめた表情で何かを睨みつけていた。

「夕季」

呼びかけても、その想いが届くことはない。

「夕季、夕季」

拒絶の瞳が宿す色は、冷たく激しい憎しみ。

「夕季……」

忍が淋しそうに顔を伏せた。

もう二度と時が戻らないことを知りながら。

第五話 『届かぬ想い』 1

夕季は病院のベッドの中にいた。

上半身を起こし、照れ臭そうに目線を伏せる。

ちらと顔を上げた。

ベッドの周りを取り囲むように大勢のメック隊員達がいた。

みな嬉しそうに笑っていた。

「過労だってな？」

駒田に顔を向ける。

「おまえ歳いくつだ。サラリーマンじゃあるまいし」おもしろそうに笑った。「十八だっけか？」

「……十五」

「十五！ 見えねえぞ。達観しすぎだって。二十二、三でもいいけんじゃねえか？」

「あ、うう……」

「でも、たいしたことなくてよかったよな」

南沢の声にみなが頷いた。

夕季がもじもじする。組んだ両手を見つめた。

「……ありがとう」

「そりゃこっちの言うことだ」バツが悪そうに駒田が顔をしかめる。

「またおまえに助けられた」

「ほれ、食ってくれ」

南沢が大きな包みを差し出す。

「出たな、レー何とか」

「だって嫁さんが……」

楽しそうに隊員達が笑った。

「夕季」

野太い声の主を夕季が目線でたどる。髭面の中年太りに行き着いた。

鳳だった。

満面の笑みで鳳が夕季をつつみ込む。

「よくやったな」

「……」鳳を上目遣いで眺め、戸惑いを隠せない夕季。「……怒らないの」

「何故怒る」

「……また勝手なことしたから」

「ああん！」鳳が大げさに顔をゆがめてみせた。「ああいうのは臨機応変っていうんだ」

「……」

「メックのモットーは臨機応変と結果オーライだ。命令なんぞクソくらえ！」

「あんたいつもと言ってることが違うぞ」と、駒田。

「何か、終さんみたいなことになってるし」とは、南沢。

「バカヤロウ。俺をあんなへなちよんぱと一緒にするな！」

「へなちよんぱって何だ、コマ」

「知るか。おっさんに聞けって」

夕季の心が安堵感で満たされる。

こんなにも穏やかな気持ちでいられるのは、いつ以来のことだろう。

「夕季、早く良くなれよ。おまえがいなけりゃ俺達は何もできない」

「鳳さん、女子高生に何情けないこと言ってるんだよ」

「バカヤロウ！」駒田をあきれ顔で睨みつける。「おまえらのことだ、おまえらの！」

「よく言うよ。バケモノに睨まれて、あぶら汗だらだらだったくせに」

「あれはフェロモンだ！」

「あんた意味よくわかってねーだろ！」

夕季はずっと考えを巡らせていた。ようやくそれを口にする。

「ねえ」

鳳達が顔を向けた。

「最後にアスモデウスを撃ったの、誰なの？」

駒田と南沢が顔を見合わせる。困惑したような表情になった。

「ねえ、教えて、駒田さん」

「あ、ああ……」

歯切れが悪かった。

「夕季」

鳳の声に振り向く夕季。

先までどうって変わって、鳳は真剣な表情だった。

「教えてやろう。あの時おまえを助けたのは……」

木場雄一は厳しい表情で立ちつくしていた。目の前の人物をちらと見て、少しだけ眉を動かす。

「申し訳ありません、隊長」

木場の前で忍が頭を下げた。

「命令違反を犯し勝手な行動をとったことについては、弁解する余地ありません。どんな処罰も受けます」

「……もういい」

忍が顔を上げる。

「二度と勝手なマネはするな」

木場が忍に背中を向けた。

「二度と勝手な行動はしないと誓います」

「もういい、行け……」

忍は複雑そうな表情でその背中を眺めていた。

「あん？」

口一杯にシュークリームを押し込みながら、柊桔平が顔を向けた。ベッドの上で上半身を起こす夕季と目が合う。

「何でってか？ そりゃおまえ……」 うまい言いまわしが浮かんで

こなかった。「……きょうだいだからだろ」

ため息をつく夕季。桔平から顔をそむけた。

「でもどうして今になって……」

「南沢の野郎、俺の時は週刊誌しか持ってこなかったくせに、くそっ！　ん？」食べるのに夢中で夕季の存在を忘れかけていたことに気づく。「おまえの前では何て言ってたのか知らないが、やっぱり妹のことが心配なんだよ。そんなもんだ」

「……」夕季が考えを巡らせる。思いつめたように口に出した。「でもあの人、あたしのこと憎んでたはずなのに……」

「何であいつがおまえのこと憎む？」

ゆっくりと顔を向ける夕季。瞬きすら忘れていた。

「そんなこと一言も聞いたことねえぞ」

「……。でも」

「おまえが勝手にそう思ってるだけなんじゃないのか。たった二人きりの身内なんだろう？　何で憎まなくちゃなんのか、俺には理解できん」

「……でもあの中は、あたしのこと嫌ってる」

「ならそうかもしれないな」

「……」

「前にも言ったが、本当のことなんて本人にしかわからないからな。忍が何を考えてるかとか、おまえが心の底からそう思っているのかどうかもな」

「！……」

「俺にわかるのは、こいつが腰がくだけるほどうまいってことだけだ。もう一個食っていいか？」

夕季が頷くより前に、嬉しそうに桔平が箱の中身に手を伸ばす。

四個目だった。

「お、抹茶だ、ラッキー！」

あきれたような面持ちで夕季が桔平を眺める。それに気づき、桔平が怪訝そうな顔を向けた。

「何だ。俺の顔に何かついてるのか」

「……何もついてない」

「んだあ。まぎらわしいツラしやがって。まさか、イケメンがついてるって言うんじゃないかねえだろうな、おお？」

「イケメンじゃない」

「そこは言っとうぜ、おまえ。今後の円滑な人間関係のためにもよ。もうオトナなんだから」

「……。鼻毛出てる」

「何っ！　ちょ、ちょっ、タンマ！」

「何が？」

シュークリームを片手で保持しながら、桔平が鼻毛をぶちぶちと抜き始めた。

「……汚いよ」

「バカ野郎、それどころじゃねえ！　かつて中学の同級生で、『鼻毛大臣』って裏の通り名を持つ奴がいた。そのあだ名のせいで、そのの末路は悲惨だった。俺は同じテツは踏みたくねえ。つまりはそういうことだ。おい、鏡ねえか、鏡」

「……」

「ぬあっ！　いてえ！　タマが縮む！」涙が滲み出る。それでもシュークリームは離さなかった。「ぬあっ！　ぬああっ！　ぬああああーっ！」

夕季が深々と嘆息した。

「楽しそうね。具合はどう？」

その声に、二人が入り口へと顔を向ける。

涙目のまま桔平が露骨に顔をゆがめた。

進藤あさみだった。

「あら、おいしそう」

咄嗟に抹茶シュークリームを口にくわえ、桔平が箱をあさみから遠ざける。

「ふぁりしりふいた？」

「はん？」

慌ててシュークリームを飲み込む桔平。

「何しに來たのかって言ったんだ！」

「平隊員のあなたに用はないわ」

「ひらた……。誰にヒラにされたと思ってやがる！」

「言いがかりはやめてくれない。私は何もしていないわ。それに自業自得じゃないの」

「ふん！ てめえらにくらべりゃ、アスモデウスの方がよっぽどかわいげあるぜ」

「あら？」 そっぽを向いた桔平の顔を、あさみがまじまじと眺める。

「鼻毛出てるわよ」

「ちょ、ちょっ、タンマだ！」

「何が？」

再び桔平と鼻毛との格闘が始まった。

「ちくしょう、何故だ！ あんなに抜きまくったのに……」

「詰めが甘かったみたいね。いつものことだけど。あ、その手で触らないでね」

「うるへえ！ いてっ！ いてえ！ くそ、こんなものいっそなくなっちまえばいいのに。何でフィルターじゃいけねえんだ。なあ、夕季」

「……」

「まるで鼻毛大臣みたいね」

「誰が鼻毛大臣だと！」

桔平があさみを思い切り睨みつける。

ショートカットを揺らしながら、あさみがおもしろそうに笑った。
「バチが当たったんじゃないの？ あなたが名付け親だったんでしょ……」

「ちくしょー！ 野郎の呪いか！ 逆恨みしやがって！」

「ものすごい言いがかりね」

「何がだ！ 何の特徴もない空気みたいなモブに、わざわざキャラ

づけてやったというのに、この仕打ちはねえだろ、普通」

「そんなひどいこと、自分の友達にはできないわよ、普通」

「野郎、覚えてやがれ！」

「ええ、心配しなくても、きっと一生覚えているでしょうね」

「……あいつの下の名前、何だったかな」

「さあ」

「あ、白髪だ！ 見ろ、夕季」

「……」

「プログラムどころじゃないわね」

いたずらっぽく笑い、あさみが桔平を見つめる。それから夕季に向き直った。

「そうそう。あなたに伝えなければいけないことがあるの、夕季」
夕季がゆっくり顔を向けた。

「安心して。あなたはもう戦わなくてもよくなったから」

「！」

第五話 『届かぬ想い』 1（後書き）

読んでいただきましてどうもありがとうございます。所詮趣味の域を出ないたわごとに過ぎませんが、それでも多くの方に観ていただけるといだけで、私生活でも励みになっております。

1%の仕掛けと、99%の悪ふざけを織り込みつつ、のんびりと続く小さなフィールドにおつき合いいただければ、感慨無量です。

第五話 『届かぬ想い』 2

大会議室に百名を超すメガルの幹部連が集結していた。

正面スクリーンには撮影班が持ち帰ったアスモデウスの映像が映し出されており、その圧倒的な存在にそこにいた全員が言葉を失う。空竜王が仮面の眉間に剣を突き立て、アスモデウスが後退する場面映像は途絶えた。

照明がとり、重苦しい雰囲気の中、進行係が補足説明を加えた。「ご覧のように、今回は単に対象の撃退に成功したにすぎません。カウンターも反応が続いています」

一人が挙手する。

「ではまた奴は現れるというのだな」

「おそらくは、かなり高い確率で」眼鏡をかけた、冷徹そうな進行係が頷く。「これまでと異なり、カウンターがリセットされておりませんので、明確なダウン表示は確認できませんが」

「つまりは、個別プログラムははまだ継続中ということか？」

「はい」

「何か目安のようなものはないのか？」火刈聖宜だった。「いつ現れるのか見当がつかなければ、常時臨戦体制をしかねばならん」

「それについては考察のしようもありません。あれが獣のたぐいならば、傷が癒えた頃とでも定義できるのですが」

「機械ならば修理がすんだ頃合いと言えるな」

「はい」熱いまなざしを火刈に向ける。「対象の攻撃自体は極めて単調なのですが、その一つ一つの威力は、人類にとって脅威であると言いか言いようがありません」

「仕方あるまい。我々の考えの到底及ばない次元の怪物だ。人外のテクノロジーで作られた、未知なる生物兵器と言ってもいいだろう。

インプ一つとってもどんな構造で動き、どんなメカニズムで湧き出るのか想像もつかない。あれを傷と見なすのなら、すでに回復しており、奴の気まぐれで我々は生かされていると考えた方がいいな」火刈の意見に頷く幹部連。彼らはみな、火刈のイエスマン達だった。

「風野博士」火刈が風野守人に振り返る。「次の空竜王のオビディエンサーの件ですが」

風野がじろりと火刈を見やる。眼鏡をはずし、その鋭い眼光をぶつけた。

蛇のようなまなざしでそれを真っ向から受け止める火刈。

「当人に話は伝えたのですが、まだ色よい返事がきておりません。

古閑夕季の搭乗権剥奪は早急すぎたのかも知れませんか」

「剥奪ではない。一時的に権利を返上させたただけだ」

「同じことでしょう」にやりと笑った。「もう一度、穂村光輔を呼び出してはいかがでしょう」

風野は何も言うことなく、ただ火刈の顔を睨みつけていた。

「光ちゃん、どうしたの？」

買い出しからの帰り道、考え込んでいた穂村光輔の心を樹神雅が呼び戻す。

一時的に警戒状態が解除され、改めて避難勧告が出されるまで、市民達はみな自宅待機をするよう市から要請が出ていた。

光輔の顔を覗き込む雅。その表情は常に穏やかだった。

「最近よくぼーっとしてるね」

街は慌しく動き続け、その雑多な喧騒の中、雅の笑顔だけが浮き上がって見えた。

「……。ああ、今ちよつと悩んでてさ」

「何を？」

「茂樹から借りたギャルゲーの突破口が見つからなくて。あいつに聞くのも何かシヤクだし。あいつ、全員にコクられたって大声で自

慢して、女子にドン引きされたらしい……」

「嘘だ」

「……」

「光ちゃんあたしに何か隠してる」

雅が背中を向ける。

凶星だった。

メガルからの呼び出しがまたあった。ついさっき、光輔のもとを訪れたメガルの使いの者が、直接そう告げたのだ。

雅には何一つ打ち明けられずにいた。

先回は桔平の助言に従い、かたくなに心を閉ざし、海竜王を拒否し続けることで難を逃れることができた。

もしやそれが露呈してしまったのだろうか、と心配になった。

「……あの、俺さ……」

「それを言くと、あたしがまた困ると思ってる。だから言わないんだよね」

「……」

すべて言い当てられ、光輔はどうすべきかわからなくなった。

雅の口調は変わらない。だがその笑みを含んだ調子の中に、時おり涙の色がかいま見える。

雅が振り返った。

それはこれまでと同じ、眩いばかりの笑顔だった。

「気が向いたら教えてね。一人で悩んでちゃ駄目だよ。あたしじゃ頼りないのかもしれないけれど」

「そんなことないけどさ……」

雅を気遣うように光輔が顔を伏せる。

それに気づいて、雅がふっと笑った。

「あたしね、今のアパートから出ようと思ってるの」

「……何で」

「メガルでね、何かできることがあるんじゃないかって」

「そんな、雅がそんなことする必要……」

「必要あるよ」光輔を真っ直ぐに見つめる。「お兄ちゃんがあたし達を守るために命までかけたところだもの。きつとそこに何かあるんだよ。あたし達じゃなければできないことが」

「……」

穏やかな表情の雅。にっこりと光輔に笑いかけた。

「明日、夕季のお見舞い、一緒に行こうか」

「……ああ」

「光輔！」

その声に二人が振り返る。

霧崎礼也だった。

「礼也」

礼也は陵太郎が死亡してからずっと姿を見せずにいた。桔平からも、陸竜王の搭乗権を剥奪されたと聞いていた。

「何で、まだおまえがこんなところにいる！」

獣のように荒い呼吸。頬はこけ、イエローブラウンの髪も振り乱したままだったが、その両眼は異様な光を放ち続けていた。

「おまえは疫病神だ。いるだけでわざわいが起こる。おまえのせいで陵太郎さんまで死んだ。なのに何故、おまえだけがのうのうと生きている！」

「違う、礼也君」

「違うものか！」雅の声をかき消す。「こいつはいつも俺から大事なものを奪っていく。俺が大切にしていたものを横取りしていく。こいつがいるだけで、俺は……」

「だったらそれはあたしのことだよ」

雅の声に振り返る礼也。

雅は礼也を悲しげに見つめ、先の言葉につないだ。

「あたしのせいでお兄ちゃん死んだ。疫病神はあたしだ。責められなければいけないのは光ちゃんじゃなくてあたしの方だよ。あたしが礼也君の大切なものを奪ってしまった……」

「やめろよ、雅」

光輔が雅の肩に手をかける。涙ぐむ雅を優しくなだめるように言った。

「おまえのせいじゃないよ。仕方がなかったんだ」

「仕方ないですませるつもりか」

礼也の声に顔を向ける光輔。

落ち着きは取り戻していたが、その押し殺した様子がかえってすごみを感じさせた。

「俺はおまえを許さない」

激しい憎悪を剥き出しにし、去り際に礼也が吐き捨てた。

第五話 『届かぬ想い』 3

夕季はベッドに横たわり、一人考えを巡らせていた。

あさみから空竜王の搭乗権限の停止を告げられた。一時的なものだと補足していたが、事実上の解任に相当することは夕季にもわかっていていた。

再三の命令違反を今さら言い訳するつもりはない。だがあさみはそのことには触れず、ただ身体的な理由により搭乗続行不可能と見なされたことを強調していった。夕季の身を案じ、これ以上負担をかけたくなかったのだと、瞳を潤ませる。

すでに次のオビディエンサーと交渉中であり、搭乗意思が確認でき次第、正式採用となる手はずだった。それによって夕季の序列は一番目から二番目に後退する。身体的理由が加味された場合、さらに序列は下がるものと考えられた。

桔平の慰めも心に届かなかった。

ようやく自分にとって大切なものがわかりかけていた。顔をそむけ拒絶していたことですから、必要なものであったと気がつく。心を開き、切り捨てられない多くの想いを手に入れることができた。

それは夕季が何よりも欲していたものだった。

そのすべてが、手のひらからこぼれ落ちようとしている。

己の判断の甘さから。

浅はかだったのかもしれない。

だが間違いだと思いたくはなかった。

それを貫くためには、あさみからの通達に応じなければならぬような気がしていた。

夕季が目細める。

大切な何かを失ったように、淋しげに。

ノックの音がした。

顔だけを向け、小さく返事をする。

静かにドアが開き、何も言わずに一人の人物が姿を現した。

忍だった。

それを表情もなく眺める夕季。過剰な反応を示すこともなく、忍から顔をそむけた。

「帰ってくれない」

忍は夕季の方をちらと見た後、黙ってテーブルの上に花束を置いた。

夕季の好きな黄色い薔薇だった。

「持って帰って。知らないから」

「そう」表情を変えることなく、再び花束を手取る。「思ったより元気そうね。あれだけの目にあっただのに。さすがね」

感情を抑えて言う。

「邪魔してごめんなさい。もう来ないから」

「笑えばいいじゃない」

忍がドアのハンドルに手をかけると同時に、夕季がぶすりと突き刺した。

「知っているんだよね。私が空竜王の搭乗権を剥奪されたこと。だから笑いに來たんだ。だったら笑えばいいじゃない」

振り返る忍。初めて戸惑うような表情を夕季に向けた。

「いい気味だと思ってる。勝手に死にそうな私を助けて優越感にひたっていた上に、こんな結果にまでなって、笑いが止まらないんじゃない」

「そんなこと思ってない……」

「嘘だ！」目を剥きながら夕季が囁みつく。「本当は助ける気だっ
てなかったくせに。こうなることがわかっててわざとやったんだ！
私がすべて無くして、泣きついてくるのが見たくて。だから助けた。本当はどうでもよかったくせに。私なんか死ねばいいって思っ
てたくせに！」

つかつかと忍が夕季に歩み寄る。花束を握りしめ、厳しいまなざしを向けながら、夕季の頬を殴りつけた。

「！」目も口も開きっぱなしで頬を押さえる夕季。放心状態のまま忍の顔を凝視した。

「いい加減にしないで！」忍の一喝。夕季の目を見据え、厳しい言葉を叩きつけていく。「人の話も聞かないで、うじうじうじうじ勝手なことばかり。あなたのそういうところが嫌いだって言っているの！ そんなこともわからないようでは、本当に死ぬわよ！」

「……嫌いなら、助けなきゃいいじゃない……」頬を押さえ、涙ぐむ夕季。子供のように口をゆがめ、悔しそうに忍を見上げた。「ずるいよ。何で今さら助けたりするの。今まで何もしてくれなかったくせに。ほっといってくれればよかったのに……」

「ほっておけるわけじゃないじゃない」切なそうに眉を寄せ、忍は囁くようにそれを口にした。「あなたは私の妹なのよ」

「……」涙がこぼれ落ちそうになるのを歯を食いしばってこらえる夕季。「調子のいいこと言わないで。今までずっと放ったらかしだったくせに。都合のいい時だけ妹だとか言わないでよ。あたしがこれまでどんな気持ちでいたか、あなたなんかにはわからない。わかるはずがない。それなのにこんな時だけ姉妹づらするなんてずるいよ。許せない。本当に助けて欲しかった時に助けてくれなかったくせに。そばにいて欲しかった時、いてくれなかったくせに……」

「ごめんなさい」

突然頭を垂れた忍の姿に、夕季がはっとなった。

「今さら許してもらえないかなんて思っていない。こんなことを言っても信じてもらえないかもしれないけれど、私はあなたのことを憎んだり妬んだりしたことは一度もない。あなたが空竜王の搭乗者選ばれた時は嬉しかったし、その分不安も大きかった。ずっとあなたのことが心配だったから。黙っていたけれど、空竜王の第二オビデイエンスーってね、私なの」

「……嘘」

「嘘じゃない。昨日搭乗要請があった」

「……」睨むことも忘れて、夕季は忍の顔に見入っていた。「……乗るの？」

忍が淋しそうに笑う。それから首を横に振った。

「断った。今さらあなたよりうまく乗る自信もないしね。でも、もしあなたがあれに乗ることがつらくなって、それが受け入れられないのならば、代わりに私が乗るから」

「……」

忍が背中を向ける。夕季に見られたくない何かを隠すように。

「私の独りよがりの気持ち、あなたを誤解させてしまったみたいだね。ごめんね、夕季。私のことが嫌いならば、それでもいい。でも、これだけは覚えておいて。あなたにしかできないことなら、もうあなただけの問題ではない。みんなの気持ちを背負わなければいけないの。あなたに託すしかない人達の気持ちを、もっと大事にして……」

感情に言葉をさえぎられる忍。部屋から出ようとし、鼻をすすりあげ、優しげな口調で先につないだ。

「夕季、よく頑張ったね。お姉ちゃん嬉しいよ。でも、もっと自分のことも大切にしてね。あなたは信じないのかもしれないけれど、あなたがいなくなると私は悲しいから……」

「……お姉ちゃん」

後ろ髪を引かれるように立ち止まる忍。

「これ、やっぱ置いていくね」

花束を手放す。それから振り返ることなく、忍は病室を後にした。夕季はしばらくそこから動くことができなかった。

その夜、夕季は眠れずにいた。

ずっと忍のことを考えていた。

子供の頃から何をしててもかなわなかった。勉強も、スポーツも、人との関わり方も。

すべてが忍に及ばなかった。

大人達はすぐに比べたがる。

何かと忍と比較されることが夕季は嫌だった。

忍はいつも誉められる。それに比べて妹は、という声を耳をふさぎたくなるほど聞かされてきた。

忍に負けまいと懸命に努力する。だがいくら頑張ってもその差は縮まらず、むしろ開いていくばかりだった。

いつか忍に置きざりにされるような気がしていた。

駄目な自分にあいそをつかして。

それが怖かった。

二人きりの肉親。たった一人の姉に見捨てられなくなかった。

前だけを見つめ、しゃにむに走り続ける。

忍に追いつきたくて。

それはいつしか二人の間に壁を作り上げることとなった。

高い高い壁。

話が噛み合わなくなったのは、いつまでたっても追いつけない自分を、忍が見下しているせいだと勘違いする。

無理をいさめる忍を、自分に追いつかれるのを恐れていると誤解して、夕季は軽蔑した。

あたりかまわず睨みつける夕季に拒絶され、近づけなくなった忍を、自分のことを嫌いになり関わりたくなかったのだと勝手に思い込んだ。

夕季にはわかっていた。

二人の心が離れたのは、忍が振り返らなくなったせいではなく、自分が追いかけなくなったからだということを。

テーブルの上に目をやる。

複数の人達からのさまざまな見舞いの品があった。

果物。菓子。雑誌。メック隊員からの励ましの寄せ書きと千羽鶴。そして花瓶に広がる黄色い薔薇の花。

そのすべてを拒絶するように、夕季が顔をそむける。

悔しそうに唇を噛みしめた。

やがて目頭を押さえると、込み上げる感情に押されるままにうめき声をもらした。

二度と時が戻らないことを知り、嘆くように。

その時光輔はメガルにいた。

アスモデウスの襲来を告げる警報が場内に轟き渡ったのは、光輔がメガルの本館に足を踏み入れた直後のことだった。

途端にざわめき始める館内。

すれ違う誰もが必死の形相で走り抜けて行った。

まるでこの世の最後と言わんばかりに。

「光輔、こっちだ！」

桔平の声に振り返る光輔。

「桔平さん……」

「ここにいては危ない。逃げろ」

「……」

桔平の言葉の意味が理解できない。アスモデウスが現れたのは前回と同じ海岸で、何よりメガルにすることが一番安全なはずなのだから。

わけもわからずに自分を見続ける光輔に、桔平はそれを口にしなければならなかった。

「ここにいたらおまえは殺される……」

第五話 『届かぬ想い』 3（後書き）

このあたりを表現してみたくて、現在の流れになったような気がしております。設定は後付け、展開はごり押しですが、パクリではなく王道なのだという苦しい言い訳を残しつつ、無理やりつなげていきたいと思っています次第です。

読んでいただきまして、ありがとうございました。

第五話 『届かぬ想い』 4

街にはまた避難勧告が出されていた。

もはや隠しとおすことはできない。報道管制は敷かれていたものの、全世界がこの攻防に注目していた。

日本のとある沿岸地帯に突如として現れた巨大な怪物。

海を割り、空を黒く染め上げ、それが現れる。

黒い翼。複数の獣の頭。悪夢の咆哮。人類を裁くための槍を高く掲げて。

嵐を従え、激しい怒りのような感情を剥き出しにして、アスモデウスは山陵市に迫りつつあった。

港の船は転覆し、海岸沿いの車は高波にさらわれていった。

遠目に湾岸道路に黒い線が描かれる。

陸上自衛隊の車両が横一線に集結していた。

砲台を有するもの、ミサイルを搭載するもの、歩兵を運ぶもの。

その数は総力戦を物語っていた。

近代兵器の集合体である彼らが駄目ならば、世界中の軍事力はこの未知なる敵に対して効果をもたない。そこに配備されていない、核兵器を除いては。

在日米軍が参戦を表明していた。圧倒的な対象を駆逐すべく最終的な手段として、核兵器の使用をほのめかせて。そこには、以後核の持ち込みを公然化させるための、政治的な思惑が色濃く表れていた。

「最後の意地ってやつか」高台から彼らを眺めつつ、鳳が哀れみを込めた調子で呟く。大雨となった黒い空を見上げた。「俺達と同じだな……」

木場は後方でメック・トルーパーの動きをうかがいながら、隊員

達に振り返った。

「いいか、これが我々にとって最初の戦いとなるだろう。命を惜しむ者は去れ。止めはせん」

ざわつく者は一人としていない。よく押さえが効いていた。

「古閑」

「はい」

木場に呼ばれ忍が隊員達の前に出た。忍は女だてらにエスの副長を任されていた。まだ二十歳になったばかりだというのに、歴戦の猛者木場雄一率いるエネミー・スパーの、二人の副官の一翼を担っている。その戦闘力と状況判断のよさは突出していた。

「我々の目的はあくまでもメガルの防衛にあります。戦闘に加わるのは、メック・トルーパーが機能しなくなってからだと思っ
ていてください。それまでは勝手な行動は慎むように。ただし、海竜王に接近する者を見つけた場合、すみやかに確保すること。場合によつては……」

「何で俺が殺されなくちゃならないんですか！」

すっかりもぬけのからとなったメックの待機所で、光輔が目を見開いて桔平に詰め寄る。

「それも、同じメックのエスに……」

桔平は光輔の顔を凝視していた。頃合いを見計らって真実を口にする。

「いいだろう。教えてやる。今のおまえには知る権利がある」

ごくりと生唾を飲み込む光輔。桔平を見続けるまなざしは真っ直ぐのままだった。

「前に話したよな。メガルには俺達とは別の、いくつかのグループが存在するって」

「はい」

「十三年前、砦埜島から風野博士は三体の竜王を持ち帰った。発掘した説明書きの石版には、『魔王に率いられし三方の霸王、竜の如

し』なんて意味合いのことが書かれていたらしい。で、竜王なんて呼び始めたみたいだがな。政府じゃこいつらを、『マーズ』とか『ネプチュン』なんてコードネームで呼んでるようだ。勝手に神様に格上げしちまいやがったが、どっちも畏怖の念がこめられているのはおんなじだ。で、それがすべてのわざわざいの元凶だと考えているグループがいる。風野博士の義理の娘、進藤あさみが設立したエネミー・スーパーだ」

「……」

「もともとエスは活動制限の多いメックから独立する形で誕生した。一年前の発動でメガル本部を守り切れなかった教訓をいかしてな。メックが政府と歩調を合わせて行動をとらなければならぬのに対して、エスはメガル独自の判断で柔軟に動かすことができる。あらゆる外敵からメガルを守るのがその存在意義だからだ。だが、実際は違う。一部の人間達は、プログラムの発動が竜王をこの地に持ち帰ったせいだと仮定し、それを奪い返すためにインプ達が出現するものだと定義している。奴らにとってのメガルは、政府も含めた企業の集合体を意味し、それを脅かすものはすべて排除する方針だ。諸悪の根源である竜王や、それを守るために結成されたメック・トルーパー、その大元である風野博士までもがその範疇に含まれる」

「だからって何故俺を？」

「竜王さえ砦埜島に返せば、プログラムが消滅すると考えているからだ。奴さんら、何とかそう仕向けようと画策しているみたいだが、現実的に役に立ってことになれば、それもうまくねえ。表向き実権者の風野博士に逆らえる人間は、メガルにはいないからな。オーバー・テクノロジーの秘密は、すべて博士の手の内にある。彼を排除し、それらを失うことを政府も望んではいない。オリハルコンは、日本が世界中を手なずけるためのエサでもあるしな。合法的に博士から竜王を奪い取るには、竜王が役立たずであることを証明するのが手っ取り早い。正面から博士を追いつめるにはそれしか方法がないとも言える。結局のところ、奴らの目的はすべての原因を竜王に

押しつけて、メガルのイニシアチブを握ることだ。決して正義や平和なんかじゃない。そのためにはメックが全滅しようが、その他大勢の人間達が犠牲になろうが関係ない。むしろ、それを既成事実とするために、わざと最悪の事態を演出しようとしている節さえある」

「だから竜王を乗りこなせる者が邪魔になったってことですか？

自分達の安全のためだけに」

重々しく頷く桔平。

「海竜王の覚醒は予定外だった。空竜王もな。夕季はていよく組織から追い出されたが、その方があいつにとってはよかったのかも知れない。あとは海竜王を乗りこなす可能性がある人間の排除だけだ。すなわち……」

「……俺」

光輔が顔を伏せる。怒りで拳が打ち震えていた。

「そんなのって……。じゃあ、そんな身勝手な理由でりようちゃんも……」

顔をゆがめる。こらえ切れず、涙が光輔の頬を伝い落ちた。

「それが俺がここで調べ上げ、たどりついた結論だ。全部が全部正しいとは限らない。だが本質は疑いようもない。いい大人が聞いてもヘドが出そうになる。おまえを最初に連れ出したのも、それを早急に確かめる必要があったからだ。あの時おまえも、直感的に関わっちゃうなんねえもんだって思っ、咄嗟に否定しちゃったんじゃないのか？ エスはすでにおまえに的を絞りを絞っている。あとは事実を確認し、人知れず葬り去るだけだ」

「……」

「竜王を作った文明は、少なくとも一度以上は崩壊している。後を受け継いできた文明もな。それらはすべてプログラムのせいだと記されている。竜王を標的にヤツらが群がって来るってのは、おそらく本当だろう。何考えて博士が、こんなところに陣取ったのかはわかんねえがな。俺達は、そんなゴツいものを作った奴らを消し去ったバケモノどもと、渡り合っていかなければならない。なのにいま

だ身内すら信用できないのが現状だ。情けない話だ、まったく。ま、人間の本质が地球誕生以来まるきり変わってないのなら、どんなに優れた文明だろうが滅びちまうのも納得できるがな」

がつくりと肩を落しうなだれる光輔。シヨックを隠せない様子だった。突然こんな話を聞かされ、受け止めろという方が無理なのだ。

「一つ確認しておきたいことがある」

「……何ですか」

「六年前の記録を見た。当時俺はまだメガルの人間ではなかったから、それが本当のことかはわからないがな」

「俺の記録なんですか？」

頷く桔平。

「六年前、すでにおまえは海竜王を覚醒させている」

「……。何なんです、それ……」

光輔が目を丸くする。

「本当に覚えてないのか？」

「はい」

「おまえの姉さん、いつ亡くなった？」

「六年前です。その時、海竜王の搭乗試験を受けていたのは、俺じゃなくて姉さんの方でした。でも、事故が起きて姉さんは……」

「そうか。ならいい」桔平は何かを飲み込むように顔をそむけた。

「俺の勘違いだ」

亡き姉のことを想い返し、すっかり消沈してしまった光輔を、桔平は複雑な面持ちで眺めていた。

「本音言うとな、俺には何が正しいのかなんてわからない。だが、自分にとって何より大切なものがあり、どうしてもそれを守りたいのなら、おのずと道は決まってくる」

光輔が顔を向ける。桔平は遠くを見つめていた。

「俺は、奴らに親友も恋人も奪われた。戦う理由があるんだ。だからと言って、それをおまえに強要する気はさらさらない」

「……俺はどうしたらいいんですか」

「そのままでもいい」涼しげなまなざしを向けた。「心配するな。おまえや雅は俺が全力で守る。それが陵太郎との約束だ……」

第五話 『届かぬ想い』 5

沿岸地域を炎で焼きつくし、アスモデウスが前進する。

そのかたわらに転がるのは、ほんの数分ほど前まで戦車や装甲車であった残骸の山だった。

「行くぞ」

静かに鳳が告げる。

隊員達が頷いた。

「！」

風を切り裂く羽音に振り返る隊員達。

頭上に影を落とすその姿を鳳は目で追った。

影の主は白い翼を広げ、疾風のように鳳達を追い抜いて行った。

「夕季……」

アスモデウスの前に立ちはだかるように空竜王が舞い降りた。

青く光り輝く両眼。

土砂降りの中、全身が雨に濡れいつそう妖しくゆらめく。オリハ

ルコン独特の色合いだった。

翼を収め、隆起部分からブレードを飛び出させる。

両手を傘のように広げ、一瞬でアスモデウスとの間合いを詰める

や、縦軸を中心に回転しながら切りかかった。

大地を揺るがすアスモデウスの咆哮。

空竜王の切先は、すべて左手の槍に阻まれていった。

後方回転しながら空竜王が宙をかける。

体を返し、頭部を地に向けた姿勢で、空にとどまったままブレー

ドをなぎ払った。

真空の刃はアスモデウスの硬い外殻に、傷すらつけずに弾かれる。大地に降り立ち、天高く指先を差し上げる空竜王。巻き起こる竜

巻を振り下ろし、アスモデウスに叩きつけた。

しかし、それはアスモデウスに到達する前に、竜の口から吐き出された熱風によって吹き飛ばされてしまった。

「夕季、応答しなさい！」

司令部から波野しぶきが何度も呼びかける。

夕季からの返答はなかった。

「マスターキーの管理はどうなっているんだ！」

「今の古閑夕季にマスターキーは必要ありません」ぶすりと突き刺し、火刈が風野の顔色をうかがい見る。「博士もご存知のはずでは？」

遺憾そうに目を細め、風野がぼそりと告げた。

「エスに指令を伝えてくれ。空竜王の回収を優先させろ」
嫌悪感を隠さずに風野に向き直る火刈。

「オビディエンサーはいくらでもいるが、空竜王の代わりはありませんからな」

風野がじろりと火刈を睨む。

それすらものともせず、火刈は口もとをにやりとさせた。

「これより、古閑夕季の行動をメガルに対する背反行為とみなし、速やかにその排除にあたります……」

「よしわかった」

本部からの指令を受け、木場が重々しく頷く。心配そうに様子を見うかがう忍に顔を向けた。

「隊長……」

「古閑夕季に対する排除命令が出た。奴は、たった今メガルに害を及ぼす危険な存在として認定された」

忍が眉を寄せた。

激しく打ちつける雨がその表情を隠す。

木場の目には、それが忍の涙のように映っていた。

「おまえは下がっている。俺と尾藤で指揮をとる」

忍が物憂げに振り返る。

彼方の街では、雨でも消えない猛火の中、反逆者が己の命を削り、怪物に立ち向かっていた。

「何だ、貴様ら！」

仲間の声に呼び戻される忍の意識。

エネミー・スリーパーの行く手を阻むように、メック・トルーパー達が道をふさいでいた。

「何の真似だ、鳳！」

ありったけの凄みを込めて木場が咆える。

しかし、腹を決めたメック隊員達は、誰一人としてその恫喝には屈しなかった。

「ここから先へは行かせん」

「何！」

「俺達にはあいつの戦いを見届ける義務がある。おまえらにもな」

「そんな必要はない！」鳳の襟ぐりをつかみ、木場が吐き捨てる。

「古閑夕季はメガルに害をもたらす危険因子と認定された。我々は速やかにそれを排除しなければならない！」

「おまえらの敵は何だ」

「！」

「逃げることしかできない人達を追いつめ、街を焼きつくすあのバケモノか。それとも、自分の死を覚悟して、俺達の代わりに戦っている、今にも折れそうな女の子か？」

鳳の言葉が忍の心に突き刺さる。

「そんなたわごとが通用するとも思うのか！ 貴様らのしていることはメガルに対する立派な背反行為だ。このままなら我々は貴様らも粛清せねばならんぞ！」

「やれるものならやってみろ」

まるで見透かすように鳳が忍の方を見やった。

「俺達を守らなくて、誰があいつを守ってやれる……」

メック待機所のディスプレイに映し出された光景を、光輔と桔平は固唾を飲んで見守っていた。

物音に気がつき格納庫へ向かうと、すでに空竜王は飛び立った後だった。

撮影班が配信する映像の中では、空竜王がアスモデウスに蹂躪され続けていた。

まるきり歯が立たず、敗北は必至だった。

「夕季……」

拳に力を込める光輔。

それをちらりと見て、桔平が押し殺した声で言った。

「馬鹿なことは考えるな」

キツとなって振り返る光輔。

「行けばおまえの命が危ない。それに……」眉を寄せた。「行ったところで、どうこうできる相手じゃない」

「でも、このまま放っておけて言うんですか？ 夕季を見殺しにしろって」

「誰に強制されたわけでもないだろう」

「……」

「これが、あいつが望んだ選択なんだ……」

アスモデウスに吹き飛ばされる空竜王。

コクピットの中で夕季は苦痛に顔をゆがめた。

息を荒げ、何度も唾を飲み込む。

めまいがし、視界がぼんやりかすみ始めた。

「がああっ！」

自ら計器パネルに額を打ちつける。

バチン、と鈍い音がして、夕季の額が割れた。

激痛が飛び始めた意識を再び呼び覚ます。強く輝く両眼のはざまを、鮮血が赤い筋となって流れ落ちていった。

「おまえなんかに！ おまえなんかに……」

忍の笑顔が脳裏をかすめる。

それは、泣きわめく幼い夕季を慰めるように、優しくあたたかく見守ってくれていた。

「奪われてたまるか！」

第五話 『届かぬ想い』 6

波野しぶきは最悪の事態を回避すべく、懸命に夕季に呼びかけていた。

「何をしているの、夕季。ただちにメガルに帰投しなさい」
返事はない。

「夕季、答えなさい！ 夕季！」

その時、初めて夕季が応答した。

『……やってやる』

ぼそりと告げたその意味を、瞬時に理解できた者は一人もいなかった。

『刺し違えてでも、あいつを倒してみせる』

途端に広大な司令部全体がざわめき始める。

すぐにしぶきが口もとを引きしめた。

「馬鹿な真似はやめなさい、夕季！」

取り乱したようにしぶきが叫び続ける。

それに答える夕季の口調は、先のもので変わらなかった。

『悔しいけど、あいつには勝てそうにない。だから……』

「夕季……」

そこにいた全員が夕季の声に耳を傾けていた。

司令部だけでなく、メックもエスも。

「夕季……」 光輔が拳を握りしめる。

メックの待機室では桔平が無線を傍受し、様子をうかがっていた。
空竜王目がけて、アスモデウスが突進する。

かろうじて空中に逃げる夕季。

「あいつさえいなくなればプログラムは消滅する。それでいい」

「何を馬鹿な……」 鳳が声を震わせる。木場から無線機を奪い取り、

回線に割り込んだ。「夕季、聞こえるか、返事をしろ、夕季！」

鳳の声に気づく夕季。

「鳳、さん……」

『バカヤロウ！ 鳳さんじゃねえ！ くだらないこと言ってるど本気でしばき倒すぞ！』

その心情に触れ、高空で滞空状態を維持しながら、安堵したように緊張を解く。

「夕季！ 考え直せ！」立ちつくす木場や忍を置き去りにし、鳳がのどから血も吐かんばかりに叫び続けた。「誰もそんなことを望んじやいない！ おまえ一人犠牲になったって、何の意味もないんだぞ！」

『……鳳さん』

静かな夕季の声。覇気がないわけではなく、間近に迫った己の死をしっかりと受け止めていた。

『意味ならあるよ。そのためにあたしはみんなに守られてきたから……』

「おまえ……」

『あたしなんかを信じてくれてありがとう。メックのみんなにもありがとうって言って、……おいてくれると嬉しい』

駒田達が齒を食いしぼる。

忍はただ困惑したように、ことの成り行きを見守っていた。

その呼びかけに心を揺り起こされるまでは。

『後でいいから、お姉ちゃんにも伝えてほしい。今まで迷惑かけてごめんって』

「！」

『悲しむ必要なんてないから……』

くわと目を見開き、忍が鳳から無線機を奪い取った。

「夕季、やめて、夕季！」

『……お姉ちゃん』

「もういいから。そんなことしなくて、いいから……」

『……』

しばしの沈黙。

それから夕季は、素直な気持ちを並べ立てていった。

『自分でもわかってた。勝手にコンプレックスを感じて、一人でお姉ちゃんと張り合おうとしてたこと。本当はただ誉めてほしかっただけなのに。何でこんなふうになっちゃったんだろ。……ごめんね』
「夕季……」

忍の心を阻んでいた壁が崩落していく。不安そうに空を見上げた。
『こんなことくらいしか、思いつかなかった。他に何もできないから。でも、誰もあたしのことなんて……』

「……必要なの」

『！』

「あなたが必要なの。あなたがいなくなったら、私は……」
込み上げる想いが忍から言葉を奪う。

口もとを真っ直ぐに結び、鳳が忍から無線機を奪い取った。

「俺もだ！俺もおまえが必要だ。仲間であり、娘でもあるおまえが。俺だけじゃない。駒田だって、南沢だって、他の奴らだってみんなそうだ」

鳳の背後で駒田と南沢が静かに頷く。他の隊員達も同様だった。

木場が少しでも表情を崩しかける。ぐっと奥歯を噛みしめ、自らに喝を入れた。

「みんながおまえのことを必要としている。本気でおまえのことを心配している。生意気で意地っ張りで、どうしようもないおまえのことをだ。おまえが俺達のことをどう思っているのか、もう一度胸に手を当てて考えてみる。それと同じだ。おまえがいなくなったら、俺達や忍がどれだけつらい想いをするのか、もっとよく考えてみる、このバカヤロウが！」

『……そんな言い方しなくてもいいのに。ヒゲ親父のくせに』
「バカ、ヤロウ……」

空竜王のコクピットの中、夕季が満たされたように笑う。

ようやく本当に望んでいたものを手に入れたのだ。

「あつという間だったけど、こういうのも悪くない」

『何を……』

はるか眼下に標的を見据え、空竜王がその場で縦軸を中心にローする。

わずかにも軸をぶらすことなく、ビシッ、ビシッと空気を切り裂き、己の精神力を高めているふうでもあった。

「やっとわかった。大切なことが。守りたいものも。だから……」
いくつもの顔が浮かんでは消えていく。

鳳の顔。

駒田の顔。

南沢の顔。

他のメック隊員達の顔。

桔平の顔。

光輔の顔。

雅の顔。

そして、忍の優しい笑顔。

「あんな奴には一つだって渡さない！」

肩口のインテーク状の窪みから空気を強制的に取り込み、脇や足首、展開した翼の無数の末端部から高圧縮させ噴出させる。

前傾姿勢で急降下を開始し、高速回転するドリルのようなきりもみを従え、夕季がアスモデウスに挑みかかって行った。

第五話 『届かぬ想い』 6（後書き）

ここぞという時のBGMには、『魂のルフラン』を使用しています。例のアレの主題歌ですが、本編よりも本編をハードにイメージできる、稀有な曲だと思っています。だから何だと言われそうです。が、脳内で気持ちよく盛り上がるためには、BGMは不可欠だったりもしまして……。他にも恥ずかしくて書けないようなBGMも多数あります。

いろいろな恥ずかしい嗜好の力を借りて、少しでも恥ずかしくないものを作ればいいかな、と自分を納得させています。どうもありがとうございます。

第五話 『届かぬ想い』 7

大雨は街中の炎を鎮火しつくしていた。

吹き飛ばされ、空竜王が高層マンションに叩きつけられる。

建物に体をめり込ませ、ピクリとも動かなくなった。

目の光も消え失せる。

コクピットの中で、夕季も完全に沈黙していた。操縦桿を握りしめたまま、うなだれるように動きを止める。

「夕季！」

ぐっと歯がみする鳳達。

その背後で木場が冷静に告げた。

「これより空竜王の回収作業にかかる。手順は先に説明したとおりだ。アスモデウスを陽動する班は特に注意を払い行動するよう……」

「木場ああーっ！」

鳳が木場につかみかかった。

「これで満足か！ 貴様、これで本当にいいのか！」

鳳の体が、くの字に折れる。木場が強烈な膝蹴りをくらわせたためだった。

屈強な鳳が立ち上がることもかなわず、悶え苦しむ。

「鳳さん！ 貴っ様ーっ！」

「よせ、駒田！」

いきり立つ駒田を南沢が押しとどめた。

「離せ、南沢！」

木場が振り返る。

その冷徹なまなざしに二人の背筋が凍りついた。

「これ以上我々の邪魔をするというのなら容赦はせん」

武器をかまえ威嚇するエスの隊員達。メックとの睨み合いとなっ

た。

「隊長、空竜王が……」

その声に全員が振り返った。

アスモデウスが空竜王に近づいて行く。

とどめを刺そうというのだ。

爛々と目を光らせながら、一步一步間合いを詰める。

ついには目の前に立ち、右手の槍を振りかざした。

その時、操縦桿を握りしめる夕季の両腕に、力がみなぎった。

顔を上げ、活目する。

同時に、空竜王の両眼が青く光り輝いた。

まるでそれを待ち望んでいたかのように。

夕季は自分の間合いぎりぎりまで敵を引きつけるとともに、神経を研ぎ澄ませ、精神を集中させていたのだ。

限界まで精神力を高め、空竜王が飛び出して行く。

それは地を這うように一直線に突き進む、しなやかな鞭のようでもあった。

槍をかいくぐり、懷に飛び込む空竜王。

羽のようなブレードで下腹部の竜の頭に狙いを定めた。

右腕の剣を甲を上に向け、切りかかる動作のまま引き戻す。

くるりと体を返す勢いで、飛び込んで来た竜の首にバックブロー

気味の水平切りを浴びせようとした。

夕季の瞳が空竜王と同じ光を帯びる。

『守りたいものならたくさんある。でも……』心の中で変わらぬ想いを連ねていく。己を奮い立たせるようにつなげて発した。「失うものは何もない！」

願いをかけ、想いを込めた、渾身の一撃。

バチバチとエネルギーの火花を飛び散らせ、押し切られるように、ゆるやかに竜の首が本体から分離していく。

実際はまばたきする間もないほどの刹那であったが、夕季の目には連続撮影のコマ送りのように、その一枚一枚が鮮明に映し出され

ていた。

ぼとりと地に落ち、それは泥水に埋没するように、見る見る溶け落ちていった。

闇夜の嵐すら引き裂く、戦慄の悲鳴に微塵も躊躇せず、夕季はひたすら先だけを見据えていた。

己を終焉へと導く、確かな未来へ向け。

振り抜いた斬撃の余韻を押し広げた左足で踏み止め、それを支点に空竜王が大地を蹴り上げる。

一瞬で回転運動を垂直方向への推進力に転化させた。

立て続けに繰り出される滑らかな一連の動作は、勢いを殺すことなく、さらなる加速をも積み重ねていった。

狙うは、仮面の喉もと。

けたたましい絶叫を撒き散らし苦しみ悶えるアスモデウスの動きを見極め、仮面の喉首目がけ、空竜王が伸び上がる。

が、それが届こうとした寸前、再び夕季は絶望を受け入れなければならなかった。

怒りにまかせ振り下ろした槍の先端が、その背中に叩きつけられていた。

凄まじい衝撃をまともに受け、地面にめり込む空竜王。

今度こそ完全に動きを封じ込められた。

「う、く……」空竜王のコクピット内でわなわなと体を震わせる夕季。目を充血させ、悔しそうにうめいた。「届かない……」

しだいに意識が遠のきつつあった。

「夕、季……」土砂降りの地面に這いつくばり、泥を握りしめる鳳。メック隊員達は毒気を抜かれ、ただ立ちつくすだけだった。

表情もなくそれを見渡す木場。部下達に静かに告げた。

「……行くぞ」

「あれは……」

信じられないと言わんばかりの眩きに振り返る木場。

ディスプレイの中では、後方から攻撃を受け、叫び声をあげるア

スモデウスの姿が映し出されていた。

第五話 『届かぬ想い』 7（後書き）

何度読み返してもゴツゴツと引っかかります。自分で書いているのに、です。で、直して、直して、結局もどおりとかザラで、テンション下がりがまくりです。そんな時のBGMは……。何がいいんでしょうかね？

読んでいただきまして、ありがとうございました。

第五話 『届かぬ想い』 8

忍はパームバズーカをかまえ、アスモデウスに狙いを定めていた。一撃目は足もと、二撃目でかろうじて背中に当たった。

しかしまるで手ごたえがない。

プラズマ砲弾を使用し、用途に応じてランチャーだけでなく小型のキャノン砲の役割も果たす、エネミー・スリーパー御自慢の特殊兵器も、未知なる怪物の前では頼りない限りだった。

必ず急所はある。

空竜王の攻撃を受け、一度ならずアスモデウスは苦しみもがいているからだ。

空竜王が傷を負わせた箇所を集中して攻撃すれば、突破口は開けるはずだった。

今はまだ間合いが遠い。

何より空竜王からアスモデウスを引き離すことが先決だった。

「！」

無線の呼び出しがかかる。

一瞬躊躇し、忍はそれを手に取った。

「……はい」

『古閑、何をしている！』

木場だった。

「勝手なことをするな！ ただちにその場所から離れろ！」

『……』

「古閑！ 返事をしろ！」

『……木場隊長』落ち着き払った忍の口調。そこに迷いは感じられなかった。『命令違反を犯し、申し訳ありません。先日の誓いを破った件と合わせて、深く謝罪いたします』

「悪いと思うのならば、早くこちらへ合流しろ！」

『それはできません』

「何！」

『現時刻をもって、私はエネミー・スイーパーから脱退致します』

「古閑……」

『恩を仇で返す形になってしまい、大変申し訳なく思っています』
木場が無線機を握りしめる。

「待て、古閑！」

『……お元気で』

「……」両目をかっと見開く木場。無線機を握り潰さんばかりに力を込めた。「待て、忍！」

忍からの応答はなかった。無線の電源を落としたことに気づく。
木場が土砂降り仰望ぎ見る。怒りをぶつけるように黒い空を睨みつけた。

アスモデウスが周囲を見回した。

自分を攻撃した敵を探しているのだ。

素早い身のこなしで忍が建物の陰に隠れる。

通りの向こうからアスモデウスが顔を出した。

パームバズーカをかまえ照準を合わせる忍。

トリガーにかかる指先に迷いがあった。

この位置からなら当てることは可能だった。だが相手を脅かす距離ではない。

切り落とされた竜の首跡を攻撃するためには、壁のような左手の盾をかいくぐる必要があった。

眉を寄せる忍。

迷いを払拭するように指先に力を込めた。

低い弾道を描き、プラズマ砲弾がアスモデウスの右肩に炸裂する。
それを微塵にも感じず、アスモデウスが振り返った。

右側にある牛の首が、忍のいた方角をなめるように見まわしてい

た。

再度建物の陰に隠れ、難を逃れる忍。

このままでは近づくことすら困難だった。

「！」

アスモデウスの後方でゆらめき立つ人影を確認する忍。

空竜王だった。

もはや戦える状態ではない。

ただ最後まで立ち続けようと、それだけを望んでいるように忍には見えた。

アスモデウスが空竜王を視界にとらえる。

雨の中、今にも消え入りそうな、それでも気高く輝く一対の青い光に、咆哮を投げつけた。

「夕季……」

キツと口もとを結び、物陰から飛び出す忍。

全速力でアスモデウスに駆け寄って行く。

その表情に悲痛な決意を刻みつけて。

近距離でプラズマ砲弾の直撃を受け、アスモデウスが振り返った。振り向きざま、忍の放った次弾がアスモデウスの仮面にヒットする。

のけぞるアスモデウス。

朦朧とする意識の中、夕季はその姿を確認した。

アスモデウスの目と鼻の先で、正面から向かい合う忍の姿を。

「お姉ちゃん……」声にならない声。瞼がひとりでに下がり始めた。忍はアスモデウスを睨みつけていた。わずかに退く様子もみせず。

に。

それどころかもう一步前に踏み出して行く。

心の中でその決意を刻みつけていた。
『届かないのなら近づけがいい。諦めずにもう一步踏み出して近寄ればいい。何故こんな簡単なことに気づかなかった。私はもっと早く、そうすべきだったのに』

幼い夕季の泣き顔が脳裏に浮かんた。

ふいに穏やかな表情になる忍。

「ごめんね、夕季……」

そう呟き、トリガーにかけた指先に力を込める。

アスモデウスが忍を確認するように、ぬうっと顔を近づけてきた。

『あなたは私が守るからね』

至近距離から放たれたプラズマ砲弾が、アスモデウスの股間の傷跡に直撃し、肉壁を抉り飛ばす。

爆風と振り下ろされた旗による突風にあおられ、迷彩服が宙を舞った。

束縛から解放され、長い黒髪がふわりと広がる。

まるで風の中を自由に泳ぐようでもあった。

『夕季……』

静かに目を閉じ、忍は満足げに笑った。

街中を、触れるものすべてを、震撼せしめる異体の叫び。

それが夕季の意識を揺り起こした。

「お姉ちゃん！」

体勢を立て直し、アスモデウスは地に横たわる忍に襲いかかろうとしていた。

「ああああああーっ！」

血も吐かんばかりの夕季の絶叫。

怒りに打ち震えるも、すでに精神力を使い果たし、空竜王を動かすことすらかなわなかった。

ギシャアアアーン！

黒きとばりをも切り裂く咆哮とともに、アスモデウスが絶望の槍を振りかざす。

切先が傷ついた肢体を叩き潰そうと加速していく。

が、数瞬の猶予を残し、その確定は阻まれることとなった。

ガギン、という打撃音が湿った空間に響き渡る。

寸前で凶悪なる処断を受け止めたのは、長く鋭い銀の爪だった。
猛烈に叩きつけられる洪水の闇間、鈍い輝きを放つ黒い腕の下か
ら、一対の妖しげな光がのぞく。

「海竜王です！」

その報告を受け、風野守人は思わず席から立ち上がった。

第五話 『届かぬ想い』 8（後書き）

取り組みコンセプトは『○○○○ メガリユーオー!』という主題の、ややシリアス系ラブコメでした。当然、主人公はハーレム状態です。ハードな展開に方向転換してしまったのは、そんなモテモテの主人公が許せなかったからかもしれません。結果、自分の首を締めているわけですが（自爆）。名残はタイトルの一部と、悪ふざけだけです。気に触ったらすみませんが、どうかご容赦願います：

第五話 『届かぬ想い』 9

桔平が光輔の異変に気づいたのは、空竜王が狂ったようにアスモデウスに切りかかって行った直後だった。

光輔が動きを止める。

ディスプレイの向こうに見えない何かを見据えるように。

「光輔……」

「俺、行きます」すっと立ち上がった。「止めたって無駄ですから」

そのまなざしの行方を桔平は見定められなかった。

「おい、待て」

「嫌です」

「いいから、待て！」

光輔が足を止める。振り返るその表情に迷いはなかった。

「……。コーヒーでも飲んで、頭冷やしとけ。話はそれからだ」

桔平が放り投げた百円玉を受け取る光輔。怪訝そうな顔を向けた。「バカやろ。勢いだけで突っ走ったって何の解決にもならねえぞ」缶コーヒーをグビグビと流し込む。ゲフツ、と派手に吐き出し、根負けしたような表情で光輔の方を見やった。「海竜王がどこに置いてあるのかも知らねえくせに。何とち狂ってやがんだ」

「あ……」

「こないだのところに行っちゃって、測定器しか置いてねえぞ。ハッチを開けるには、パスの入力も必要だしな。何も知らねえくせに、一人でテンパってんじゃねえぞ、クソガキ。今おまえに必要なのは、ミルクと砂糖たっぷりブラックコーヒーだ！ ほれ」

「……それは、いいです」

「熱血だけで押し切れるのは中二までだ、覚えとけ。何で俺のまわ

りにゃ、こんなバカばっか集まんだろうな。ま、バカの総大将が陵太郎じゃ仕方ねえか」

光輔が目を見開き、桔平に注目する。

「マスターキーや燃料は必要なかったな。おい、約束しろ」

「……」

「絶対、死ぬんじゃないぞ」

「……」桔平のまなざしを真っ直ぐ見つめ返し、光輔が頷く。「はい」

桔平がにやりと笑う。

「おし、行くぞ。残念ながら、今の俺にできるのはこれくらいだ。奴までの距離はおまえの気持ちで縮めてみせろ。もし死にやがったら、今度こそボコボコにしてやるからな」

「はい！」

「ったく、いつもこいつもバカちゃんばかりだよ。まいっちまうってのな、実際」

光輔が熱いまなざしを向ける。

「桔平さんって、ハナ……」

桔平がキツとなって光輔を睨みつけた。

「鼻毛はわざと出してる！ 仕様だから気にするな！」

「……」

「決して鼻毛大臣の呪いが発動したわけじゃねえ」

「……。そうですか」

「何か文句あるか！」

「いえ……。文句はないですけど、桔平さんって、ハナしがわかる人だなんて思ってた」

「……。……まあ、なんだな……」

＊

アスモデウスの豪腕の前に、しだいに海竜王が押され始める。

真上から押さえつけるような、強大な圧力が、呼吸する余裕すら与えずに襲いかかってきた。

内側から左手を添え、両腕でどう力に対抗するも、踵をぬかるみにめり込ませるだけだった。

これ以上退くわけにはいかない。背中に深手を負った忍を抱えているのだ。

精神力を高め、スカート状の足首から高圧縮させた気体を噴射させる。

海竜王の足もとで、二つの水のクレーターが重なり合った。

噴き上がった雨水のミストを身にまとい、決死の形相で光輔が振り返る。

「桔平さん、早くしいちゃんを！」

ビリビリと振動し続ける黒き巨人の背後に、桔平が回り込んでいた。忍の症状を目の当たりにし、それが用意ならざる状況だと認知する。

「駄目だ、光輔。動かすのは危険だ！」

けたたましいアスモデウスの咆哮にかき消され、桔平の声は光輔には届かない。

ちっ、と舌打ちし、桔平は両腕で大きなバツ印を作った。

「だーめーだー！ うーごーかーせーねーえー！ あっちー！ いてー！ くれー！」

両手で払いのける仕草をしてみせた。

「くそっ！」

海竜王のコクピット内で光輔も舌打ちする。

眉間に力を込め、光輔が眼前の怪物を睨みつけた。

「ああああーっ！」

ドロドロと黒緑の体液が流れ続けるアスモデウスの股間に、つま先をえぐり込む。

嵐すら引き裂く絶叫とともに、仮面の口が大きく開き、巨体を仰け反らせ、異形の怪物が数十メートルも後退した。

海竜王が爪を射出し、槍に巻きつけると同時に、足首から圧縮空気を噴出させ跳び上がる。

アスモデウスの頭上でくると回転し、背後に降り立った。

それを追いかけるように、アスモデウスが振り返る。

桔平と忍をアスモデウスの後方に置き、それなりの距離を確保することができた。

「いいぞ、光輔！」

忍の様子を確認しながら、桔平が携帯無線機を手取る。メックやエスの持つものとは、周波数の違うものだった。

「ああ、八木か、俺だ。大至急、救護班をよこしてくれ。大至急だ……」

叩きつけるような雨粒が、黒く艶やかな海竜王の外殻を滑り落ちていく。

チェーンを両手で保持し、槍をたぐり寄せようとするも、アスモデウスの力は凄まじく、逆に海竜王が引き寄せられ始めた。

チェーンから左手をはなし、光輔が額の傷目がけてもう一本の爪を撃ち放つ。

旗のような別の槍に阻まれ、海竜王が後じさった。

何度やっても同じだった。

左手にかまえた透明な盾にすべての攻撃が弾かれる。

海竜王が右腕の爪を引き戻した。

ギッシャアアアッ！

限りなく機械音と融合したかのような、無機質なアスモデウスの咆哮。

仮面の口を大きく開き、海竜王に挑みかかって来た。

空高く跳び上がり、光輔がそれをかわす。

アスモデウスの背後に降り立つや、鞭のように打ち下ろされる尻尾を左腕で受け、気合もろとも鋭い尖端を蛇の眉間に突き刺した。

ギイアアアアーン！

蛇の頭を潰され、アスモデウスが狂ったように暴れ回る。

海竜王が両手のひらを正面に向けた。

立ち込める濃霧に、すべての目が視界を奪われる。

気配を感じ空を見上げたアスモデウスに、海竜王が跳びかかって行った。

空中で左腕の爪を射出。

一撃目をわざと三角形の旗で弾かせ、二撃目を左首の羊の額に撃ち込んだ。

炸裂と同時に爪の先端部からフックのような返しが展開し、ヒットポイントを固定する。

途端にアスモデウスが苦しそうに身悶え始めた。

海竜王は、アスファルトのめくれ上がった地面に足をめり込ませてからも、狙いを定めさせないように縦横に鎖を振り回し続けた。

羊の顔に浮かび上がる悪魔の表情。

口から長く細い舌と緑色の液体を滴らせた。

右側の牛の首がギロリと目を剥く。

アスモデウスが右腕の毒槍を振りかざすのが見えた。

泥地に両足を埋めて、踏みとどまる海竜王。

突き立てた爪を、今引き戻すわけにはいかなかった。

黄色い両眼でアスモデウスと対峙し、海竜王が槍に合わせて左腕の爪をかまえた。

その時、空から巨大な白鳥のような影が舞い降りた。

空竜王だった。

アスモデウスの左側を縦に通り返けた後、その勢いのまま、糸の切れたマリオネットのように、空竜王が濡れた大地に叩きつけられる。

真上から羊の首を貫くように滑り落ちた両刃の剣は、一瞬で海竜王にかかるテンションを打ち消した。

羊の首が鎖に引っ張られ地面に転がっていく。

それだけではなかった。

それに誘発されるように、アスモデウスの左腕が腐り落ちたのだ。旗のついた槍と左腕は一体だった。

透明な三角形の旗は一瞬にして消え去り、残った腕と首は、本体から離れるやいなや、地表に融け込むように消滅していった。

激しい嵐を全身にまとい、背中を向け逃げ始めるアスモデウス。追撃しようとした海竜王を、牛の口から吐き出された豪炎が押しとどめた。

空高く、遠く海上に消えていくアスモデウスを、海竜王は立ちつくし、ただ睨み続けるだけだった。

「おい、しっかりしろ！ おい、忍！」

呼びかけに、ゆるゆかに瞼を開く忍。

心配そうに覗き込む桔平の顔があった。

「……桔平さん」

忍が意識を取り戻し、桔平の表情が少しだけやわらぐ。

「バカ野郎、無茶しやがって。本当におまえら姉妹は、そろってどうしようもねえな」

「……。夕季は、夕季は無事ですか？」

「ああ、何とかな。……海竜王が来ている。もう大丈夫だ」

「海竜王が……」目を閉じて安心したように笑った。「よかった。光ちゃんが、来てくれた……」

「！」

桔平の顔を眺め、力なく忍が微笑む。

「……桔平さん、鼻毛、出てますよ……」

「るせえ！ んなこと気にしてる余裕があんなら、てめえの体の心配でもしやがれ！」

「そう、ですね……」

「ったく、どうして俺のまわりの女どもは、言いにくいことをずけずけと。……！」

桔平の腕に身を任せ、動かなくなる忍。

その意識を呼び覚まそうと桔平は懸命に呼びかけ続けた。

「忍、しっかりしろ。おい、しっかりしろ、忍！ 忍っ！……」

満足げに微笑む面差しが、その呼びかけに応えることはなかった。

薄暗い病院の通路を運ばれていく忍を、親からはぐれた子供のような顔で夕季は追い続けていた。

「お姉ちゃん、お姉ちゃん！」

夜の嵐はさらに勢いを増していた。

手術室の扉が開く。

「やだ、死んじゃやだ、お姉ちゃん……」

その声は忍には届かない。

無機質な扉が、何もくみ取ることなく閉ざされる。そこに残された、迷子のような感情を置き去りにしたまま。

「お姉ちゃんっ！」

絶叫が無人の通路に響き渡った。

了

第五話 『届かぬ想い』 9（後書き）

読んでいただきましてどうもありがとうございます。勢いで書いてしまったものは改めて読み返すと赤面するほど滑稽で、手直しにその十倍近い時間がかかってしまします。とりあえず出来上がった部分や、まだ手をつけていないプロットの話こそ、皆様に見ていただきたかったりもしますが、いつになったら完成するやらという感じです。

こういうベタな展開が許されるのも、序盤だからこそという気がしますので、いかに王道に近づけるか気合を入れようと思っている次第です。

おつきあいいただきまして、ありがとうございました。

第六話 『インブレイス』 OP

暗闇の中、光輔は一人泣き続けていた。

狭い場所に閉じ込められ、迷子になった子供のように。

先まであれほど騒がしかった外部が、水を打ったような静けさだった。

「お姉ちゃん……」

不安になり、光輔が顔をゆがめる。

「光ちゃん……」

姉、ひかるが呼んだような気がして耳を澄ます。それはかすかだが、すぐそばから聞こえてくるようだった。

「お姉ちゃん！ お姉ちゃん！」

「光ちゃん、もう大丈夫だから……」

「……」

涙をぬぐいながら光輔が両手を前に押し出す。重かったが扉は少しずつ開き始めた。

差し込む光。

目の前にひかるの笑顔があった。優しく抱きしめるような、やわらかくあたたかい微笑み。

途端に光輔の心が安堵につつまれる。

ひかるは光輔の顔を認めると、安心したような表情になった。

「怖いのに、よく頑張ったね……」

額を伝う汗。

うつろなまなざし。

ひかるの胸もとを槍のようなものが貫いていた。

不安そうに口もとをゆがめ、光輔の体が硬直する。

それに気づき、ひかるは満面の笑みで光輔をつつみ込もうとした。

「心配しないでいいよ」

窓から降りそそぐ陽の光が、ひかるの横顔を輝かせる。

それは女神のようであり、或いは母親のような強さを持った、受け入れる者にとってはかけがえない笑顔だった。

「私はここににいるから。いつも光ちゃんのそばにいるから……」
静かに目を閉じるひかる。

満足そうに笑い、ひかるは動かなくなった。

「お姉ちゃん！ お姉ちゃん！ お姉ちゃん！」

光輔はいつまでも姉の名を呼び続けた。

たった今、誰よりも愛しい人間を失ったことすら理解できないまま。

第六話 『インブレイス』 1

雨はますます激しさを増していた。

夜のとぼりが落ち、時おり光る雷が夕季の顔に不安な影を落とす。明かりの消えた待合室で夕季は背もたれのないソファに腰かけ、うなだれていた。頭に包帯を巻き、表情もなく、満身創痍の体は起きてるのがやっとなほどだった。

その隣で眉間にしわを寄せ、桔平が腕組みをしていた。足音に気づき顔を向ける。

光輔だった。

息を切らせ、桔平にたずねる。

「桔平さん。しい……、忍さん、どうなんですか？」

その声に反応したのは夕季だった。

ギリッと歯を食いしばり、目を剥いて光輔を睨みつける。

立ち上がるやいなや、夕季は光輔の頬を力任せに平手で殴りつけた。

突然の出来事に言葉も出ない光輔。

桔平も同様だった。

夕季の体は怒りに打ち震えていた。血走った目で光輔を激しく睨み続ける。

「何でもっと早く来なかった。海竜王に乗れること、何で黙ってた！」

涙目のまま、その憎悪だけを真っ向から叩きつけていく。

「おまえがもっと早くそのことをみんなに打ち明けていたら、こんなことにはならなかった！ おまえのせいだ！ 全部、おまえのせいだ！」

収まらない怒りは続けて光輔に襲いかかってきた。

先と同じ箇所夕季の平手がヒットする。力は先の半分程度だった。三発目はバランスを崩し、先端だけがかすめていく。四発目で空振りし、足がもつれて崩れ落ちた。

「夕季……」

「触るな！」

手をさしのべようとした光輔を振り払う夕季。顔を上げることもできずに、ぜえぜえとあえぎ続けた。すでに体力の限界だった。

「何でもっと早く来てくれなかった。もっと早く来てくれたら、お姉ちゃん、こんな目にあわなくてもすんだかもしれないのに……」
声に張りはない。それでも怒りは持続していた。

夕季に責めたてられ、責任を感じ、うなだれる光輔。苦しそうな声を絞り出した。

「……ごめん」

「そうじゃない」

二人のやりとりを静観していた桔平が、ようやく横入りしてくる。
「光輔は悪くない。何度も出て行こうとしたのを、俺が無理やり止めたんだ」

「桔平さん……」

複雑そうな表情で桔平に目をやる光輔。

桔平は夕季を見下ろし、静かに告げた。

「海竜王を覚醒させた人間を見つけ次第殺せ。そんな信じられない命令が俺達の内部の一部に出ている。今回の件で、またことは表面化するだろう。真実が露呈すれば光輔は即座に殺される。それを承知でこいつは飛び出して行ったんだ。一人で苦しんでいるおまえを放っておけずにな」

はっとなる夕季。苦しそうに顔をゆがめた。

「……あたしのせいだ。あたしが勝手なことをしたから……。あたしがお姉ちゃんをこんな目にあわせてしまった。全部、あたしのせいだ……」

「おまえのせいじゃない。おまえは自分がやれることを精一杯やっ

た。おまえがやらなければもっと多くの命が失われていただろう。忍もだ。誰も悪くない。ただそれが及ばなかっただけだ」

夕季が落ち着きを取り戻す。力なく、かすれた声を押し出した。

「光輔、ごめん……」

光輔が切なそうに目を細めた。

「いいよ。本当のことだから。俺にもっと勇気があれば、しいちゃんを助けられたかもしれないのに」

「違う……」

「違わない。俺、また大切な人を見殺しにしてしまうところだった」

「光輔……」

二人を眺め、桔平が嘆息する。

「夕季」

桔平に呼ばれ、夕季がゆっくり顔を向けた。表情もなく、桔平が見下ろしていた。

「おまえ、ちょっと横になってろ」

「……でも」

「でもじゃねえ。ボロボロじゃねえか、おまえ。こんなんじゃ、おまえの方が先に……、どうにかなっちまうぞ」

「……」

「何かあったら俺が起こしてやる」

夕季が悔しそうに唇を噛みしめた。

待合室で桔平と光輔が向かい合って座る。ともに表情はなかった。昨日の避難命令で病院の中はからっぽだった。いるのは光輔らと、忍の手術のために臨時で集まった人間達だけである。

夕季は疲れ果て、ソファで横になり眠ってしまっていた。もともと細面の顔立ちが、極度の疲労からかなりやつれて見えた。

忍の手術が始まってからすでに三時間が経過していた。時計の針は午後十時四十分をさしている。

アスモデウスは海へ逃げたものの、またいつ攻撃してくるのか皆

目見当もつかなかった。

「記憶が戻ったのか？」

桔平の問いかけに光輔が頷く。

「はい」

「そうか……」気の毒そうに眉を寄せる桔平。「記憶を飛ばしちゃうくらいだ。相当ショックだったんだろうな」

「ええ」

「だが、いつまでもごまかせるようなことじゃない。むしろそれではよかったと考えろ」

「わかってます……」

淋しそうに顔を伏せる光輔。過去のことを思い返しているようだった。

その頭を整理させるように桔平が補足する。

「おまえがどこまで思い出したのか知らないがな。俺が調べた記録ではこうなっていた。六年前、おまえがまだ十か九つくらいのことだ。海竜王の第一オビディエンサー最有力と思われた、穂村ひかる、おまえの姉さんのことだな。その弟であるおまえの感応数値を調べてみたら、驚くほど異常な値が出たらしい。で、多くの反対意見を押し切って、感応研究部の一人が嫌がるおまえを無理やり海竜王に乗せた。その時、事故が起こったらしいな」

「……」

「突然海竜王が暴れ出し、一瞬のうちにメガルは壊滅寸前まで追い込まれた……」

光輔の頭の中を多くの想いがかけめぐっていた。

第六話 『インブレイス』 1 (後書き)

難産です。とりあえず更新いたしました。どうか読んでやって下さい。

第六話 『インブレイス』 2

穂村ひかるは廃墟と化したメガル内部を走り抜けていた。
信じられない光景だった。

これがほんの数十分ほど前まで多くの人々が行き交い、闊達な意見が飛び交った、最先端の科学の集合体だということのか。

実験室を破壊し飛び出した海竜王は、恐るべき力で建物の内部に瓦礫の山を築いて進み続ける。

その傷跡を見れば破壊力のすさまじさは一目瞭然だった。

十六歳の少女にどうにかできる状況ではない。

それでもひかるは行かなければならなかった。その破壊者の中には、この世でたった一人の肉親が閉じ込められているのだから。不安で押しつぶされそうになり、自分に助けを求め、泣きわめいて。

「ひかる」

ひかるが振り返る。

陵太郎の真剣な面差しがあった。

「りょうちゃん……」少しだけ心に余裕が生まれる。「みんなは？」

「避難した。礼也の奴、まだしぶってやがったが、何とか綾さんが連れていったみたいだ」

「そう」ほっと胸を撫で下ろす。

「さいわいケガ人だけで済んでいるようだ。おまえも早く避難を……」

「それはできないよ」

「ひかる……」

「光ちゃんを助けなくちゃ」

真っ直ぐなひかるのまなざしに言葉を失う陵太郎。すぐに気を取り直して言う。

「俺達が行ってどうこうなることじゃない。周りを見る。これが竜王の力だ。もともと俺達が扱えるようなシロモノじゃなかったんだ。あとはメックに任せて……」

「メックに任せていたら光ちゃんまで助からない。メックの目的はこの騒動の鎮圧であって、搭乗者の命までは保証してくれない」

「……」

「光ちゃん、きつと泣いてる。怖くて不安なのに、誰も助けてくれないから。きつと私のことを呼んでるはず。だから行かなくちゃ」

無言でひかるを見つめる陵太郎。ふっと笑った。

「わかった。俺も行く」

「駄目だよ、りょうちゃんは関係ない。りょうちゃんまで危険な目にあう必要はない」

「関係ないものか。光輔は俺達の兄弟でもある。あいつがいなくなれば雅も悲しむ」

「りょうちゃん……」

「それにな、あいつがもし竜王を使いこなせる人間だとすれば、世界中の平和のためにも、あいつの力が必要なんだ」

「……」

「……。いや、そんなことより、あいつの命が先決なわけだけども……」

「何だか正義の味方みたいだね、りょうちゃん」

「あれ、違ったか？」

ふいをつかれたように、ひかるがぷつと噴き出す。

肩まである髪を揺らし、困ったように眉を寄せた。

「ほんと馬鹿だね、りょうちゃんは」

「そんなことは言われなくてもわかってる。何を今さら照れ臭そうなの笑顔をこの上なく好ましく思う。」

「まだ若いのにお父さんみたいだよ」

「おまえもおっかさんみたいだぞ。俺より年下のくせに」
ひかるが嬉しそうに笑った。

ひかると陵太郎が物音のする方角を目ざして進んで行く。

不安な気持ちは隠せなかった。

二人とも海竜王の搭乗試験には参加したことがある。その時はただの巨大ロボット程度にしか思わなかった。感応数値も誰のものを見ても似たり寄ったりだった。

しかし光輔だけは違った。

トップレベルのひかるや陵太郎のそれより、五倍近い数値を叩き出したのだ。

それを不安に感じていたのはひかるだけだった。

周囲の大人達は未知なる可能性に飛び上がって喜んだ。そしてその謎を解き明かそうと躍起になる。畏怖すべきものすら手中に取り込もうとする、愚かで利己的な欲望が、今回の事故を引き起こしたのだ。そのすべては光輔に集約していく。光輔一人を危険人物と特定し、人柱とすることで、それまでの行為を正当化するはずなのだ。これだけの被害が出れば誰か一人の責任ですむことではない。おそらくは光輔の存在すら二の次になっているものと思われた。

否、この期に及んで、光輔を本気で助けようとする人間がいるとは到底思えなかった。

「！」

一人の研究員が通路で倒れていた。かなりの深手を負っているようだった。

「大丈夫ですか！」

陵太郎の呼びかけにうつろなまなざしを向ける。

光輔の搭乗実験をもっとも切望した男だった。

「りょうちゃん、この人を助けてあげて」

ひかるに顔を向ける陵太郎。

ひかるは通路の先を見据えていた。

「この先に光ちゃんがいる。私、行くね」

「おい、ひかる、待て。行くなら俺が……」

「駄目。光ちゃん、私を呼んでいる」振り返り、にっこり笑った。
「大丈夫。必ず助けてみせるから……」

緊張の面持ちで通路を駆け抜けるひかる。

ロビーの向こうから海竜王のシルエットが浮かび上がっていた。

そこへ足を踏み入れ、ひかるが絶句する。メガルの中核とも言えるコンピュータ・ルームが、かつての面影すら見当たらないほどに破壊されつくしていた。

それをひかるは怒りだと感じた。

ここにいないべきでない彼らの怒り。

何としてでも、鎮めなければならなかった。

ゴトン！

ものの音に目をやる。

その先にいたのは、黒く光り輝く海竜王の姿だった。

怒りに打ち震えるように、全身を激しく波立たせる。

海竜王が振り返る。

その目の光を認め、ようやくひかるは理解した。

それが怒りではなく、哀しみであることを。

怯えていることを。

ひかるは武器を床に落とし、両手を広げ、ゆっくりと海竜王に近づき始めた。

笑みを浮かべ、ひかるが海竜王に語りかけていく。

「ごめんね、あなたも怖かったんだね。まだ小さくて、力をうまくコントロールできない光ちゃんをいきなり乗せられて、どうしていいのかわからなかったんだね」

海竜王の両眼が輝きを放つ。

「私ではあなたの心を開くことはできなかった。あなたのパートナーにはなれなかった。仕方ないね、私に力がなかったんだから。でも、もうあなたの嫌がることはしないから、だから今度だけは許して。お願い、光ちゃんを返して」

海竜王の長く鋭い爪が鈍く光った。

振りかぶり、ひかる目がけて走り出す。

それでもひかるは、その微笑みを絶やすことなく、海竜王の前で両腕を開き続けた。その忌まわしい存在のすべてを受け止め、抱きしめようとするかのように。

「もう怖がらなくていい。私は何もしないから。だから、光ちゃんを……」

一瞬の閃光。

爪がひかるの胸を貫いていた。

「光ちゃんを返して」

海竜王の目から光が消え失せる。そしてピクリとも動かなくなつた。

「ありがとう」力なくひかるが笑う。

やがてハッチが開き、泣きべそをかきながら光輔が姿を現した。

「光ちゃん……」

その無事な様を確認するや、ひかるは安心したように瞳を閉ざしていった。

二度と開くことのない、穏やかな瞳を。

＊

「それからおまえが心を閉ざしちまったのか、海竜王が拒否し出したのか、ろくな数値がでなくなった」光輔の顔色をうかがうように桔平が言う。「結局メガルはおまえを危険者リストの筆頭にぶち込んで、近づくことすら禁止した。姉さんの事故死で生活の保障をするかわりに、自分達の監視下に置いてな。そんなところで合ってるか？」

「はい……」力なく光輔が頷く。「……たぶん」

鼻で息をつく桔平。

「彼女の意味を継いだのが陵太郎だったわけだが、まわりまわって

結局またおまえのところへ戻ってくるとはな。因果だ何だ、理解しがたい何らかの力が働いているとしか思えんな」

気の毒そうに光輔を眺めた。

ふさぎ込む光輔。

そのそばでは夕季がすうすう寝息を立てていた。

ちらと夕季に目をやる桔平。

「普段はクソ生意気だが、寝顔はかわいいもんだな。ガキなんだから、意地ばっか張ってねえで、もっと甘えりゃいいのによ」

ふとやり切れない表情になった。

「もう海竜王には近づかない方がいい。エスはすでにおまえの存在を特定している。今回が決定打になっちまった。あいつらなら本当におまえを殺しかねん」

「……」

「安心しろ。俺がいる限り、奴らの好きにはさせん。おまえも夕季もな。ガキを守るのが立派な大人の使命だ」

第六話 『インブレイス』 3

「大変です！」波野しぶきがメガル司令部で声を張り上げる。「アスモデウスです。アスモデウスがまた山凌市に向かって進み始めました！」

『山凌市、並びに周辺市町村へ避難勧告を発令だ』画面越しに火刈司令官が冷静に対応策を示す。『国防省へも出動要請だ。断つてくるのならそれでもいい。メックを先陣に、エスをバックアップに向かわせろ』

「それが……」

歯切れの悪いしぶき。困ったように眉を寄せた。

「先のアスモデウス撃退以降、メックとは連絡がとれません」

『何！』

「鳳隊長が独断で指示を出しているものと思われます」

『エスはどうした！』

「木場隊長の指揮で空竜王と海竜王の回収に向かったため、メックとは別行動をとっています」

『エスは今どこにいる？』

「古閑忍が搬送された救急病院の周辺で待機しているはずですよ。おそらくは進藤副司令の号令待ちで古閑夕季の確保に踏み込む予定だと」

『そんなことは聞いておらんぞ！……。進藤副司令に伝達だ。ただちにエスにアスモデウス討伐の準備をさせろ、とな。それから……』押し殺した声。『至急私に連絡を入れさせろ』

「了解しました」

ふう、と深く息を吐き出すしぶき。ボリウムのある金髪を揺らし、別回線に切り替えた。

「アスモデウスが来ました。あと一時間ほどでそちらへ向かうものと推測されます。……はい。言われたとおりに切り返しておきました。……はい、承知しています。そちらも頑張ってください。応援していますから」いたずらっぽく笑った。「柊もと主任」

「もう来やがったか……」携帯電話を折りたたみ桔平が歯がみする。午前二時。忍の手術はまだ終わらない。

嵐が収まる気配もなかった。

光輔が桔平の顔に注目する。

「アスモデウスが来たんですか？」

重々しく頷く桔平。まなざしに力を込めた。

「俺は行く。妙な考えおこすんじゃないぞ、光輔」

「……」

桔平に釘を刺され言葉を失う光輔。うらめしそうに顔をそむけた。

「そんな……」

夕季の声に桔平が振り返る。重い体を持ち上げ、立ち上がるところだった。

「何でこんな時に……」苦しそうな顔を桔平に向けた。「避難勧告が発令されたら、病院はどうなるの」

言いにくそうに桔平が告げる。

「全員避難することになるな。患者も医者も」

「それって……」不安気に顔をゆがめる夕季。「お姉ちゃんは……」

夕季の顔を表情もなく眺め、桔平が静かに言った。

「心配するな。手は回してある」

光輔が夕季に目をやる。

夕季の体が小刻みに震え始めていた。

「アスモデウスは俺達が何とかする。おまえらはここから動くな」

「でもどうやって……」懇願するように桔平に詰め寄る夕季。「あいつのすごさは、みんなわかっているはずじゃない。竜王だって倒せないのに。メックやエスじゃ歯が立たない……」

「倒せるかどうかはわからん。だが忍の手術が終わるまでは、何が何でもこの病院は守ってみせる」

「……」

「俺がいいって言うまで、おまえ達はここから出るな」じろりと二人を睨めつける。「エスが本格的に動き出したようだ。表向き優先目標はアスモデウスの討伐。裏のメインはおまえらの抹殺だ」

はっとなる二人。

夕季が悔しそうに唇を噛みしめた。

その様子を静かに見守る桔平。

「奴ら、まだ何とかなると、たかをくくってやがる。この現状をまのあたりにしてなおだ。ボンクラどころか、自分だけは絶対安全だと思ってやがる」

光輔が顔を向ける。

桔平は見えざる敵を見据えるように、嵐吹き荒れる窓の外を睨みつけながら続けた。

「すぐ目の前でエレエことが起こってるってのに、まるでゲームの画面を眺めているような感覚でしかないんだ。誰かが何とかしてくれる。自分が何もしなくてもな。それが当たり前になっちまってるから、下っ端やガキどもを酷使しても何も感じねえ。コマがなくなりゃ、次持ってくりゃいいってな具合だ」ちらと夕季を見やる。

「こんな大ゴマ、もうどこにも残ってねえのにな」

「……」

「チリメンジャコはてめえらの方だったのによ、ったく。死んじやならねえ奴ほど、我先に覚悟決めるってのに、どうでもいいのに限って死にたくねえとかぬかしやがる」

「不謹慎じゃないですか？」

桔平が振り返る。

拳を握りしめ、真剣なまなざしをぶつける、光輔の姿があった。

「……。おまえらから見たら、俺も同じか？」

「いえ、そういうわけじゃ……」

桔平が嘆息した。

「信じられねえだろうが、奴らにとってはそれも正義なんだ」

「……」

「この世の中に無数に存在する、枝分かれした正義の一つだ」

「……。大人の事情ってやつですか？」

「そんな複雑なものじゃない」

桔平が言いたくなさそうに続ける。

「もし俺の中で、どうしてもゆずれないものが一つだけあったとすれば、おまえらや他のすべてを犠牲にしたとしても、必死でそれを守ろうとするだろう。そのうちわかるようになる、なんてことを言う気はさらさらねえ。でもな、嫌でもそんなふうに見えるんだよ」

「……」

「何かを背負っちゃった人間が、口にしちゃねえ言葉がある」
光輔が桔平の顔に注目する。

それを真正面から受け止め、平坦な口調で桔平は先につないだ。

「平等と世界平和だ」

言葉もなく、ただ拳を握りしめ、踏み止まる光輔。

桔平はただ、憤りのような毒を吐き出さただけだった。

「……。案外、プログラムってのも、いいセンってんのかもな。

こんなんじゃ、いっそ綺麗さっぱりなくなっちゃった方が……」

「嫌だ！」

夕季の声に二人が視線を向けた。

「そんなの、いや……」

夕季の体が打ち震えていた。行き場のない怒りを拳に宿し、唇を噛みしめながら冷たい床を睨み続けていた。

「俺も嫌です！」

消え入りそうな夕季の声を、光輔が追いかける。

その顔をまじまじと眺め、桔平が面倒くさそうに受け答えた。

「……バーカ、冗談に決まってるだろ。俺だってゴメンだ。それに

な、世界中がどうしようもねえボンクラばかりだとしても、俺のテリトリーの中にいる奴らだけは、あんなモンの好きにはさせねえ」
光輔が口ごもる。バツが悪そうに顔をそむけた。

「どうでもいい命なんて一つもない……」

ぼそりと告げた夕季の一言に、再び二人が注目する。

「どんな命だって、何かに求められて生まれてくる。そう、陵太郎さんが言ってた」

「野郎、また青くせえことを……」

「今なら、あたしもそんなふうに見える……」

「……。少なくとも、おまえらにはそれを口にする権利がある。俺にはまだないが……」 桔平が腕組し嘆息する。窓の外を眺めながら、先につないだ。「……あいつにもな」

第六話 『インブレイス』 3 (後書き)

読んでいただきまして、ありがとうございます。難しいです。こころ変わるのは勘弁して下さい。

第六話 『インブレイス』 4

再度光輔達に念を押し、桔平は待合室を後にした。

桔平が立ち去ってから、光輔と夕季はその場から動けずにいた。何もできない現実には打ちひしがれていた。

薄暗い照明の下、やがて夕季が立ち上がる。その瞳に決意を宿して。

ただならぬ様子の夕季に、光輔は何ごとかを感じ取った。

「夕季……」

「あたし、行く」ぼそりと告げた。「竜王じゃないとあいつは倒せない」

「そんな体じゃ無理だよ」

「でもあたしが行かなくちゃ、お姉ちゃんが……」

ふらついて崩れ落ちる夕季を光輔が受け止める。その体は信じられないほど細く、軽かった。

十五歳の少女が氣力と精神力だけで戦っていたことを、光輔は改めて思い知った。

眉間にしわを寄せ、睨みつけるその瞳に光はない。

額に巻かれた包帯の上で、血の色がじわりと広がった。

「無理だよ。これじゃわざわざ死に行くようなものだ」

「そんなのどうだっていい、はなして……」

「駄目だ」

振りほどこうとする夕季の腕を、両側からつかんではなさない光輔。

夕季が泣きそうな顔を向けた。

「じゃあ、どうするの!」

「俺が行くよ」

その言葉の意味が理解できずに夕季が目を丸くする。ほうけたように呟いた。

「光、輔……」

「俺が行くから、おまえはいいちゃんのそばにいてくれよ」

夕季の心が揺れる。すぐに気持ちを持ち直した。

「駄目だ。そんなことしたら、光輔が殺される……」

「いいよ。それでいいちゃんが助かるなら」

「……」

光輔の瞳は真っ直ぐで、青空のように澄んでいた。そこに迷いはない。

「もう嫌なんだよ。自分にとって大切な人達が傷ついていくのに、何もできないで見ていただけなんて。そんなの、嫌だ」

「だからって、あんたが……」

「きつと姉さんもうちゃんも同じことをしたと思う。そんなふうに助けられて自分だけのうのうと生き延びてきたくせに、もし俺に同じことができなかったら、そんなじゃ、これから二人に顔向けできない」

夕季が目を細める。光輔を直視できずに顔を伏せた。白くぼやける視界。

おとなしくなった夕季を解放する光輔。

力が抜けたように夕季がその場にぺたんと座り込んだ。

「それに必ず死ぬとは限らないだろ」夕季を心配させまいと明るく振る舞ってみせる。「何とかうまくやってみるよ」

気遣うように光輔が続けた。

「俺、頭悪いから、桔平さんが言ってたことよくわからないけど、もしここにいるのがおまえやしいちゃんじゃなかったとしても、助けなくちゃいけないと思うんだ。おまえみたいにすぐくないからさ、俺じゃ世界平和なんて絶対無理だけど。でも、自分の手が届くところにいる人間だけは、やっぱり助けたい。死んでほしくない。もちろん、しいちゃんだから、もっとそう思うんだろうけどさ」

「……」

夕季からの反応がない。それを光輔は、うまく伝えられない己自身のせいだと感じていた。

「うまく言えないんだけどさ……」後頭部をぼりぼりとかく。「おまえやしいちゃん可哀想だとか、そんなんじゃないから、勘違いするなよな。俺が勝手にそうするだけなんだから。おまえが気にすることなんて、何もないからさ……」

「……」

「……」

あきらめたように光輔が背中を向ける。

その時、歩き始めた光輔を、夕季の囁くような声が引き止めた。

「……光輔」

足を止め、ゆっくりと振り返る光輔。

顔を上げることなく、夕季がしゃがれた声を押し出した。

「……お姉ちゃんを守って」

「……」

「お願い……」

安心したように光輔がふっと笑う。

「だからさっきからそう言ってるじゃんか」

背中越しに、光輔が小さく手を振ってみせた。

「うまくいったら、また何かおごってくれよな」

第六話 『インブレイス』 5

「ああ、そうだ」吹きすさぶ豪雨の中、病院の外階段で携帯電話を手にする桔平の姿があった。「ああ、そうしてくれ。頼む」

叩きつける雨を見上げ、しかめ面をする。

「ああ。悪いがそっちでサポートしてやってくれ。俺にもまだやらないかならんことがある。あんた達はエスを押さえてくれればいい。奴らがアスモデウスに向かうのなら、それもアリだ。んあ？……。何言ってるんだ？ 二等兵に向かって」

苦笑い。

病院の入り口に目をやる。一つの影がロビーから出て来るところだった。

「やめてくれて、こっちがあんたには頭が上がりねえよ。必ず埋め合わせはするから。……ああ。夕季のことが心配だ。頼むぞ。……ああ、わかった、八時にいつもの店だな。待ってるぜ」にやりとする。「鳳さん」

入り口の人影から目を離さずに鳳との通話を終える。

ふん、と鼻から息をもらした。

「本当にわかりやすい野郎だな」それをまるでわかっていたかのように、桔平はおもしろそうに笑った。「つたく、少しは俺のこと信用しやがれ、クソガキども……」

豪雨の中、光輔が傘もささずに病院を出る。

足を止め振り返った。

深夜の二時を過ぎた建物内からは、薄暗い非常灯の光しか確認できない。

静まり返ったその中では、今も複数の人間達が戦っていた。

手術中の忍と医師達。

そして夕季もまた。

キッと瞳に決意を込める。

横殴りに頬を叩く大粒の雨すらものともせず、光輔はメガルの方角を目指して歩き始めた。

それを待ちかまえていたように一人の男が姿を現す。

木場だった。

通りの角から光輔の姿を認めると、距離を保ったまま尾行を開始した。

「すいません、献血をお願いしたいんですけど」

聞き覚えのある声に、木場がゆっくりと振り返る。

木場は冷徹なまなざしでその男、桔平を睨みつけた。

「おりよ？」わざとおどけてみせる桔平。「何だよ、やけにガタイがいいと思ったらゴリラかよ」

「……」

「まぎらわしいんだ、いっちょ前に服なんか着やがって。ま、いいや、緊急時だ。ゴリラ百パーの血でもちったあ役に立つだろ。おまえの血液型、何だっけか？」にやりと笑った。「ガタガタの不渡手形か？ それとも、進退きわまってカラカラに干からびちゃった、どこぞの干潟ってところか？」

木場の表情は変わらない。

その激情だけを眼前の男にぶつけ続けていた。

街の一角で光輔が足を止める。

その行く手をふさぐように、何人かの人間達が待ち受けていた。光輔にはわかっていた。それが普通の人間ではないことを。

自分に何らかの接触をはかろうとしていることも。

避難勧告が出ているため、他に人影もない。

決断しなければならなかった。

「待ってたぜ、特定危険人物」

中の一人が声をかけてくる。揶揄するような口調だった。

雨で表情までは見えず、まるであそばれているような感覚だった。

光輔は隙を見て逃げ出すつもりでいた。左手の路地まで約二十メートル。足には自信がある。それにこの視界なら、チャンスは充分あるはずだった。

するとその男は意外なことを口にした。

「柊さんの言っていたとおりだな」

ヘルメットを取って顔を見せる。にやっと笑った。

メック・トルーパー隊員、駒田かつみだった。

「まさかメガルまで歩いて行こうってんじゃないだろうな。何キロあると思ってる。今時の高校生は逆算もできないのか？」

「今パイロットが到着しました……」

駒田の後方で別の隊員が通話を始める。

南沢紀之だった。

「はい、指示どおり例の物は確保してあります。……。ええ、別のトレーラーには鳳さんがついていきますよ。……。はい？ 何言ってるんですか。俺達はいつまでもあんたの部下ですよ。たとえば俺達より階級が下になってもね」

光輔はほうけたような顔で駒田達を見続けた。

まだ事情がよく飲み込めていない様子だった。

それを察してか、駒田が近づいて来る。

「安心しろ、我々は君の味方だ」

「……」

「俺達はメックだ。今はメガルの管理下を離れ、自分達の判断で行動している。理由は言わなくてもわかるよな？」

真っ直ぐなまなざし。光輔を以前からの仲間のように受け入れようとしていた。

「おい、エスだ。早くしろ！」

別の声に振り返る二人。

駒田がまた光輔に向き直った。

「そのこのトレーラーに海竜王が積んである。さあ、行ってくれ」
「……。どうして、こんな……」

「君と海竜王を保護するために、このトレーラーを占拠してきた」
「かっぱらってきたんだよ」南沢の合いの手が入る。駒田を親指で指して、あきれたように笑った。「こいつが」

絶句する光輔。

駒田が補足した。

「こうでもしなけりゃ、理不尽がまかり通ってしまうんでな。今のメガルに正義はない。俺達が信じられるのは、ともに命を張った仲間だけだ。夕季達を助けてくれてありがとう」

駒田が手を差し出す。握手を求めている。

それを受ける光輔。

駒田が力強く握り返した。

「君も我々の仲間だ」

信頼するものだけに見せる表情だった。

「さあ、行け。行って俺達の本当の敵を蹴散らしてきてくれ。頼んだぞ」

その想いをくみ取り、光輔が重々しく頷く。

「はい」

すれ違いざま、光輔に声をかける南沢。

「俺達メックは、全力で君のバックアップにあたることを約束する。さあ、パパッと片づけてきてくれよ」涼しげに笑った。「家じゃ小さな子供がパパの帰りを待っているんだ。もう二日も顔を見ていない。気が狂いそうだ」

「おまえはさっきからそればかりだな」

別の隊員のつつこみに、つかの間の笑いがおこる。

つられて光輔も笑った。

隊員達の顔を一人一人眺め、光輔は海竜王へと向かった。

それに笑顔で応えるメック達。

「おい、エスが来たぞ！」

緊張が走る。

エネミー・スパーパーは車両で乗りつけるや、武器をかまえ、駒田達を威嚇し始めた。

「貴様ら、自分達は何をしているのかわかっているのか！」

凄みをきかせるエス。

だがメックはそれに一步も引かなかった。

「貴様らこそいい加減に目を覚ましたらどうだ」エスの面々を見据え、静かに駒田が怒りをぶつける。「おまえ達がしたかったのは、本当にこんなことだったのか」

「……」

「何だと！」桔平から目をそらさずに、木場が部下からの報告を受ける。無線機を握りしめる手がぶるぶると震えていた。「海竜王が……。空竜王もか！」

通信を終了し、ギリギリと桔平を睨みつける。

「おまえのしわざか、柊！」

「俺のしわざだ」にやっと笑った。「ゴリラえもん」

くっとう歯がみする木場。

それをおもしろそうに眺め、桔平は言った。

「いい加減、腹決めろよ。そろそろ、いっぱいいいじゃないかねえか？」

「……」

「さあやろうぜ、木場」桔平がバッグを投げ捨てる。「十五年振りにな」

光輔が海竜王のコクピットに乗り込み、ハッチを閉じる。

シートにもたれかかり、瞳を閉じた。

「行くよ、りょうちゃん」

途端に海竜王の内部が息を吹き返したように光を放ち始めた。

第六話 『インブレイス』 6

病院の前の歩道では、桔平と木場が殴り合いを続けていた。すでに二人ともふらふらだった。

「いい加減につ、目を覚ませっ！」

桔平が振りかぶり左フックをくり出す。木場の顎にパチンとあたった。たいした力はない。それでも木場はそのダメージすら受け止められずよろめいた。

「おまえに何がわかる！」

木場のスローな右ストレート。

桔平のこめかみをかすり、その体をフェンスに叩きつけた。

「わかるわけっ、ねえだろっ……」はあはあと息を切らせ、体当たりをする。「ゴリラえもんの考えることなんてな！」

「その呼び方はやめろ！」

自分より軽い桔平の体重に押され、木場が尻もちをついた。

取っ組み合いになる二人。抱き合うように、上に下に体勢を変え続けた。

「鼻毛出てんぞ、おまえ！ あーもー、最悪！ 史上最低だ！」

「ふざけるな！」

生も根も尽き果て、並んで大の字になって寝転ぶ桔平と木場。

桔平がタバコを取り出し、口にくわえた。

「おい、火い持ってねえか」

「……。俺が吸わんことは知っているだろう」

「だっけか？」へへと笑う。「一年近く、ろくに話もしてなかったんで忘れてたわ」

「……」

「何で右側攻めてこなかった？ 俺の傷がまだ治ってないこと、知

つてたはずだ」

「……。それで勝っても、おまえは認めんだろう」

「たりめえだ。てか、おまえなんぞに負けるか、アホ」

桔平がふいに淋しそうに笑った。

「忍がな」

「……」

「俺に頼んできやがった。おまえを助けてくれてよ」

木場が雨空を見上げる。雨粒が全身に激しく突き刺さっていた。

「夕季のことが心配で、それどころじゃなかったはずなのにな。あいつ、何か勘違いしているんじゃないのか。おまえのことを優しい兄貴か何かだと思ってやがる。こんな救いようのねえゴリラえもんだったのに、あいつはおまえを見捨ててない。見ていて切なかったぜ」

「……。あいつは今……」

「緊急手術中だ。予断を許さない状況らしい」

「そうか……」

「緊急警報が発令されれば、ここにいるすべての奴らが自分達の仕事を放棄して逃げ出す。それは責められるようなことじゃない。余計な被害者を出さないためにも、そうしなければならぬからな」

「……当然だ」

「彼らはそれをしないだろうがな」

「……。どういうことだ？」

「俺が頼んだ。あんた達の安全を保障するかわりに、最後まで手術してやってってくれって」

「貴様！」木場が顔を上げる。目をつり上げ、桔平を睨みつけた。

「何をしている！ そんなことをして責任がとれるのか！」

「ま、そんな必要なかったわけだが」

「……」

「あの人らは最初からそのつもりだった。逆に怒られちゃったよ。目の前で苦しんでいる人間がいるのに放っておけるか、だってよ」

桔平の瞳が暗い空に吸い込まれていった。「何でも、かけがえのない命を見捨てて、逃げ出すことはできないそうだ。ケガ人の雨あられで、ろくに寝る間もねえだろうによ。医者なんてみな、ごうつくばりのクソジジイばかりだと思ってたが、いるんだな、あんな猛者どもも」

木場の心に楔が打ちつけられる。その体のどのダメージよりも強烈だった。

「患者や他の人間達は昨日から避難しっぱなしだ。もちろん、いざとなったら手術室にいる奴らも俺が退避させる。何て言うかは知らんが、忍がそれを望まないだろうからな」

「……おまえ一人で何ができる」

「一人じゃない」

「……」

「光輔がいる」

「穂村光輔か！」木場が重い体を起こす。「奴が何故……」

「何故もクソもねえ」伸びをしながら桔平も起き上がった。「忍や夕季が苦しんでいるのを黙って見てられねえんだろ」

「だが、奴は……」

「そんなことは百も承知だ」涼しげなまなざし。遠くを見つめ、口もとに笑みをたたえた。「昨日もそうだ。あいつは自分が死ぬことなんて何とも思っていない。もっと大事なものがあるらしい。おまえらなんて、はなから眼中にないんだ」

「……」

「人を殺すのに覚悟はいらねえ。一本ネジがぶっ飛んでりや、その辺のコゾウにだってできる。だが、自分が殺されるのを覚悟できる人間には滅多に行き会えねえ。俺が知っている限りじゃ、おまえくらいだ」

「……おまえも、じゃないのか」

「ふざけろ！俺はてめえと違ってやりたいことが山ほどあるんだ。死んでたまるか！」

「……」

「木場。心を偽るのはやめろ」

真剣な口調の桔平に木場が顔を向ける。

「あいつらが必死になって守ろうとしているものを、誰よりも失いたくないのは、おまえの方なんじゃないのか」

木場が拳を握りしめた。固く固く、その拳の中に何かを封じ込めるように。

大荒れの海から激しい波が打ち寄せる。

それは海岸に乗り上げ、人の姿を形作った。

濡れた山の斜面から、黒い人影が浮き上がる。

その集団は一つの大きな塊となって、人影途絶えた街を目指し進軍を開始した。

「何、黒インプもだど！」携帯電話を手にし、鳳順一郎が大声を張り上げる。「青だけじゃないのか。……。よしわかった。ただちに向かう。何が何でも街への侵入は阻止しろ！」

通話を終え、後方のトレーラーを見上げた。

そこには空竜王の姿があった。

「もう引き返せん。おまえも、俺達も……」

鳳が不敵な笑みを浮かべた。

「おいおい、何て数だよ……」

雨で濡れてぐしゃぐしゃになったタバコを口にくわえたまま、桔平が呟く。

「絶望的なんじゃねえか？ こいつあああ……」

その言葉とは裏腹に、表情は歓喜に満ちていた。にやりと笑う。

「行くぞ、木場」

病院を背負い木場が重々しく頷いた。

「ああ、きつ……、終」

「……」桔平がため息をつく。「木場、エスをやめろ。したら、ま

た前みたいに呼ばせてやる」

「それはできん」

「なら仕方がないな。いいな、木場、ここが俺達の砦だ」
「おう！」

「ここから先はゴリラの子一匹通さねえ」

「……。それは俺のことか？」

「そうだ！ 行くぞ、ゴリラえもん！」

「うがあっ！」

仰々しい武器を全身に携え、二人が土色のインプに挑みかかった。

第六話 『インブレイス』 6 (後書き)

夏真っ盛りにこのような暑苦しいものを……。恐縮です。

第六話 『インブレイス』 7

両足を大きく広げ、桔平がスタンドに固定した大型機銃を水平になく。

端から黒インプの赤いコアが、水風船のように次々と弾け散っていった。

弾頭の一部にオリハルコンが練り込まれた特殊実包は、触れるだけで人外の魔物すら消し飛ばした。

「おまえらには借りがある。一匹残らず、木っ端だ！ ……。と、げっ！」

弾切れを起こし、桔平の顔が青ざめる。

払えど払えど、際限なくインプは湧き出るようだった。

「だー！ キリがねえ！」

「どけ、桔平！」

弾薬を補充する桔平を押しわけ、パームバズーカを肩に担いで木場がインプの前に立ちはだかった。

高らかな発射音とともに射出されたプラズマ砲弾は、インプの群れの頭上で弾け、激しい光の放射をともないながら十体以上の魔物を瞬時に蒸発させた。

「……反則だろ」桔平が不愉快そうに顔をゆがめる。「パキュン、パキュン、いい音させやがって。おい、俺達にもそいつまわせ！」
「俺の一存じゃどうにもならん。どうしても言うなら、進藤に頼め」

「それはゴメンだ！」

「ならあきらめろ」

「それもゴメンだ！」

「勝手にしろ！」

「勝手にパクる……、おわっ！」

プラズマ砲弾の連射がインプの黒い塊に大穴を穿った。

刺し込むような雨の中、ゆらゆらとうごめく青く透き通った巨人を蹴散らし、メック・トルーパー隊長、鳳が味方を鼓舞する。

「いいか！ ガキどもが足に根っこ張ってふんばってるのに、こっちの腰が引けてちゃ話にならん。一生に一度、死にもの狂いで何かをしなければならんことがあるとすれば、それが今だ！ 助かるうなんて甘い考えは捨てろ！ 死ぬぞ！」

「わかってらあ！」サブマシンガンの乱射で青インプをなぎ払い、駒田がわめき散らす。「そんなことは百も承知だ！」

「死んでもいいなんてのも駄目だ！ 死ぬぞ！」

「どっちだよ！」

「気合だ！ 気合で倒せ！ 生きのびろ！」

「結局、気合かよ、オッサン……」

鳳が振り返る。

まばたきすら放棄してしまったように、エネミー・スリーパーの隊員達が立ちつくしていた。

「おまえら、そこでずっと突っ立っているつもりか？」

何も返らない。

鳳が中央にいる一人に顔を向けた。

「大沼」

名を呼ばれた隊員が表情もなく鳳を見つめ返す。

「……。我々は木場隊長からの指示待ちで……」

「木場ならとっくに参戦している。おまえ達がどうするかは、個々の判断にゆだねさせろ、と奴から連絡があった。信じられなきゃ直接聞いてみる。尾藤は現状維持だそうだ。おまえはどうする？ 副隊長代行」

「……」微塵にも表情を変えないことなく、大沼が静かに告げた。「これより我々はメック・トルーパーと行動をとにもする。不服のあ

る者は申し出て尾藤隊に合流しろ。責任はすべて俺が……」

「責任は俺がとる！」

「……」

鳳がにやりと笑った。

「ついて来い」

「了解！」

「おい、動けるか、きつぺい」

フェンスにもたれかかり、木場が顔を横に向けた。

「ああ、何とかな」サブマシンガンをそれぞれの手に持ったまま路上に横たわる。「口だけはな」

「一番なくなればいいものだけが残ったな」木場がふっと笑った。

「俺もだ」

それを桔平は淋しそうに眺めていた。

「……。鼻毛か？」

「……。いや」

街中いたるところで戦闘がくりひろげられていた。

メックもエスもなく、ただインプの殲滅に奔走する。

砂だらけとなった病院の周辺からは、インプの反応はなくなっていた。

すでに嵐は過ぎ去り、流れる雲の合い間から月明かりがこぼれ始めていた。

「いいのか。エスまで動かしちゃって」

「……。あいつらは最初からそうしたがっていた。俺が無理やり抑えていただけだ」

「そうじゃねえだろ」あきれたように言う。「あさみがほっとかねえぞ」

「ああ」覚悟したような笑い。「殺されるかもな」

複雑な表情で木場を見続ける桔平。昔を思い返すように目を閉じた。

「！」木場が何かに気づき、身を乗り出す。「来たぞ……」

木場の声に慌てて起き上がる桔平。

「アスモデウスか」

「ああ……」

立ち上がる木場。パームバズーカを手に取り、走り出した。

「おい、待て、木場！ おい！」

桔平の声も耳に届かなかった。

透明なインプの大群の前にエネミー・スイーパーが二の足を踏む。
「バカヤロウ！ そんなへっぴり腰で何ができる！」駒田が咆哮し、サブマシンガンでインプの頭を弾き飛ばした。「隊長が腰抜けなら、隊員も隊員だな」

「何だと！」エスの一人が瞳に炎を宿し前進する。「俺達は何を言われてもかまわない。だが隊長を侮辱することだけは許さん！」

怒りのフルオート。

数体のインプが海水となり、粉々に砕け散った。

「やるじゃねえか。……おわっ！」

駒田の眼前を黒い疾風がかすめて行く。

海竜王だった。

海竜王は黄色い両眼を爛々と光らせ、残りのインプ達を次々と撃破していった。

駒田がにやりと笑った。

「頼もしいね、相棒」

木場は自ら囀となり敵を引きつけることで、アスモデウスを少しでも病院から遠ざけるつもりだった。

たとえ命を落とすことになろうとも。

遠距離からプラズマ砲弾を見舞う。

辺り一面を強烈に照らす暴力的なスパークに気づき、アスモデウスが方向転換した。

凶悪な顔を木場に向け、襲いかかる巨大な魔獣。

「そうか……」木場が自分自身に言い聞かせるように呟いた。「おまえはこんなバケモノに一人で挑んでいったのか。たった一人で……」

忍の顔が脳裏に浮かぶ。苦しそうな顔。つらそうな顔。悲しそうな顔。そして笑顔。

パームバズーカを連射する木場。

それはアスモデウスを脅かせるものではない。だが怒りを一手に請け負うには充分すぎた。

全弾撃ちつくし、自らの目的を果たしたかのように木場がバズーカを降ろす。

疲弊しガクガクと痙攣する両足を気力だけで大地に突き立て、目の前の敵すら映さないその瞳を静かに閉ざした。

忍の笑顔が他の娘のそれに重なった。

忍と同じ年頃の、別の誰か。

「杏子……」

運命を受け入れようとする木場。

アスモデウスが槍を振りかざす。

だが、アスモデウスの凶刃は木場には届くことはなかった。

木場がゆるやかに瞼を開く。

視界に飛び込んできたのは、のけぞるように天を仰ぎ見るアスモデウスの姿だった。

狂猛な殺気をほとばしらせ、アスモデウスが振り返る。

その背中越しに木場は見た。

強大な敵の前で一步も退くことなく立ち向かう、揺るぎのない海竜王の雄姿を。

「！」目も口も閉じられず、眼前の光に心を奪われる木場。「……穂村、光輔」

第六話 『インブレイス』 8

薄闇の中、光輔はアスモデウスと対峙していた。

昨日のダメージは回復しておらず、竜も羊も蛇も、そして忌々しい盾となる左腕も消滅したままである。

これが最後であるような気がしていた。

結果はどうであれ、これで最後だと。

光輔が心を決め、頷く。

「行こう、りょうちゃん」

海竜王の内部がさらに光を増した。

はるか頭上から振り下ろされる長槍を、紙一重で海竜王がかわす。光輔の試みた攻撃は、すべてアスモデウスの右手の槍によつてはね返されていた。

すそからの圧縮空気の噴出で、滑るように敵の攻撃をかいくぐる海竜王。

そのリーチの長さに苦戦し、なかなか懐へもぐり込めずにいた。ハッチの裏面に映し出されるアスモデウスを光輔が睨みつける。視線が合致した。

その狂猛なまなざしは、際限なく押し寄せる波のように光輔を圧倒した。

わずかなためらいが光輔の心にすきを作る。

追いつめられ逃げ込んだ場所に、すべてを凌駕する未曾有の雷撃が迫りつつあった。

キラリと光る尖端に、己の姿が映りこむのを光輔は確認した。

「くそ！」

コクピットの中で歯がみする光輔。

両腕の爪を交差させ、大地をも砕かんとする一撃に備えた。

その刹那。

光輔の視界を白煙と噴霧が覆いつくす。

メック・トルーパーの放った滑腔砲の一斉砲撃が、アスモデウスに襲いかかったのだ。

振り返る海竜王。

今度は背後から大出力の光源が、辺り一面を白昼の世界へと変貌させた。

エネミー・スニーパーによるプラズマ砲弾の乱れ撃ちだった。

「ロケット弾の準備はいいかー！」

「おうよ！」

鳳に顔を向ける駒田。

「よし、駒田、いけっ！」

「おうよー！」

駒田の合図で、何百発もの特殊ロケット弾が、続けざまにアスモデウスの外殻に吸い込まれていく。弾頭に仕込まれた強酸性の溶解液は、その外皮を這うように広がるや化学反応を起こし、周辺を瞬く間に真っ白に染め上げた。

ギイエエエエーッ！

煙幕にまかれるように、海竜王の姿を見失うアスモデウス。

ギョロギョロと周囲を見渡し、振り返った白もやの中に一對の光を認めた。

分厚い白煙の壁を割って現れた漆黒の破壊者の強襲に、アスモデウスの巨体が弾け飛ぶ。

海竜王の放った浴びせ蹴りが、鋼をも砕き折る硬質の踵が、仮面の傷口に楔となってえぐり込まれたのだ。

ギギギギ……

歯車のきしんだようなノイズを撒き散らし、ゆるやかにアスモデウスが立ち上がる。

その間合いに、海竜王の艶めく体躯があった。

腹部の傷目がけて射出した左腕の爪は、振り払おうとした槍の先

端に巻きついた。

再びアスモデウスが海竜王を見失う。

爪を撃ち放つと同時に、海竜王はアスモデウスの頭上高く跳び上がっていた。大きく振りかぶり、他方の腕で右側の牛の首を貫く。

グググググエエエーッ！

苦しそうに白目を剥き、牛の口から巨大なナメクジのような舌が飛び出した。

海竜王はアスモデウスの肩に乗り、さらに爪をえぐり込んだ。

ググググググエエエッ！

舌を出したままぐったりする牛の首。

すると、光輔を振り払おうと躍起になっていた槍が、右肩から腐り落ちていった。

「やった！」目を輝かせ躍り上がる南沢。

そのすぐそばで木場が自分の部下達に介抱されていた。

鳳が振り返る。

「よし、手をゆるめるな。次の攻撃準備だ！」

「了解」

「エスは引き続き両翼から攪乱を続けろ」

『了解！』

空中で一回転し、アスモデウスの背後に降り立つ海竜王。キラリと目を輝かせた。

うつすらと空が白け始める。

決着の時間がせまっていた。

巨大な黒い羽をはためかせ、敵を吹き飛ばそうとするアスモデウス。

しかし、生命としての終焉が確実に近づいた現状では、海竜王を脅かすほどの力は持ち合わせなかった。

「おまえなんかに、おまえみたいな奴に」感圧式の操縦桿を握りしめ、光輔が咆哮する。「俺達が負けるものかあああーっ！」

跳躍する海竜王。

炎をかいくぐり、何も守るものがなくなったアスモデウスの仮面の額に爪を突き刺した。正面から抱きつくように左手で後頭部を押さえ、両足をガッチリと首にからめる。突き立てた右腕を真っ直ぐに伸ばし、下腕に左手を添えた。

仮面の口がクワと広がる。業火を吐き出す前の予備動作だった。海竜王の黒い外殻が艶やかに波打つ。

「てええええーいっ！」

絶叫、そして一閃。

コクピット内で光輔が激情を迸らせると同時に、海竜王は仰け反るようなその体勢から、貫けとばかりに銀色の長爪を射出した。

仮面の傷口から後頭部に銀色の爪が突き抜ける。

仮面が粉々に砕け、内側から押し出されるエネルギーの激しいハレーションが、辺り一面を白く照らした。

一瞬の沈黙。

その直後、断末魔の悲鳴をあげることもなく、アスモデウスは背中から倒れ込んでいく。

微塵にも動く気配を見せず、アスモデウスはじわじわと巨体のすべてを大地に埋めていった。

おとずれる静粛。

一拍置き、湧き立つ歓喜の波は、その反動の大きさを物語っていた。

「やった！ 勝ったぞ！」

「俺達の勝ちだ！」

「勝った、勝った！」

メック・トルーパーもエネミー・スーパーもない。みな高らかに笑い、勝利の抱擁を交わしていた。

「これで家に帰れるぞ！」

「おまえはそればかりだな」

その様子を木場は表情もなく眺め続けていた。全力を使い果たしたかのように立ちつくす、海竜王をゆるやかに見上げる。

「わかるか木場」

木場が振り返る。

穏やかな鳳の笑顔があった。

「どんなところにだって希望はある。おまえがそれを拒まなければな」

「……」

手術室から看護師が走り寄る。

夕季にさしせまった顔を向けた。

「ご家族の方はいらっしゃいますか？」

「……はい」

「輸血用の血液が足りません。誰か血液を提供していただける方はいらっしゃいませんか。連日の騒動で在庫が不十分な上、補充用の車が遠方で足止めされているようで……」

「私から採ってください」ずり落ちた包帯をむしり取り、夕季が懸命に訴えかける。「全部採ってもいいから……」

「そんな体で採血したら本当に死んでしまうぞ」

野太い声に夕季が振り返る。

山のような大男が、ぬうっと姿を現した。

木場だった。

「木場……」

口を結び、戸惑うように見続ける夕季にちらりと目をやり、木場は傷だらけの体を看護師の前に差し出した。

「私の血を使ってください。彼女と同じはずです……」

静かな口調で言う。その目は遙か遠くを見据えていた。

第六話 『インブレイス』 8 (後書き)

戦闘シーンって難しいです。継ぎ足して、継ぎ足して、削って、こねくりまわして、ひっくり返して、で、またもどおり、とか……。すぐ前の行に同じ表現を使っているのに、何度読み返しても気づかなかったりもします。おかしいところがあったら、ご指摘お願いします。

第六話 『インブレイス』 9

もやの立ち込めるバス停で、忍は時が来るのをただ待ち続けた。

じきに始発の時刻となる。

そのバスに乗り、忍はこの場所から遠く離れるつもりだった。誰と関わることなく、一人でいることを望んだからだ。

もう二度と振り返ることもなくなる、濃霧につつまれた街を見渡す。

閑散とした道路上では、信号機の淡い光だけが何度も切りかわっていた。そこに生き物や、人々の生活の匂いは感じられず、他に誰の姿もない停留所は、そのまま異世界へと己をいざなうのではと思わせた。

後悔はない。ここですべきことは、すべてやりとげた。あとはみなの記憶から自分が消えるのを待つだけなのだ。

淋しさ。

それを口にする資格は自分にはないはずだと、忍は強く感じていた。淋しい想いをさせてしまったのは、むしろ自分の方なのだから。それでも、心の中にしこりのように残る、白けたもやを否定することはできなかった。

忍が目を伏せた。

己を戒め、責めたてながら。

霧の中から徐々に白い車両の表情が浮き上がる。それは忍の前で音もなく停止し、いざなうように乗降用の扉を開いた。

顔を上げ、決別のまなざしで忍がステップに足をかけようとした。その時、何かが袖に触れた。

ささいな力ではあったが、それは忍を引き止めようとしているよ

うだった。

振り返る。

そこには目に涙をため、口もとを固く結んだ、幼い夕季の姿があった。

「夕季」

夕季の視線まで忍が腰を落とす。穏やかに微笑みかけ、諭すようにそれを口にした。

「手を離して。いい子だから」

まばたきもせず、睨みつけるように夕季が忍を見つめ続ける。

「ごめんね、夕季。お姉ちゃん、行かなくちゃいけないの。わかって」

口をへの字に曲げ、懇願するように夕季が激しく首を振った。

小さな手がさらに強く忍の服をつかむ。やがて唇がわなわなと震え出し、ぼろぼろと大粒の涙を流し始めた。それでも、忍の体をぎゅっとつかんだまま、決して離そうとはしなかった。

「夕季……」

忍の眉が揺れる。

瞳からこぼれ落ちる、封じ込めたはずの感情。夕季を強く抱きしめ、その名を呼び続けた。

「夕季、夕季、夕季……」

ゆるやかにバスの扉が閉まる。そして、音もなく霧の中へと消え去っていった。

忍はいつまでも夕季を抱きしめていた。

この上もなくいとおしい者への想いを、二度と離さないことを心に刻みつけて。

カーテンの隙間から差し込む光の暖かさに、忍は目を覚ました。

己のおかれた状況が理解できず、しばし考えをめぐらせる。

そして、死を覚悟した自分が、今こうしてここにあることによりやく気づいた。

病室のベッドの中、陽の眩しさに目を細める。
生きている証として。

「……」

視線を変えると、ベッドの横で自分に抱きつくように眠っている
夕季の顔を確認できた。

疲れきった寝顔。

しかし、苦しみから解放されたその表情は以前よりも安らかに見
えた。泣き疲れ、眠ってしまった迷い子のように。

忍が手をさしのべ、夕季の頭を優しく撫でる。壊さないように、
つつみ込むように、ひたすらいとおしげにそれを繰り返した。

目を覚ます夕季。

ゆっくりと目線でたどっていくと、穏やかなまなざしで自分を眺
めている忍の顔を認め、放心したように口もとを震わせた。

「……お姉ちゃん……」

夕季を見つめ、力なく忍が微笑む。

じわりと瞳を潤ませ、夕季の表情がとけていく。涙を流し、誰は
ばかりことなくその肢体に抱きついた。

「お姉ちゃん！ お姉ちゃん！ お姉ちゃん……」

見守るように、静かではあるが嬉しそうに忍が頷いた。込み上げ
る想いに押され、忘れ去られた感情が頬を伝いこぼれ落ちる。

忍は何も言わずに夕季の頭を撫で続けた。

いとおしそうに、いつまでも、いつまでも。

了

第六話 『インブレイス』 9 (後書き)

読んでいただきまして、ありがとうございます。だらだらと地味に続けていくつもりです。よろしかったら、これからまたのぞいてやって下さい。謝々。

第七話 『伝えられない言葉』 OP

木場雄一は墓石の前で立ちつくしていた。

石には木場杏子の文字と、一年前の日付が刻みつけられている。

目を閉じる木場。

妹、杏子の笑顔が浮かんでは消えた。

最後に聞いた杏子の言葉を思い返す。

その時、何者かの気配に気づき、木場が振り返った。

その顔を確認し、目を細める。

「尾藤……」

「あれから、一年経つんですね」

木場と同年代の青年が杏子の墓前に花を添える。手を合わせ立ち上がると、決意の表情を向けた。

「もう来なくてもいいんだぞ」

「木場さん」力強いまなざしだった。「この世からいなくなったとしても、杏子はいつまでも僕の中で生き続けています。今もここにいます」

尾藤秀作は胸に手を当て、木場に笑いかけた。

「木場さんこそ、もうおやめになった方がよろしいではありませんせんか。これ以上こんなことにあなたを……」

「貴様はどうなんだ」

「……。僕の気持ちは変わりませんよ。たとえ一人になったとしても、必ずやりとげてみせます。それが杏子の望まないものだとしても」

「……」

木場が尾藤から顔をそむけ、もう一度妹杏子の墓を眺める。

背中から尾藤の声が追いかけてきた。

「どうやら、余計な進言をしてしまったようですね。あなたの決意は僕のそれよりはるかに固い。ともに、杏子の無念を晴らしましょう。きっとそれが、多くの人達の幸せにつながるはずですから」

その言葉に木場が反応する。

杏子の笑顔が浮かんだ。

最後の言葉を思い出す。

『必ず幸せになるからね』

杏子の青白い顔が、脳裏から離れなかった。二度と微笑むこともない、永久に瞼を閉ざしたその顔。

『必ず幸せに……』

「俺達から杏子を奪ったメガルを、この手で消し去ってやりましょう。必ず……」

木場の瞳から炎が立ち上がった。

めらめらと燃え上がる、血にまみれた真紅の炎が。

第七話 『伝えられない言葉』 1

会議室の最後部に鳳の姿があった。

コの字型に並べられた机の正面に火刈聖宜が腰を下ろしている。

鳳野の姿はそこになかった。

メガル幹部陣がずらりと顔を並べた審議の場で、鳳は緊張を隠せない様子だった。

「もう一度、今言ったことを繰り返して述べてくれ、鳳主任」

ぞんざいに見下され、鳳は直立不動の姿勢で再度それを口にした。

「はい。誠に勝手ではありますが、敵の襲撃パターンが予測できない状況ならば、再度の襲来に備えてメック・トルーパーの柔軟な対応と、空竜王の速やかな運用が不可欠だと考えました」

「それで空竜王を黙って持ち出したというのか？」

「はい。有事に備え、常に古閑夕季の手の届く場所に空竜王を配置するのが最良かと……」

「それが何故君達の独断行動につながる！」

別の幹部が拳で机を叩く。

「何故、報告もなく、申し立てもなく、勝手な行動に走った！ それこそが問題だ。結果がよければ許されると思っているなら大間違いだ！」

鳳が無然とした表情でその男を眺める。

鳳より十才以上も若い、政府から派遣されてきた人間だった。一流大学を優秀な成績で卒業し、合格率の低い国家試験をパスして、国を動かす人間の一人となった。工業高校を卒業後、即自衛隊に入隊した鳳とはまるで歩み寄る場所がなかった。

「お言葉ですが」じろりと睨めつける。「現場の判断と本部の意見に食い違いが多く見られます。我々の報告を有効に活用していただ

けているものとは、到底思えません」

「それがどうした！」また机を叩く。「貴様達にはそんな権限はないはずだ。越権行為だぞ！ 貴様らは我々の下した判断に黙って従っていればいい！ 貴様達がそんなだから、我々もそちらを信用できないということが何故わからない！」

「しかし……」

「何が正しい、何が間違っているという問題ではない！ 厳密なルールが存在する以上、正式な経緯もなくそれが覆ることは、組織のあり方を根底から否定するということだ。誰もが歩調を合わせることなく、己の倫理や正義感を振り回すことがまかり通るのなら、この世の犯罪行為はすべて肯定されることになる！」

正論を押しつけられ鳳が退く。

「……おっしゃるとおりです。申し訳ありませんでした。今後このようなことがなきよう、肝にめいじます」

「それですむとも思っているのか！」

「まあまあ……」

いきり立つ部下をなだめにかかる火刈。鳳に含むような笑みを向けた。

「彼も悪気があってやったことではない。あくまでも危機的な状況を憂慮し、よかれと判断して行ったことだ。我々に責めたてられることを承知でな。違うか？ 鳳主任」

「……そのとおりです」

「しかし、だからと言って、それを許せば組織としての示しがつきません！ それどころかさらに増長し……」

「君の危惧はわかった。だが今回は、彼の判断が正しかったものと言わざるをえない」

「しかし、それでは……」

「メックの迅速な対応によって被害を最小限に抑えることができた。当局からも感謝の一報が届いている。我々優秀なブレインと、それに頼らず独自に最良の選択を模索し続ける現場の人間。これこそが

メガルが世界に誇るマンパワーだ」

火刈に言いくるめられ、拳の行き場を失う男。

火刈は満足そうに頷いて鳳に向き直った。

「しかし報告がないのはまずかったな。いくら優れた判断であろうと、我々の預かり知らぬところでは、行き詰まった状況をフォローすることもできない。以後気をつけてほしい」

「……はい。申し訳ありません」

ふっと笑う火刈。

「もう一つ確認したいのだが」

「はい。何でしょう」

「空竜王はいい。何故操縦者もない海竜王まで持ち出したのだ」

鳳の目が据わる。

それに対する答えはすでに用意してあった。

「海竜王が単体で動くことを知っていたからです」

会議室全体がどよめき始める。

「パイロットがおらずとも、海竜王が単体で行動する場面を我々は目の当たりにしました。終主任の報告は正直信じがたいものでした。ですが、実際それを目の前で見てしまったら、信じざるをえません。事実、一度ならず二度までも、我々はそれを確認しています」

火刈の近くの人間が小声で告げる。

「メックやエス、そこに合わせた人間のほとんどが同じ報告書を提出しています」

火刈がちらと目線をやる。

「つまりは、海竜王は操縦者がいなくても単体でプログラムに対抗しうると、そう言いたいのか？」

「はい」

鳳と火刈が睨み合う。それぞれの思惑を胸に抱きながら。

「ちくしょー！」

メック待機室近くの通路で駒田が壁を蹴飛ばす。

「減給六ヶ月だと！ ふざけやがって！」

その横で南沢が暗い顔を向ける。

「おまえはいい。俺は所帯持ちだぞ」げんなり。「今だってボーナスでぎりぎり赤字補てんしているってのに……」

「バカ野郎！ 俺だって先月クルマを買い替えたばかりだぞ。いとしのブラロン号……」頭をかきむしった。「またカップラーメン生活だ」

「しかし何で俺達だけなんだろうな？」

「仕方ないだろ。エスは司令のお気に入りなんだ。ま、今回はなりゆきっぽいところもあったからな」

「ふんまんやるかたない……」

通路の向こうに駒田が見知った顔を認める。大声で呼びかけた。

「おーい、黒崎」

駒田に顔を向ける黒崎。ぺこりと頭を下げ、近づいて来た。

「結構やるじゃねえか、おまえらも。見直したぜ」

迷彩模様の戦闘服を着た、駒田達よりやや若い隊員は、申し訳なさそうにうつむいた。

前回の戦闘で駒田の咆哮に発奮した隊員だった。

「おまえが気をつかうことはねえよ。あれは俺達が勝手にやったことだ。エスにはエスの事情があるんだろうからな」

「……」

「なあ、黒崎」南沢が参入する。「おまえら、エスを辞めてこっちにこれないのか」

「それはできません」

即答する黒崎に迷いはない。

それは駒田も南沢もわかっていたことだった。

「俺達は木場さんがいる限りエスを辞めない」

抑揚のない声に振り返る三人。

目つきの鋭い隊員が顔を向けていた。

「大沼、さん……」駒田が呟いた。

大沼と呼ばれる隊員は少しだけ表情を曇らせると、黒崎を連れ、通り過ぎようとした。

「おまえ達にもわかってるはずだ……」

二人には大沼の背中が泣いているように見えた。

「貴様ら何をしている」

静かなる怒号に振り返る四人。

駒田と南沢が怪訝そうな表情になった。

「これからミーティングだ。早く集合しろ」

事務的にそう告げるとその男、尾藤は背中を向けて立ち去って行った。

そこに駒田達がいたことなどまるで気にもとめない様子で。

第七話 『伝えられない言葉』 1 (後書き)

かなり地味な内容になってしまいました。

ガン〇ムで言うところのアムロがお母さんに会いに行く回。エヴァンゲリオンで言えばジェットアローンの回というところです。それなりに意味をもたせたつもりなので、いわゆるボトルショーというたぐいではありませんが、華やかさは皆無ですね。我慢して読んでやって下さい。

第七話 『伝えられない言葉』 2

光輔とみずきは並んで駅までの並木道を歩いていた。

アスモデウスの度重なる襲撃は、主に沿岸地域に集中していた。

そのため沿岸の地区から街の中心部にかけては復興でかなり慌しかったが、山側に近い山凌学園の周辺は嘘のように平穏だった。

通りの屋台に立ち寄る二人。

看板には『おぼちゃんのうすうすロールケーキ』と書かれてある。薄く焼いたシフォンケーキをクレープのように巻き上げ、フルーツやチョコレートなどをトッピングしたものだった。

みずきが光輔に一つを手渡す。

「サンキュー、篠原」

「どっちが？ ごちそうさまです、穂村君」

満面の笑みでかぶりつくみずき。ツーテールが潮風に揺れた。

プップクプッププウー！

下品なクラクションに光輔が振り返る。

県道沿いの歩道に横づけされた、四輪駆動車の左側のウィンドウが下りると、見覚えのある下品な顔が現れた。

「おいゝす！ 光輔」

「桔平、さん……」

「元気がねえぞ。もう一回だ。おいゝす！」

「お、おいゝす……」

「そこのお姉ちゃんも、おいゝす！」

「……」

「……。あのな、光輔、レー何とかで今、ケーキバイキングやってんだけど行かねえか？」

「行きませんよ！」

桔平が悲しそうに眉を寄せる。冗談だと思って流した光輔が軽く引いた。

みずきが光輔の後ろにこそっと隠れた。

「あ、篠原。この人、りょうちゃんの先輩」

「……こんにちは」

「おう」光輔に向き直り、いやらしく笑った。「かわいい娘だな。おまえの彼女か」

顔を赤らめるみずき。

光輔が慌てて否定した。

「違うって、桔平さん。変なこと言わないでくださいよ!」

光輔の後方で、みずきが少しだけ淋しそうな顔をする。

それに気づき、桔平があきれたように嘆息した。

「いい人なんだけど、基本的にすごく変な人だから」

「おいおい、そういうこと言う時は、普通いい方を後から持つてくべきだろ。それじゃ、基本的に、から先のことしか印象に残らねえだろっ。せっかくイケメンなのになあ!」

「そうすか?」

「あはは……」

「なっ、お嬢さん」

みずきの愛想笑いを拾い上げ、桔平が両目でウィンクした。

光輔の顔を見上げ、みずきが目を見開く。

「ほんとだ〜! 変な人かも!」

「いやいや、あいな……」

「イケメンじゃないしね〜」

「ううん……」

「イケメンとかって言われても、なんだか今さらって感じだし」

「今さら……」

光輔は困ったような表情で二人を交互に眺めるだけだった。

「……」予期せぬダメージにテンションを奪われる桔平。ふいにくわと目を見開いた。「おい、何だ、そりゃ?」

「……はい？」

「おまえが手に持つとるモンだ」

「ああ……」退きながら、ケーキと桔平を見比べる。「おぼちゃん
のうすうすロールケーキですけど……」

「何だと！ おぼちゃんのうすうすロールケーキだあ！」険しい表情で光輔を睨みつけた。「激的な感じじゃねえか！」

「劇的って……。ははっ、食べます？」

「食べます、じゃねえだろ。当然食うだろ。流れる的に。何わけわからんこと言ってるんだ、おまえは！」

「ははっ……」

「お嬢さん、すまない。俺の分も買ってきてくれないか」みずきに
振り返り、桔平が千円札を二枚差し出した。「三つだ」

「はい」顎を引きながら、みずきがそれを受け取る。

「桔平さん、俺ら、もういりませんよ」

「バカ野郎！」光輔を睨みつけた。「俺が三つ食うんだ。俺が！
一人で、三つっ！ おーれーがっ！」

「はい、わかりました……」

くすっ、とみずきが笑った。

それを好意的に受け取る桔平。

「できれば違う種類のを買ってきてくれ。チョイスはキュートな彼女
におまかせする」

「桔平さん、あのね……」

「もう一つ買えたら、おみやげに家に持って帰るといい」またもや
両目でウインク。「俺からのハッピーなプレゼントだ」

「はあ、いい、わかりましたあ」

ぷっと笑い、楽しそうにみずきがロールケーキを買いに向かう。
その様子を眺めながら、桔平はおもしろそうに笑ってみせた。

「いい娘だな。大事にしるよ」

「あのね……」光輔がため息をつく。「本当にそんなじゃないんだって。
篠原と俺は別に……」

「おまえはなんでそんなに、バランスがアンポンなんだ？」

「……」

「突然正義のヒーローになったかと思えば、私生活の駄目駄目ボーイぶりは、もはや致命的だな」

「……何すか、それ？」わけがわからずむくれる光輔。

「本当、よく似てるよ。陵太郎にな」

「……」

海岸沿いに車を走らせながら、桔平は光輔にことの顛末を説明していた。

「……とまあ、こんな感じだな」紙くずを丸め、後部座席に放る。すかさず二つ目に手をつけた。「今回の手柄はなんもかも、全部自衛隊がかつさらっていった。ま、その方が俺達にとっても都合が いいわけだがな。ちなみにおまえは、体育館でみんなと一緒に体操座りしてたことになってる」

「はは……」

「安心しろ、誰もおまえのことはしゃべっていない。監視カメラの記録も修正済みだ」

「そうですか」

「みんなで決めたことだ。おまえに迷惑かけたくないってよ。ま、本音は仲間として迎えたがってるみたいだがな……。く、何てことだ！」険しい表情で、くわと目を見開く。「うめえな、チョコバナナ！ ほった落ちちまうじゃねえか！ 俺を殺す気か！ 美味しい殺す気か！ おい、美味しい殺すって何だ、そりゃ。あつははは！」

「……」

「くそっ、おっせえ車だな。早く行けて。……くどいようだが、メガルには近づくなよ。メガルに関係するものすべてにだ。それが俺達にできる限界だ。……お、睨まれちまった」

「わかってますよ……」

光輔が淋しそうな顔をする。

それを気にかける桔平の表情も冴えなかった。やりきれない様子でロールケーキをもくもくと口に運ぶ。

「……」突然、想いが込み上げた。「何じゃ、こりゃああっ！ ヤベえ！ ストロベリー、激ヤバだ！ ウメえもたいがいにしとけ！ ははあゝん。さてはソ連の新兵器か！ あのねー！ ソ連って、おい！」

「……。テンション、高いすね」

「おうよ！ 俺はいつだって前のめりだ！」

「……それ、意味わかんないす……」

「今にわかるようになる」

「いやいや……」

ふっと笑いかけ、やにわに桔平が真顔になった。

「もう一つ気になる情報がある」

「……何ですか？」

それを言うべきか否か、桔平は迷っているようだった。

やがて意を決したように口にする。

「プログラムの反応がまだ残っているらしい」

「！」

「本体を倒したのに、カウンターの反応が消えてないんだってよ。

それが誤動作かどうか、今調べている最中だ」

「また、来るんですかね……」

「何とも言えないな。間違いの可能性だって充分ある。よその地域に逃げ出した輩も、ようやくこっちに帰り始めているところだし、不安をおおるような発表は政府としても控えたいところだろうな。ま、おまえさんは今までどおり、普通にしたりやいい」

「俺、いつ呼んでもらってもかまいませんよ」

「おまえにばかり頼っていらねえ、って言いたいところだが、現実になっちゃうたら頼らざるをえないだろうな。情けない話だが」

「そんな。……俺なんかで役に立てるなら、全然……」

「へ。カエルの子はカエルってな」

「はい？」

「バカ野郎の弟分は、輪をかけてバカだってことだ」

「……。人のこと、言えないすよね」

「それだけわかってりゃ上等だ」ふいに淋しそうな表情になり、窓の外へと視線を泳がせた。

「……」

振り返り、いつもどおりの笑顔で桔平が光輔を迎え入れた。

「ま、そんなところだ。おまえには俺達を知りうる限りの情報を伝えておいた方がいいと思ってな。最後に判断するのは、結局おまえ自身だけだな」

光輔が桔平の顔に注目する。その表情に偽りはないようだった。

「あとは、もう一人の大バカ野郎をどうすつかだな……」

桔平のまなざしに浮き上がる厳しさを感じ取り、光輔がそろりと様子をうかがう。

「あの……」

「くそっ！」

「……」

苦虫を潰したような顔になり、桔平が悪態をつく。

「もう一個買ったときゃよかった。ブルーベリーが気がかりで仕方ねえ。へっ、俺もまだまだ足りねえ」

「……。桔平さん、ヤバイすよ、甘いものばっか」

「おまえ、俺の体の心配までしてくれるのか」

「いや、見ていてウップ、って感じなんですけど」

「実はそうやって、おまえの訓練も兼ねているわけだがな」

「なんの訓練すか……」

「ふ……」悲しげに表情を曇らせた。「人類にとって最大のプロゲラムは血糖値なのかもしれねえってことだ」

「……。いや、それ桔平さんだけでしょ……」

「そうとも言う。認めたくねえもんだな、甘さゆえの過ちを。って、

昔どっかの誰かが言っ
てなかったか？ 赤い人とか
「言っ
てま
せん
て……」

第七話 『伝えられない言葉』 2 (後書き)

すみません。ジミジミの反動からです……

第七話 『伝えられない言葉』 3

花瓶を抱えるようにして、古閑夕季は病室のハンガードアを開けた。

ベッドの上で半身の体勢になり忍が出迎える。夕季の顔を見てにこっと笑った。

忍と目が合い、夕季も嬉しそうに笑う。

他人には滅多に見せない表情だった。

夕季の置いたかすみ草を眺める忍。目を細め、穏やかな笑みをたたえた。

「だいぶよくなったね」

夕季の声に心を引き戻され、忍が顔を向けた。

「うん。先生も驚いてたよ。私くらいの成人女性では、考えられないほどの回復力だったさ」

「あたしは納得できるけど」

「人のこと言えないでしょ。やっぱり、血筋なのかな」

眉を寄せ上げるようにして、夕季が額のバンソウコウを見上げた。

「光ちゃんのおかげだね。治ったらお礼言わなくちゃ」

途端に夕季の表情が曇り出す。

「……」

「どうしたの」

「あたし、あいつにちゃんとお礼言っていない」

「会っていないでしょ。学校に行ったら言えればいいじゃない」

「……」

「駄目だよ、それくらい言えなくちゃ。あんたの性格は知っているけど、光ちゃん、自分が死ぬのを覚悟してまで私達のために戦ってくれたんだからね」

「そうじゃない……」

口ごもる夕季。

「何？ まだ何かあるの？」

「……。あいつをひっぱたいた」

「……。なんで？」

「お姉ちゃんがケガしたの、あいつのせいにして。三発か、四発くら……」不安げに眉を寄せる。「……もっと殴ったかもしれない」ぽかんと口を開けたままの忍。あきれたように嘆息した。

「バカたれ。何やってんの、もう。早く謝ってきちゃいな」

「一応謝ったんだけど、たぶん。……でもバタバタしてたから、あんまり記憶がない」

「気まずいのはわかるけど、もう一回ちゃんと謝っておいで。でないと二度と光ちゃんの前に顔出せなくなるよ」

「うん。わかってる……」

忍がため息をつく。諦めたように笑った。

「ほんとに、ぶきっちょな子」

その様子を見ながら、夕季はおそるおそるそれを口にした。

「……お姉ちゃん、エス、辞められないの？」

「……」

淋しそうに忍が目を伏せた。

メガルの訓練場付近で呼び止められ、桔平が振り返る。

その声の主を確認し、目を細めてみせた。

「おう、尾藤か……」

「はい」

その顔一面に笑みをたたえ、尾藤秀作は桔平と向かい合った。年齢も背格好も桔平とほぼ同じだが、髪は短く綺麗に整えられていた。柔和な表情の奥で、鋭いまなざしが光りを放つ。

「もう呼び捨てにはできねえな。俺の上司なんだからな」

「やめてくださいよ、柊さん。誰もそんなこと思っやしませんよ。」

何よりあなたは、我々の尊敬する木場隊長が、誰よりも信頼を寄せる人なのですから」

「その説明調は勘弁してくれ。ホメ殺しみたいに聞こえるぜ」

「すみません。そんなつもりはないのですが……」

「どうせ殺すんなら、美味い殺しにしてくれ」

「はい？」

エネミー・スナイパーの訓練風景に目をやり、桔平が深く息を吐き出した。

「何とか、うまくごまかしておきましたよ。ごり押し丸出しでしたかね」

「ああ。すまねえな、憎まれ役を押しつけちゃって」

「いえ、これも必要なことですから」

そう言い、尾藤も訓練場へ顔を向ける。

「木場隊長が参戦することはわかっていました。あの人はそういう人ですから。だから我々もついてこれた。大沼がその心情に寄り添うのも、当然の結果でしょう」

「あの時おまえが踏み止まらなかったら、エスは空中分解してたはずだ。苦渋の選択ってとこだったろうな」

「……はい」

「んで、案の定、木場は謹慎。おまえさんがその間、すべてをまとめなくちゃなくなっちゃったわけか。とんだ貧乏クジだな」

「はい。とんだ貧乏クジです」迷惑そうに頷く。「隊長代行なんて分不相応ですが、本来の隊長のいない間、せめて隊がばらばらにならないようにするのが私のつとめです。その後のことは何も考えていません」

「案外、そのまま納まっちゃもうんじゃねえのか？」

「よしてくださいよ。そんな器ではないことは、自分が一番わかっているつもりです」

「……」

「エスはメガルにとって必要な戦力です。足かせだらけのメックだ

けになれば、また過ちが起きる。あの時と同じ悲劇が……」

「……」

「柊さん」

言葉もなくその背中を眺め続ける桔平に、尾藤が振り返った。

先までの温和な様子とは違った、厳しい表情がそこにはあった。

「私はあなたの存在を軽んじるつもりは、毛頭ありません。あなたは木場隊長同様、ここには必要な人間だ。ですが、もう少しわきまえていただけませんか。今回のことは仕方ありませんが、今後同じようなことがあれば、かばうのにも限界があります」

「ああ……」その冷徹なまなざしを見つめ返し、桔平が眉を寄せた。

「そうだな。気をつける」

すると尾藤がふっと笑った。

「本当にしようがない人達ですね。あなたも、木場さんも」

「……」

「ご存知ですよ」

「……何がだ」

桔平に背中を向け、静かに尾藤がそれを切り出す。

「海竜王を無断で乗り回している者を抹殺しろという命令」

「……まあな」

「にわかには信じがたかった。何故我々に勝利をもたらす、その人物を粛清しなければならぬのかと」ゆっくり振り返り、真っ直ぐに桔平を見つめた。「本当だったんですね」

「……」

「噂が一人歩きしています」

再び背を向け、尾藤が続けた。

「何者かに命じられ、木場さんがそれを行使すべき立場にあるものと。或いは、木場さん自身が、そのすべてを掌握する人間であるのも」

「……」

「だとすれば、放っておけません。愛する肉親をメガルに奪われ、

それに報いようとする心情は十二分に察することができます。しかし、それでは見当違いもはなはだしい。それは我々のすべきことではない。私の望むことではない。あの人は変わってしまった。このままでは、我々は己の身を引き裂かれんばかりの選択を強いられることになりかねません。自分達が死すことよりも、さらに苦渋の選択を……」

振り返る尾藤。苦しそうに顔をゆがめ、桔平に訴えるように訴えかけた。

「お願いです、柊さん。あの人を、木場さんを止めてください。あの人の暴走を止められるのはあなただけです。あの人を、救ってやってください……」

「……」

桔平はその顔をまばたきもせず凝視していた。苦悩に満ちた、その悲痛なまなざしを。

第七話 『伝えられない言葉』 4

光輔は学校の裏庭で友人達と談笑していた。

やがて昼休みも終わりに近づくと、みなと校舎の違う光輔は一人離れて歩き始めた。

それを物陰から見続けている女子生徒がいた。

夕季だった。

夕季は光輔が一人になるのを見計らうように姿を現した。

遠方から別の友人が光輔に声をかける。

するとまた夕季は物陰に身を潜めた。不完全な隠れ方で。

友人とすれ違ってから、光輔が夕季を見つけて言った。

「さっきから何やってんの？ 夕季」

「さっ！……」

バツが悪そうに夕季が近づいて来る。

そんなことなどおかまいなしに、光輔は笑いかけた。

「しいちゃん、どう？」

むぐっ、と口ごもる夕季。

「……。順調みたい。結構早く退院できそう」

「そっかあ、よかったよな。俺もお見舞いとか行かなくちゃって思ってたんだけど、桔平さんに止められてさ。ごめんな。しいちゃんにも謝つていてよ」

その言葉に夕季が反応した。

「なんであんたが謝るの」

「え……」

顔を赤らめ、夕季が取り繕った。

「……お姉ちゃんも光輔に会いたがってた。早くお礼が言いたいて」

「お礼なんて言われるようなこと、俺してないよ。逆に謝らなくちやって思ってたくらいだし」

「……」

「だって俺のせいでケガしたみたいなものだもんな。どうせ行くんなら、もっと早く決断してたらよかったのにさ。ほんと、おまえが言ったとおりだ。ごめんな、夕季」

「……」

「……なんで睨むの」

「睨んでない、けど……」

「ふん……」

「……あの」

「？」

「光輔は悪くない。悪いのはあたしの方だから。……殴ったりして、ごめん」

「いいよ、前にもう謝ったじゃん」

「でも、ちゃんと謝ってなかったし」

「いいって。おまえの性格ならわかってるし……」光輔が不思議そうに首をかしげる。「そう言えば、おまえが俺とかに謝るのって初めてだよな？」

ふいをつかれたように動揺を隠せない夕季。

「……。あ、……の、そ、そ……」

「？ 何だよ」

怪訝そうに夕季の顔を眺める光輔。

だがどうしても夕季の口からは、ありがとう、の一言が出てこなかった。

「光輔も殴ればいいのに！」

「へ？ ……誰を？」

「あたし、を」

突然火の点いた予期せぬ爆発物に、今度は光輔が戸惑い始める。

「な！ ちょっ！」

導火線はぐいぐいと近づいてきた。

「気がすむまで殴ればいいと思う。十発でも二十発でも。覚悟はしてるから」

「何言ってるの、おまえ。何、勝手に覚悟とかしちやっってるの。なんで俺がおまえを殴んなくちゃならないんだよ」

「そうでもないとおさまらないじゃない」

「何がおさまらないんだよ。俺は別に……」

「あたしの気持ちがおさまらない！」

懸命な表情で訴えかける夕季。しかしその想いはまるで伝わらなかった。

「さあ、早く」

夕季が目を閉じて顔を突き出す。

「何言ってるんだよ。やだよ、俺……」

そこへみずきが通りかかった。

おかしいな雰囲気気づき、思わず目を丸くする。

「……。あー、ごめんなさい！」

「！」

途端に夕季の顔が真っ赤に染まった。紙袋を光輔に押しつけ、逃げるようにそこから立ち去って行く。

「……助かった」ほっと胸をなでおろす光輔。

「ごめん、穂村君」

落ち込んでいる様子のみずきが目に映った。

「何が」

「……。……チュウしようとしてたのに」

「！」一瞬で光輔の表情が凍りつく。何かに取り憑かれたように言い訳がましい言葉を連ねていった。「そうだよ！ 普通そんなふうに見えるよね！ 俺とあいつがチュウ以外のことしてたなんて、誰も思わないよね！」

ハテナ顔のみずき。ぽかんとなって、光輔の顔を眺めた。

「違うの？」

「絶対違う。てか、ありえないしょ、そんなの。……ええ！俺とあいつがあ！あのさ、一応言ってみるけど、実はこれから俺、あいつの顔を二十発くらい殴ろうとしてたんだよね。信じてもらえる……」

「信じられない」

「だよね！ やっぱりね！」

「嘘臭い。言い訳にしてはセンスがないし」

「あ、センスの問題なんだ……」

頭を抱える光輔。

納得しきれない様子ながら、みずきはほっと胸を撫で下ろした。

「あたし、あの何だか怖いな」

徐々に光輔が落ち着きを取り戻す。

「うーん、そんなに悪い奴じゃないんだけどな……」夕季が残していった紙袋の中を覗き見る。カツサンドと焼きそばパンが入っていた。「……ちよっと、とつつきにくいかもしれないけど」

「でも、いつも怒ってるみたいだし。みんなもそう言ってるよ」

紙袋の中から光輔がおもむろに一つを取り出す。

みずきの丸い目が、二重丸になった。

「あゝ！ 月曜限定ミックスサンド！ これ、激レアだよ！ あたし、実物見るの初めてかも」

光輔は複雑そうな表情で夕季の背中を見送り続けた。

「古閑夕季の搭乗権は剥奪ということでもよろしいですね」

火刈が風野守人に告げた。

風野からの反応はない。

それすら予測の範疇と見なし、火刈が続ける。

「確かに古閑は空竜王の覚醒に成功はしました。ですが素行が悪すぎる。命令違反も許容できるレベルではありません」

「それは君の考えることではない」
ぶすりと突き放す風野。

火刈が眉をピクリとうごめかした。

「先日の会議でも方向性は見えたはずですが。海竜王が無人で動くのならば、空竜王も陸竜王もオビディエンサー自体が必要なしとの見解に達します。古閑夕季が空竜王を覚醒させたわけではなく、空竜王が単体でプログラムに呼応したもののというのが、研究員達の出した結論です。オビディエンサーは竜王を制御するのではなく、単に管理者として存在すればいい。感応数値の優劣はまったく意味がないものだという見解です。上席者が全員一致でこの意見に賛同いたしました。そのため、現時点でのリザーバーへの連絡は、すべて保留にしてありますが」

「……」

「それとは別個に、現場を預かる責任者の口からも、プログラムに対抗するにはメックと竜王の共同作戦は不可欠だとの意見が出ておられます。この際、竜王の指揮権もこちらに委譲していただきたいのですが、それについては博士はどのようにお考えでしょう？」

「竜王は無人では動かない」

静かに告げた風野に、火刈がほお、という顔をしてみせる。

「それはまた、どのような根拠で？」

「エスとメックのレポートの中に、一人だけ他の人間とは違う内容の報告をしてきた者がいる。その隊員は、穂村光輔が海竜王に乗っていたものと断定している」

「それなら私も読みましたが、いかんせんあいまいな記述が多い。信憑性に欠けます。何より彼一人が真実を述べ、他の全員が虚偽の報告をする理由とはいかがなものでしょう」

「海竜王の使用者を抹殺しようとする者が、我々の内部に存在する」「……あんなたわごとをうのみにされたわけですか？」火刈がにやりとする。「しかしそれならつじつまは合う。もしかしたら彼こそが、ただ一人情報を正確に掌握している人間なのかもしれません。それが真実ならば、速やかにその逆賊を粛清しなければならぬ。或いは、彼自身がその人物やもしれませんが」

「……」

「わかりました。詳しく話をうかがうことにしましょう」内線で呼び出しをかける火刈。「ああ、私だ。至急尾藤副主任を司令部控室までよこしてくれ……」

第七話 『伝えられない言葉』 4（後書き）

悪ふざけ満載です。もともと、普段から活字をほとんど読まない自分自身が、何度もしリピートできるものを作りたいと思い、立ち上げました。当然、本編レベルでそれを実行できるような腕もなく、せめて飽きないように、遊びとイタズラだけはふんだんに盛り込むことにしました。

というのも、過去の愚作がすべて中途半端なままほったらかしになっている理由が、他ならぬ、読み飽きて推敲する気が起きないから、ということに気がついたからです。完成したところでどれだけ改良されるのかはわかりませんが、百回読めば確実に誤字脱字が減ることもわかりました（自爆）。

気づかなくても全然オツケー。気づいた人がちよつとだけニンマリできるような、ささやかなトラップ（パクリ？）を仕掛けていくつもりです。ということで、こんなわがままにおつき合いしていただいて、どうもありがとうございます。

第七話 『伝えられない言葉』 5

メック・トルーパー待機所の前には本部へと続く通路があり、途中、いくつかの喫煙所兼休息所があった。

樹神雅はそこで飲料水を片手に、桔平と談笑していた。

桔平の手だれた下品な話題に一歩たりと退くことなく、制服姿の現役女子高生、雅が真っ向から立ち向かう。

「だって」

「あっはっはっは……。あゝ、腹減ったな。なんか食いに行くか」
「いいよ。どこへ行くの」

「んじゃ、こないだの激辛タンタン麺とかどうだ」

「ええゝ、あんな辛いのもういいよ」

「とか言って、激辛五十倍、ブリッと完食してたじゃねえか」

「後から大変だったの。陣痛とかきて」

「いや、陣痛はこねえだろ……」

「辛いのはもういいよ。なんで桔平さん、甘党のくせに激辛とか平気なの？」

「どっちもオーケーだからだ。俺はバイセクシャルだからな」

「あ、バイセクシャルなんだ。ふうん。さすが桔平さんだ」

「何が？」

「さあ」

「……ふうん」

「嫌いなものとかないの？」

「ん？ ムカデかな」

「……ムカデかあ。確かに食べにくそうだよな」

「何言ってるんだ、みっちゃん。あんなもん食う奴いねえだろ」

「ねえ、いないよねえ」背中であとめた長い髪に触れ、子供をあや

すように笑った。

「あっははは。んじゃ、激辛勝負、行くか」

「あたし、ラーメンだったら他のがいいかな」

「他のって、何だ」

「ベトコンラーメン」

「いやいや、普通、女子高生はベトコンラーメンとか言わねえって。知らねえって、たいがいのモンは」

「そお？ 前に夕季と一緒に食べに行ったけど、あの子も結構気に入ってたみたいだったよ」

「マジか」

「チャーシューおまけしてもらったのに、マスターを睨んでたけど」

「あっははは。何だ、そりゃ」

「おいしいです、だって」

「ははは、らしいけどな」

「ねえ」

「いや、みっちゃんもあれだよなあ、あれ」

「あれって何？」

「あれだよ」

「ああ、あれ？」

「そう、あれあれ」

「あれね？」

「あれあれ、な？」

「あっはは」

「げはははは！」

「あはははは！」

会話の中身はほとんどない。

通りかかった夕季が、表情もなく、遠巻きに二人を眺める。それに気づき、雅が手を振った。

「あ、夕季」

「お？」

「おいでよ。ジュース飲も。でね、桔平さんがベトコンラーメンおごってくれるって」

「激辛タンタン麺だったの」

雅に小さく手を振り、夕季が拒絶を伝える。それから桔平をちらと見て、何も言わずにその場から離れて行った。

「何だ、あの野郎、愛想ねえな。何、怒ってやがんだ？」

不機嫌そうに眉をゆがめた桔平に振り返り、雅はどうということもなさげに告げた。

「別に怒ってなんかないよ。あの子はあれで普通なんだよ」

「あんな普通ねえだろ、普通」

「照れてるだけだよ」

「……あんな挑戦的な照れ隠し、見たことねえぞ」

「まあね」

「ネコ娘みてえなツラしやがってよ」

「あゝ、わかる、わかる。髪型とかね」

「おお、髪型とかな」

「うん、うん。でもすごいよね、あの子。一人であんな怪物倒しちゃうんだから。あ、しいちゃんと二人でか」

「ん。ああ……」

「そうだ、桔平さん。明日、しいちゃんのお見舞いに行かない？」

「ああ、いいけどな」

「光ちゃんにも言つとこ。あ、桔平さんにも紹介しなくちゃね、光ちゃん」

「……」

楽しげに笑う雅の様子に、桔平の心も満たされる。

「ねえ、桔平さん」

「んあ？」

桔平の様子を探るように、雅がうかがい見る。

「……」

「……？」

「……何でもない」また笑顔に戻った。

複雑そうな表情で雅を眺め、桔平はふいに真顔になった。

「引越し、終わったのか？」

「あ、……うん」

雅の調子が平坦に変わる。それに気づき、桔平は腹の底に溜めた憂いを吐き出した。

「本気でプロジェクトに参加する気なのか？」

「……。うん」

「せっかく、陵太郎の奴が止めててくれたのにな……」

「だからだよ」

「？」

「お兄ちゃん、あたしを心配させないように、ずっと無理してた。やらなくてもいいことまでやってた。みんなそうだと思う。夕季だって、しいちゃんだって。もちろん桔平さんだってそうでしょ？」

「俺はそんな……」

「あたしにできることなんて、ささいなことなのかもしれない。でも、それで少しでもみんなの負担が軽くなるなら、あたしはそうしたい」

「そっか」

「ついでに女子大生にしてもらえることになっちゃったけど」

「ははっ、ちゃっかりしてやがんな」

「えっへへへえ」

「……。ガーディアン計画か……」空になったコーヒー缶をテーブルに置き、深く息を吐き出す。「三大計画の中でも要だな。何やってんのか、下々の人間にはまるきり伝わってこねえが」

「参加してる人達ですら、自分達が何をしてるのかわからないことの方が多たって聞いた」

「知らねえ方がいいんだろうな。俺らクラスのモンなら。どうせ知ってても口外できねえだろうしな」

「だね。正式なオフアーはまだだけど、たぶん近々……」

「もう後戻りはできねえぞ」

「大丈夫だよ」

「……」

「ちっとも不安なんかじゃないし」

心配そうに様子をうかがう桔平に、雅が口もとをニュツと上げて笑いかける。

「すぐそばに、こんなに頼りになるお兄さんもいるからね」

安堵のまなざしを向け、ふっ、と桔平が笑ってみせた。

「イケメンのな」

「イケメンじゃないけどね」

「……。あら？ 遠慮するなよ、みっちゃん」

「遠慮なんてしてないよ」

「そうかあ？」

「そうだよ。桔平さんって、パツと見はそこそだけど、実はそんなにイケてるって感じでもないし」

「おいおい、どうせ言うなら前後逆に言って……。あれ！ ひっくり返しても、そこそこ！ 普通！ なんか、逆にせつねえ！」

「そうかな」

「いやいや、こう見えても結構イケてんだぜ」

「そんなことないよお」

「あ、そ」

「うん」

「でも、俺が攻められてんのに、みっちゃんが謙遜ぽくなってるのはなんでだろう？」

「うん、なんだか、許せなかったのね」

「あそ！」

「だいたい、イケメンって、もう死語っぽいしね」

「死語！ ……だよな、俺もちょうど今そう思ってたところだし……」

「さすが桔平さん」

「いやいや……。みっちゃんもかなりのハード・パンチャーだよな」

「うん。……え？」

「……あ、はは……」

「……へえ」

「……あはははは」

「……うふふふ」

「あはははは！」

「うふふふふ！」

「あははははーっ！」

「……？」 やけくそ気味の桔平の顔をマジマジと眺める。「あれ？」

鼻……」

「もういい、みなまで言うな！」

突如、狂ったように桔平が鼻毛を抜き始めた。

「ぬあっ、ぬああ！　ち、縮む……」

「何が？」

「タ、タマ……」

「タマ？……」

第七話 『伝えられない言葉』 5（後書き）

雅というキャラ、扱いにくいです。立ち上がりは第一ヒロインだったはずなのに、活躍する場を与えられず、空気のようになっていきます。展開上、もう一人の主要人物ですら、入場チケットさえ買えない有様だったり。このままギャラリーに降格、ということはない予定ですが、コアとなって動き出すのはまだまだ先となりそうです。頭の中の全○○話が完成すれば、というところですが……（かなりショッキングな数字なのでお見せできません……）。

第七話 『伝えられない言葉』 6

夕季が病室に入って来た。口をへの字に曲げて。

それにすぐにピンとくる忍。

「何やらかしたの？」

すると、夕季がびくつと体をすくませる。わかりやすいリアクシヨンだった。

「……別に何も」

「嘘言いなさんな。なんかやらかしたような顔してるよ」

「……光輔に謝ってきた」

「それから？」

「……。それだけ」

「お礼は？」

「い、いいい……、そびれた」

「それで？」

「それで、って……」

あきれたように息をつく忍。

「あのね、あんたのことは私が一番よくわかってるの。隠しても駄目。なんかやらかした時は必ずそんな顔になるの。てかね、鏡見てごらん。誰にでもわかるって、そのへの字口なら」

「への字じゃない」

「への字だよ。なんで反射的に何でも否定するの？」

「……」忍に刺し込まれ、夕季が困ったような顔になる。「あのね……」

その時、野太い声が夕季の声をかき消した。

「入ってもいいか？」

「どうぞ」

忍がよそいきの声で答えると、その男、木場雄一は岩のような顔をぬっと押し出すように入室してきた。

途端に豹変する忍の表情。

「ドアが開いていたんでな。どうだ、調子は？」

「はい。順調です」口もとを引きしめ、姿勢を正す。「あの、輸血、どうもありがとうございますでした」

「そんなにしゃっちょこぼるな。治るものも治らなくなる」

「はい」

木場が夕季に気づく。

夕季は身がまえるように木場を見上げ、何も言わずに一度深く辞儀をした。

「夕季、お湯取って来て」

「うん」

木場にちらちらと振り返りながら、夕季がポットを手に部屋を出ようとする。

「気を遣わなくていい」

夕季を見守り、木場がまた忍に向き直った。

「たいしたものだな、おまえ達姉妹は。二人だけで世界を救ってしまった。それに比べて俺達は、ふがいなさだけが露呈してしまったようだ」

「いえ、私達は……」

「いや、三人か」

忍が目を見開く。複雑そうな表情になった。

「……隊長。あの……」

「安心しろ。夕季への特定コードは解除された。しばらくは空竜王に近づくことも厳禁だがな。だが穂村光輔のものはまだだ。俺はエスの責任者として、彼に会わねばならん」

「……」瞳に決意を込める忍。「隊長、穂村光輔は決して見返りを求めることなく、自己犠牲の精神を持って、自らの意志で強大な敵に立ち向かっています。これは我々メック・トルーパーの信念に通

ずるところであり、むしろ尊ぶべき存在であるかと……」

「そんなことはわかってる」忍の顔を涼しげに見据え、木場が笑う。すぐさま表情を正した。「だが俺はエスの隊長だ。あくまでもこの立場で彼と会わねばならん。会って確かめなければならぬことがある」

遠くを見つめるような木場のまなざし。

忍は心配そうな様子でそれを見続けた。

「すまなかったな、邪魔をして」

ふっ、と笑い、椅子から立ち上がる木場。

「あ、すぐにお茶をお入れしますから、もう少しお待ちください」

「いや、行かなければならんところがあるのでな、失礼する。……花を」思い出したようにそれを口にした。「花を買ってこようと思っただが、おまえの好きな花が思い出せなかった。何をやってこのさまだ。まったく、何の役にも立たん」

「……」

「かすみ草だったか？」

「はい……」

「わかった。今度来られたら、たっぷり買ってくる」背中を向け、穏やかな口調で告げた。「早くよくなれよ、忍」

「！」忍の心を揺り動かす感情。「隊長、木場隊長！」

木場は振り返らなかった。重い足を引きずるように部屋を出て行く。

その背中に悲痛な決意を刻みつけて。

焦ったように忍は、連絡用の携帯電話へと手を伸ばした。

「桔平さんですか？ 私です、忍です。……はい、あの、木場さんの様子が変わなんです。……。そうじゃありません。本当に何か変なんです。いつもとは違う様子で……」

部屋の外で夕季が聞き耳を立てていた。

これほどまでに取り乱した忍の姿を、夕季は見たことがなかった。「お願いします。助けてください。木場さんを助けてください……」

「はい、わかっております、火刈司令」尾藤が携帯電話に相づちを打つ。「はい、必ず。それがたとえ、この身を引き裂かんばかりの苦渋の選択だとしても……」

通話を終え、ものものしい表情で尾藤は立ち上がった。

その後ろ姿を不安げに眺める黒崎。

明かりが消え、誰もいなくなったエスの武器収納庫で、尾藤は振り返りもせずに言った。

「行くぞ」

黒崎が生唾を飲み込み、顎を引く。

「メガルに弓を引き、混乱を引き起こす反逆者を許すわけにはいかない。メガルだけではない。この国の平穏すら脅かすことになりかねないからだ。そのために……」

「……」

「我々はこの手で、敬愛すべき木場隊長を粛清しなければならない。つらいのは俺も同じだ。だが誰かがやらなければならない。止めなければならぬんだ。これ以上あの人に罪を重ねさせないためにもわかってくれ、黒崎」

「……はい」

「すまん。ワリを食わせるようで。だが、悪いようにはしない」
しっかりとした足取りで、尾藤は確かなる一歩目を踏み出していく。

「悪名はすべて俺が背負おう」

そのまなざしに異様な光を宿して。

第七話 『伝えられない言葉』 6（後書き）

夕季はもつともリアリティのないキャラかもしれませんが。リアルにいれば、ただのへんくつ者で、一目は置かれても、敬遠されるタイプですね。個人的に周囲に溶け込めないキャラは好きなのですが、ちょっとしたきっかけで打ち解け、それで照れながらガムとかくれたら、キュンとなってしまうかもしれません（恥告）。

いがみ合う男キャラ二人が先にあって、そのバランスを取るための安易なキャラとして立ち上げたのですが、肉付けを施すうちにほぼ主役という位置づけまで昇格してしまいました。その過程で、当初はクールでほとんど感情を表に出さない人物像だったのが、感情丸出しの泥臭いものへと変化し、全くといっていいほど別人となりました。金八先生が思わず声をかけたくなるようなキャラが出ていればとりあえず成功というところなのですが……

第七話 『伝えられない言葉』 7

街の片隅で木場は一枚の写真を眺めていた。
ふっと表情を和らげる。

やがて人ゴミの中、目当ての人物を視界にとらえ、写真を胸にし
まい歩き始めた。

「穂村光輔だな」

振り返る光輔。その岩のような巨体に思わず退いた。

「君に聞きたいことがある」

「……」

光輔と木場は廃墟となった工場の中にいた。

アスモデウスの襲撃で焼け跡となった工場地帯の一角。そこに人
影は見られなかった。

「何ですか、俺に聞きたいことって？」

ガラスのなくなった窓から海を見ていた木場が振り返る。海鳥の
鳴き声を背中に、単刀直入にそれを切り出した。

「海竜王を動かしたのは君だな？」

光輔が身がまえる。

「……はい」

木場が眉を寄せた。身の危険を知りながら、あえて正直に答えた
光輔の心の内を探ろうとする。

「死ぬのが怖くないのか？」

「怖いですよ」即答。「でももっと怖いものを見てきましたから」

「何だ、それは？」

「目の前で大事な人を失うことです。何もできずに」
「！」

「自分を守るために命を投げ出そうとする人間がいる。なのに自分は、その人達が死んでいくのを黙って見ていることしかできない。だったらいっそ……」

「きいた風な口をたたきやがって！」

突然、態度が豹変する木場。光輔の胸倉を両手でつかみ、ぐいと持ち上げた。

「貴様はいい。貴様には力がある。だが、それができない人間もいる。したくてもできない人間もいる。そいつらはどうすればいい！ そいつらにも貴様と同じことをしろと言うのか！」

「そんな関係ないですよ」

今にも噛みつきそうな木場にもまるで臆することなく、光輔は静かにつないでいった。

「力があるうがなかるうが、俺の考えは変わらない。それを他の人に押しつけるつもりもない。でも俺はそうしないと、自分が自分でいられなくなるんです。俺を守ろうとしてくれた人達が見えてくれた、自分でいられる自信がないんです」

ふう、と息を吐き出し、木場が光輔を解放した。

木場の三倍もの息を吐き出す光輔。

木場が背中を向けた。

「君は正しい。だがな、君を助けようと思って、その身を差し出した人間の気持ちも考えろ。君まで死んだら、そいつの死が無駄になる」

言葉を失う光輔。木場の中に悲しみのような感情をとらえたからだった。

振り返る木場の顔は信じられないくらいに穏やかだった。

「俺の部下の命を救ってくれてありがとう。心から礼を言う」
それが忍のことを言っているのだと気づく。

「わかったろ、木場。こいつはこういう奴なんだよ」

聞きなれた声に振り返る二人。

裏口の近くに桔平のにやけ顔があった。

木場の表情は変わらない。

「遅かったな、桔平」

「おお、やば用があつてな」

そう言いながら、うすうすロールケーキにかじりついた桔平を見て、光輔が引いた。

「忍がな、焦って電話してきやがった。おまえがなんだか変だつてよ」

「……」

「顔が変なのは昔からだつて言つてやつたら、泣きそうな声出しやがつてな。いや、泣いてたんじゃねえのかな、あいつ」

「！」

「あんな芯の強い娘が、おまえのことになるとぼろぼろだ。いったいおまえら何やってんだ？」

「……」

暮れ始めた海の彼方、遠く視線を泳がせ、木場は過去を思い返していた。

メック・トルーパーの訓練は厳しく過酷だった。

要領はいいが他の隊員達と比べ入隊経験もなく、女であり、体的にもハンデがある忍。

それでも泣き言一つ言わずに木場についてきた。

思うような成果が得られず悔し涙を流す忍に、木場は黙って差し入れの紙袋を置いた。

「何だそりゃ？」

待機所の書類入れの上に花を飾った忍を隊員達がからかう。

くるりと振り返り、忍は子供を諭すように彼らに言った。

「むさ苦しい男の人ばかりで息がつまるから、こんなものでも飾ってごまかせないとね」

「しょうがねえだろ。むさ苦しいのはうちのカラーだ」おもしろそ

うに木場を見上げて笑う。「大将が砂漠の岩石みたいな顔してるのに、花なんか似合うかってのな」

むっとする木場。

口走った隊員が恐縮した。

「知らないの？ 砂漠にだって花は咲くんだよ」嬉しそうに花瓶のかすみ草を整える忍。「今度はサボテンでも飾りましょかね」

その横顔を木場は感慨深げに眺めていた。

「副隊長、私と同じ血液型なんですね」

忍に問いかけられ、何気ない様子で木場が振り返る。

「ん？ ああ、そうなのか……」

「杏子さんもですよ？」

「ああ……」

「ですよ。よく似てらっしゃいますものね」

「そんなことないだろ。俺とあいつはまるで違うぞ」

「似てますよ。杏子さんも否定していましたけれど。もし輸血が必要な時は言ってくださいね。私、提供しちやいますから」

「ん、ああ、……頼む」

「杏子さんも幸せですよ。こんなに優しいお兄さんがいらっしゃって」

見る見るうちに木場が赤面する。

「あ。もし輸血をした人と結婚しちゃったら、どうなっちゃうんですかね？」

「！」

「やっぱり子供に影響出ちゃうんですかね。ううん……」

「俺が知るか！」

忍が真顔で腕組みをし続ける。その顔を眺め、木場がふう、と一息ついた。

木場の心の中は穏やかな気持ちで満たされていた。

妹、杏子の葬儀の席で忍が涙を流す。

ものすら言わず耐え忍ぶ、木場の心情を察するように。

どう頑張ってもその代わりになれぬことを嘆くように。

顔をくしゃくしゃにし、許しを請うかのごとくに、いつまでも木場を見続けた。

その悲しげな姿は今もお、木場の脳裏に焼きついて離れずにいた。

『お兄ちゃん』

杏子の最後の言葉がそれに重なった。

『必ず幸せになるからね……』

第七話 『伝えられない言葉』 7（後書き）

一番定まっていなのが、主人公のキャラのような気がします。当初はあ○ち充御大の描くマンガの主人公のような、普段はひょうひょうとしていて実はケンカがバカ強いという、隠れ番長的なイメージだったのですが、今思えば、殴られても自分は殴り返さずに、もめごとを押さえ込むようなキャラの方があっている感じです。

心の強い人間に蛮行は不要な気がします。ただし、逃げ足はめっぽう速いという設定です。ちなみに夕季は動体視力が全国クラスで、飛んでいるハエを素手で捕まえるという裏設定があります。

第七話 『伝えられない言葉』 8

「杏ちゃん、結婚決まったんだってな」

桔平のほがらかな問いかけに、木場杏子は満面の笑顔で振り返った。

「ん。何とかなった」肩までのソバージュを揺らし、控えめに答える。それから柔らかな表情で、でへへ、と笑いかけた。

「何とかじゃねえだろ、コノヤロ。杏ちゃんなら、よりどりみどりでじゃねえか」

「やっところだよ、やっところ」

「ウソこけ。でも杏ちゃんいなくなると淋しくなっちまうな」

「いなくならないよ、桔平君」

「マジ？」

「うん。家計を助けるためにも、ぜひ仕事は続けてほしいって」

「そっか……。でも、悲しむ野郎多いぜ。なっ、木場」

別館の食堂で大盛りのカレーライスをかき込みながら、桔平の横で木場がじろりと目線だけをくれる。ものも言わず、終始仏頂面のままだった。

「またおまえわあつ、素直に喜べねえのか！」

「うるさい……」

「うるさいのはおまえのツラだ！」杏子に向き直る。「ほんっと、よかったよなあ。こんなネアンデルタール顔に似なくて。奇跡だ、まったく」

「やかましい……」

「やかましいのはおまえのツラだ！」

「……」

「杏ちゃんはこんなにハイクオリティだったのに、やっぱこいつの

原始人みたいなフレームと、不細工なツラがネックだったんだろうな」

「あははは……」

「いや、マジ、家族が人間以外ってのは、でけえハンデだぜ。猿人ウーマンになってもおかしくなかったのに、逆境に負けずによく頑張ったと俺は誉めてやりたいね。杏ちゃん細っちいから、ガチでこいつの中に入って操縦できるんじゃないか。ゴリ竜王だな」

「いい加減にしろ……」

「てめえのツラこそ、いい加減にしがれ！ 生まれてきて申し訳ねえとか思わねえのか！」

「思うか！」

「思え！」

「貴様こそ申し訳ない……」

「思うか！」

二人のやりとりを眺め、杏子がおもしろそうに笑う。少し離れた場所から顔を向けている忍に気がついた。

「しの坊もこっちにおいでよ」

「あ、おめでとうございます」

「ありがとね」

長身の忍と比べると、杏子は一回り以上も小さく見えた。顔立ちもかなり違う。それでも二人が並ぶとまるで姉妹のようだった。

「あの……」顔を上気させ、嬉しそうに忍が笑った。「尾藤さんなら大丈夫だと思います。優しそうだし、きつと杏子さんのことを幸せにしてくれると思います。あ、私なんかこんなこと言うの、変ですけど……」

まるで自分のことのように懸命に訴えかける様子を、杏子はこの上なく好ましいものだと感じていた。心からの笑顔を忍へ向ける。

「私もそう思う。お兄ちゃんは何も言ってくれないけどね」

「あ、木場さんもきつと喜んでいると思います。ああいう人ですから、口にはしないと思いますけど」

「ああいう人って？」

「あ……」

いたずらっぽく杏子が笑った。

「お兄ちゃん、幸せ者だよ。桔平さんやこういう人がそばにいてくれるから、私も安心していられる。これからもお兄ちゃんのこと、よろしくね」

「あ、そんな、私なんて……」

「はは。しの坊も早く妹さんと仲直りできるといいのにね」

「あ、はあ……」

「大丈夫、必ず伝わるって」

「……」

「悪い子じゃないみたいだし、誤解してるだけだって。きっと今にわかってくれるよ」

戸惑いの面持ちを隠せない忍に、丸い目がなくなるほどの笑顔を向ける。

「だって、こんなに綺麗な気持ちが伝わらないはずないもの……」

「おい、木場」

桔平に耳打ちされ、木場が目線だけを向ける。

「心配してんのか。尾藤のこと」

「……」

不安げに眉を寄せた木場に嘆息し、桔平も神妙な表情になった。

「うわさはいろいろと聞いている。だが、それがすべて正しいとも言いきれねえだろ。尾藤は環境に流されやすい。野心家かもしれないが、チャンスを待つタイプだ。俺達がいっかり見ててやれば、滅多なことにはならねえだろ。そのうち奴も変わるかもしれない」

「わかっている」

「なら何も心配することなんてねえだろ。杏ちゃんは自分の力で幸せになろうとしている。俺達にできるのはそれを祝福することだけだ。おまえは、杏ちゃんの幸せを第一に考えろ」

「……わかっている」

「おめでとうくらい言ったのか？」

「……。いや、まだだ」

「何やってんだ、おまえは……」

「お兄ちゃん」

あきれ顔の桔平の言葉を杏子の声が優しくさえぎる。

「今まで本当にありがとうね」

「……」

「いろいろ心配かけちゃったかもしれないけれど、もう大丈夫だから。お兄ちゃんは自分が幸せになるために頑張ってるね。今度は私がお兄ちゃんを幸せにしてあげる」

「ばっ！ 俺はだなあ！」顔を赤らめ、木場が杏子に食ってかかる。

「俺のことはどうでもいいだろうが！ おまえは自分のことだけを心配していれば……」

「大丈夫だよ」

「……」

「心配しないで。あたし、幸せになるから」

満面の笑みで木場をつつみ込んだ。

「必ず幸せになるからね……」

その時、すべてを押し流す不穏な警鐘が場内に鳴り渡った。

「……何、化け物がメガルに向かっただど！」

木場が目を見開く。

木場達メック・トルーパーはメガルとは反対側の海岸へ向かっていた。メガル本部からの出撃命令を受けて。

プロジェクト・フィロタヌスが発動していた。

初のプログラム発動ということと、すべてが極秘裏に進行していたこともあり、政府への報告は控えてある。

全部隊が出撃したため、メガルに戦力は残っていなかった。

『おい、木場！』

桔平からの無線を受ける。

「桔平、メガルはどうなっている？」

『ヤベーぞ。避難命令は出たみたいだがな、急なことだったし、あの人数だ。取り残された人間達もいるはずだ。俺達は今からメガルに向かう。おっ、……鳳さん、残りまとめてくれ……』桔平の声が遠くなる。すぐに元に戻った。『おまえらも早く戻れ。そっちの方が近いはずだ』

「……」

『どうした？ 木場』

「……いかん」

『はあ！』

「持ち場を離れるわけにはいかん。我々はここで待機するよう、隊長から命令を受けている。ここにも奴らは現れる可能性がある。この場所を死守するのが、我々に課せられた任務だ」

『バカ野郎！ あんなボンクラの言うこと、いちいち真に受けるな！ あいつは己の保身だけしか考えられない、ただの伝書鳩だ！ 今何をすべきか、何が大事なのか、おまえならわかるはずだ！』

「だから俺は、ここに残る」

『バカ野郎！ 杏ちゃんもメガルに残っているんだぞ！ そんなこと言ってて、もしものことがあったらどうする』

「ここに奴らが現れないという保証はない。おまえにそれが断言できるのか」

『……おい』

「ここを化け物どもに突破されたら街へ被害が出る。何も知らされていない人達が苦しむ。それだけは避けねばならん。メガルはおまえにまかせる。頼んだぞ、桔平」

『おまえ……』

しかし、いくら待てども、木場のもとへインプは姿を現さなかった。

隊長クラスも含め、多くの犠牲者を出しながらも、残された桔平や鳳達が何とかインプを殲滅する。

後にショート・プログラムと呼ばれたそれは、一度だけの襲撃で消滅した。メガル内部に多くの問題点を浮き彫りにさせて。

メガルに戻った木場を待ち受けていたのは、妹、杏子の亡骸だった。

「満足そうに笑っているでしょう……」

木場が振り返る。

目を真っ赤に充血させた尾藤秀作が体を震わせていた。

「一度は逃げたんです。でも竜王のデータを取りに戻ったところを杏子は……」

「……」

「ずっと俺に言っていました。自分達がここにいられるのはメガルのおかげだからだって。少しでもメガルの役に立ちたいって。竜王が自分達の希望だって。たとえば小さな力でも、危険な任務についている俺やあなたの手助けになればいい。そう杏子は笑いながら……」
込み上げる感情に押される尾藤。左手の婚約指輪を引き抜き、床に投げつけた。

「くそっ！」あふれ出る涙。

悲しそうに表情を曇らせ、木場は背中を向けた。

「木場さん！」

立ち止まる木場。

「知っているんですよ。本部が何もかもわかっていて、メックを見当違いの場所へ向かわせたこと」

「……」

「司令と副司令はメガルを私物化しようとしている。そのためには、自分達の思うままに動く部隊の存在が不可欠だ。その必要性を示唆するために、わざと今回のような指令を。そんなことのために、杏子は……」

木場が尾藤の胸倉をつかむ。鬼のような形相で睨みつけた。

「それ以上言うな。それ以上言えば、たとえば妹の婚約者でも……」

「一緒にかたきを討ちましょう」

「……」

「杏子のかたきを……」

木場が顔を伏せた。

それを認め、尾藤がにやりと口もとをつり上げる。

思いもよらず訪れたチャンスと、獲物が罠にかかったことを確信するよう。

第七話 『伝えられない言葉』 8 (後書き)

桔平の役回りは当初女性キャラに割り当てる予定でした。ですが、それだと、まんまアレのようだということに気がついて、そのペアキャラを配置換えすることにしたのです。彼がチョイ役から準主役に抜擢されたことにより、物語の方向性がガラリと変わるとともに、進藤あさみが悪役キャラになってしまいました。

もともと下品で身勝手なキャラを一人レギュラーとして据えたかったのですが、単なる皮肉屋だった脇役が、下品でおしゃべりな狂言回しへと変貌をとげました。いろいろなことを勝手に説明してくれる便利な役割でもあります。実際にいたら、あまり関わりたくない類の人間です。

すみません、自己満的あとかきでした。

第七話 『伝えられない言葉』 9

大沼透は包囲した工場の前で時間が過ぎゆくのを待っていた。できることならこのまま時間が止まればいいと思いつながら。無線の呼び出しに応じる。

『大沼、そちらはどうだ？』

エネミー・スイーパー新隊長、尾藤秀作だった。

「包囲は完了している。あとは対象が現れるのを待つだけだ」
『そうか』

大沼と尾藤は自衛隊での同期だった。除隊後、ともにメガルに入り、メック・トルーパーの一員となったが、一年前のエス発足後、隊員と副隊長に分かたれた。

『手はずはわかってるな。失敗は許されんぞ』

「……ああ」

うかない様子の大沼に念を押す尾藤。

『その銃弾ならバトルスーツをも撃ち抜く。海竜王の従属者、穂村光輔を無事保護するためにも、全力をつくしてほしい。くどいようだが、情やしがらみはすべて捨て去れ』

「……」

『あの人はすでに我々の知る木場雄一ではない。あの人にはもう我々の気持ちは届かない。むしろ、止められぬ暴走を憂い、我々の手で終止符を打ってほしいと願っているのは、他ならぬ彼自身のはずだ。それが、あの人を救う、ただ一つの方法でもある。苦しいのはみな同じだ。ならば、あの人と誰よりも多くの時を共有した俺達こそ、その十字架を背負わなければならないのではないのか』

大沼は返事をしなかった。

かつて木場が自分達に向けて語った言葉を思い出す。

『この世に不要なものなど一つもない。あえて言うなら俺自身だろう。俺にとっての俺は、誰よりもちっぽけで、もろく、何の役にも立たない弱い人間だ。だから俺は、たとえほんの少しでもいいから、他の誰かに望まれる人間になりたいと願っている。おまえ達に必要なとされる人間でありたいと思っている。おまえ達が自分自身のことをどう考えているのかは知らんが、俺はおまえ達を必要とする。おまえ達に助けてもらわなければ何もできないことがわかっているからだ。おまえ達の力で、役立たずな俺を必要な人間にしてほしい。おまえ達にとって必要な人間にな……』

そう言って木場は笑った。一人一人の顔を熱く見つめながら。眩しさに目を細め、大沼が空を仰ぎ見る。

永久に時が止まればいい、と思いながら。

「そろそろ行くか……」

木場が立ち上がる。光輔と桔平に振り返った。

「桔平、彼を頼んだぞ」

桔平は何も答えなかった。

木場が光輔の顔を真っ直ぐに見つめる。

「いろいろと迷惑をかけたな。さっきはあんなことを言ったが、俺も君の意見に賛成だ。ただ自分の弱さを認められずに、大事なことから目をそむけてしまっていた」

「……」

「こんなことを頼めた義理ではないが、君や夕季が俺達の希望なんだ。ふがない俺達を助けてくれ」考えをめぐらせる。「もう一つ聞かせてくれ。もし同時に二つのものを守らなければならなかったとしたら、君ならどうする」

「わかりません」その言葉とは対照的に光輔の表情に迷いはなかった。「でもその時、先に心が動いた方に行くと思います」

「もしその二つが、自分にとって同じくらい大切なものだったとしてもか」

言葉を失う光輔。

それを見て木場は満足そうに笑った。

「今の気持ちを忘れるな。その迷いがある限り、誰かが君に手をさしのべるはずだ」桔平を見てにやりと笑った。「なあ、桔平」

「スカしてんじゃねえぞ、ゴリラえもん」

仏頂面で桔平が吐き捨てる。

「今ごろ外にはエスがうじゃうじゃいるはずだ。俺達を殺そうと、おまえの愛弟子達がごっそり取り囲んでな。誰にどうやって手をさしのべてもらや、いいってんだ」

「大丈夫だ。おまえがやって来た裏口からなら、何とか抜け出すことはできる。あとは俺が少しの間、時間稼ぎをするだけだ」

「木場」思案する桔平。言うべきかわざるべきか迷い、それを口にした。「おまえ、知っているんだろ。尾藤はな……」

「言うな、桔平」桔平の言葉をさえぎる木場。窓の外にずらりと並んだエネミー・スパーを見渡しながら呟いた。「わかっている……」

「木場……」

建物から出て行こうとする木場を引き止めるように桔平がつなぐ。

「そこまでわかっていながら、何故おまえは行く」

木場がらしからぬ小声で呟いた。

「ケジメ、だからな」

「ケジメ？」

「ああ。俺の心情に寄り添って、こんなことにつき合わせてしまった、奴らへのケジメだ」

「そのケジメで、奴らにためえを撃たせるつもりなのか。奴らの手を、誰よりも信じてきたためえの血で染め上げるつもりか。そんなケジメ、誰が望んでるってんだ！」

「……」

「尾藤は腐ってる。杏ちゃんに近づいたのだって婚約者としてじゃない。竜王の秘密を聞き出すためだ。おまえという人間を手なづけ

るエサとしてもな。奴の目的はエスのトップになること。そしてそれを足がかりに、組織の中核へと食い込むハラだ。売り物として高値で取引するため、おまえを太らせてきた。次は俺だろう。奴が火刈と共謀していたかどうかは定かではないがな」

「……」

「おかしいよな。あまりにも浅はかだよ。だが、それを承知の上で、火刈が尾藤に便乗したとも考えられる。奴のメリットは何だ。エスとメックの合法的な解体だ。その上でエスを再編し、竜王をも手中に収めようとしている。今度こそ火刈の私設軍隊の誕生だ。尾藤は、単に利用されているにすぎない」

「もういい。言うな」

「いや、言う。おまえは大バカ野郎だ。それをわかっていながら、まんまと奴らの策略にのった。それが腐ったメガルを叩き潰すのに、一番手っ取り早い方法だと考えたからだ。だが実際はそう簡単にはいかない。奴らのほうが一枚も二枚も上手だ。いつしかおまえを慕って集まった奴らも取り込まれて、がんじからめになって身動きができなくなった」

「やめろ、桔平」

「おまえにとっては、メガルもプログラムもどうでもよかったはずだ。だがな、気づいちまったんだろ？ 杏ちゃんが必死になって守ろうとしたものを、壊したくないってな。だったら何故やめない。何故、杏ちゃんが望んだものを守ろうとしない。悪いのは尾藤と火刈だ。あいつらさえいなくなれば……」

「やめてくれ、桔平」

静かに木場がそう告げると、桔平の勢いが止まった。

「杏子はいいつを信じて死んでいった。これっぼちも疑おうとせずにな。満足そうな死に顔だった。俺がそれをくつがえせば、あいつの死は無駄になる。あいつには正しいことをしたまま、死なせておいてやりたいんだ」

「……。だからおまえは大バカ野郎だってんだよ！」ぺっと唾を吐

き出す。「岩石みてえなツラしやがって、きれいごとばかり並べやがる。それを聞かされるこっちの身にもなれ！」

「それくらい我慢しろ。長いつき合いだろう」

「やかましい！ 忍はどうなる。おまえ、あいつに杏ちゃんの姿ダブらせてんじゃねえのか」

「……」

「ブサイクのくせに、あんないい娘泣かせやがって、身の程を知れ。いっそのこと俺が悩みの種をきれいさっぱり刈り取ってやろうかって心境だ！」

「その必要はない。もう、悲しむこともなくなるだろう。これで……」

「だから、おまえのやり方じゃ駄目駄目なんだよ！」

「そんなことは言われなくてもわかってる」

「鈍い野郎だな。メガルぶっ潰すんなら、俺が手伝ってやるって言ってんだ！」

「……」

「てめえみてえな、真面目しかとりえがねえようなアンポンが、分不相応に小難しいこと考えやがるから、どうにかなっちまうんだ。そういうことは頭の切れる俺みたいなイケメンのナイスガイに任せとけ！ 小せえノーマイズ、パンクしちゃっても知らねえぞ。まあ、俺にしたところでイケメンとか言われても、なんだか今さらって感じで、死語の世界でたんばりんってところだが、そいつは仕方だねえことだ。むしろ、おまえのためにわかりやすく言っただけなんだ。感謝しろ！ ああー、言っただけぞ、ザマミロ！」

「桔平」

「ん？」

「昔からおまえは、頭は切れるが勉強はできない類の人間だったな」
「……。うっせえ、どうせ言うんなら、ひっくり返して言いやがれ！ それじゃ、勉強ができねえ、しか印象に残んねえだろが。てめえみてえな、勉強ができるのとは違う意味で真面目な生徒だった、

って新聞に書かれるような犯罪者タイプとはわけが違うぞ！　こっちだってよ、ちったあ責任感じてんだ。こうなっちまったのは、俺の責任でもある。尾藤があんな可愛げのねえ野郎だと知ってたら、無理やりにも杏ちゃんからひっぺがしとくんだったってな」

「……」

懐かしいものを眺めるように木場がふっと笑う。桔平に背中を向けた。

桔平は興奮冷めやらぬ様子で、その背中を凝視し続けた。

「……てめえ、忍が夕季のヒットマン志願した時、わざと行かせやがったな。他の奴の手にかかるくらいなら、身内の自分がやった方がいいって理由、知っててよ」

「そうだな」

「あいつが自分の妹を殺すことなんて、絶対できっこないってことも全部承知の上でだ」

「……そうだったのか」

「とぼけんじゃねえ、くそゴリラ。だから、てめえはバカだって言ってるんだ」

「……。その言い方、何とかならんのか」

「何ともなるか！　結局、てめえがあいつら救ったみてえなもんじやねえか」

「そうはならんだろ。俺は何も……」

「くそつたれ」悔しそうに桔平が吐き捨てた。

「……。尾藤にそこまでの考えはないだろう。本当におまえを怖れているのなら、俺を泳がせ続けておくはずだ」

「だから浅はかだ、つつってんだろ。だが、火刈は違う。全部わかった上で、おいしいところだけのっかろうとしてやがる。本当に恐ろしいのは火刈だ。俺達の本当の敵は、奴だ」

「桔平」木場が振り返る。桔平に穏やかに笑いかけた。「今度飲みに行くか？」

ぽかんと口を開ける桔平。

「何言ってやがる。てめえ、下戸だろうが」

「たまにはいいだろ。おごってやるよ」

「……。へっ、珍しいこともあるもんだな」

「前からそう思っていた」嬉しそうに笑い、目を伏せる木場。「やつと言えてよかった……」

その決意を感じ取る桔平。

「似合わねえんだよ、ゴリラえもんが」

「……その呼び方、いい加減にやめろ」

「気にするな。ちゃんと尊敬の念が込められてる。……はずだ」

「嘘つくな。おまえが俺を尊敬なんてするか」

「そんなことはない。俺はいつだって尊敬してたぜ」にやりと笑った。「木場先輩」

「来ました!」

一人の声に全員が注目する。

大沼達の視線が一斉に木場に集中した。

木場が立ち止まる。胸から一枚の写真を取り出し眺めた。

中学生か高校生の頃の写真の中では、木場と桔平と杏子、それから進藤あさみが仲良さげに笑っていた。

ふっと笑みをもらす木場。すぐさま表情を正すと、写真を胸にしまい、銃をかまえた。

「ここから先へは行かせん。文句があるものは俺を倒して進め」

隊員一人一人の顔を確認するように見渡す。

「木場隊長、やめてくれ」

大沼の声に木場が目線だけを向けた。

「俺はもうおまえ達の隊長ではない」

「俺達はあなたを撃ちたくない」

一人として銃をかまえている者はいなかった。

ピクリと眉をうごめかせる木場。

「何をしている、俺は貴様達に銃口を向けているのだぞ。ためらう

な。ためらわずに撃て。でなければ貴様達が死ぬだけだ。俺はそんなことを教えたつもりはない」

木場が大沼の額にポイントする。

くっ、と大沼が歯がみした。

「かまえろ、大沼。そして俺を撃て。だが約束しろ。今日限り、全員エスから脱退するとな」

「拒否する」

「！」

「あなたはもう、俺達の隊長ではない」

大沼が銃を放り投げた。

「撃ちたければ撃て。あなたに殺されるのなら本望だ」

その一言を契機に、一人、また一人と武器を放り出す隊員達。

みな目に涙を浮かべ、木場を見守っていた。

「俺達はあなたがいたから、ここまでやってこれた。あなたが行くと言うからついて来た。それを勝手に放り出して、一人で責任とろうなんて通らないよ、木場さん」

木場の目頭が熱くなる。憤るように深く息を吐き出し、静かに銃を降ろした。

「何故俺達に相談しない。何故一人で抱え込む。みずくさいぞ、あんた」

「そうだ、俺達を何だと思っている」

「俺達はメガルに雇われている。だが、従うのはあんただけだ」

木場が空を見上げる。自らの過ちを悔い改めるように。

その時。

無常なる銃声が轟く。

それから、ゆっくりと木場が背中から倒れ込んでいった。

第七話 『伝えられない言葉』 9 (後書き)

この七話はあっさり短く終わらせる予定だったのですが、ミスチルのHANABIという曲を聴いているうちに、どんどん長くなつてしまいました。ああいう曲に弱いです。調子にのってしまいます。だからなんだということですが……

第七話 『伝えられない言葉』 10

「くそっ！」

廃工場の屋根の上で桔平が吐き捨てる。

「どこから撃ちやがった！」

銃をかまえ、四方八方を見渡す。が、それを特定することはできなかった。

「どうしてこんなことに……」

不安そうに表情をゆがめる光輔に振り返りもせず、桔平は抑揚のない調子でそれに応答した。

「結局、全員揃ったところで、どうにもならなかったのかも知れねえ。だが、自分が駆けつけられなかったことを、あいつは悔いている。幸せを願う言葉の一つすらかけられずに、最愛の者を見殺しにする選択しかできなかった、ふがない自分を憎んでいる。これが、あいつ自らが望んだ、戒めなんだ」

「……。桔平さん、あそこ！」

光輔が指さす方角に目を向ける桔平。

反対側の建物の陰から二つの人影が様子をうかがっているのが確認できた。

桔平達の位置からは障害物が多すぎる上、手持ちの銃では有効射程圏外だった。

木場までの距離は数百メートル。反対側からの目視は極めて困難であり、かつアクセス・ルートが限定されるため、一流の狙撃手なら近づく敵兵をことごとく葬り去ることができるだろう。

「黒崎、か？ あいつなら一キロ先からでも……。野郎、ドサクサに紛れて、おまえまで殺そうとしているはずだ。全部、部下に責任おっ被せるつもりでな。踊らされて用無しになるのがためえだって

ことも知らねえで」

「……。行きましょう」

「くそつたれ！」

桔平が身をひるがえした。

「木場さん！」

「来るな！」

近づこうとした隊員達を一声で制する木場。荒れたコンクリートの地面に仰向けになり、左肩を押さえ、苦しそうにうめいた。

「おまえ達まで撃たれるぞ。早く散れ！」

木場の絶叫を受け流し、わき目も振らずに大沼が駆け寄る。両手を広げ、決意のまなざしで木場の前に立ちふさがった。

「大沼！」

誰一人申し合わせることもなく、次から次へ隊員達が木場の周囲に集結していく。木場を覆い隠し、両手を広げ、全員で輪を描くように人の壁を作った。

「貴様ら……」

「尾藤！」大沼が大声で叫ぶ。「これ以上この人に手出しはさせん！　まだやると言うのなら、俺達を撃ってからにしろ！」

「やめろ、おまえら、命令だ！」

「聞きませんよ」にやりと笑って大沼が振り返った。「あなたがもう一度、俺達の隊長になるって言うまでは……」

集音マイクでその一部始終を把握し、ぎりぎりとお歯を噛みしめる尾藤。

充血したまなこで、狙撃銃をかまえる黒崎へと振り返った。

「かまうな、撃て！」

しかし、黒崎は動かない。

「何をしている、貴様！」

「……」

「奴らは反乱分子だ。木場に洗脳され、メガルを、この世界を破滅に導こうとしている。ためらうな、黒崎！」

「撃てません……」涙で顔をくしゃくしゃにし、静かに銃を引き離れた。「俺には、あの人達を撃つことは、できません……」

鬼のような形相で、尾藤が黒崎を睨みつける。

「貸せっ！」

黒崎から銃を奪い取る尾藤。大沼の額に照準を定め、トリガーにかけた指先に神経を集中させた。

それを押しとどめようと、黒崎が覆い被さる。

「やめろ！」

「はなせ、馬鹿者が！」

「はなすものか！」

「貴様から粛清してほしいのか！」

黒崎を蹴り飛ばし、銃をかまえ直した尾藤が、凶弾を導くべくトリガーを引き絞っていく。

その時だった。

突如として、尾藤の視界が白く染まったのは。

尾藤と木場の空間を隔てるように、空から巨大な白い人がたが舞い降りたのだ。

空竜王だった。

スコープ内で銃弾が白い壁に弾き返されたのを確認し、焦った尾藤が銃を乱射する。

それらはすべて、木場達をかばうように立ち膝にかまえ、白銀の翼を広げた空竜王によって阻まれることとなった。

傾きかけた陽の光を浴び、薄茜色にきらめくその背中を、畏怖するように木場達が見上げていた。

「ぐう！」

空竜王の放ったトルネードによって、パームバズーカに手をかけた尾藤が吹き飛ばされる。

らせんを描きながら立ち上がるや、滑るように空竜王が間合いを

詰めて行く。弾道から位置を特定し、一瞬で尾藤の眼前まで巨影を躍らせた。

尾藤は尻もちをつき、不気味に光る青い両眼に見据えられると、小動物のように震え出した。

追いつめられ、狂ったようにパームバズーカを乱射する尾藤。その激しい閃光と爆風は、己の体をコンクリートの表層へと叩きつける結果となった。

プラズマ砲弾ものともせず、噴煙の間隙から空竜王がぬうつと顔を押し出す。

「ひ！ ひいっ！」

ガチガチと定まらない噛み合わせで、怯えるまなざしの尾藤が、空竜王へ向けてパームバズーカを突き出した。

顔をそむけ、やみくもに撃ち放った流れ弾が、木場達のすぐそばの屋根を吹き飛ばす。

このままでは甚大な被害を招くおそれもあった。

尾藤を貫くため、夕季がフェザーブレードを振りかぶる。夕陽色の艶やかな光が空竜王の全身に流れ落ちていった。

恐怖に凍りついた尾藤は、ただただ空竜王を仰ぎ見るばかりだった。

「く、ああっ……。一年待った。この日がくるのを、一年。一年だ。それを！ こんな奴らに……。こんなわけのわからない奴らに！ ……お……お……」

「！」

尾藤の異変に気づき、夕季がその手を止める。

「やめろ、夕季！」

桔平の声に夕季が振り返った。

そこには、哀れむような桔平のまなざしがあった。

「そんな奴、殺す価値もない」

もう一度夕季が尾藤に向き直る。

尾藤は失禁し、気を失っていた。

第七話 『伝えられない言葉』 11

空竜王から降りたバトル・ジャケット姿の夕季を、桔平と光輔が出迎える。

「無茶しやがって」

夕季が桔平をじっと睨みつけた。

「どうやってクルーをたぶらかしたのか知らねえが、おまえ今、空竜王に近づくのも禁止なんだろ。帰ったらおこごとくらいじゃすまねえぞ」

何も言わずに夕季は歩き始め、光輔の笑顔の前で足を止めた。

「ナイス、夕季。助かったよ」

光輔に一瞥くれ、通り過ぎようとする夕季。顔も向けずにぼそりと言った。

「こんなことくらいで借りが返せたとは思ってないから」

「俺は、そんな借りだとか……」

とまどうように光輔が夕季に注目する。

光輔をちらと見やり、夕季は気まずそうに顔をそむけた。

「ありがとう、光輔……。いろいろ……」 小声で言う。それから照れくさそうにこめかみを指でこすった。

光輔がふっと笑った。

「隊長、久しぶりに飲みに行きませんか」

満面の笑顔で大沼が言う。

左肩のかすり傷を押さえながら、木場が苦々しい顔を向けた。

「バカ野郎、俺は下戸だぞ」

「知ってますよ」 涙のあとでも消えぬまま黒崎が笑った。

「いいじゃないですか、たまには」 ぐすんと鼻を鳴らす大沼。 「ず

つと前から考えていたんです。なかなか切り出せなかったんですがね」

「隊長のおごりすよ」

木場の目頭が熱くなる。こめかみを手で押さえた。

「あ、隊長が泣いた」

「泣いて、らい……」

「今、らいつて言ったぞ」

「うるさい！」

巻き起こる爆笑。

みな楽しそうに笑っていた。

ほんの一時間前までは、誰もが想像すらしえなかった光景だった。その様子を桔平は涼しげなまなざしで見守っていた。光輔の横で
呟く。

「俺との約束は当分後になりそうだな」

「？」

「光輔、今夜飲みに行くか？」

「俺、めちゃくちゃ高校生ですよ」あきれ顔で桔平を眺める。「ち

よつと前まで中学生だったす」

「バカヤロウ、そんなもんビビッててどうするか！」

「捕まるのは桔平さんの方ですけど」

「ふうん……」淋しげに遠くを眺める桔平。かたわらの夕季に振り返った。「おい、夕季、ケーキバイキングでも行くか？ おごつてやるぞ」

「行かない」振り向きもせず即答。加えて冷たい口調だった。

さらに淋しそうな表情になり、桔平は光輔に情けない顔を向けた。

「んじゃ、おまえ行く？」

「いいですよ」

「あれ、即答……。今、俺のこと、かわいそうだと思っただろ？」

「はい」

「……ふうん。……。お、そうだ、しの坊に電話しとかねえと……」

「桔平」

桔平と向かい合う木場。

二人が互いの信頼をぶつけ合った。

表情を正し、憂慮するように木場が口を割る。

「桔平。進藤には気をつけろ。あいつは本気でメガルの消滅を考えている。俺もおまえも関係ない。変えるつもりも毛頭ない。奴の頭にあるのは、跡形も残さない、すべての消滅だけだ」

「わかってる」桔平が遠くを見つめた。「あいつは俺達の敵だ……」

夕暮れのメガル基地で、雅は光輔を迎え入れた。

諦めたように笑い、紅く染まった顔を向ける。

「どうして教えてくれなかったの。駄目じゃない、何でも話してくれなきゃ」涙をぬぐった。

困ったような様子で光輔がうつむく。雅の悲しそうな顔を見ることができなかった。

「ごめん、雅……」

「駄目だよ、自分だけで悩んでちゃ」

はっとなり顔を上げる光輔。

雅は涙を浮かべながら笑っていた。

「一人で苦しまなくていいよ。あたしも一緒につきあってあげるから……」

火刈聖宜は司令部特別室の扉を開こうとしてその手を止めた。

振り返り、じろりと風野を睨みつける。

「後悔することになってでも知りませんよ、風野博士」

風野は何も答えようとはしない。

「この行為を、政府に対する絶縁状のようなものだとは私は受け止めますが」

「好きに解釈すればいい」

「確かに私は、博士の意にそぐわないメガルにとって身中の虫かもしれない。更迭なさりたいお気持ちもよくわかります。ですが、これだけは覚えておいてください。私は、この国を汚そうとするモノすべてと、全力で戦う覚悟があります」

「国を辱めているのは、君達の方ではないのか」

ほう、という顔になる火刈。

「その言葉、心に刻みつけておきます。まあよろしいでしょう。今にわかりますよ」

そう言って火刈は部屋から出て行った。

入れ替わりに入室して来た人物が風野の前に立つ。

「本当に私でよろしいですね」

風野がその人物を見上げる。

「よろしく頼む。進藤司令官」

進藤あさみが意味ありげに笑った。

了

第七話 『伝えられない言葉』 11 (後書き)

地味な回が何とか終わりました。おつきあいしていただきまして、
ありがとうございます。

第八話 『終わりなき連鎖』 OP

氷のようなそのまなざしは、何も信じてはいなかった。

夜の路地裏に無様に横たわる男達の中で仁王立ちした今も、鎮まらない怒りのやり場を探し続ける。

高架の壁に張りつき怯える男女にギツと振り返り、霧崎礼也は吐き捨てた。

「消えろ」

呪縛から解放されたように、そそくさと逃げていくカップル。

無粋に悶え苦しむ十人以上ものチンピラ達を見下ろし、礼也は血も吐かんばかりの静かな怒りを押し出した。

「どうして、こんな奴らだけがのうのうと生きてやがる。こんな奴らだけが」

「てめえ、百人で囲むぞ……、があっ！」

精一杯の凄みを絞り出したリーダー格の横っ面を、礼也が躊躇なく踏み抜く。

地面を舐めるように、男が弱々しい呻き声をあげた。それは、これまでの人生を力だけで支配してきた彼が、おおよそ初めて発する女々しい響きだった。

「消えろ。どういつもこいつも、俺の前から消え失せろ」

「だったら、てめえっ、が、消えろ……」

「何！……」

『俺、が……』

脳裏に浮かぶのは少年時代の出来事だった。

小学生の礼也は、宿舎で五対一のケンカを繰り広げていた。中には明らかに礼也より年上の輩も何人かいたが、相手全員にケガを負

わけ、三人が戦意を喪失して泣きわめいていた。

陵太郎が慌てて止めに入る。

「やめろ、やめろ、おまえら」

一人が礼也を指さして言った。

「こいつがいきなり殴りかかってきたんだよ」

「本当なのか、礼也」

礼也はギリリと奥歯を噛みしめ、陵太郎を睨みつけた。おまえもか、という表情で。

真っ直ぐな陵太郎のまなざしを受け、悔しそうに顔をそむける礼也。

それを見て陵太郎がピンときたようだった。

「おまえら、礼也に何か言ったのか？」

五人が顔を見合わせる。

別の一人が小声で答えた。

「別に、何も言っていないよ……」

「本当だな」

「……う、ん」

口ごもる五人を不信に思い、さらに問いつめる。

「おまえら、こいつに何言ったんだ。本当のことを言ってみろ」

「本当も何も、俺ら……」

「……」

「こいつがエンコーで産まれて、捨てられた子だって言っただけだ……」

礼也がぐっと歯を噛みしめる。込み上げる感情を懸命にこらえていた。

「バカ野郎！」

陵太郎の怒号にはっとなる礼也。

「二度とそんなくだらしないことを口にするな！ 今度言ったら許さんぞ！」

「だって本当のことだろ！」

「それがどうした。こいつが誰の子供だろうと、こいつはこいつだ。それ以上でも以下でもない」

「だって……」

「だったら俺達は人殺しの子だ。これからそう呼べ。いいな」

「……。なんでこんな奴、かばうんだよ！　こんな奴、いなくなればいいんだよ！　すぐ暴力ふるうし、みんな嫌ってるし、必要ないんだよ、こんな奴」

「おまえ達にそんなことを言う資格があるのか。こいつよりがむしやらに努力してるって、胸を張って言えるのか」

「……」

「おまえ達はこのつを妬んでいるだけだろう。見下してるこいつが、自分達にできないことができるのを認められないだけだろう。違うって言えるのか！」

陵太郎の迫力に言葉を失う五人。シュンとうつぶいた。

「こいつはここにいてもいい。ここに必要な人間なんだ。誰も認めなかったとしても、俺は認める。こいつは、俺達にとって、必要な人間だ」

礼也は瞬きも忘れ、陵太郎の背中に見入っていた。

眩しくて正視できずに目を細める。

涙が出そうだった。

「大丈夫？」

優しい声に振り返ると、雅が手をさしのべて笑っていた。

「全然、気にしなくてもいいよ。あたしも認めてあげる」

眼前の光景が、じわりとぼやけ始める。

『俺が欲しかったものは』

雅の手を振り払う礼也。

すべてを拒絶するように固く口もとを結び、そこから顔をそむけた。

『俺が欲しかったものは……』

第八話 『終わりなき連鎖』 OP（後書き）

忘れられた人物降臨です。

実は導入部分には、あのサン○イズ作品を参考にしたりしています。単なるAパートの先っちょをちょんぎっただけではなく、短くても一つの章としてのボリュームとインパクトがあり、プロローグからOPへかけての疾走感は素晴らしいものでした。予告編のギャグに惹かれて、続けて観始めたが最後、加速感にすっかりやられて完食してしまいます。内容的には賛否両論でしたが、冒頭部分においてはいまだマイベストですね。

ろくすっぽ更新もできていないのに、のぞきにきてくださる方達には感謝の気持ちで一杯です。読んでいただきましてどうもありがとうございました。

第八話 『終わりなき連鎖』 1

「霧崎君、またケンカしたらしいよ」

同級生達のうわさ話に、桐嶋楓は耳をそばだてていた。

「暴走族だって。十人以上いたらしいよ。からまれてたカップルもろとも、オール血祭り状態だって」

「何それ。バーサーカーか！」

「バーサーカーって何？」

「きちが……」

「おっとつとだよ！」

「嘘だあ」

「本当だって、羽野町のガード下、血がべっとりだって。見に行ってみる？」

「行かないって」

「前も工業に一人で殴り込みかけて、野球部の部室、血の池地獄にしちゃったって聞いたし」

「ねえ、そんだけヤンチャして、なんでクビになんないの？」

「なんでも、すごいコネがいるから、学校も何も言えないんだって。アッチ系統の人達も手出しできないらしいよ」

「マジで！」

「だって、あんだだけ欠席してるのに、進級とかオカシクない？」

「確かに……」

左肩の上で結んだ髪をかすかに揺らし、楓が礼也の方へと視線を向ける。

礼也は机の上で足を組んだまま眠り続けていた。

授業中からずっとその調子だった。もはや注意する教師もいない。

「桐嶋さん」

背後から男子生徒に呼びかけられ、楓が振り返る。柔らかさの消えかけた素顔の表層に、咄嗟に優雅な笑顔を構築した。

生徒会の副会長だった。

「今度の議案の件だけど……」

ガタッ！

物音がしたかと思うや、すぐさま礼也の怒号が響き渡った。

「殺されてえのか！」

一瞬で教室内が静まり返る。

一人の男子生徒が礼也に胸倉をつかまれ、締めあげられていた。

「どうしたの？」

楓の問いかけに、礼也のうわさ話をしていた女生徒達が不安そうな顔を向けた。

「高橋君達がふざけてて、霧崎君の机にぶつかっちゃったみたい」

「悪気があったわけでもないのに」

「ねえ」

楓が副生徒会長へ振り返る。

もともと青白い顔をさらに白く染め、彼は目線で、無理、と訴えかけた。

次に、柔道部の主将をしている同級生へと顔を向ける。

楓と目が合うと、巨漢のその男子生徒は羊のように怯える顔をそむけた。

「ごめん、ごめん、霧崎君、ごめん……」

懸命に謝り続ける相手の姿すら目に映らないように、礼也が振りかぶる。ギリリと歯を食いしばり、そのまま無抵抗のクラスメイトを殴りつけようとした。

「やめなさいよ！」

その刹那、時が静止した。

桐嶋楓の声だった。

ゆっくりと振り返るや、礼也が凄まじい形相で新たな獲物を睨みつける。

その迫力に尻ごみする楓。怯みながらも、周囲の心配そうな視線を受け、何とか気持ちを持ち直した。

「いい加減にしてよ。そんなにケンカがしたいのなら外でやればいいじゃない」

「何だあ！」

すっかり興味を失ってしまった最初の獲物を突き飛ばし、机を押し倒しながら礼也が近づいて来る。

海を真っ二つに割ったようなその危険な空間に、誰一人とどまろうとはしなかった。

楓が息を飲む。

「もっぺん言え。俺の前で言え」

礼也の鼻先が楓のすぐ目の前にあった。

不安そうに見守る多くの視線。そして、そこに混在する無責任な期待に押されるように、楓は無理やり恐怖心を封じ込めようとした。

「……何、よ」

「おい、誰も助けにや来ねえぞ。わかってんのか」

「……」

礼也の言うとおりに、助け船は望めないだろうことは承知していた。

「気に入らねえ」

「な……」

「女だから殴られねえって計算してやがる。気に入らねえぞ、てめえ。気に入らねえ」

「……そんな」

「一発ですむと思うな。ツラ、ボコボコにしてやる」

「ひ！」

礼也に肩をつかまれ、楓が涙目になる。足もガクガクと震えていた。

その時、楓の中で何かが弾けた。

「……。……殴りたいなら、殴ればいいじゃない！ 気がすむまで殴れば！」

「ああ！」

「好きなだけ殴れば！ 二度と人を殴る気が起きなくなるくらい。いつそ殴るのが嫌になるまで殴れば！」

唇を震わせ、礼也から目をそらさずに、楓が覚悟を決めた顔をぐつと突き出した。

「……。あんたなんか、いなくなればいいのに……」

「！」

ピクリと眉をうごめかす礼也。

楓を睨みつけ、それから何も言わずに礼也は教室から出て行った。固唾を飲んで見守っていた教室中に一斉に吐息がもれる。

緊張の糸が途切れ、みなほっとしたように胸を撫で下ろした。

「やっぱり女の子は殴らなかったか」真っ先に口を開いたのは、柔道部の猛者だった。「ヘタに俺が入るとややこしくなると思って……」

誰も彼の言葉には耳を傾けない。

同級生達が楓を取り囲むように群がって来た。

「さすがだね、桐嶋さん。やっぱ頼れる生徒会長……」

楓の肩に手をかけ、その言葉が途切れた。

楓の全身は震え続けていた。

悪寒を訴える病人のように、雪原に取り残された遭難者のように、その震えがおさまることはなかった。

第八話 『終わりになき連鎖』 1 (後書き)

ロボットのイメージがうまく浮かんでこないの……。……友人
とガン〇ラ作ったりしてます。結構楽しかったりします。素組です
が……。

第八話 『終わりになき連鎖』 2

一日のカリキュラムを終え、山凌学園高校の校門付近は帰宅部員達の波であふれ返る。

標的を射程圏内にとらえ、夕季はその背中に狙いを定めた。

「光輔」

何気ない様子で光輔が振り返る。

真剣な夕季のまなざしを受け、光輔の表情に緊張の色が浮かび上がった。

「……何」

「……」

夕季はじつと光輔を見つめ、やがて重々しいその口を開いた。

「メックの人が、バーベキューやるから来いって」

「……」

「……」

見つめ合う二人の時間が静止する。

しばし考えた後、光輔が答えた。

「……いいよ」それから、ほっとしたように笑った。「おまえも行くんだったら」

「あたしは……」

口ごもる夕季に光輔がたたみかける。

「行くんだろ？ 俺一人だと行きにくいけど、おまえと一緒にならいいよ。夕季と一緒に行くって言うって」

「……」

「でさ、俺も頼みがあるんだけど……」

夕季が光輔の顔を凝視する。

「……いや、睨まなくても」

「……睨んでないけど」

柊桔平は幹部のみが着ることを許されたスーツをカッコリと着込み、司令部に足を踏み入れた。

その姿を見て、多くの人間達がかしこまった挨拶をする。中には、かつて会議室で桔平を怒鳴りつけた輩も見受けられた。

いつもの場所で足を止めた桔平を、波野しぶきが笑って出迎えた。「就任おめでとうございます」襟もとの紋章へちらと目をやり、艶やかなウイंकを投げかける。「柊副司令殿」

途端に桔平の姿勢が粉々になった。

「いい加減、勘弁してくれって、波野ちゃん。何回同じこと言う気なのさ」

「とりあえず一ヶ月くらいは」

「長！ しつこ！」

「挨拶まわりは無事終わりましたか」

「何とかね。結局丸々一週間かかった」

「お疲れ様です」

「マジで疲れたわ。これじゃ、木場達と一緒に謹慎処分くらった方が、よっぽどマシだったの。嫌がらせもいとこだ」窮屈そうにネクタイに指を突っ込む。「だいたいガラじゃねえんだよな、こんなの。この金バッジだって、絶対、盗聴器、入ってるって。うっかりセクハラ発言でもしようものなら一発アウトだったの」

「一発アウトですね」

「こんなタイトロープの上じゃ、一瞬たりと気が抜けねえ。何もできねえ。俺は羽をもがれたトンボだ。無力な幸せの赤トンボだ」

「とうがらしですね」

「ああ、とんがらしだ」

「でも、すごい出世ですよ。平社員から一足飛びに副局長ですから」持ち込みのミニポットからハーブ・ティーを注ぎ、桔平へ差し出す。

「あ、サンキュ。その前に一足飛びに三階級降格してるんだけどねえ……」ズズズ、とすする。「あれ、無糖？」

「はい」

「駄目だろ。これじゃ本来のうまみが引き出せてねえ」

「すみません」

しづきからスティックシュガーを二本受け取り、居心地悪そうに周囲を見回した。

「それまでゴミみたいな目で俺のこと見てやがった奴らが、手のひら返したようにペコペコしだすんだもんな。気色悪いったらねえよ。あ、もう一本、もらえる？」

「はい、どうぞ」

「サンキュ」

「仕方ありませんよ」すだれのような前髪を、気持ちよさげにさらさらと揺らす。「実質、本局のナンバー・スリーなんですから。本来ならば、私だってこんな口きけないところです」

「だから勘弁してって。もともと波野ちゃんの方が俺より立場、上だったじゃんか」

「そうでしたっけ？」

しづきがおもしろそうに笑った。

「そうでしたってばよ。あれ？ 髪型変わった？ なんか、すだれみたい。さらさらしてて」

「はい」

「なんて言うの？ それ」

「さらさらすだれ頭です」

「あ、そのままだ……」

「恐縮です」

「似合ってるわ。なんか、目とか鼻とかブサブサ刺さりそうで、いい感じだわ」

「ありがとうございます。柊さんのは？」

「ん？ ボサボサもっさりヘアー」

「そのままですね」

「逆にね」

「逆にですか。鼻毛もセットで」

「こいつはオプシヨン……」ぶちぶちと抜き始めた。「ぬあっ！」表情も変えずにゴミ箱を差し出すしぶき。

「あ、うん。……。でもよ、こんなの、任命でもなきや絶対ありえねえもんな」

「大抜擢ですからね。それだけ新局長に信頼されているってことですよ」

「どうだかな。まあ、メックの隊長も兼任って条件付けといたから、思うようにはさせないけどよ。だが、それと引き換えに、俺は冗談の一つも言えねえ、遊び心のかけらもねえ、つまらねえ人間になっちまった。こんな重責を担っちまった以上、俺には笑うことすら許されねえ。もう二度と平穩は望まねえ。そう心に誓った。過ぎた時間は戻らねえ。下品な冗談を言って、ゲラゲラ笑ってた日々が遠い昔のようだ」

「結局最初の一日しかもちませんでしたね」

「うん」ズズズズー！と一気飲み。「あのさ、実は俺、政府から派遣されたスパイだって知ってた？」

「奇遇ですね。私もスパイなんですよ」

「マジ？　じゃ、情報交換とかできちゃうじゃん。メアド教えて」「それは機密事項なので」

「マジかよ。かてえな。今日何色？」

「黒です」

「黒ね」

「はい」

「ま、小うるさい俺を、ちよろちよろ動き回らせないための意図が丸見えなんだけどな。丸見えなのはパンツだけにしてくれてえの。俺的には白か縞々が鉄板だな」しぶきのチョコレートをつまみ食いする。「あれ？　うまいね、これ」

「新発売です」いたずらっぽく笑った。「柊さんと同じですね」
「あいたたた……」

並木道を抜け、多くの人々が行き交う駅前通りを、光輔と夕季は不自然な距離を保ちつつ歩いていた。

二人がともに下校するのは初めてのことだった。

何となく落ち着きのない様子の夕季が気にかかる光輔。

「どしたの？」

駅周辺にはさまざまな飲食店があり、それらをきよろきよろと見回し、そわそわしている様子だった。

「腹減ってんの？」

「……別に」

しっぽのような後ろ髪がうろうろと揺れる。

突然ピンときたように光輔が口火を切った。

「夕季、そのロールケーキ屋さん寄ってこようよ。おばちゃんのお店。前に篠原達と行ったことあるんだけどさ、屋台だけど結構うまいんだって、マジで。俺、今日、おごるからさ」

「……あ、た……」

「いって、いって」何か言いたげな夕季を制し、光輔が財布を取り出した。中を確認し、すぐさま絶望的な顔になる。「ありゃあ」

「……」

「わり、夕季、金貸してくれない？」

「……」

「明日返すからさ」

「いい。あたし出すから」

「でも、なんか悪いしな」

じろりと睨みつける夕季。

「……んじゃ、お言葉に甘えて。ごちそうさん」

「何にするの」

「俺、チョコバナナ」

夕季が財布を手に店の前へ立つ。

スーパーマーケットの店先に構えた、側面をひさしのように跳ね上げたワンボックスカーの中に、年配の女性店主の姿が見てとれた。

「チョコバナナ二つ……」

「おまえ、ストロベリーにしとけば」

振り返り、また夕季が光輔をじろりと見やる。

光輔が卑屈な笑みを浮かべた。

「あ、き……、篠原がヤバイくらいうまいって言ってたから」

「……ん」

「ソ連の新兵器くらいうまいって」

「……」

「は……」

「どういう意味」

「なあ、わかんないよなあ！」

「……」

「あ、はは……」

夕季が苺を好きなことを、光輔は知っていた。

「チョコバナナとストロベリーください」

ふくよかで人なつこい感じの店主が満面の笑顔で出迎えた。

「はい、ありがとねえ、チョコバナナとストロベリーねえ」

ケーキを手に、店の前のベンチに並んで座る二人。時間が早いため、まだ客足はまばらだった。

「！」

一口食した直後、夕季が眉間にしわを寄せる。すさまじい形相でロールケーキを睨みつけた。

「な、うまいだろ？」

光輔が楽しそうに笑った。

キツと振り返り、夕季が鋭い眼光で光輔を撃ち抜く。

「……。睨まなくてもいいじゃん……」

「……。睨んでない……」

「お嬢ちゃんのお口には合わなかった？」

優しい口調に振り返る夕季。

屋台の中から丸顔のおばちゃんが、穏やかな表情で二人に笑いかけていた。

途端に夕季が赤面する。

「そんなことないです！　おいしいです。すごく……」

「そう。よかったらまた来てちょうだいね」

「あ、はい……」

「はい、これサービス」

店主がつまようじに刺した小さなメロンを二人に差し出した。
どぎまぎしながら、夕季がそれを受け取る。

「あ、す、すみません……」

「お嬢ちゃんのお口だって」

ギツと振り返る夕季。激しい憎悪を光輔に叩きつけた。

「……あ、やっぱり睨んでるよね。思いつき」

「……」

「否定しねえし……」

光輔の声も右から左、夕季がもくもくとロールケーキを口へ運ぶ。
表情は乏しかったがその味が気に入った様子だった。

夕季と別れ、人が流れ始めた駅の待合室で、光輔が大きく伸びをする。

「そうだ」ふいに何ごとかを思い出し、財布の中身を確認してから立ち上がった。「定期買ったところ」

第八話 『終わりなき連鎖』 2 (後書き)

「ゆうき」という名前の響きが好きです。どちらかというとなりの子向けの名前なのでしょうが、テンションが上がった時に呼びやすいという理由もあるみたいです。「ゆき」だとなにやらカッチリしすぎているような気がしてしまってます……。別に思い出があるわけでもないのですが、気に入っています。ちなみに「ゆき」と言われて思い浮かぶのは、大多数の常識をくつがえして、ワイルド○のみそっかすか、アルプスで少女がかわいがっていた羊さんです。

第八話 『終わりなき連鎖』 3

メガル本棟、大会議室内に桔平の姿があった。

議長席のあさみの横で、気のなさそうな表情でぶちぶちと鼻毛抜きにふける。

張りつめた空気も意に介さず、ふわあゝ、と大あくびをした。嫌悪感をあらわにする他の面々。

進行係を一瞥し、一人の男が自信に満ちた面持ちで挙手した。

「エネミー・スリーパーも含めたメック・トルーパーの近頃の独断行動は目に余るものがありますが、進藤局長はどうお考えでしょう」百人もの人間達であふれ返る大会議室。その中で桔平とあさみは群を抜いて若かった。

もともとは火刈のとりまき連達であり、みな、若造の新司令官達にガツンと食らわせてやろうと、はなからのんでかかっていた。

「その件に関しては柊副局長がお答えいたします」

妖しく笑うあさみ。

すると桔平は面倒くさそうに顔を向けた。

「んあ？」

「早くお答えいただけませんか！」

なめた態度の桔平に苛立ち、語気を荒げる男。かつてこの会議室でドンドンと机を叩き、桔平や鳳を威圧した人間だった。

「そうだな……」今考えていると言わんばかりの表情。

「まさかとは思いますが、ペナルティなしですませようというおつもりではないでしょうか」意地悪そうにニヤつく。「私達事務職とは違い、直接部隊を率いていた経験もおありでしょうし、お気持ちも察しますが、それでは示しがつきません。馴れ合いと言われても仕方がない。我々としても大元への報告をどうすべきか頭が痛い」と

「ここでしてね」

「おう、そうだな。あんたなんか言われなくてもわかってるって。心配しなさんな」

「！」横柄な桔平にカチンとくる。「我々の納得のいく説明をしていただきましょうか！ 柊副局長！」

「ガンガンがなりたてんじゃねえって。あゝ、うるせえ」桔平が口うるさい母親を見るような顔をした。「でっけえ声出しゃ、思い通りになるとでも思ってたのか？ 案外この連中もレベルが低いんだな」

ざわめき立つ会議室。

一瞬ですべてを敵にまわした。

「局長！ 彼は副局長としてふさわしくないのではありませんか！」男が立ち上がる。

「このような人間に我々を牽引することができるとは到底思えませんが」

「落ち着きなさい。大城室長」

「資質の問題です。彼にはそんな大役を担う器がない」

「控えなさい」

「いいえ、彼を増長させれば、今にメガルにとって必ず不利益となります。私はそれをさせないためにも、あえて苦言を呈します！」

火刈の傘の下、分不相応な権力を振りかざしてきたあさみを、彼らは快く思っていないかった。火刈なき今、実のともなわない人間に従う理由はどこにもない。

「ガタガタうるせえぞ！ 座れ！」

「な……」桔平の一喝に男の血の気がさあっと引いていく。すぐに気持ちを取り戻した。「そんな安っぽい脅しに屈するとも……」

「座りなさい」

冷たいあさみの一撃。

その瞳の奥を覗き、男の背筋が凍りついた。絶句して着席する。

「ほんと、せっかちなだな、あんたら。口開きや、自分のことばっか

だ」広大な会議室全体を見渡すように桔平が切り捨てた。「ふんぞり返って威張ってるか、弱いモンいじめして悦に入ってるかだけで中身はスカスカだ。社長さんがいなくなった途端にこれかよ。こんなぼんくらどもばかりじゃ、人類を破滅に導くわけだな。焦るんじやねえっての。順を追って説明してやるからよ。キャンキャン、キャンキャン、犬っコロじゃあるめえし、しばらく口つむってろ」

「それは問題発言だぞ！ 我々を犬っコロ呼ばわり……」

「黙ってろつつったんだ！ 日本語も通じねえのか、ここの能無しどもは！」

「……」

ざわざわと室内に不協和音が響き渡る。それすらものともせず桔平は続けた。

「メックやエスのやったことは、決して誉められたものじゃない。いくら結果を出したからって、組織の中ではあってはならないことだ。こんなことを続けていれば、いつか組織は崩壊するだろう」

意外な常識論に幹部連が戸惑いをみせる。

「したがって苦渋の選択ではあったが、奴らを全員解雇することにした」

静まり返る室内。

おそるおそる、古株の一人が発言した。

「それがメガルの意向なのか」

「いや」ぐっと睨みつける。「俺の独断だ」

「な……」

「副司令官に就任したとは言え、これからも部隊を率いるのは俺だ。俺はあんな命令違反ばかりで上を上とも思っていないアンポンどもを使うつもりは毛頭ない。それじゃ、こっちの命がいくつあっても足りねえからな」

「だが、エスはともかくとして、メック・トルーパーは国の所有物でもある。こちらの都合で一方的にそれを解体した、では、政府も黙っておらんだらうに」顔をしかめ、責めたてるように桔平を睨み

返す。「再編が必要になる。どうするおつもりだ、これから」

「心配するな。次の手は考えてある」にやりと笑った。「あんたら全員をメック・トルーパーとして登録しておいた。ニュージェネレーションの誕生だ。明日からと言わず、午後からでも早速訓練を始める。俺のしごきはきついぞ。覚悟しとけ、ジジイども」

一瞬の沈黙。すぐに場内が爆発した。

「ふざけるな、何様のつもりだ！」

「横暴にもほどがある！」

「早速報告させてもらおう！」

「いったいどんな権限があってそんなでたらめを！」

「権限ならある」

全員が桔平の顔に注目する。

「あんたらの大元の上司には、すでに許可はとってある」

「嘘を言うな！」大城が立ち上がった。「そんな馬鹿げた決定に誰が賛同すると言うのだ！」

「嘘じゃねえよ。信じられねえなら、今すぐ確認してみな」席を立ち、ぐいと顔を近づける。「あんた、向こうじゃ、『切れたナイフ』、なんて呼ばれて、一目おかれてるらしいな」

ムツとする大城。

「違う！『研ぎ澄まされたナイフのような鋭い切れ味を持つ、怒れる若き荒獅子』、だ！間違えるにもほどがある！」

「イタイな、あんた。自分で言っちゃってよ。結構気に入ってるみたいだな、そのキャッチ。俺には使いこなせねえ。恥ずかしすぎて」

「ん、な……」

「ほんと、つくづくだ。まあ、いい。センスがねえのはどうしようもねえ。でな、親方みなさんにあんたらの仕事っ振りと、なか中にはとんでもねえことしてる輩もいるみたいですね、って世間話してやったら、例外なく向こうから、よろしく願います、つと頭を下げてきちまってさ」大城の顔をしげしげと眺める。「安藤さんだっけ？ あんたの親分。何とぞ穏便に願いますって、そ

ればつかだったぜ。なんかやましいことでもあるのかね。俺にや、さっぱりなんだが」

言葉を失う大城。怒れる肩を荒げ、背中を向けて退室しようとした。

「ふざけるな、やってられるか！」

「出て行くのは勝手だが、もし何らかの心当たりがあるんだったら、やめといった方がいいんじゃないのか？」

大城がゆっくりと振り返る。桔平に青ざめた顔を向けた。

「とりあえずこの先、座ってできる仕事はねえやな。ここにいたって同じかもしれないが、キッツイ監視ついて、何するにも制限いっぱい、給料が十分の一になるよか、まだましかもってことだ。や、その前にブチこまれちゃたりしてな。結局自分の身を守るためにも、そいつらメガルにしがみつくしかねえんだな、かわいそうに。でも仕方ねえよな、自業自得なんだもんな。げっははは！」

げらげら笑う桔平。薄笑みを浮かべ、大城と向かい合った。

「ま、あんたはそういうのとは関係なさそうだから、嫌ならここから出てってもいいよ。安藤さんには俺から話しといてやる」

塩をかけられたナメクジのように縮こまり、大城が青白い顔を伏せる。

ふいに桔平の表情に陰が浮き上がった。

「ここにや、そんなフザけた野郎は一人もいねえだろうが、何もしねえで上にゴマばっかすってやがった奴等も同罪だ。三田圭一、中西徳茂、小木守数の三名を除く全員は、これよりメックと現行の仕事を兼任してもらう。どうせ今まで仕事らしい仕事もしてこなかったんだから、ヒマつぶしにやちようどいいだろ。訓練服はすでに各自の仕事場に届けておいたから、戻ったらすぐに着てみる。サイズが合わなかったら言ってくれ。今日中なら交換を受けつける」

完全に毒気を抜かれ、室内は通夜のように静まり返っていた。

見かねてか計算ずくか、それまで静観していたあさみが救いの手を入れる。

「弱い者いじめはそのくらいにしておいたら、副局長。みなさん完全に信じ込まれていらっしやるわよ」

ほっと胸を撫で下ろす幹部連。

しかし、桔平がいちるの望みを撃ち砕く。

「おいおい、俺は本気だぜ。本気でこいつらにインプと戦ってもらう。上司の命令には服従する義理堅い連中なんだろう。死ねって言や、死んでくれそうだし。こんなにもってこいの奴らどこにもいねえだろ。適材適所ってやつだ。もともとあんたら一人分の給料で、兵隊、三、四人は雇える計算だから、それくらいやってくれてもやりすぎってこたねえだろ。仮にぶっこ抜いた分入れることがありや、もつと働いてもらわなきゃなんねえけどな」

その声は耳をふさいでも彼らの心の中に侵入してきた。

「無理だとわかっているのに？」

「無理でも何でもやってもらわなくちゃ困る。何せ、メックは今俺一人だけなんだからよ。あるモンでしのがなくちゃならねえんだ。本当は隊員の急募でもしたいところだが、残念なことに俺は忙しすぎて、そんなことをしているヒマはねえ。てめえらが仕事をまともにやらねえツケが、全部こっちにまわってきやがんだ。そんなに簡単に前くらいのレベルが揃うとも思えねえしな。とりあえず、捨てゴマモードでだましまし使っていく所存だ。もしどうしても嫌だつてのなら、俺のかわりに明日までに前と同じくらいの猛者どもを連れてきてくれや。やつつけで集めてきたって駄目だぜ。そんないい加減な奴ら雇うつもりは、ケツの毛ほどもねえ。俺が使い物にならないと判断したら、代わりに自分らに穴を埋めてもらうからな」

げっそりする幹部連。

大城も十も老けたような顔つきで、足もとばかりを見続けた。ドンと机の上に足を投げ出す桔平。

弾かれたように顔を向けた連中を激しく睨みつけて、桔平は言い放った。

「ガチだ！ よく聞け、ボケジジイども！ 明日までに直筆で始末

書百枚書いてこい。徹夜してでも書いてこい。代筆は認めない。内容は自分で考えろ、って言いたいところだが、むしろ、あんたのことを冷静に見てた部下とかに考えてもらった方が的確かもしれない。もし俺の意図と違ったこと書いてきやがったら、その都度倍にして書き直した。それと自分らの足で百人の嘆願書を集めろ。身内じゃない。ここで働く人間のものだけだ。一人一人頭を下げて、丁寧をお願いしてこい。自分達の無能さのせいでメックを失ってしまった、何としても復帰していただきたいのですが、申し訳ありませんがお力をお貸しいただけませんか、ってな。期限は今日一日。その様子をきっちりビデオに収めて提出しろ」

「しかし、我々にも他にすべきことが……」

「安心しろ。あんたらがいつもどおり仕事をサボってても、いつでもおり世の中は回っていく。忙しい職務の合間を見て、何日かかって俺が全部見てやる。ちなみに俺が納得してハンコ押すまでは、あんたら全員給料ねえと思っとけ。一人でも不合格者がいるうちは連帯責任だ。気に入らねえんなら、労組でもストライキでも好きにしろ。俺が全力で叩き潰す。あ、それから、もう一つ教えておいてやる。俺のガキの頃からのあだ名だ、覚えておけ」にたり。「とても恐ろしい男だ」

窓の外、青空の下を、自由の鳥が飛び立っていく。

一人が呆けたように呟いた。「……そのままじゃないか」

第八話 『終わりなき連鎖』 3（後書き）

のぼしが入る名前を好んで使ってしまいます。いわく、「〇ー〇」、「〇〇ー」、「〇よー〇」、「〇っ〇ー」、「〇ー〇〇」などです。やっぱり緊迫した場面とかで叫びやすいというのが最大の利点でしょうかね。日常でも、自然と名前呼びがしやすいというのもメリットだと思います。呼びづらい名前で、名字でしか呼ばれない者の願望でもあります。

第八話 『終わりなき連鎖』 4

休日に光輔と夕季は海岸へやって来ていた。当然制服ではなく、二人ともハーフパンツにシャツを合わせたラフな格好だった。

その姿を確認し、出迎えるメック隊員達。

南沢が先陣を切った。

「何だ、夕季、用があつたんじゃないのか？」

「……う、ん」

続けて駒田が参戦。

「おまえが来ないって言うから、みんな淋しがつてたんだぞ」

「髪縛ってないと別人みたいだな。女子大生みたいだ」

「俺はポニーテールの方が好きだけどな。できたら、前髪まっすぐ揃えたやつがいいんだが」

「おお、オッサンだな、コマ。ポニーテールとか直球で言っちゃうあたり」

「うるさい」夕季をちらと見やる。「やめちまったのか？」

「……その日の気分で」

「気分かよ。そんなメンドいのか？」

楽しげに笑う駒田をとまどうように眺め、夕季がもごもごとつないでいく。

「……前髪がうまく作れないと、やめちゃう時もあるし」

「なんだよ、おまえも結構乙女なんだな」

「……」

「まっすぐ揃えておけばいいだろ。昔の娘みたいに」

「……ん」

「だってさ」光輔も参入する。

光輔だけをしっかりと睨みつけた。

「うるさい」

「……うゝん」

「おまえ、やらかしたらしいな？」

デッキチエアーを大きくしならせ、缶ビールをグビグビやりながら鳳が桔平を横目でうかがう。

「別に、たいしたことはしてねえ」

隣で缶ビールをグビグビやりながら桔平が答えた。

「たいしたことねえわけねえだろ」グイッと飲み干す。「実際に戦闘服、送りつけたそうじゃねえか。着るかどうかともわからねえのに。オドシにしちゃ、コストかかりすぎなんじゃねえのか？」

「あんたらのお古を適当にバラまいただけだ。どうせ着るわけねえって、最初からわかってたしな」

「強烈な警告状みたいなものだな。ハツタリだとわかっていても、無視できねえ。おまえ、あの大城って野郎、完全にヘコませたんだってな」

「ああ、あのキャンキャン大声出す、切れたナイフか」グイッと飲み干す。「あいつが泣きそうな顔して嘆願書集めてるビデオあるぜ」
「おまえも悪趣味だな」

「なんだよ。観たくねえのか？」

「観てえに決まってんだろ！」躍り上がるように、桔平に次のビールを手渡す鳳。「でも、おまえな、そんな無茶して大丈夫なのか。ちびっと、やりすぎなんじゃねえのか」

「知ったこっちゃねえって。あの女の考えてることはわからんからな。また、いつ二等兵になったって不思議じゃない。だったら、できるうちに好き勝手やっただけよ。どうせいつかはクビになる。暴れるだけ暴れて、はい、さよなら、だ」ふいに申し訳なさそうな顔になった。「一週間の特別休暇じゃ少なかったか？」

「上出来だ」にやりと笑う。「鼻毛出てるぞ、おまえ！」

「あんたもな！」

「そうか、まさかおまえみたいにボーボーじゃないだろうな！」

「いや、ボーボーだ、見てらんねえぞ！」

「そうか、安心したぜ、ガッハッハ！」

「あんでもねーよ！ ギャッハッハ！」

カンパニー！

ビールが半分以上飛び散った。

「だがな。それまで一切口出しをしなかった博士が、突然こんな強硬手段に出るとは意外だったな」

「ああ。政府とのつながりをスッパリ断ち切るつもりだろうな。どれえもん、つきつけてよ」

「今度は俺達がメガルを守る番だな」グイと豪快に飲み干す鳳。「それにしても、進藤が司令官とは。何考えてやがる、あの博士は」

「さあな」

「あんな小娘に務まるのか？」

「務まるさ」桔平もグイと飲み干した。「あいつはただの操り人形だ」

「まあ、おまえが敵を作るのは今に始まったことじゃないが、たいがいにしとけよ。改めて俺が言うようなことでもないかもしれないが」「命狙われちまうってか？ そいつはねえだろ。どこの企業も組織も、メガルに手を出すのはタブーだ。そんなヤバイ橋、奴ら渡らねえよ」

「今まではな」

「んあ？」

「おまえがパワーバランスを崩しちまった」

「……」

「おまえが蒔いた火種は、あつという間に世界中に広がる。導火線でできた蜘蛛の巣の真中に、火の点いたマッチ棒を落とすしちまったようなもんだ。途中でうまく消えてくれりゃいいが、クビぐらいですみや御の字だろうな。覚悟しておけよ」

「ふん。これ以上、何を覚悟しろって？」

「事情が違ってきている。守らなきゃならないものが増えすぎた。俺にも、おまえにも」

「何も変わってねえよ」陽射しの眩しさに目を細め、缶をかざした。「必要なものも、守らなきゃならないものも……」

鳳が立ち上がり、トイレへと向かう。

暑苦しさにネクタイを剥ぎ取り、桔平はクーラーボックスの中から缶チューハイを取り出した。午後からまた持ち場へ戻らなければならなかったが、おかまいなしである。

ふと、後方からちらちらと視線をよこす夕季の存在に気がついた。「なんだ？」

「……」

何かを言いたそうな顔だった。

「俺に何か言いたいんじゃないのか？」

「……」紙コップ越しに桔平を眺め、少し不機嫌そうに夕季はそれを口にした。「あたしのこと、クソ生意気だって言った」

ドキッとする桔平。さあつ、と酔いが覚めていくのがわかった。

「……言って、ねえよおう」

「言った」

「……。おまえ寝た振りしてやがったな」

「……」

「それでずっと根に持ってやがったのか」

「……別に。ただ、大人なのに、もう少し考えてものが言えないのかな、って思っただけ」

「そういうところがクソ生意気だってんだ。意外とネチっこい野郎だな」

「……」夕季が口をへの字に曲げる。すねたようにそっぽを向いた。

「もういい」

「わかった、わかった、もう言わねえ。言わねえからそういうのは勘弁してくれ。俺の繊細な神経がもたねえ」

「……」ちら、と様子をうかがう。「ケーキ」

「？」

「おごってくれるって、言ってた気がする……」

「わかった、おごってやる。ゲロ吐くまで食わせてやる。だからもう、ネチネチ責めるのはやめてくれ」

「……」

夕季が顔をそむける。

それを見て桔平がふっと笑った。

以前の夕季なら、そういったことを決して口にはしなかった。心に余裕ができたからだと思った。

「ならおまえ、光輔の話も全部聞いてたのか？」

背中を向けたまま夕季が頷く。

「ひかるさんが事故死したのは知ってたけど、本当のことは何も教えてもらえなかった。お姉ちゃんもあたしには言わないようにしてたみたいだから」

「おまえを心配させたくなかったんだろ？」

「……。光輔には借りがある。今度はこっちが力になる番だ」

「そういうの、あいつはどうでもいいみたいだぞ」

ゆっくり振り返る夕季。桔平の顔に注目した。

「知り合いが困ってたから助けた。それだけだ。それを借りだの何だの妙に重くしちまうと、あいつ淋しがるぞ」

「……」

「本当にあいつに義理を感じてるのなら普通にしてろ。その方が喜ぶだろ。ま、おまえの普通ってのが、一般的にかなり普通じゃねえのがイテえとこだが」

「自分だって普通じゃないくせに」

「何！」

光輔のいる場所に目をやる夕季。メック隊員達とすっかりうちとけている様子で、一緒にバーベキューの用意をしていた。

「あの野郎、すっかりなじんじまいやがったな」

「……。昔からそうだった。光輔の周りにはいつも人がいる。いつも人が集まる……」

「おまえもだろ」

夕季が不思議そうに桔平を見つめる。

桔平は楽しそうに笑っていた。

「おーい、夕季、肉が焼けたぞ！」

南沢の声に振り返る夕季。

駒田が続いた。

「一番いいとこの肉だ。おまえに最初に食わせてやる」
困惑したように桔平を見続ける夕季。

「ま、おっさん限定じゃありがたみもねえか」

しようなない、と言わんばかりに桔平が立ち上がった。

「おーい！ おまえら！ 残念だが夕季は上等な肉がチョー嫌いだ
そうだから、代わりに俺が食べちまってやるぞ！」

「黙れ！ あんたに食わせる肉はない！」 駒田がぼつりと切り捨てた。

「何！」

南沢が追い討ちをかける。

「残念ながらあんたはもう俺達の隊長じゃない。今までみたいに無理やり上等な一番肉を食う権利はない！」

「ぬね！」

「おまけにあんたのせいで失業しかけた。こっちは所帯持ちだったのに、ギャンブルの巻き添えはまっぴらだ！」

「のおー！ おまえら！ 休暇ガツリ取り消されてえのか！」

「早く来い、夕季。肉が固くなっちまうぞ」

桔平の声を無視して、夕季に手招きする駒田。

「ギチギチに固くなったら柊さんに食わせてやってもいいが、正直不本意だ」

「何だと！ てめー！ 俺はやる時はやる男だぞ！ やればできる子だぞ！」

「チョーうまそー！」駒田のテンションがひとりでに上がる。「おい、エリンギ入れてもいいのか？ 確か、ピーマン嫌いだったな。」

よし、柊さんのはピーマン、オンリーな！」

「ナスくらい入れてやれよ」

「あと焦げた玉ねぎとラードと……」

「てめーら……」

やれやれという顔で桔平が振り向いた。

「だってよ」

桔平に背中を押されるようにうながされ、何度も振り返りながら夕季が近寄って行く。

缶ビールを片手に鳳が迎え入れた。

「おうおう、食べ食べ。食ってもっとうちの娘のようにぶくぶく太れ。そんな体じゃ、くるもんもこね……」

「言うな！ それ以上！ 訴えられるぞ！」

自主規制をかける駒田もものともせず、鳳が暴れ続ける。

「バカヤロウ！ そんなもんが怖くてメックの隊長が務まる、かつ……」夕季に睨まれていることに気がついた。その迫力に退く鳳。込み上げる想いが体の自由を奪った。「うぷっ、おええっ！」

「思わず目をそむけてしまいたくなるような酔っ払いだな……」

南沢が心から残念そうに呟いた。

第八話 『終わりになき連鎖』 4（後書き）

落語家ってすごいと思います。扇子一つであらゆるものを表現してしまうなんて。明確なイメージと的確な技術さえあれば、ヘンチクリンな語尾や妙な言い回しに頼らなくてもセリフだけでキャラ分けができるはずだし、「？」とか「！」とか「……」とか空白とか無駄に多用しなくても充分伝わるはずだし、地の文をスッキリ最小限度に収めてもしっかり映像が浮かんでくるはずだし。で、何が言いたいのかっていうと、……絵文字なんて使えなくても、別に……

第八話 『終わりなき連鎖』 5

酔っ払い達の宴は絶頂状態だった。

桔平の退席後も、光輔と夕季を肴にお下劣な座談会が続いていた。

「おまえらつき合っちゃえばいいじゃないか」

ビールを飲みながら何の気なしに南沢が口走る。

すると目を倍以上に見開く光輔の隣で、夕季が顔を赤らめた。

「おうおう、いっそ結婚しちゃえって」コンロで串ものをかえしながら駒田が楽しそうに笑った。

顔を引きつらせながら、光輔が夕季のご機嫌をうかがい見る。

「ははっ、あんなこと言ってる……」

見たこともないような凄まじい形相で、夕季が光輔を睨みつけていた。

「……頼むから俺のこと睨まないでくれる」

「睨んでない……」

「バカヤロウ！」

突然の怒号にびくつと体をすくませる光輔。

夕季の右隣で鳳がべろんべろんに酔っ払っていた。夕季の肩をぐいと抱き寄せる。

「こいつは俺の娘みたいなんだ。こんなどこの馬の骨とも知れないような、へなちょんぱにやれるか！」

「へなちょんぱって、何」

知るか、という顔で夕季が光輔を睨みつけた。

「でもさ、鳳さん。こいつらの子供なら、すげえのが産まれると思うぜ」

「そうそう。素手でインプをしばき倒せるような」

駒田と南沢をくわっと睨みつける鳳。

「バカヤロウ！」

さらに強く夕季を抱き寄せた。
夕季の口がへの字に曲がる。

「俺はな、こいつがかわいくてかわいくて仕方がないんだ。娘の生まれ変わりだとさえ思っているのだぞ！」おろんおろんと涙を流す。
「それはもう、食べてしまいたいくらいだ！ 小遣いもやるぞ。いくらだ、いくら欲しい、おまえ」

「いない……」

「二万円くらいでいいのか？ だいたい相場はどれくらいだ？ いくら渡せば納得して帰ってくれるんだ！ 後でもめるのは勘弁してくれ」

「エンコーじゃないか」あきれ顔の南沢。「自分の娘、殺しちゃったし」

「泣いちゃったよ。おっさん、へべれけだな」軽蔑顔の駒田。「くれるってんだから、とりあえずもらっとけよ、夕季」

「……いない」

「おい、駒田、二万円貸してくれ」

「嫌だ！」

「たしかに鳳さんの娘さんよりは夕季の方が美人だよな」南沢が笑いながら言う。「かなりね」

鳳の腕の中で夕季が赤くなった。

「たわけが！ どうみてもいい勝負だろうが！ 甲乙つけがたいところだ」

「どこに基準をおきや、そんな強気になれるんだ……」

駒田が言葉を失う。

鳳が豪快に笑った。

「同率首位だ！ 両校優勝だ！」

「わけわかんねえ！」

南沢がフォローに入る。

「鳳さんの娘も、女子プロだったら、普通かちよつと下くらいかも

しれないけどな」

「何の女子プロだ！」

「全部言わせる気なのか？ いいのか？」

ぺっと唾を吐き捨てる鳳。不機嫌そうな顔になった。

「もういい！ おまえらにはもう、娘にも夕季にも近寄らせん！」

「あんたの娘は別にいいけどな」

駒田を睨みつけ、鳳が夕季にぐっと顔を近づけた。

「夕季、こいつらにはもう近づくな。バカが伝染る！ 腐る！ 心

配するな、俺がおまえにふさわしい結婚相手を探してやる」

駒田があきれたように言った。

「どうでもいいけど、あんた、さっきから夕季にすごい顔で睨まれてるぞ」

「おおうっ！」

「睨んで、ない……」

夕刻、夕季と光輔は忍が入院している病室に足を踏み入れた。

その顔を確認し、忍が読んでいた週刊誌を放り出す。

「光ちゃんじゃない。久しぶりだね」

満面の笑みで出迎える忍に、くすぐったそうな顔を向ける光輔。

「ははっ、元気そうだね、しいちゃん。夕季に頼んで連れて来てもらったんだ。本当はもっと早く来たかったんだけど、ごめん」

「何言ってるの。頭下げるのはこっちの方だよ。本当にありがとうね」

「いや、俺、そんな……」

忍の目尻が下がる。心から嬉しそうに笑った。

「なんか、カッコよくなったね、光ちゃん」

「どうだろ。背はしいちゃんより高くなっただろうけど」

「ほんと？ あたし七十くらいあるかも」

「ええ！ マジ。……びみょー」

「はは」表情を正し、夕季へと顔を向ける。「夕季、光ちゃんにち

「やんと謝った？」

「謝ったよ」

「ありがとうは」

「……言った、と思う」

「あんたねえ」

バツが悪そうにうつむいた夕季を氣遣って光輔が言う。

「いいって、しいちゃん。何か、こいつにそういうことされると、かえって気持ち悪くて」

「ほら、睨まないの」

「……睨んで、ない……」

「あ、はは……。ねえ、どれくらいかかるの？」

「ん？ 来週の検査次第ってところかな。結構早く出れそう」

「そう。よかったね」

「ありがと。あ、光ちゃん、おなかすいてない？」

「ん、まあ」

「よかったら、冷蔵庫の中の物、食べちゃって。あたしも夕季もそんなに食べられないから。ほっとくと桔平さんが全部食べちゃうだろうしね」

「あたしの時もそうだった」口をへの字に曲げ、夕季が振り返る。

「いつも両手いっぱいいろいろ買ってくるけど、結局ほとんど一人で食べちゃって。一人でくだらないこと、ずっとしゃべってるし、看護師さんとかにもエッチなことばかり言ってたし。来るたびに冷蔵庫の中、必ずチェックしてたし。何しに来てたんだろう、あの人」

「あの人らしいけどね」

「はは。らしい気がする、俺も」

「迷惑だよ」

「そう言いなさんなって」

「だって」

「来てくれるだけありがたいよ。気にかけてくれてるんだから」

「そう、だけど……。光輔、バナナ」

「あ、サンキュ」

突き出すように差し向けられたバナナを受け取るや、光輔がもふもふと食べ始める。

それを見て、忍が懐かしそうに顔をほころばせた。

「光ちゃんって、昔っからバナナ好きだよね」

「ん？ んん、んん」

「泣いてる時だって、バナナあげると泣きやんだもんね。猿の子みたい」

「猿の子って……。いや、それは泣き終わってから、もらってただけみたいなの……」

「だって？」

「ん、んん」

「お姉ちゃん、りんごの皮むこうか？」

「あ、お願い」

「あ、夕季、そのメロンも」

「……」 果物ナイフを片手に夕季が光輔をじろりと見やる。「皮むくの？」

「いや、切ってくれると、光輔、誠にありがたいかな、と」

「……。とっておこうと思ってたのに……」

「……。マジですか……」

「オレンジで我慢すれば」

「うーん……」

「あっははは」二人のやりとりを眺め、忍がおもしろそうに笑った。

「いいよ、切っちゃえ、切っちゃえ。せっかく来てくれたんだもの。

ね、光ちゃん」

「かたじけない」

「もったいない」

「マジで……」

「あっははは」

目尻の涙をこすり取りながら、忍が夕季へ向き直った。

「あ、そうだ、夕季。エスの人達、感謝してたよ。ありがとうって伝えてくれってさ」

皿やフォークを取り出し、夕季が何気なく顔を向ける。

「そんなのいいのに。頼まれたわけでもないし」

「だから余計にね。あんたがお目玉もらったこと、すごく気にしてたよ。また改めてお礼がしたいって」

「普通にしててくれれば」桔平の言葉を思い出し、手を止める。「……いいのに」

「いいじゃない。悪いことじゃないんだしさ。まあ、ぶきっちょだから仕方ないか」

「ぶきっちょって関係あんの？」

「さあ」

楽しそうに笑い合う光輔と忍。

照れたように背を向け、夕季も安堵の表情を浮かべた。

「こうやって見ると結構お似合いだね。つき合っちゃえば？」

「ちよっと、しいちゃん！」

何気ない忍の一言に凍りつく光輔。おそろおそろ振り返ると、夕季が光輔を睨みつけていた。

「だからあ」

にたにたとおもしろそうに眺め続ける忍に目をやり、夕季が口をへの字に曲げる。

「まんざらでもなかったりして」

「……。お姉ちゃんと木場さんもいい感じだよ」

「な！　ちよっ！　おまつ、ばっ、ちよっ、ちよ！……」

「理想的な上司と部下って感じがする」

「……。……ま、あね」

「あっははは！」

夕季が光輔を睨みつけた。

「だからあ……」

第八話 『終わりなき連鎖』 5 (後書き)

ソノラマ文庫のエイリアンシリーズが好きでした。結構な頻度で脱線しまくっていたと記憶していますが、ウンチクも含め、それがいい意味で主人公の濃さを引き出していたような気がします。だから脱線ばかりでもいいのか、というわけではないのですが……。ちなみに某大御所ホラー作家の脱線は苦手で、長編はおろか、中編すら読了したことがあります。

またおつき合いしていただきまして、ありがとうございました。

第八話 『終わりなき連鎖』 6

辺りはすっかり暗くなっていた。

病院を出て、街灯の明かりに照らされ、駅までの道のりを並んで歩く光輔と夕季。

通りの二車線道路は車両がせわしく行き交い、喧騒とライトが目まぐるしく交差していた。

「あゝあ、またすぐに期末考査だな。こないだ中間が終わったばかりなのに」

あくび交じりの何気ない問いかけを、夕季は表情もなく受け流す。

「おまえはいいよな。頭いいから。そういや、センター試験の問題やって、満点だったってホント？」

「……。誰がそんなこと言ったの」

「え？ いや、うわさだけど」

「できるわけじゃないじゃない」

「あそ……。やっぱ、都市伝説か。んじやさ、五十メートル走が六秒台だとか、握力が五十キロ超えたとかいうのもガセ？」

「……」

「……そっちはガチなんだ」沈黙を恐れるように、話題を探求し続ける。「あ、でもさ、ずっとトップなんだろ、成績」

「……」

「違うの？」

「そんなの、入試の時だけ」

「……さすが選抜クラスだな。おまえより頭のいい奴もいるんだな」

「……あたりまえじゃない」

「何人くらい上にいんの？」

「……。三十五人」

「……あそ。さすが選抜クラス……」

光輔がちらと夕季を見やった。

「だいぶ調子戻ってきたみたいだな。顔色もいいみたいだし」

「太っただけだよ」

「でもまだ前ほどは太ってないよな？」

夕季の足が止まる。顔も向けずにぶすりと突き刺した。

「前がすごく太ってたみたいに聞こえる」

「いやいや、そういうわけじゃ」

「……。さっきから、何」

「や、別に、そんな……」焦ったように光輔が取り繕う。ふっと笑い、気を取り直した。「あのさ、無理に連れてって、悪かったかなって」

「何」

「昼間。ああいうところ、嫌いなんだよな、おまえ」

「嫌いじゃないよ。別に」

「そっか。ならいいんだけど」

「苦手だけど」

「……だよな」

「……。あたしがいると雰囲気悪くなるし」

「なってないって。何、おまえ、勝手に空気読んじやった感じになっ
てんの」

「……」

「それ言うなら、あいたた発言とかでシラけさせてたの俺の方だっ
て」

「……。すっかりなじんでたくせに」

「必死だったんだって。カラ回り全開。南沢さんとかのフォローに
何回救われたことか」

「……」

「みんないい人達だよな。下品だけど。ま、おまえ的には鬱陶しか
ったりするんだろうな」

「……. そんなこと思ってない」

「八割方シモネタなの？」

「……」

「……」 光輔が何かに気づく。自嘲するように笑った。「そっか。そうだよな。そんなわけないよな」

どこか様子のおかしい光輔に、ようやく夕季が怪訝そうな顔を向ける。

「何が言いたいの」

「いや、いや。何でもないけど、なんか、羨ましいかなって」

「……. 何が」

「いや、おまえさ、あの人達にすごく信頼されてたみたいだから」

「……. そんなことないよ」

淋しげに顔をそむける夕季。

それを笑い飛ばすように、光輔が続けた。

「あるよ、めっちゃくちゃ。俺にもよくしてくれてたけど、やっぱり距離を感じたもんね。おまえ、すごいよ。ほんと、すごい」

「……. すごく嘘くさい」

「全然嘘じゃないって。あ、こういうのが嘘くさいのか」 夜空を見上げて笑った。「ま、いっか」

「……」

流れ続ける車両のライトを見下ろすように、高架の上を列車が走り抜けて行く。県道を隔てた駅の周辺では雑踏の残り香が漂い、そこに生活のサイクルを感じとることができた。タクシー乗り場で並ぶ人々。ロータリーにたむろする若者達。待ち合わせの場所から動き始めるカップル。コンビニ。ネオン。笑い声。どこにでもある風景。それを夕季は別世界のもののように眺めていた。

平和という日常に自分が埋もれることに違和感を感じながら。

夕季にとって、平和という言葉は何ら意味をもたないものだった。自分が必要とされない世界。その方が怖かった。必要とされれば己の身を削ってでも応える。それだけが自らの存在意義だとかたくな

に言い聞かせてきたからである。

しかし、信じられる仲間をえて、愛する者の心を取り戻せた今、この穏やかな気持ちも悪くないと思い始めていた。

求められればすぐにでも応じる覚悟はある。それでも、こうして気の知れた輩と他愛もない日常を共有することを望む心があることを、今は否定する気はなかった。かつて認められなかったその気持ちを、心地よいとさえ感じていたのだから。

「……あのさ、さっきのさ、話だけど」

信号待ちの最中、夜空を見上げ、光輔が自嘲気味に切り出す。

「助けてもらったのに普通にしろっての。それって難しいよな」何も言わず、夕季が光輔の顔に注目する。

「だってさ、死にそうなところ助けてくれたんだぜ。頼んでもないのに。それってさ、やっぱ、嬉しいじゃんか。意識しないでいろって方が無理だよ」

「……」

「結局、俺だって夕季に助けてもらったわけだしさ。ほんとには普通にしてた方がいいってわかってるんだけど、なんか、やっぱさ」

「あた……」

「誰にでも苦手なことってあるけど、おまえは自分にしかできないことをちゃんとやってるから、すごいと思う。嘘くさいかもしれないけど、俺はそう思うよ」

「……」

夕季も空を見上げる。

梅雨時だというのに空は澄み渡り、満天の星が瞬いていた。

闇の中、突如として大地が割れ、山が崩れ落ちる。

淡い光にまみれた街を切り裂き、ビルを押しつけてそれは現れた。悪魔の顔を持つ、それらが。

「それは本当なのか？」

司令部別室で桔平が顔をしかめる。

かつて風野専用だったその机の上で妖しげに手を組み合わせ、重々しくあさみが頷いた。

「いつからだ？」

「昨日の深夜、突然現れたの」報告書を桔平に差し出すあさみ。「全部で五十三体。日本中にまんべんなく散らばっているようね」

「これが……」報告書に釘づけになりながら、桔平がごくりと唾を飲み込む。「すべてアスモデウスだと言うのか」

「まだそうとは言い切れない。確かに先のものと同サイズ、同デザインだけれども、これらはいまだ何の動体反応も示していないから。いわば木偶ね」

「ガイア・カウンターは」

「反応なし」

「……五十三体のアスモデウス」

「確認できるものだけだね。人目の届かない山間部や海の底にもいる可能性を考慮すれば、それ以上と思う方がセーフティじゃない」
「……」

報告書に貼付された数百枚に及ぶ現況写真を見比べる桔平。

日本中の都市にアスモデウスをかたどった石像のようなものが出現していた。それは川の中に顔だけ出したものもあれば、巨大なビルを引き裂いて居座ったものもある。

そのすべてが、自分達がいまみえた、あの狂猛な悪魔と同じ姿だった。

違うのは石像のような色だけである。

「だからと言って……」

「だからと言って、黙って見ているわけにもいかないでしょうね」桔平の声にかぶせて言う。「政府も監視だけは続けるみたいだけれど、最終的な局面に至ってはメガルに出勤を要請してきている。前の戦闘で相当懲りたみたいね。モンスターに対抗できるのは竜王だけと、向こうから言ってきた次第」

「……だからって、日本中に散り散りになった五十以上もの敵を、竜王とメックだけで倒せてんじゃないだろうな」

「仕方ないじゃない。それしか手段がないんですもの。実際、この近辺の方面隊の戦力はガタガタよ。これ以上彼らに頼ろうとするとこそ、酷というものじゃないのかしら」

「……」

桔平が難しい顔で考え込む。

それを見てあさみがふつと笑った。いたずらめいた、妖しい笑み。「もし一斉に彼らが目覚めたら、こちらとしても対抗手段がないわね」

ゆっくり顔を向ける桔平。

「そこで提案なんだけれど、彼らが目覚める前に私達が遠征して、一体一体討伐していくっていうのはどうかしら。もちろん、メックだけでなく竜王も配置させるけれど」

「……」不信そうにあさみを眺めた。「風野博士は何て言ってる」「博士は関係ありません。竜王の指揮権も、私達に一任されることになったから」

「！」桔平が目を見開く。「何だって？」

「博士からそう提案してきたの。私達の方が、より竜王を効果的に運用できるはずだからって」

「……」

「ここから一番近いポイントは約三十キロ北西の野部塚市ね。まずはここからつついてみましょうか」

あさみの顔に注目し続ける桔平。その表情は変わらない。

何を考えているのかまるでわからなかった。

あさみの左手の薬指に、エメラルドが輝いていることに気づいた。

「婚約指輪か」

「あら、目ざとい。さすが恐ろしい男」ふつ、と微笑む。「まあ、そんなところかしらね」

「もの好きな奴もいたもんだな。そいつ、自分が殺されるかもしれ

ないって知っているのか」

「失礼なもの言いね。でも残念ながら、殺されるのは彼ではなく私の方かもしれない」

「物騒な彼氏だな」

「ええ。やきもちをやくのなら、あなたも覚悟しておいてね」

「誰がやくか！」目を剥くように食いついた。「いっそ、そいつを副司令にしたらどうだって思ったただけだ」

「あら？」面白そうにやりと笑う。「それができるくらいならとつくにしているわ。あなたなんか頼らずにね」

「ああー！ ああー！ 俺なんかで悪かったな」

「仕方ないじゃないの。とりあえず我慢してあげるわよ」

「おい、こら、勝手に任命しといて、思っくそ不服そうじゃねえか。気に入らねえぞ。まさか今さらなんて後悔してんじゃねえだろうな」

「そうとも言えるわね」

「冗談じゃねえぞ！ こっちだって好きで……」

ノックの音に振り返る桔平。

「どうぞ」

あさみがそう告げると一人の少年が姿を現した。

鮮やかに流れる金色の髪と、触れるものすべてを切り裂きそうな鋭いまなざし。

霧崎礼也だった。

第八話 『終わりになき連鎖』 6 (後書き)

引越しのタイミングでやらかしてしまい、一ヶ月ほどネットワークから締め出しくらってました。現代社会における一ヶ月の速度、マジはんばいです。すっこり置いてけぼりのウラシマタロー……

第八話 『終わりになき連鎖』 7

竜王の格納庫前で、礼也が追いつめられた獣のような瞳を泳がせる。

メガルの指示により、野部塚市内全市民の避難が午前中に完了するよう政府からの通達が出ていた。加えて周辺都市をはじめ県内の約半分の地域が避難対象となっており、作戦決行時刻に合わせ、山凌市でも全面的に午後までの帰宅と避難勧告が発令される。

直接関与する礼也に至っては、打ち合わせのため前日から基地内で缶詰め状態だった。

礼也にとってこれが最後のチャンスだった。

そう告げられたわけではない。だが、己のおかれた立場を見誤ることはなかった。

攻撃対象は生体反応のない石像のようなものであり、単なる解体作業だと思って気楽にかまえていてくれればいい、とあさみは言った。

しかし、その裏にある真意に礼也は気づいていた。

今のメガルに必要なのはロボットを操縦できる者ではない。竜王を使いこなせる者なのだ。

今回の作戦には、いまだ覚醒をはたしていない陸竜王の、覚醒をうながす意味合いもあった。そのため素行の悪い礼也の行動も不問とされたのだ。

礼也は積乱雲を見上げるように、過去を思い返していた。

幼少の時分、身寄りのない子供達を集めるガイアー財団に声をかけられた。

そこで彼らの役に立てば将来が約束される。

自分を見下していた輩を見返すために、礼也は死に物狂いで努力

してきた。過酷な選定にも耐えて勝ち上がってきた。多くの競争相手達を蹴落としてきた。

誰一人信じることなく。

やがて礼也の周りにも、わずかではあるが一握りの心を許せる人間達が現れた。

それが礼也にとってのすべてだった。

兄のような陵太郎の強さを思い出す。

雅の笑顔と優しさ。

そして……

＊

大声で泣き出した光輔に気づき、雅が走り寄って来た。

光輔の目の前で礼也が怒り収まらぬ顔つきで仁王立ちしている。

雅が礼也をたしなめた。

「どうして光ちゃんばかりいじめるの！ 駄目じゃない」

光輔をなぐさめる雅。その後ろで陵太郎が笑っていた。

「光輔が礼也に勝てるわけないよな」

「笑いごとじゃないよ。綾さんに思いつきり叱ってもらわなきゃ」

「そんなたいしたことじゃないだろ」

「駄目！ 弱い者いじめは絶対許さない。謝るまで、あたし、礼也

君とは口きいてあげない」

「だってよ。おい、どうする？ 礼也」

礼也は表情もなく二人を眺めていた。

やり切れないまでの孤独感に心をくすぶらせながら。

「礼也君」

雅とともに光輔をなだめていたひかるが礼也を呼ぶ。

小学校低学年の礼也から見れば、五つも六つも年上のひかる達は大人と同じだった。

叱られると思い、礼也がそっぽを向く。

するとひかるの方から近寄って来た。

殴られるものと身がまえる礼也。

光輔の顔が目映った。

礼也には見えていた。

光輔の周りに存在する、光あふれる輪のようなものが。

近づくことさえためらわれるような眩しさが。

「ごめんね、礼也君」

ひかるの優しいげな声に、はっとなって振り返る礼也。

ひかるは笑って礼也を見つめていた。

礼也に手のひら大の模型を手渡す。

「これ礼也君のだね。光ちゃんが取っちゃったみたいでごめんね。ちよっと触りたかっただけなんだって」

「……」

「ほら光ちゃん、ちゃんと謝って」

「……ごめんね」

光輔がべそをかきながら謝った。

雅が申し訳なさそうな顔をする。

「あたしもごめんね。礼也君もいけないんだよ。そうならそうとちやんと教えてよ」

「おまえがいじわるだからだ」

「お兄ちゃん！ でも、何も泣くまで叩かなくてもいいのにな」

その様子を楽しそうに眺めるひかる。礼也に穏やかなまなざしを向けた。

「光ちゃんと仲良くしてあげてね」

柔らかく暖かな光につつまれた、ひかるの笑顔が眩しかった。

あふれ出しそうな涙をこらえるために、ぐっと歯を食いしばる。

見下ろすように光輔を睨みつけた。

多くの仲間達の笑顔を光の輪のようにまとう光輔。

それを交わり合えぬものと自ら線引くように。

＊

背中越しに聞こえてくる会話に礼也が耳を傾ける。

半日授業を終えた、光輔と雅らしかった。

建物の陰となり、二人から礼也の位置は確認できない。

「光ちゃん、お兄ちゃんの体鍛える道具とかいらない？」

「どんなの？」

「こおんなのとか」

「エキスパンダーね」

「こおんなのとか」

「あ、グリッパーね。握力のやつ」

「こおおんなのとか」

「腹筋鍛えるやつ？」

「こおおおんなのとか」

「何それ？ エアロバイク？」

「違う。スキーみたいにしゅかしゅかするやつ。ひ弱でもてなかったお兄ちゃんが、たったの二週間で」

「もてるようになったの？」

「ううん。押し入れにしまっちゃった。忙しくてやる暇なかったみたい」

「……。りょうちゃん、全然ひ弱じゃなかったじゃん。もともとガツチリしてたしさ。もてなかったかもしれないけど」

「ねえ、もてなかったねえ。あつ苦しいから」

「腹筋のだけもらおうかな」

「全部持ってってよ。特にスキーのやつとか」

「俺の部屋、そんなでかいの置けないって」

「あと、ハリセンとかもあるよ」

「なんで！　なんでそんなん買ったの！　りょうちゃん」

「あたしが買ったの。お兄ちゃんシバこうと思って」

「なんでシバくの！」

「あつ苦しかったから。結局一度もシバけなかったけどね。今度、光ちゃんシバいてあげるね」

「……好意的な感じになってるのはなんでだろ」

「結構痛いみたいだよ。桔平さん、涙目になってたもの」

「あの人シバいたの！ 怖いよ、おまえ！」

「桔平さんが言い出したんだよ。どれくらい痛いのか芸人として知りたいからって。お笑いのセンス全然ないのにね。失敗して顔削っちゃったんだけどねえ」

「なんでへらへら笑いながらそういう恐ろしいこと言えるの……」
「てへへ」

「いや、てへへ、じゃないだろ。てへへ、おかしいじゃん！」

「わあ、光ちゃん、ツツコミうまくなったよね。なんで、の連発はややいただけないところだけど。前みたいにすぐピーピー泣かなくなったのは立派、立派」

「いや、泣かないから、こんなことくらいで、いくらなんでも」
「そう？」

「そう！ あ、そう言えば、俺もあの人シバいたんだった。今思うとコエー！」

「え？ ノリツツコミ？ 被せボケじゃないし、ツツコミノリツツコミって言うのかな。結構高度だよな」

「いや、俺、そういうテクニク、一切使ってないから……」

「ねえ、テンドンって知ってる？」

「知ってるよ、天井くらい。あんまり食べたことないけど、おいしかったよ！」

「ねえ、おいしいよねえ」

「何それ……。雅、ひよっとして、自分にお笑いの才能があるとか思っていない？」

「え！」

「……」

「……なんだかショックだな。そういうふうに言われちゃうと」

「あ……。ごめん。そういうつもりじゃ……」

「光ちゃんのくせに」

「そっち！」

「桔平さんもよくスベってるから、ダメ出ししたりするんだけどね。実にせつなそうな顔してる。勘違いしてるんだよね」

「いいじゃん！ 見逃してあげようよ、お世話になってんだから！」

「それとこれとは別でしょ」

「なんで！」

「言ってあげた方がその人のためなんだよ」

「そうかな……」

「夕季なんてひどいんだよ。見て見ぬ振り」

「いや、いや。それがあいつなりの優しさなんじゃないの！ おまえの方がひどいって、やっぱ！」

「長いなあ。ツッコミはもっと簡潔にしようよ。こう、スパッと切れるようにね」

「何が！」

「今までは可哀想だと思ってスルーしてたところもあるけど、これからはビシビシいくからね。そういう点ではあたし、結構小悪魔だから」

「……いったいなんの話？」

「あ、そんなことどうでもいいんだけど、あたし、桔平さんに呼ばれてたんだ。行くね」

「どうでもよかったんだ……。ま、いいけどさ」

「ねえ、お昼まだでしょ。一緒に食べよ」

「いいけど」

「じゃ、あとでね。食堂で」

「あ、うん」

「カツカレー食べよ」

「カツカレーって！ そこはカツ丼とかじゃないの！ で、天井でしょって感じで」

「もう、くだいなあ。その流れ、とっくに終わってるのに」

「ああ、ああ、くだいって、もうってさ。長いとか、ほんとに……」

「あっははは。ごめん、ごめん。冗談だよ」

「もういいって。なんでおまえってそんななの。いや、昔からイジワルだったけどさ」

「心外。イジワルとかじゃないよ。ただ人をからかって困らせるのが好きなだけ」

「そういうの、たぶんイジワル言うんだけど」

「ええ！　びっくり！」

「こっちがびっくりだよ……」

「ほんと、ごめんって。泣かないでよ。こっちまで悲しくなっちゃう……」

「いや、泣いてないから！　泣きたくなってきたけど！」

「あはははは」

「あゝあ……」

突き刺すような視線を彼方に投げかけ、拳を握り込む礼也。

「いつだって、あいつは……」

「……かすめ取っていく」

『苦労して集めたものを……』

『ようやく手に入れたものを……』

『本当に欲しかったものを……』

『無意識に、そして無邪気に横取りしていく』

『それが当たり前のように』

『まるでそこに何もなかったかのように、すべて……』

『俺から奪っていく！』

ギリッと奥歯を噛みしめた。

第八話 『終わりなき連鎖』 7 (後書き)

経験則から見れば、どんなにくだらないギャグでもちゃんと拾ってくれる人間は学校や職場で重宝されます。特殊スペックのない人は、ツツコミやフォローを勉強した方が幸せになれるかもしれない。オヤジギャグをさばけるだけで、スネオ・ポジションを確立することも可能です。ただしセンスのないツツコミは命取りとなりますが……

第八話 『終わりなき連鎖』 8

格納庫付近の木箱に腰を下ろし、焦点の定まらない視線を泳がせながら、礼也はタバコの煙を吐き出した。視界が白く曇り、先が見通せなくなる。

脳裏をいくつもの言葉がかけめぐっていた。

『だったら、てめえが消えろ』

『いなくなればいいんだよ！ 必要ないんだよ、こんな奴』

『あんたなんか、いなくなればいいのに……』

それらは例外なく、礼也の存在そのものを否定するまなざしを向けていた。

近づいてくる影に何気なく目をやると、制服姿の夕季がそこに立っていた。

タバコを指で弾き、礼也が立ち上がる。

「どういうつもり」

無視して通り過ぎようとする礼也を夕季が引きとめた。

「礼也はまだ……」

「ろくに竜王も乗りこなせないくせに、か」

ぐっ、と口をつぐむ夕季。

「……ずっと乗っていないのに、無理だよ」

「その間におまえと光輔は化け物を倒してヒーローになった。なのに俺はいまだガラクタを乗りこなすことすらできない。さぞかし哀れに見えてんだろうな」

「そんなこと思っていない」

「嘘つけ、見下し感バレバレだぜ。陰で俺のこと笑ってんだろ。光輔と一緒に。あんなカスは放つというて、二人で仲良くやりましようってな」

「……。あたしと光輔がどんな思いをしてきたのか、知りもしないくせに」

「いい思いしてたんだろ」ギロリと夕季を睨みつける。「ねちよねちよと裸でちくり合ってよ。くんずぼぐれず、ああ、気持ちいいってなぐあいだよ」

「いい加減にすれば。そんなくだらないこと聞きたくない」

「聞きたくねえんなら、耳塞いでどっか行っちまえよ」

夕季が顎を引く。

「光輔なら、さっき雅とあっち行っただぜ。てめえもぼけぼけしてやがると、大事なペット寝取られちまうぞ。ああ見えてあの女、結構やり手みてえだからな」

「言ってて恥ずかしくないの。耳が腐りそう」

「ああ！ 凶星つかれて、いてえからじゃねえのか」

「痛いのはそっちの方じゃない」

「何がだ」

「世界で自分が一番不幸だと思ってる。報われない苦しさを全部他人のせいにしてふて腐れてる。心の弱さを認められないから、人を妬むことしかできない。あたしには、わざと可哀想な振りをして、同情をひこうとしてるようにしか見えない」

「……。へ、たいした分析だな。何でもわかんだな、おまえは。ご立派なもんだ」

「そうやって虚勢を張ってれば、つらいことから逃げても見逃してもらええると思ってる。わがままな子供と同じだね」

「あんだと！ 誰が子供だって！」

「わかってるくせに。本当は光輔のことが羨ましいだけなのに……」
「あん！ てめえ、つまんねえこと言ってるやがると、ぶちのめすぞ！」

「光輔は自分の存在すら許せないほどの、深い悲しみと傷を背負っている。自分の悲しみしか知らない礼也とは違う」

「……」 込み上げる怒りを礼也が無理やり飲み込む。夕季から目を

そむけた。「けっ、くだらねえ」

「聞きたくないなら、耳塞いでどっか行けば」

「ああっ！」

「光輔はどんなにつらいことから逃げたりしない。目をそむけたりしない。今の礼也じゃ、どうあがいたって光輔にはかなわない」

「あんだと、てめえ！」

礼也が夕季の胸倉をつかみ、ぐいと引き寄せる。

夕季は瞳をわずかにも揺らすことなく、静かに礼也を見据えていた。

「黙って聞いてりゃ、調子こきやがって。気に入らなかったんだ、前からよ。おまえも光輔も」夕季の顔に鼻先を近づけ、獣のような息づかいで吐き捨てた。「そののっぺりとしたツラにハクつけてやるよ。感謝しろや」

失望したような表情で夕季が礼也を眺め続ける。

「やめれば、そういうの。みつともないから」

「ああっ！」その両眼に激しく燃え上がる炎が宿った。「本気でバラバラにしてやるよ！」

礼也が拳を固く握りしめる。

その時。

「何やってんだよ、おまえら！」

声のする方向へ振り返る二人。

それが光輔だとわかるや、礼也の顔がさらに険しくゆがんだ。

二人の間に割って入ろうとする光輔。

「何やってんだよ、二人とも。やめろよ、もう……、わっ！」

言い終わらないうちに、礼也が光輔の肩をつかむ。そのまま押し出して体をのけぞらせた。

「うあっ！」

礼也が振りかぶる。だが次の瞬間、光輔の顔面をとらえようとした拳が宙を舞った。

夕季が礼也の襟首をつかんで引き倒したのだ。

背中から倒れ、後頭部を押さえながら礼也が立ち上がる。夕季を睨みつけるそのまなざしは、憎悪一色に染まっていた。

「あ、やめろって……」

「ぶっ殺す！」

戸惑い動けずにいる光輔を視界の外に追いやり、ボクシングスタイルをとった礼也が牽制の左ジャブを連続して繰り出す。

頭に血が上った状態とはいえ、その鋭さに、夕季は退いてかわすのが精一杯だった。

槍のような右ストレートが夕季の顔面目がけて襲いかかる。

間一髪で避け、退いた夕季の鼻先をかすめた剛拳は、その場にとどまった前髪をスローモーションのように弾いていった。

踵を地面に引っかけ、手詰まりとなった夕季が逃げ場を失い絶句する。

「！」

礼也の左手が夕季の右肩を固定していた。電話帳をも引き裂く握力と腕力が、制服をがっしりとつかんで放さない。

双方無言のまま、ゆるやかに時が流れていく。

先に動いたのは夕季の方だった。

「やめろよ、礼也！」

気を持ち直し、ようやく光輔が割って入ろうと試みる。

その存在に気をとられた一瞬の隙をつき、八の字を描くように己の右腕を礼也の左腕へからませる夕季。体重移動を利用して、礼也の肘を切るように折り落とした。

開襟シャツのボタンが弾け飛び、肩口がぱっくりと裂ける。

夕季は膝をついた礼也の背後へ回り、腕を決めたまま、うつぶせにねじ伏せた。その体勢で礼也の左腕を捻り、両足で挟み込む。変則の十字固めだった。

「ぐ！」

階級差のかなり離れた少女の力とはいえ、確実にポイントをおさえているため、屈強な礼也でも抜け出すことは極めて困難だった。

「……おまえ、すごいな」

呆然とたたずむ光輔にじろりと目をやる夕季。

「光輔、逃げて」

「だって……」

「早く!」

礼也の左腕がミシミシと悲鳴をあげていた。

「……てめえ、貧乳さらして、何イキがってやがる」

「貧乳じゃない」

「ああっ!」

「いい加減にしろよ、おまえら」

「光輔、てめえもマニアだな! こんな割り箸みてえな女のハダカでよく興奮できるもんだって!」

「あ、え、あ……」

「その口から、先に折らせて」

礼也の後頭部を睨みつけ、全身をねじるように夕季が力を加える。

「ぐうああ……」コンクリートの地面に左の頬を埋めたまま、礼也が憤怒を叩きつけた。「上等だ。折ってみろ!」

大地をわしづかみにするように礼也が右腕を突き立てる。両肩が隆起し、背中、腰、両足もそれに呼応した。

咄嗟に夕季が手を引き戻す。

無理な体勢から礼也が腕を引き抜く勢いで、夕季が背中から地面に打ちつけられた。

わなわなと震える左腕を押さえながら、礼也が獲物を視界にとらえる。

それすらものともせず、一言も発することなく、夕季はゆっくりと立ち上がった。

しきり直すように睨み合う二人。

「てめえ、わざと抜かせやがったな」

「なんだか弱い者いじめみたいでいたたまれなかったから」

「だれが弱いモンだと!」

「その可哀想な子」

「ああっ！」

「やめろって。夕季も挑発するなよ……」

「本気でぶっ殺してやる！」

「あ……」

闘技場に踏み込むタイミングもはかれず、光輔はただおろおろとうろたえるだけだった。

「何やってるの。あなた達」

突然響き渡った静かな雷に顔を向ける三人。

あさみが鋭い眼光で睨みつけていた。

その後ろで桔平が浮かない顔をしている。

「いい加減にしなさい。あなた、この任務から降ろされたいの」

ちっと舌打ちし、顔をそむける礼也。

近づきざま、あさみが夕季をじろつと睨めつけた。

「あなたはまだ、ここへ近づくのも許されていないはずだったわね」
ちらりと目線だけを向け、そっぽを向く夕季。制服の前を正し、
ばんばんとスカートの埃を払った。

ふん、と嘆息し、あさみは通り過ぎて行った。

その後に続く桔平が夕季を畏怖するように眺める。

夕季も視線を合わせた。

「すげえな、おまえ……」

「……」

あさみが礼也の肩を叩く。

「あなたには期待しているのよ。これ以上失望させないで」

「わかってる」左腕を押さえ、顔も向けずに吐き捨てた。その瞳に
期待など映らないことを知りながら。「やってやるよ、必ず……」

礼也はただ光輔を睨み続けていた。

激しい憎悪のまなざしで。

第八話 『終わりなき連鎖』 8（後書き）

原稿用紙五十枚くらいの目安で、あらすじのような連作をポンポン量産していく予定でした。当然中身はスカスカで、スパロボ戦闘メインのものでしたのですが、それが軽く倍の分量となり、内容も日常会話オンリーの有様。セリフやシチュエーションを含めたプロットの段階で、すでに予定枚数を超えていたりすると、何だかなあ、です。変わってないのはスカスカなところだけですかね。

キャラが勝手に動き出すなんてとんでもない話で、おまえそれ違うやろ！ おまえがそれ言ったらアカンやんけ！ 言わせねーよ！ と一人ツツコミの毎日です。

おつきあいいただきまして、ありがとうございました。

第八話 『終わりなき連鎖』 9

陸竜王がトレーラーに積み込まれる様子を礼也は表情もなく眺めていた。

出動まで約一時間。

格納庫やエプロン周辺では多くの人間達がせわしく動き続ける。みな緊張の面持ちで未知なるミッションに臨もうとしていた。不安と希望、そして活気に満ちた試み。

その中核となる己の居場所を、礼也は見つけることができずにいた。

エンジ色のバトル・ジャケットを着込み、礼也が立ち上がる。手持ち無沙汰にタバコをくわえようとした時、その声は聞こえてきた。

「やめたんじゃなかったの」

ゆつくりと振り返る。

雅が控えめな笑顔を向けていた。

「タバコ。お兄ちゃんと約束したんじゃなかった？」

何ごともなかったように、また背を向ける。それから抑揚のない調子でそれを口にした。

「すっかり立ち直ったみたいだな」

「うん。もう二ヶ月以上もたつしね。いつまでもジメジメしてられないし。その方がお兄ちゃんも喜んでくれると思うから」

「つええな。たった二ヶ月で、たいしたもんだった」

「礼也君はまだ……」

「勘違いするな。おまえらがどうなろうが俺の知ったこっちゃねえ。世の中もおまえらも、どうなろうが関係ねえ」

「……。そう……」

「何か用か」

気のない様子で問いかける。

すると雅は瞳を揺らすようにそれを口にした。

「どうして礼也君が行かなければいけないのかなって。メックだっているのに」

「俺じゃ役立たずだからか」

「そうは言っていないけれど……」雅が困惑したような顔をする。視線をはずして続けた。「礼也君は、夕季や光ちゃんとは違う」

雅の言葉に反応し、くわと目を見開く礼也。

「行けば死ぬかもしれない。もしものことがあったら」

「ちようどいいんじゃないか」

「！」

「捨て駒としちゃ、いいセンってんだろ。俺は期待されてるらしいしな。裏切っちゃまずいだろ、いろんな奴らの期待をよ。その方がみんな喜ぶんじゃないのか」

「バカなこと言わないで。そんなの、あたし……」

「他人の考えなんざ、どうだっていいがな。俺はただ、幕を下ろす場所さえあればいい。俺にお似合いの、無様な死に場所さえあれば」

「礼也君……」

礼也が振り返った。決意を刻みつけた表情で。

その迫力に硬直する雅。声も出せずにただ礼也を見つめていた。

礼也は感情のともなわれないまなざしを向けると、ふいに雅をきつく抱きしめた。

静かに時が流れていく。

その沈黙を破ったのは礼也の方だった。

「何故抵抗しない」

「……」

「俺が哀れだからか」

「そうじゃない。違う、礼也君……」

「だったら、俺のことを厄介者だと思っている。関わりたくない」と

思っている。いなくなればいいってな」

「そんなこと思はずないじゃない」

「いや、おまえはそう思っている。俺のことを邪魔者だと。ただ口にできないだけだ。おまえも陵太郎も、俺なんかいなくなればいいと思ってたんだろ。死ねばいいと思ってたんだろ。ずっと前から」

「違うよ、違う！」

「違わねえ。おまえらはみんな同じだ。偉そうにごたく並べたって、どいつもこいつも自分のことしか考えてない偽善者ばかりだ。おまえも、陵太郎も、光輔の姉貴も」

「やめて！」

雅が礼也を振りほどく。

「これ以上、お兄ちゃんやひかるさんのことを悪く言うのなら、あたし、許さないから」

「どう、許さない」

殴ろうとかまえ、キッと口を結び、涙目で睨みつける雅。

それを礼也は表情もなく眺めていた。

だが、いくら待てども、それ以上は何も起こらなかった。

唇を噛みしめたまま、雅が手を引き戻す。

礼也の表情にかげりが見てとれた。

「どうして殴らなかったのかわかる？」

しっかりとそう告げた雅に、何も期待せずに礼也が顔を向ける。

雅は今にも泣き出しそうな、それでも強いまなざしで礼也を見据えていた。

「……嫌いだからじゃない。俺が可哀想だから、か……」

「違う。そうじゃない。逃げてるから」

「！」

「嫌われた方が楽だと思ってる。誰もそばにいない方が苦しまなくともすむと思ってる。だから思ってもないことばかり言うんだよね。あたしはそんな礼也君が許せない。そんな人、殴りたくない。そんなのあたしの知っている礼也君じゃないから。そんな礼也君、あた

しは認めない。きっと、お兄ちゃんも」

「……。殴ってももらえなくなっちまったんだな、俺は」

「二度と今みたいなこと口にしないで。今度そんなこと言ったら……」

「ぶっ殺してくれよ。かまわねえから」

雅が絶句する。苦しそうに顔をゆがめ、礼也を見つめていた。

「どんなご立派な野郎だろうが、死んじまったらおしまいだ。灰になっちまった奴に何ができる。そんなモンにすがったところで、何も返っちゃこねえ。縛られるだけ馬鹿らしいだろ。利口な奴らは黙っててもみんな消えていく。残ったのは馬鹿な奴ばかりだ。俺みたいな、救えねえ大マヌケだけだ」

「そんなこと言っちゃ駄目だよ」

「……」

「礼也君はそんなこと言うような人じゃない。そんなこと思ってないはずだよ。礼也君は、そんなふうにできていないから」

「……」雅をまじまじと眺め、呆れたように口にする。「勝手にキヤラ付けしてんじゃねえって。そういうのがウゼエんだ。いい加減気づけっての」

「知ってるよ、そんなの」

「ああ？」

「だってあたし、いじわるだもん」

「……」しばし硬直した後、ふいをつかれたように礼也が嘖き出した。「くっ……、あっははは！」

「……」

「いてえ、いてえ。殴られるよりいてえって」

礼也が静かに、そして嬉しそうに笑った。

それは雅や陵太郎が知る、かつての礼也の顔だった。

雅もつられて笑う。穏やかに微笑みながら。

「いじわる雅、か」

「……」

「おかげで目が覚めた。ありがとう、雅
はっとなる雅。

「礼也君」

歩き出す礼也の後ろ姿を、雅は心配そうに見守っていた。

「……。逃げることをやめたら、思い切り殴ってあげる。覚悟しておいて」

振り返ることなく、礼也が小さく手を上げる。

その背中には、もう二度と届かないような気がしていた。

第八話 『終わりになき連鎖』 9 (後書き)

いつもの流れだとOPを晒す段階で、全体の約九割が決定しています。残りを細かい修正だけにとどめれば、ほぼ一週間更新、少し踏み止まって二週間、となるわけですが、今回は後入れ加筆が特に多く、すでに全体の五割増し超えです。そのため構成上の切り上げ方、つなぎ方がグダグダで、あくもく組み直したい、ちゅう感じですよ。脱線が多い時こそ、氣いつけなはれや！ と肝に命じていたはずだったのに……

あ、天からの声が聞こえる。

結論・練りこめど練りこめど、スカスカはスカスカ……

第八話 『終わりなき連鎖』 10

野部塚市は県北西部に位置する中核都市だった。人口も山凌市とは比較にならないほど多い。

すでに住民の避難は完了していた。

メガルの近隣とはいえ、初めての作戦をこれだけの規模の都市で遂行するにあたっては賛否両論だった。たとえ遠方でも、より人口の少ない地域を選択すべきだと。

だが政府の心配をよそに、本部での作戦会議は驚くほどスムーズに進行した。満場一致の採択。これには桔平の一撃が大きく関与しているものと思われた。

屋外作戦本部で指揮をとるために木場とともに派遣された桔平。

その仏頂面をディスプレイで確認し、あさみが声をかけた。

『なんだか不服そうね』

「あん？」

『あなたの要求どおり、木場主任を遠征部隊長に任命してあげたじゃない。まだ何か？』

「あのなあ、こんなミッション、メックだけで充分だろうが。竜王なんか持つてく必要ねえだろ」

『何度同じことを言わせる気なの。竜王の作戦参加はポーズみたいなものだって言ったでしょ。各方面へのアピールのためのね』

「なんで今さらアピールしなきゃなんねえんだ。んなもん、前の奴の時に嫌ってほど……」

『あら、あなたが引っかけ回してくれたフォローのために決まっているじゃないの』

「……」

『ミルククラウンはまたたく間に器の隅々まで広がる。壁の内側で

跳ね返った波紋は再び中心へと押し寄せ、互いにぶつかり合うように水面を揺らし続けるでしょうね。それが好ましくないことくらい、いくら粗暴なあなたでもわかるでしょ？ 今回の狙いは、その波紋を広がり切る前に封じ込める目的も兼ねているの』

「……。導火線でできた蜘蛛の巣か……」

『は？』

「は！」

『蜘蛛の巣？』

「いや、そうとも言っつてな！」

『……実にあなたらしいセンスね』

「いや、あのな……」

『どうかした？』

「何でもねえ！」

桔平が苦虫を噛み潰したような表情でタバコをくわえる。それが前後逆であることをあさみに指摘され、癩癩を起こして木場の後頭部へ投げつけた。

「何だ、桔平。何か用……」

「うるせえ、任務中は私語は厳禁だ。黙ってろ！」

「……」

あさみが意味ありげな微笑みをみせる。

今回の作戦は、ただ近いからという理由だけではなさそうだった。

『霧崎君、準備はどう？』

あさみの呼びかけに精神統一をしていた礼也の心が呼び戻される。

「できてるよ。いつでもいい」

『そう。頼もしいわね』

「一つ約束してくれ」

『何？』

「誰も手を出さないって」

『わかりました。約束します』

「頼む……」

無線機の向こうであさみの笑い声が聞こえてきそうだった。

報道管制がしかれる中、作戦は開始された。

防護パーツでモコモコになった陸竜王が、サポート車両をともないアスモデウスに近づいて行く。

目的ポイントに到達すると、陸竜王以外の人員がその場から撤退していった。

『いいか、礼也。無理するな』仮設基地のテントから桔平ががなりたててくる。『オペレーション・システムは変更してあるから前よりは滑らかに動くはずだが、少しでも危険だと判断したらすぐに撤退しろ。今回は空竜王も海竜王も待機させてない。本部のベースにがちり固定されちまったままだ』

「わかってる」陸竜王のコクピットの中、礼也が小さく吐き捨てた。

「あんな奴らに助けられるくらいなら、死んだ方がマシだ」

『何！　なんか言ったか！』

「なんでもねえ。切るぞ」

『おい、礼也！　おい……』

一方的に無線を断ち切る礼也。

背もたれにその身をあずけ、何もかもを遮断するように目を閉じた。

遠方で動き出した陸竜王の影を確認しながら、ギリギリと歯がみし、桔平がアスモデウスを睨みつけた。

「おかしいだろうが。なんで化け物を挑発しようってのに、空竜王も海竜王もホールドさせたままなんだ……」

すぐそばで部隊へ指示を出す木場の存在も視界にとどまらず、心の中で自問自答を繰り返す。

『目的はなんだ。竜王の失態という事実は交渉の材料として使われるだろう。ならばオビィの死は……。……人柱でもいいけにえでもなく、単なる既成事実の一つにすぎないのか……。』

陸竜王と動かざるアスモデウスを一つに結んだ遙か彼方に、見える相手を映し出していた。

「……本当にそれでいいのか、あさみ」

「何か言ったか？」

「！」

思いがけず口について出た言葉に桔平が動揺する。

「何でもねえ！」

氣遣って声をかけた木場を突きはなし、桔平はその瞳に不信感をあらわにした。

「てめえ、いつまでもたもたしてやがる。とっとと野郎のサポートに行け！」

「わかってる。すぐに行く」沸騰し続ける桔平を表情もなく眺め、様子をうかがうようにそれを口にした。「なあ、桔平……」

「私語は厳禁だっつったろ！ 黙ってろ！」

「……ああ、すまん」申し訳なさそうな顔になった。「たいした話じゃない。後にする」

「待て」

巨体を揺らしながら、ゆっくりと木場が振り返った。

「何だ？」

「いや、本当にたいしたことじゃないんだ。任務が終了してからでいい」

「いいから言えって」

桔平の目が据わる。その眼光を真正面から受け止め、木場が自嘲気味に切り出した。

「いやな。もうすぐ忍が退院するらしい」

「おう。で？」

「それで近しい人間だけでも退院祝いをしてやろうと思ってな」

「おう。で？」

「よかったらおまえも来てくれ」

「ああ！」桔平が目を剥いて木場に噛みついた。「行くに決まって

「んだろ、ふざけんな、バカ野郎！」

「お、おお……」

「来るなつつつても行くぞ。なんでそんな大事なことに早く言わねえ！
そのかわり、おまえの全おごりだ。迷惑料込みだ！」

「ああ、そのつもりだ」

ほっとしたように木場が笑った。

「有り金全部かき集めとけ！」

「……」

ショッピングモールを割って鎮座するアスモデウスの木偶を、ゴーグル越しに見据える礼也。薄暗いコクピットの中でいらだつように金色の髪をかき上げた。

陸竜王の頭部にあるメインカメラは搭乗者の首の動きと連動しており、そこに撮り込まれた映像はゴーグルの下面からヘッドアップされ、偏光レンズの裏面へと映し出される。そのためコクピット内には他のディスプレイの類はなく、ゴーグルから得られる視界の向こうに壁のようなハッチの裏側が透けて見えた。

両手に収まる感圧式のスティック。スイッチ類。それらを照らす淡いランプの光。

そのすべてを含めて、棺おけの中にいるようだと礼也は感じていた。

専用車両に特装された巨大なバルカン砲に手をかける。

ポイントは確認済みだった。

「くたばれって！」

気合もろとも全砲弾を仮面の額目がけて撃ち放つ。

硝煙が消え失せた頃、礼也の目に飛び込んできたのは、無傷のまま鎮座するアスモデウスの姿だった。

「くそ！ 次！」

コイルガンを手取る。

膨大なエネルギーを放出させ、軌跡は次々と巨大な石像に吸い込

まれていった。

「次！」

竜王専用プラズマバズーカ砲。

「次！」

強酸弾、炸裂弾実装マシンガン。

そのどれもがアスモデウスに傷一つつけられずに約割を終える。

スペアマガジンまで使い果たし、すべての攻撃を終了する陸竜王。

「……」 仮設本部で桔平がぼりぼりと頭をかきむしる。「作戦終了だ。帰る準備をしろ」

『おい、メックはどうする。配置は完了済みだぞ』

「んあ？」 パイプ椅子にふんぞり返ったまま、恨めしそうにデイスプレイの中の木場を見下ろす。「これ以上やっただって同じだろ。わざわざ無駄ダメくれてやることはねえ」

『それはそうだが……』

「これで駄目だってんなら、表向き、こいつを破壊できる兵器は存在しない。いっそあちこちから、公表できねえモン、ごっそり並べてみるか？」

『おまえ……』

「はなからわかってたことだ。奴は竜王を誘ってやがんだ。覚醒してない方じゃ、興味がねえってことだろ」

「副司令、大変です！」

緊迫した様子のオペレーターの声に注目する桔平と木場。

デイスプレイの中では、アスモデウスの五対の目が異様に光り輝いていた。

第八話 『終わりなき連鎖』 10 (後書き)

コクピットをイメージするためにいろいろと試してみたのですが、シャワー付きトイレが一番近かった気がします。内部の設定では前方が曲面でシートがリクライニングなので、半畳トイレ？ のような圧迫感はありませんが、やはり窮屈ですね。八メートルくらいの設定にしておけばよかったと少し悔やんでいます。とはいえ、強大な敵と相対する場合、それでもサイズが違いすぎるし、等身大の間と目線を合わせるのなら、三、四メートルがいいのに、と思った。オーパーツなんだからいっそ伸縮自在にしようけば、……てのはマズいすね。

読んでいただきましたましてありがとうございます。

第八話 『終わりなき連鎖』 11

「くっ！」

コクピット内で礼也が齒がみする。

全弾を撃ちつくすや、絶妙のタイミングでアスモデウスが動き始めたのだ。罫を張っていたかのように。

信じられない光景だった。灰色の石の塊が突然生身の肉体のように脈打ち、動き出す。それは鉋石状の皮膚を持つ巨大な生物のようだった。

石像の風体を保ったまま、軋んだ齒車のような咆哮を引きずり、アスモデウスは陸竜王に狙いを定めた。

「……これが、アスモデウス」

槍を頭上高く掲げられ、蛇に睨まれた蛙のごとく動きを奪われる礼也。

眼前の敵を光輔や夕季が倒したことを思い出し、心を引きしめた。

「何やってる！ 礼也！ 早く離脱しろ！」

無線機をブンブンと振り回し、桔平ががなりたてる。しかし返答は予想しえないものだった。

『ふざけんな』

「な！……」

『今逃げたら、あいつらに負けたことになる。だったら死んだ方がましだ……』

「バカ言ってるじゃねえ！ あいつらって誰だ！ いいか、命令だ、撤退しろ！ 撤退……」声が届いていないことに気づき、無線機を力任せに叩きつけた。「あの大馬鹿野郎！」

強烈なアスモデウスの一撃を受け、吹き飛ぶ陸竜王。

前後左右に何度も全身を打ちつけ、礼也の脳が揺さぶられた。

「がああっ！」

夕季から受けた左腕のダメージが気つけとなり、かろうじて正気を保つ。

闇雲に操縦桿を引き続けるが、動力ユニットを破壊されてしまった竜王はそれ以上動くことはなかった。

棺おけのような薄暗いコクピットに身を沈め、独立電源を持つカメラの映像越しに、迫り来る怪物の姿だけを睨みつける礼也。

愚かな自分の姿をそこに投影するように。

暴力的な光の交錯と爆発に目を細める。

メックトルーパーの一斉攻撃がアスモデウスを足止めしていた。

「くっ……」

徐々に意識が遠のき始めていた。

「何故こんなことになった……」朦朧とする意識の中、うわずるようなその声がひとりでに押し出されていく。「俺はただ、あの人のようになりたかっただけなのに……」淋しげにその先を飲み込んだ。『……ただ笑って欲しかっただけなのに』

手を伸ばし何かをつかもうとした。何もつかめないことを知らないが。

広がる闇の彼方に陵太郎の笑顔が浮かび上がる。

（諦めるな）

はっとなる礼也。

陵太郎の声が聞こえたような気がした。

礼也の目の前で、懷から飛び出した写真の中の陵太郎が笑っていた。雅や光輔、仏頂面の礼也と並び、ひたすら真っ直ぐで眩しい笑顔。それはそこにいるすべての人間に平等に向けられたものだった。

（諦めるな、礼也）

「陵太郎さん……」

『諦めるな！』

「！」

『レイヤーッ！』

ドン！

空を割り、礼也の前に降り立つ黒く艶やかな機影。

海竜王だった。

「光輔……」

黄色い両眼を妖しく輝かせ、漆黒の巨人がアスモデウスに挑みかかっていった。

「よーしゃ！ ナイスだ、光輔！」

机に足をかけ、ぼさぼさの頭を振り乱しながら、興奮気味に桔平がまくしたてる。その姿はさながらロックバンドのボーカルというところだった。

ディスプレイ越しに畏怖するように桔平を見続け、おそろおそろ木場が問いかける。

『おい、桔平、おまえが呼んだのか……』

「知るか、バカヤロー！」

『……』

「夕季ー！ 夕季ー！ いたら返事しろ！ いるんだろ、ゆーきーっ！」

不機嫌そうな声がぼそりと返る。

『……うるさい』

「聞こえてんなら、とっとと返事しやがれ！」

『そんな大きな声出さなくても聞こえる……』

「バカヤロー！」

『……』

「今から指示を出すからしっかり聞け！」

『……』

「返事は！」

『聞き取りづらいから回線切ります』

焦ったように桔平が待ったをかけた。

「いや、切るな、切るな。もう二度とバカヤローとか言わねえから。ちよっと興奮しちまっただけだ。もう大丈夫だ。反省した。かなり反省した。おまえらが頼りなんだ、頼む」

『……』

「いいか、夕季。礼也が動けないようだ。ケガしてるかもしれない。ハッチひっぺがしてもいいから助け出せ」

『了解』

ディスプレイへ振り返り、木場と向かい合った。

「木場、ここは俺が指揮する。おまえは陽動部隊連れて、引っかき回してくれ」

『了解した』

「すき間あけんじゃねえぞ。次から次だ」

『おう！ 任せておけ』

再び無線機を取り、戦闘中の光輔を呼び出す。

「光輔、一分我慢しろ。礼也の無事を確認したら、すぐに夕季を向かわせる」

『はい』

「メックもサポートさせる。踏ん張れよ、おまえならできる」

『はい！』

『陸竜王の回収は？』

「バカヤロー！」

横入りしてきた夕季に対し、桔平が露骨に嫌悪感を剥き出しにする。

『バ……』

「んなもん、後まわしだ。ほっとけ！」

『……』

「余計なこと考えるな。キビキビ動け」

『……。はい』

「よし！」

一通りの指示を出し終わり、夕季からの無線が途絶える。満足そうに一息つき、ふいに桔平が目をつり上げて無線機を睨みつけた。

「何だと！ ちょっと待て、夕季、おい、コラ、てめえ！」

ただならぬ様子の桔平に画面の中から木場が怪訝そうな顔を向ける。

『どうした。何を怒っている』

今にも噛みつかんばかりの形相で桔平が振り返った。

「いや、今、あいつ、変なこと言いやがったからよ」

『何を言った』

「何をつて、おまえ、『はい』つてよ」

『それがどうした』

「いや、おかしいだろ！」

『何がだ』

「ああ！ 何がって、何が？」

『だから何故それがおかしい。なんでおまえは怒っているんだ』

「……。なんでって……」

『……』

「……。そんなこと俺に言われても……」

『……』

高密度クローを射出し、アスモデウスの槍を封じる海竜王。

チェーンを巻きつけたまま陸竜王へ振り返り、光輔が叫んだ。

「礼也、大丈夫か！ 早く逃げろ！」

陸竜王は動かない。

気をとられた隙をつかれ、海竜王が引き倒される。

「うわっ！」

『光輔ー！』

空から急降下してきた空竜王に仮面を切り裂かれ、アスモデウスが退いた。

『光輔、大丈夫！』

「ああ、サンキュ」

空竜王に目をやる光輔。竜王は頭部で認識した映像をハッチ裏へと映し出す。その視界は後方にまで及び、オビディエンサーが振り返ることによって全周囲を掌握することが可能だった。さながらガラスの器の中にいるようだった。

立ち上がり、再びクロールをかまえ、光輔は難敵に挑みかかった。
「夕季、早く礼也を頼む」

『わかった』

羽毛のようにゆるやかに大地に降り立ち、空竜王が陸竜王を引き起こそうとした。

『礼也、礼也、無事なの』

夕季の声は礼也の耳へ届かなかった。

眼前で己を守って奮闘する海竜王の雄姿に心を奪われていたからである。

その姿に陵太郎が重なった。

「……陵太郎さん」

（礼也、しっかりしろ）

遠く彼方から、追いかけるように陵太郎の声が聞こえてくる。

「俺はただ追いつきたくて、触れたくて」（もうとっくに追いついているだろう）

「ただそこにいたくて」（追い越してみせろ。おまえならできる）

「俺は……」（今度はおまえの番だ。おまえがつかないでいけ）

「……あがいていただけなのかもしれない」

（おまえ達がいる限り俺は死なない。おまえ達が受け継ぎ、それを他の誰かへつなげる限り、俺の心はみんなの中で生き続ける。永遠に）

「陵太郎、さん……」

じわりと視界がぼやけ出した。

「礼也、礼也！」

反応のない礼也に何度も夕季が呼びかける。無線を通じ、かすか

に、『陵太郎さん……』と聞き取ることができた。

「礼也、どうしたの、礼也！」

槍の直撃を受け海竜王が吹き飛ばされる。陸橋を折り崩し仰向けに倒れる海竜王にゆらりと近づき、アスモデウスが更なる攻撃を加えようとした。

くっ、と歯がみし、夕季がアスモデウス目がけて切りかかっていた。

大地を踏みしめ、袈裟切りのようなバックブローを下方から矢継ぎ早に繰り出す。息をもつかせぬ連続攻撃で相手を圧倒した。

距離を取り、ようやくアスモデウスが踏み止まる。

獣のような咆哮。

体勢を戻したアスモデウスと夕季が正面から向かい合った。

降りそそぐ太陽の光を浴び、空竜王の全身が白銀の輝きを放つ。

「夕季、無茶するな！」

『わかってる』

ハッチ裏の大型ウィンドウ越しに睨み合うアスモデウスと空竜王を見据えたまま、光輔が夕季からの返答を待つ。

『次で確実に仕留めてみせる』

「……」

その時、光の波が光輔と夕季を追い越していった。

背中から覆い被さるような、視界を奪うほどの光の放射。

眩しさに手をかざし振り返った二人の前に、それが姿を現していた。

真なる王者の姿をともなつて。

第八話 『終わりなき連鎖』 11（後書き）

ロボットだからできること、って、よく考えたりします。ロボットにもできること、ではなく、ロボットにしかできないこと、です。ガサラキあたりを観ていた時、ああ、これなら砂漠や市街地で戦車を手玉にとれるかも、と妙に納得してしまいました。最近ではギアス系のローラーゲーマー達が説得力があったような気がします。あれだと直進兵器では歯が立たないでしょう。空飛んじゃあかんしょ、って気もしますが。

機動力を活かして死角に回り込んだり、有利なポジションを取り合ったりするのならいざ知らず、リアル系ロボットが正面からミサイルやビームを撃ち合ったりしていると、何だかなあ、という気分になります。無駄だらけで。

とは言え、足の裏からロケット噴いて、ゲンコツで敵のドテツパを貫くロボットって、カッコいいと思います。無駄のかたまりなのに……

気がつけば、約八ヶ月ぶりの戦闘シーンです。どんだけ日常会話好きなんだ、てなこと。

読んでいただきましてありがとうございました。

第八話 『終わりになき連鎖』 12

陸の王者が真なる姿を白日のもとに晒し、大地に降臨する。

完成された格闘家の肉体を連想させる体軀は、赤味を帯びた土の色と深い緑色で塗り分けられ、海、空竜王と比してより人間的であり、より戦闘的に映った。

そびえるように突き立つ触覚は一角獣を連想させ、他の二竜王同様に鋭い顎のラインと切れ上がった両眼、下腕には隆起部を持つ。

雄々しく胸を張り、猛々しく伸び上がる。赤色の眼を激しく輝かせ、全身に及ぶ無数の小さな窪みから息吹を放出した。

大気をゆさぶるほどの咆哮をともない、大地を蹴って全長六メートルの巨人が跳び上がる。滞空中に前方回転し、憤怒もろとも硬質の踵を、己の何倍もの敵目がけて叩き降ろした。

巨大なハンマーを打ち下ろしたような衝撃が地面へと突き抜ける。比較すら馬鹿らしくなるほど質量差のある相手の攻撃を受け、アスモデウスが木片のごとく吹き飛んでいった。

後方に降り立ち、それをしごく当然だと言わんばかりに陸竜王は次なるかまえに移行した。

倒れたアスモデウスに馬乗りになり、陸竜王がナックルガードに包まれた拳を振り上げる。メリケンサック状に大きく膨らんだ光の輪が、拳の周囲で振動し続けていた。何度も打ち下ろされるそれは、しだいにアスモデウスの固い皮膚に穴を穿っていった。

ケエエエー！

悲鳴を撒き散らし、アスモデウスが陸竜王を弾き飛ばす。が、立ち上がるや、再び陸竜王の猛攻に晒されることとなった。

その攻撃に間合いは存在しない。ひたすら前進し、懐へ入り込み、真正面から拳を繰り出すのみ。

竜の首を抱え、捻る動作で引きちぎる。

ゴキッ、と岩を砕くような音が数キロメートル先まで響き渡った。「すごい……」海竜王のコクピット内で言葉を失う光輔。陸竜王の蛮勇に釘づけだった。「……あれが陸竜王」

それは桔平も同じだった。

「あのバケモノをザコ扱いかよ……」ごくりと生唾を飲み込む。

空中で後方回転し、アスモデウスに正面を向けて陸竜王が降り立った。

対象を捕捉すると同時に両眼が輝きを増す。

バツ、バツと内部から湧き起こるハレーション。みなぎるエネルギーを全身からほとばしらせ、赤黒いボディカラーが燃え上がる真紅に染まる。すると頭部の一本角が中心から割れて広がりVの字を形作り、艶やかな紅の色があらわになった。

全身をぬらりと輝かせ、無数の窪みから圧縮空気を噴出させる。それに呼応して足裏から突出した八対のベアリングローラーを滑らせ、弾丸のようにダッシュした。

個々の姿勢制御により、瓦礫の凹凸すらものともせず、荒れた大地も氷上のごとく駆け抜ける赤き疾風。繰り出された槍を、叩きつける炎をかくぐり、魔神の懷を事もなげに抜けて行く。

同じ時を共有する両者の速さは明らかに異なってみえた。その動きは誰の目からもはつきりと大別される。

狩る者と狩られる者として。

急激なターンとローラーの逆回転でブレーキをかけ、予測攻撃すらあつさりとかわす。両足を大地にえぐり込ませると、厚さ二十センチメートルのアスファルトが小山のようにめくれ上がった。

振り返るや否や、左の拳を突き出し、ナックルガード状の鋼板を射出する陸竜王。高速で撃ち出されたそれはアスモデウスの盾をも砕き割り、深々と右肩へ食い込み結合した。高熱を発する最厚部十センチメートルの熱塊は、触れるものに爆発をもたらし、いかなる鉱物とも結着することが可能だった。ナックルガードと竜王をつな

ぐワイヤーは下腕隆起部に収納されており、肉眼では確認できぬほど極細だが、数万トンの荷重にも耐えうる強度を誇る。

ローラーを高速回転させ、一気に間合いを詰めるべく陸竜王が加速していく。ワイヤーを巻き戻す勢いでさらに加速し、空高く跳び上がると、大きく振りかぶった右の拳でアスモデウスの額を撃ち抜いた。

一拍おき、衝撃が周辺の空気をビリビリと震わせる。

それからガラスの器を叩きつけたかのようにアスモデウスの仮面が弾け、飛散した。

それ以上はなかった。

両腕をだらりと下げ、もはや木偶と化した巨体は、ゆるやかに背中から倒れ込むのみだった。

地響きとともに沈んだ巨軀は、またたく間に無数のひび割れに覆われていく。それが粉々に砕け散るや、先を争うように大地に還り始めたのだ。勇者の蛮勇を目の当たりにし、我先と逃げ出す雑兵のごとく。

残ったのは、胸を張り大空に臨む、陸の王者の雄姿だった。

間近で見上げる木場が思わず眩く。

「あれが……、最強の竜王……」

その表情を畏敬の念で染め上げながら。

第八話 『終わりなき連鎖』 12 (後書き)

竜王にはそれぞれ暫定イメージがもうけてあります。描写力に難があるため、カミングアウトすれば脳内イメージの補助となるのでしょうが、あれなのにこれ！？ みたいにつっこまれるのがつらいので、そのモデルは伏せることにいたします。

とにもかくにも、ようやく三体揃えることができました。あとは

……

おつきあいいただきましてありがとうございます。

第八話 『終わりなき連鎖』 13

仮設本部に歓喜の絶叫が鳴り響いた。

パイプ椅子にどっかと腰を落とし、桔平が大きく息を吐き出す。

「どいつもこいつも勝手なことばかりやがって」

あさみからの呼び出しに気づき応答した。

「柊だ。こっちは全部終わったぞ」

開口一番、激しい雷撃の猛襲を予想していたものの、意外なほど穏やかな笑みをたたえているあさみに桔平は拍子抜けした。

「ま、結果オーライ……」

『説明していただこうかしら』

「……おっと、そうきたか」

桔平の耳に突き刺さる冷徹なイカズチ。

それは命令違反を犯し、勝手な行動をとった者への静かなる怒りだった。

『このままでは示しがつきません。全員処罰します』

冷淡に告げるあさみに、桔平がため息まじりの声で答える。

「それでもいいが、クルーや他の人間達の協力がなけりゃ竜王は動けない。かなりの数が荷担していることは間違いないな。それも俺らみたいな役立たずじゃなく、かわりのいない優秀なスタッフ達だ」
『それが何』

「本当に全員処罰すればメガルは崩壊するぞ。それは政府の望む結果じゃない。もう一度嘆願書でも集めさせる気か？ それとも一人だけに責任を押しつけて、詰め腹切らせるのが妥当なセンか。ま、はなから俺がそのための要員なんだろうがな」

『何が言いたいのか』

「副司令の引責辞任なら、満場一致で収まるんじゃないかねえかってこと

だ」

『……すべてあなたの手引きどおりと言うことね』

「バカ言え」あきれたように鼻で笑う。「俺だったらもっとうまくやる」

『なら……』

「俺の責は、手を封じられたと勝手に思い込んで、何もしなかったことだ。悪いが、俺は俺の好きにやらせてもらう。あとはつじつまが合うように適当にやっといてくれ、司令官殿」

『……それですむと思っているの』

「喜ぶ奴は多いだろ。俺も含めてだがな。ジジイどものスタンディング・オベーションが見えるようだ。思わずウェーブしちゃったりしてな」

『……』

「まだわからないか。あいつらはおまえらの思い通りにはならねえよ」

『……』

「あいつらはどんな風が吹いても折れない、しなやかで強い花だ。どんな荒地でだって枯れやしない。一本だけでも厄介なのが、三本揃っちゃった。おまえの浅はかな考えで扱えるしろものじゃない」

『……まあ、いいわ』意味ありげにやりと笑った。「浅はかかどうか、試してみるといい。あとで後悔しても遅いけれど」

「それは自分のことじゃないのか」

『……』

あさみが一方的に通信を打ち切る。

届くことのない言葉を桔平がつないだ。

「そんなことは、俺に言われるまでもない、か……」

メガル基地内の滑走路で、陸竜王から無言の礼也が降り立つ。

光輔の姿を認め、鋭い眼光を放ちながら近づいて行く。

礼也を睨みつけ、夕季が二人の間に割って入ろうとした。

それを制する光輔。

「夕季、いいよ」

光輔の正面に立ち、礼也が血走った眼光を叩きつける。が、そこに険は見られなかった。

「わけもわからずに死ななければならなかった奴らがいる。何もできずにそれを受け入れるしかなかった奴らが。俺はそいつらが何故死ななければならなかったのか、答えを見つけてやりたい。そいつらの死に意味があったことを証明してやりたい。そいつらの死が、決して無駄じゃなかったってことを。俺に居場所をくれた人のためにも」

「礼也……」

頭を垂れ、礼也が光輔の肩をガシッとつかんだ。

「おまえの力を貸してくれ、光輔。俺にも、おまえ達と同じ傷を背負わせてくれ……」

夕季と顔を見合わせ、静かに光輔が頷いた。

「礼也君」

聞き覚えのある呼びかけに礼也が振り返る。

淡々と発せられたその声の主を間違えるはずがなかった。

「……雅」

表情もなく、そして厳しく、雅が礼也を直視する。

「わかってるよね」

すると礼也は観念したようにふっと笑い、目を閉じてみせた。

「ああ、覚悟はできてる」

「思いつきり、いくから」

「好きにしろって」

「ちよっと、何……」

腕をつかまれ、光輔が踏み止まる。

光輔の目をじっと見つめ、夕季が首を振った。

「ごめんね、約束だから。しっかり歯を食いしばって！」

雅が振りかぶる。

斜め四十五度から力任せに振り下ろされたそれは、礼也の頭のてっぺんで大きく弾け、ベシッ、と軽快な音色を奏でた。

「！」

「……。ハリセンだねえ……」

夕季と光輔の目が点になる。

「……」

「……まあ、オチは読めてたんだけどね」

雅を指さし、間の抜けた顔で光輔が振り返った。

「あれ、自分で買ったんだって。ひゃっ均かな」

夕季が困ったような表情をしてみせた。

やりきれない様子で礼也がゆっくりと目を開く。

雅の楽しそうな笑顔が飛び込んできた。

「心配かけたバツだから」

「……ってえな。ちった、手加減しろって」

「自業自得でしょ」にんまり笑う。「次やったら、みんなの前でお尻ペシペシいくから」

「……勘弁しろっての」

礼也も嬉しそうに笑った。

「ナマでね」

「ナマかよ……」

「ナマだって。えげつな！」目を見開いて光輔が夕季を振り返る。

「あいつやっぱ、小悪魔だよ。笑顔なのに目が笑ってないし！」

夕季はすっかり困りはてた様子でそのマヌケヅラを見続けた。

「次、光ちゃんの番だったね」

「ええっ！ 何故！」

「だって約束だもの」

「したっけ！ いっしたっけ！」

「わかってよ、そのところ」

「もしもし……」

「大丈夫、なるべく苦しまないように頑張るから。痛いのは一瞬だ

から」

「いや、痛い嫌だから!」

「うん、わかってる。じゃあ、ひっひっふーで」

「ちよっと!」

雅を凝視し、光輔が思わず退く。のけぞった頭が何かに当たり、ゴチンと音を立てた。

後頭部を痛そうにさすりながら振り返る光輔の目に飛び込んできたのは、額を押さえ涙目で睨みつける夕季の顔だった。

真っ赤に熟したその額に、光輔の目が釘づけとなる。

「あ、すごいたんこぶだね。いや、実を言うと昨日から気にはなってたんだけどね。いったいどうしたんだろうなって。ずっと心配してたんだけど、マジで。いや、でも結構似合ってると思うよ!」

「……」

「夕季、そこツッコムところだから、大事にね」

「何が! なんの話!」

「はい」にゆっ、と口の両端をつり上げる。

雅から託されたハリセンを握りしめ、夕季は光輔の頭上目がけて振り下ろした。

バシッ!

光輔のボサボサモツサリヘアーが真っ二つに割れた。

「でっ!」目を剥いて抗議する。「さっきと音が違うじゃん!」

「違うねえ」

「違うって」

「いてーよ、マジで! 耳かすったよ! あーもー、なんかひりひりするって! 熱い、もー、熱い!」

「惜しかったね、光ちゃん。鼻からいくと星が見えたのに」

「何が! 確実におかしいよね、それ!」

申し訳なさそうに夕季が呟く。「手もとが狂った」

「そんだけ気持ちよく振り下ろせば狂うに決まってるだろ! おまえ、持つなよ! もう武器だよ、それ」

「光ちゃん、よくわかったね。それ新兵器なんだよ。東ドイツの」
「どこだよ、それ！ いい加減にしろよ！ なんか、テニスのサーブみたいになってたし！ もう、めっちゃ破れてるしさ」

「ごめん、弁償するから」

「いいよ、ひゃっ均でまた買ってくるから」

「あ、やっぱりひゃっ均なんだ。て、何、また握り込んでんの！」

「今度ははずさないでね」

「うん」

「あの、ちょっと……」

口をへの字に結び、伸び上がった姿勢から今度は渾身の力で撃ち放った。

バッシ！

了

第八話 『終わりなき連鎖』 13 (後書き)

ようやく八話、終わりました。自分でも呆れるほど冗長です。気がつけば、『バスケがしたいです……』になつてたし……。ある意味聖典のようなもので仕方ないのかもしれませんが。

年内に一区切りつけられるかどうか不安ですが、もうしばらく(?) おつきあい願います。

読んでいただきましてありがとうございます。

第九話 『絶叫』 OP

太陽を背に陸竜王が跳び上がった。

その豪快な浴びせ蹴りはアスモデウスの狂猛な槍すら弾き飛ばす。くるりと着地し拳を突き出すと、ナツクル・ダスターと呼ばれる超振動ダガーの中から鋼板がエネルギーの塊となって襲いかかり、ワイヤーに導かれて一直線に手もとへと戻ってくる。インパクトの瞬間に熱量を最大まで高め、触れるものに爆発をもたらす、有効射程約一キロメートルの大型キャノン砲。その破壊力は複合装甲の重戦車を易々と粉碎し、新鋭戦艦の横腹に大穴を穿つ。仮にその一撃に耐えられたとしても、衝撃と飛散した内壁によって内部は致命的な損壊をまぬがれないだろう。実質三十センチの弾頭部を持つ徹甲弾でありヒート弾でもあるそれは、質量、熱量、射出力に換算すれば、同口径の弾頭を持つ滑空砲よりはるかに上だった。

仮面を陥没させ退くアスモデウス。

続けざまに放たれた無数の鉄拳を受け、人外の魔物は断末魔の悲鳴をあげる間もなく、大地に身を沈めた。

「ええ、承知しています」

司令官専用の事務室の中で神妙な様子の進藤あさみが頷く。

「決してあれの封印は解きません」

冷たく、そして妖しく光るまなざし。

「たとえ最終局面になったとしても……」

そこに浮き上がるものは悲しみの色合いを含んだ決意だった。

海竜王が超高密度クローを射出する。伸縮性のチェーンを従えた、最大五百メートルの射程を誇る細く鋭利な一本爪は、現存するどの

物質よりも比重が大きく硬い。鉱石状の外殻に突き刺さるや、先端が複数の鉤状に展開し、アンカーボルトとなって深く食い込んだ。

大地を踏みしめ、牽引力により硬質化したチェーンで強大な対象を引き倒そうとする海竜王。

「夕季！」

抵抗するアスモデウスの死角から、白銀の翼を広げた空竜王が飛びかかっていった。

あらゆるものを切り裂く両刃の剣が、照り返しを受けて七色に光り輝く。

頭上高く舞い上がり、組み合わせた二枚の剣を平行にそろえたまま打ち下ろした。

「てえええーい！」

表情のない悪魔の仮面が三つに裂けて弾け飛んだ。

メガル地下格納庫の最深部に雅の姿があった。

薄明かりの下、ただ眼前の巨大な物体を見上げる。

「樹神雅」

名を呼ばれ、振り返る雅。

そこには張りつめた表情で風野守人が立ちつくしていた。

「君の力が必要になった」

その瞳に悲しみのような決意を刻みつけ、雅が小さく頷いた。

第九話 『絶叫』 OP（後書き）

ここ何年もインスピレーションを受けるような作品に出会えていません。いい、悪い、おもしろい、つまらない、にこだわらず、創作意欲を刺激してくれるような作品です。まあ、おもしろいにこしたことはないのですが。

イケメンの雨あれとか、心のこもらないスカしたセリフの応酬より、ベタでもいいから心が震えるようなドラマが観たいです。でも韓流はちよつと苦手ですが。

ちなみに『白い巨〇』は田宮版が好きです。食わず嫌いはいけなイと思いつつも、釣りバカの人の演技を体が受けつけなくなってしまうしました。昔は好きだったのに……

第九話 『絶叫』 1

遠征から戻り司令室に足を踏み入れた桔平を、波野しぶきが出迎えた。

「おめでとうございます」にっこり笑う。「今月に入ってもう五体目ですね」

「ん、ああ……。五体つつつても、そのうち二体は何の反応もないただのダミーだったけどな」

気のない桔平を不思議そうに眺めつつも、しぶきは笑顔を崩さずに続けた。

「ようやくうまくまわり始めた感じですね。これから頑張ってください。応援していますから」

「応援してくれるのはありがたいが、俺はなんもしてねえよ。頑張ってるのはあいつらの方だからな」

ガラス越しに外を見やる桔平。

輸送ヘリから搬出された竜王のそばで、光輔達がメック隊員達に迎え入れられていた。その様子を複雑そうに眺める。

「淋しいんですか？」いたずらっぽく笑う。「本当はこんなところじゃなくて、メックの人達と暴れ回っていたいではありません？」

「いや、別に。この服も慣れたら悪くない。偉そうな奴がペコペコしてくるのも快感になってきたしな」

「それはおめでとうございます」

「鳳さんと木場がいりゃ、俺の居場所もないしな」ふん、と息をついた。「だが、こんなこと、いつまで続けられるのかって思っ」

「……」

「おかしいよな。俺達が出向くまで、奴さん黙って待ってるだけなんて。今はストンストンいつてるけど、これが終わった時、また何

「かあるんじゃねえかって心配になってくる」

「意外と心配性なんですね」

「ん、ああ……」部屋の後方を見上げる。中二階のその位置には風野とあさみがいるはずだった。

「大丈夫ですよ」

しぶきの声に振り返る桔平。

「柊さんがいればどんな敵が来たって大丈夫です。信じていますからね」

「……敵がアスモデウスだけならよかったのにな」

「は？」

「いや、何でもない。波野ちゃんだけだよ、俺のことそんなふうに言ってくれるのは」

「はい。私、柊さんのファンですから」

「すげえ、リップサービスだな。やっぱり口先だけ？」

「はい。口先だけです」

「ふーん……。ま、学校は財団の系列だから何とかなるが、他の人間達にいつまで隠しとおせるかと思ってな。表向きガキどもは、メック・トルーパーの補欠要員ということにしてある。オビディエンサーってのも、あくまでも実用化に至らないセクションの補助的な人員って位置づけだし」

「巷じゃ竜王は遠隔操作で動いていることになっているらしいですね」

「ああ。実際、竜王に関わる部所以外で奴らが最前線で戦っていることを知っているのは、この司令室の人間と限られた特権階層だけだ。ま、知られたくないところには当然筒抜けだろうがな」

「お約束ですね」

「この部屋の中だけでもスパイがうじゃうじゃいやがるからな」百名を超えるスタッフが就労する広大なフロアを見渡す。それぞれが秘守義務のもと無表情に淡々と従事する光景は、異様な雰囲気をもっていた。「プログラムを契機によそからわけわかんねえ連中が

ごっそり流れ込んできやがった」

「古株のスパイとしてはやりづらい限りですね」

「ああ、実にやりづれえ。いっそ適当な情報バラまいて、何が本当なのかわからなくしちまうのもおもしろえかもな」

「私達がガセ情報の提供者になるわけですね」

「そうだ。俺達でフェイクのネットワークを構築してな」

「匿名で嫌な上司に迷惑メールをうつこともできますね」

「そいつはイケてやがんな。俺はあさみにうつ」

「私はそれをみんなにバラします」

「よし、試しにやってみるか。えと、波野ちゃん、メアドは……」

「すみません。私のケイタイ、大きくて邪魔なので解約してきたばかりなんです。テレビのリモコンと見まごうばかりのサイズなのに液晶画面は二桁しかありませんし」

「ええ！ 今時！」

「すみません。いちいち入力するのが面倒で。せめてメモリー機能さえあれば」

「……。ま、それじゃ仕方ないけどな……」

ダイヤモンド！ ヴァアアアアアッ！

「あれ？ 今の着信じゃないの？」

「いいえ」

「でも今、波野ちゃんの服からさ……」

「おなかの音です」

「おなか……」

「ダイエット中なので空腹時は常にこんな感じです」

「怪獣が叫んでる感じ？」

「はい」

「……ふうん。ダイエットつても結構過酷なんだな……」

ダイヤモンド！ ヴァアアアアアッ！

「……。それ、なんて着信音？」

艶やかに微笑む。「ダコラーです」

「ダコラー……。あのさ、メアド……」

「残念です。昨日言っていただければ間に合ったのですが」
マッシ！ カシン！ カシン！ カシン……

「……それもダコラー？」

「いいえ」 桔平を真っ直ぐに見つめる。「ロボです」

「ロボ……」

「はい、ロボです」

「へええ……」

真っ赤なウルフレイヤーが妖しく揺れた。

「その髪型カッコいいね。似合ってるわ。爆発的な感じで」
「恐縮です」

「なんて言うの？」

「赤い彗星です」

「赤い！……」

「はい」

「んじゃ、やっぱ値段も三……」

「はい、三割増しです」

「ああ、割の方ね……」

「柊さんも今日はカッコいいですね。アンテナが立っていて、ちょっとした感じです」

「まあな。やっちゃってるだろ」

「ええ、かなりやっちゃってますね。なんて名前ですか」

「ボサボサもつさりヘアー、妖怪アンテナバージョンだ！」

「妖怪ですか」

「ああ、この時期は特にヤバいからな」

「ネコ娘対策ですね」

「いや、アヒル娘の方だ」

「雅ちゃんのことですか」

「ピンポン」 正解、と指さす。「かわいい顔してとんでもねえ小悪魔だ」

「そんなにたちが悪いんですか」

「ああ。最悪だ。給料前でも平気で甘えてきやがる。気がつきや財布がすっからかんだ。あのアヒル口には男は逆らえねえ。うわさじや礼也の野郎もかなりやられてるらしい」

「でも甘えてこなくなると、それはそれで淋しいんじゃないですか？」

「ああ、ちよっぴり淋しいな」

「複雑ですね」

「複雑なんだよ、これが」

「そうですか。やっちゃってますね、男ってやつは」

「実にやっちゃってる感じの生き物なわけだ、男ってやつはよ」

「まるで共感できないところが逆にすごいと思います」

「まあな。やっちゃってるだけにな。で、今日は何色」

「赤です」

「赤！」

「はい。そろえてみました」

「あ、髪とね。アリだけど……」 桔平が異変に気づく。「あれっ！ チョコは？」

「すみません。ダイエット中なので」

「あ、そう。……赤い彗星なのに」

「はい、赤い彗星なのにです」

「へええ……」 桔平が淋しそうに笑った。ちらと腕時計に目をやる。「ち、止まっちゃった……」

第九話 『絶叫』 1（後書き）

マウントポジションの時にいろいろと浮かんできます。トイレの中、風呂の中、電車の中、車の運転中、仕事中！ トイレや車の中にはメモやケイタイを持っていくようになりましたが、湯水のようにわき上がる時に限ってほとんど信号にひっかからなかったり、女子高生をちら見した瞬間、すこっと全部忘れたりします。まあ、たいていくだらなことです……

調子こいてる時は三時間睡眠とかでも全然平気なのに、駄目な時は三連休あってもセリフ一つ浮かんできません。ガンプラすら作る気がしないし、十時間睡眠のあげく二度寝って……

後書きというよりは勘違いブログですんません。

ご清聴ありがとうございました。

第九話 『絶叫』 2

その瞬間、教室中が静まり返る。

霧崎礼也が入室して来たためだった。

表情を変えることなく一直線に自分の席へたどり着く。椅子にドツカと腰を下ろすと、バッグから菓子パンを取り出しがつつき始めた。

一人の男子生徒がおそろおそろ近づいて行く。

「はあ！ 知るか！」

礼也に一喝され渋々引き返す彼が、とりまきに囲まれ教室に戻って来た桐嶋楓と鉢合わせになった。

周囲の視線に押されるように一歩踏み出す楓。

「どうしたの、加藤君」

楓に問いかけられ、その男子生徒がももごと事の顛末を説明し始めた。

「体育の授業で使うテニスラケットの代金、霧崎君の分立て替えたんだけど、そんなの知らないって。俺、体育委員だから先生に言われて集めにいったんだけど、おまえが払ってけって言うから……」

二年生で野球部のレギュラーナンバーを獲得し、後輩からは鬼の加藤と恐れられる彼が、泣きそうな顔を楓に向ける。

「……。いくら？」

「四千元」

楓が口もとを結ぶ。瞳と眉に決意を宿し、ツカツカと礼也に歩み寄って行った。

「霧崎君」

「ああ？」

じろりと見上げられ、楓がわずかに体を後ろにそらす。

最近おとなしくなったとはいえ、礼也の威圧感は並ではなかった。

「加藤君にお金返してほしいの」

「借りてねえって」

「そんなはずないでしょ」

面倒臭そうに礼也がため息をつく。顔を横へ向けて声を張りあげた。

「なあ、加藤！ 俺、借りてねえよな！」

「霧崎君！」

「お」

「そうやって大声出して威嚇していれば、何でも思いどおりになるとでも思っているの」

「あん？」

「加藤君にかわりに払えって言ったんでしょ。知らないとは言わせないから」

「冗談じゃねえか。いちいち真に受けてんじゃねえって。ガキじゃあるまいし」

「冗談ですむことかどうか、わからないの。自分が今まで何をしてきたかを考えれば、そんなこと言えるはずない！」

「……」

礼也が向き直る。立ち上がり、楓の全身をなめるように見回した。心が退きかけたものの、それでも楓は気丈な態度を崩さない。

「……何」

気持ちを引きしめる楓。殴りたければ殴れ、と、礼也を睨みつけた。

教室中が固唾を飲んで成り行きを見守る中、突然礼也が楓のスカートに手をかける。

「！……、ちょっと、やめてよ！」

膝の上までまくれ上がったスカートを押さえ、楓がキツ、と顔を向けた。

「やべ、勢いつきすぎたか」礼也がにやりと笑った。「今日は足震

えてねえんだな」

見透かしたような礼也の表情に、楓の怒りのボルテージがマックスに達する。手を振りかざし、平手で殴りつけようとするその勇姿に、クラスメート達が青ざめた。

楓の攻撃をこともなげによける礼也。

机に足を引っかけてバランスを崩した楓は、はからずも礼也の胸の中に飛び込んでいくこととなった。赤面し、心臓があおるように高鳴り出す。

「あゝあ、メッキ剥げちまったんじゃねえのか？」

起伏のない礼也の一言に呼び覚まされる楓の心。口もとをぎゅつと結び、礼也を押しのとけると、涙目で睨みつけた。

その様子に礼也が眉をピクリとうごめかせる。はあゝ、と大きなため息をつき、楓に背中を向けた。

「やめだやめ。学校に来るたびに体裁だけでつかかれたんじや、割り合わねえって。俺はばっくれるよ。ほな、バイナラ、正義の生徒会長さん」

バッグを取り、掲げた手のひらから五千円札をひらりと落とす。

「待ちなさいよ！」

「つりは取っとけて。見物料だ」

「霧崎君！ どこへ行く気！」

「いねえ方が平和でいいだろ、俺なんざ」

「……」

「あ、それからよ」

礼也が立ち止まる。ぼそりをつないだ。

「あんた、そういうの似合わねえって」

「……」

「ひっきしんっ！ んあゝ」

赤面したまま、楓は礼也の後ろ姿をいつまでも睨み続けていた。悔しそうな顔だった。

メガル本館大会議室では、恒例の副局長対幹部連中の舌戦が白熱化していた。

「あのなあ、もっとわかりやすく言ってくれねえかな！」

相手を睨めつけるように桔平が大声を張り上げる。

負けじと立ち上がったのは、毎回桔平の鼻をあかすために仕事そっちのけで労力を費やす、キャリア組の新星だった。

「この程度の用語は基本の基です。これから先頭に立って我々を統率していくような人間ならば、それくらいの用例は覚えて頂かなければ」

まくし立て、鼻からロケット噴射のような大容量の憤りを噴出する。

「つまりだ、俺の方がもっと勉強してあんたらに合わせろって言うてんだな、あんたは」

「そうは言っておりません。たかだか簡単な用語と、ごく日常的な言い回しにすぎませんので。それほど無理なことを言うてはいないと思われませんが。もしそう思われたのなら、それはあなたの知識と解釈に問題があるのではありませんか？」

一同から、ほほお、と感嘆がもれる。

進藤あさみは闘技場を覗こうともせずに、秘書と書類のやり取りを交わしていた。

勝利を確信し、男が椅子に腰を下ろす。

逆襲はその間隙をつくように彼へと押し寄せてきた。

「言葉じゃねえ。ニュアンスがあいまいだって言うてんだ。どうとでもとれる言葉、わざと選んでるふうにしかな聞こえねえ。決して不可能という意味ではないが成功する確率は極めて低く加えて実現に至るプロセスは困難を要するものと推察されなおかつ確たる根拠もないため現時点ではその可能性の有無を公言しかねることは誠に残念な限りです、って、いったい何が言いてえんだ。何回おなじこととでひっくり返ってんだ。結局、できねえことと残念だってことしか伝わってこねえぞ。これのどこがごく日常的な言い回しだってん

だ。こんなめんどくせえ言い回し、近所のおばちゃんが当たり前のように使ってるの見たことあるのか。それとも俺がスルーしてるだけか！俺の目が節穴なだけで、平均的なおばちゃん達はそんなにボキャブラリーが豊富だったのか！俺にはあんたらがいい加減に言葉濁して、責任逃れしているとしたか思えねえぞ」桔平の目が据わる。「違うか？大城室長」

大城と呼ばれたその男が再び立ち上がった。その勢いで長机を打ちつけ、湯飲みがひっくり返る。

「それは失言ではありませんか、副局長！我々に対する侮辱としかとれませんぞ！」

ざわめきたつ大会議室。

その中でただ一人、桔平だけは大城を見据えてにやりと笑った。

「そのとおりだ。否定する気はさらさらない」

「な！……」

予期せぬカウンターに勢いをそがれる大城。

すると桔平はさらにもしろそうに笑いながら続けた。

「はつきりしていいだろ。わかりやすくてよ。誰が聞いても誤解のしようがねえ。こんなふうに言ってくれや」

「……つまり、あなたに合わせろと」

「相手合わせは基本だろ。聞き手の粗相は言い手の粗相だって、あんたの行ってた学校じゃ教えてくれなかったのか？よく大学に受かったな」

カチンと音が聞こえそうなほど、大城の表情が険しくゆがむ。

「我々に幼児言葉でも使えと？」

「俺が幼児に見えるんならそうしろ。あんたら頭がいいんだから、どのレベルなら俺が理解できるのかくらい、ぱぱのちよいなでわかるはずだ。いちいち確認とらなくていい。でもな」キラリと輝く邪悪な瞳。「腹いせやあてつけくだらねえことしやがったら、その場で叩き潰すからな。覚えておけ」

「……。お若い」

「んあ？」

銀縁眼鏡のブリッジを指で押さえ、大城が愁えるようにため息をつく。

「あなたはあまりにも青臭く幼い。もつと世の中を学ぶべきだ」

「ほお、そいつはいったいどういったふうで？」

「いいですか。この世にはあえてグレーゾーンにとどめておかなければならないことが存在する。いや、それが大半であると言っても過言ではない。はっきりとした見解を提示すればするほど、そのあげあしとりは容易になるからです。これは断言できる。すなわち白か黒であることを明言すれば、そのような人種はいともたやすく我々の裏をついてくる」

「へえ、そんなイタイ奴らがいるのかよ」

「ご存知ないのですか。我々の周囲はそんな輩だらけです。彼らにまともに対応すれば忙殺されるだけでなく、組織全体が多大な実害をこうむることになる。それを未然に防ぐためのテクニクでもあるのです。そんなことも把握できないようでは、いずれ取り返しのつかない損失を招くのは火を見るより明らかでしょうな」

「おいおい、水くせえじゃねえか。そんなのがいるんならすぐに報告してくれよ」

「報告してどうなるという問題でもないでしょう」

「つれねえこと言うなって。すまなかったな」

優しげなまなざしで大城を見つめる。

「でも安心してくれ。これからはあんたらの手を煩わすことなく全部こっちで対応するからよ。どっちかってえと、そっちのが専門なんでな。いや、正直ものたんねえと思ってたところだったんだが、あんた、いいこと教えてくれた」

「な……」

「俄然、やる気出てきたわ。よしや！ そんなふざけた奴ら、徹底的に調べ上げて叩き潰してやる。迎撃要塞の異名は伊達じゃねえぞ！
くうー、たまんねえな。オラ、ワクワクすっぞ」

「……」

「あ、これからはそんな腰の引けたものの言いをする必要はないからな。胸を張って対応してくれりゃいい。全部俺に任せとけって。あんたらは命にかえても俺達を守る。約束する。あんたらはメガルを支える貴重な戦力だからな。何があろうとすべて俺が責任を持つ。すべてだ」

「そ、それは……」

「どうしたい、浮かねえツラして。それとも何か。あえてグレイゾーンにしかねえと、あんたら自身が困るようなことになるだけでも言うんじゃねえだろうな。おいおい、そいつはスルーできねえな。だよな、大城室長さんよ」

「……」何一つ取り返せないことを悟り、ちんまりと着座する、研ぎ澄まされたナイフのような鋭い切れ味を持つ怒れる若き荒獅子。……だった男。

「なんちってな。ま、そんなことはこれっぽちもないことを知った上でのブラックジョークなわけだが」

その腹の中を見通して、一同が静まり返る。特攻隊長の大城を始め、顔色を失った面々からは、ぞおっ、という音色が聞こえてくるようだった。

追い討ちをかけるべくたたみかける、自称、とても恐ろしい男。

「どうした？ 返事がねえじゃねえか。わかんねえのか、わかんねえふりしてんのかどっちだ、ぼんくらども！」

ドン！ と机に拳を叩きつける。

びくっ！ とすぐみ上がり、高給取りの幹部連が背筋を正した。

「適当にらしい言葉ばっか並べて、煙に巻いてんじゃねえって言うてんだ。もつとわかりやすく説明してやろうか。ただし、これ以上はオブラート付きじゃ無理だがな。こんな簡単なことも理解できねえような能無しはここには必要ねえ。とつととおっかちゃんのところへ帰んな」

大城の惨敗で対決は幕を閉じる。またもや連敗記録が更新されて

しまった。

毎度のことながら、これから桔平のねちねちした口撃が待っているかと思うと、一同の心は暗く重く沈むだけだった。

「ちょっといいかしら」

あさみの参入で部屋中が安堵の吐息であふれ返る。

この助け船を彼らは待っていたのだ。

「静かな部屋でこの書類に目を通したいから、私は失礼させていただきます。あとはみなさんで心ゆくまでどうぞ」

「おうよ」

「……」

鳥のさえずりが音のない部屋に穏やかな音色を奏でた。

山凌学園高校の校門で夕季が光輔に声をかけた。

「光輔」

光輔が振り返る。「何？」

テスト期間中のため多くの生徒達が家路へつこうと通り抜けて行く。空には風に流された雲が広がり、午後からは天気が崩れそうな気配だった。

真剣なまなざしで夕季は光輔を見据えていた。やがて重々しい口を開く。

「木場さんと桔平さんがお姉ちゃんの退院祝いやるから来いって」
戦慄するように目を見開く光輔。

嫌な予感がしていた。

「……」

「みやちゃんも来るって」

光輔の足もとを湿った風が吹き抜ける。

「……。行かなくちゃ駄目？」

「……」

「……」

「……駄目」

「……」

暗雲にまみれた空がゴロゴロとくすぶりはじめていた。

第九話 『絶叫』 2（後書き）

自分なりに色々な『縛り』を入れています。こいつにはこういうことは言わせないとか、こういう行動はさせないとか。気をつけているつもりなのに、見直すたびに破綻が露呈します。後から気づいて、慌てて修正したりするのですが、それによってどんどんグダグダになっていきます。

呪いだと思います。

第九話 『絶叫』 3

市内の大型焼肉店の一席に光輔達は集合していた。

テーブルの奥から木場と桔平と夕季、向かい合って雅と忍、光輔が並んで座る。

「しいちゃん、おめでとう」

雅が笑いかける。それを受けて忍も嬉しそうに笑った。

「ありがとう、みやちゃん」

「よかったな、忍」

木場に声をかけられ表情を正す忍。

「ありがとうございます。隊長」

「おい、こんなところで隊長はやめてくれ」

木場がバツが悪そうな顔をする。

「すみません……」

「おい、しの坊、遠慮すんな。今日は隊長殿のおごりだからな」まだ生焼けのカルビを何枚も押し込みながら桔平が大声を出した。「隊長殿、特等和牛ステーキ頼んでよろしいでしょうか！ なあに、たかだか一皿二千五百円のやつですが！」

上機嫌だった。すでにべろんべろんに酔っ払っている。

「二千五百！」

顔を引きつらせ木場が立ち上がる。

そんなことなどまるでおかまいなしの桔平。

「なんだ、なんだ、みみっちいこと言ってるな、てめえ。それでもソルジャーか！ 兵士か！ ゴリラか！ 俺達や日本の兵隊さんだぞ！ アーミーだぞ！ アーミーマーだぞ！」

「いや、それとこれとは……」

「あゝみゝまゝっ！」

「……」

手のほどこしようがない。

何ごとかと周囲の客や店員が振り返った。金曜の夜なので客数は多い。

「こら、桔平、でかい声を出すな。他の客の迷惑だ」

「何言ってやがんだ、てめえがさんざん迷惑かけてきたくせに」

光輔の箸が空をつかむ。焼き網の上のコースを桔平がごっそりさらっていった後だった。

「……」

消沈したように木場が目線を伏せる。冗談とはいえ、桔平の言葉が胸に突き刺さった。

その心中を察し、忍が悲しそうに木場を見つめる。

「もう、大丈夫なの？」

忍が雅に振り向いた。

「あ、うん。まだしばらくは通院しなくちゃいけないけどね。当分デスクワークかな」

「無理はするなよ」忍をいたわるように木場が優しげな声を出す。

「副隊長には大沼を推薦しておいた。おまえさえよかったら、いっそ事務仕事に専念してもらってもかまわないが」

「そんなわけにはいきません」木場の顔を眺め、嬉しそうに忍が笑った。「お気持ちはありがたいのですが、まだまだやり残したことでただけで」

「おまえらじゃ頼りなさすぎて任せとけねえんだってよ」

桔平の汚れなき悪意に、むぐ、と口をつぐむ木場。

気遣いはすべて忍へとまわされた。

「そういったことは少しも考えてはいないんですけれど……」

「いいんだよ、しの坊。はっきり言ってやりや。こいつは駄目駄目のゴリラえもんなんだから。エスはもとも私でもってたもんですぜ、って言い切ってやれって。実際おまえさんいなくなってから、こいつらがタガタだったんだぜ。な？　ゴリ男」上カルビを飲み込

むタイミングを誤り、むせ返る。「おっほ、オッホ!……」

複雑そうな表情で忍が木場を見上げる。

すると救いの手を差し向けるように雅が参入してきた。

「桔平さん、さっきから暴言吐きまくり。木場さんかわいそうだよ」

「あんん？」

光輔が網へ乗せたばかりの肉を桔平が根こそぎかき出していった。「いいんだよ、みっちゃん。こいつはね、変に気を遣われるより、こうやって俺みたいにズバズバ言ってやった方が幸せなんだって。第一、かわいそうってツラじゃねえだろ？」

雅が木場の顔をまじまじと眺める。げんなりするその様子は、とても幸せそうには見えなかった。

「いるよねえ。自分じゃわかってないけど、ナチュラルに嫌われちゃう人って」

「だろ？ このツラだもん、仕方ねーけどな」

「うん。桔平さん入院した方がいいかも」

「お？ 俺の体の心配してくれるのか。優しいねえ、みっちゃんは」
「でしょ、でしょ。でも心配してるのは頭の方だけだね」

「おう！ そういや、こないだハリセンでぶたれてから時々星がちらつくんだよな」

「ほんと！ それキラキラ星だよ。ラッキー」

「マジでか！」

二人だけが楽しそうに笑い合う。

呆然とする光輔を桔平が視界にとらえた。

「何だ、光輔。おまえ、さっきから全然食ってねえじゃねえか」
「ははっ……」

「若いのに遠慮すんなよ。木場がおごってくれることなんて滅多にないんだからな」

桔平の横で夕季が花を愛でるようにカルビを何度もひっくり返していた。

木場と桔平の目が合う。

「何だ、何だ、ちまちまちま食ってやがって」

木場はその体格に似合わず、肉を一枚一枚丁寧に焼いていた。食べ頃になると忍と雅の皿に取り与える。

「何だあ、焼肉奉行か？ やれ肉汁が、やれ食べ頃が、んなのクソツくらえだ！ 肉は食いたい時にガバチョツと食うのがうまいんだ。こうやってな！」

夕季の肉をすくい取って口に運んだ。

「あゝ、うめえ！」

夕季が桔平を睨みつけた。

「光輔、おまえも食べ食べ！」

「……」

光輔が忍に救いを求めるような顔を向けた。

「ん？ 何？ 光ちゃん」

「……いや、別に」

「？」

「お兄さん、極上骨付きカルビ五人前ね！ あと、網替えて」

「みっちゃん、陵太郎の時は何も力になれずにすまなかったな」

申し訳なさそうに木場が切り出す。それに精一杯の笑顔で雅が応えた。

「いいよ、そんなの。あたしもいっぱいいいっぱいで、わけわからなかったし」

「みやちゃん。木場さん、裏でいろいろしてくれてたんだよ」

フォロ―する忍を何気なく眺める雅。

「面倒な手続きとか、提出書類とか、みやちゃんのこととか」

「こら、忍！ やめ……」

「そうなんだ」にゆっ、と笑って、木場の顔を見上げた。「ありがとう、木場さん」

「いや、別に俺は……」照れ臭そうにそっぽを向く。咳払いをし、光輔に向き直った。「光輔」

木場に名前を呼ばれ光輔が顔を向けた。

「君には本当に世話になったな」

「いえ、そんな」

「謙遜しなくてもいい。君がいなかったら、俺達もこうしてここにいられたか、わかったものじゃないからな」忍に目配せする。「なあ」

忍がそれに頷いた。光輔に笑みをみせる。

「本当だよ。光ちゃんがいなかったら、きっとエスもメックも今みたいになってなかったと思うよ。あたし達もね」

忍が夕季の方に視線をやった。

「そういうことだ」桔平がにやりと笑う。「おまえにはこのうまい肉をたらふく食う権利がある」

夕季の箸に触れた肉を桔平が横取りする。

夕季がギロリと桔平を睨みつけた。

「……」

「どうしたの？ 光ちゃん」

困ったような表情で光輔が雅を振り返り見た。

「雅、席かわってくんない」

「はあ？」

「なんでそんな顔で俺を睨む！」

桔平の大声に光輔達が振り返る。一般客も含め。

桔平と夕季が睨み合っていた。

「自分の胸に聞いてみたら！」

めずらしく人前で夕季が激昂していた。

「俺が何をした！」

「あたしの肉を取った！」

「なんだ、なんだ、たかが肉の一枚や二枚で……」

「一枚や二枚じゃない！ 八枚！」

「さっさと食わねえからじゃねえか！ いちいち数えてんじゃねえぞ。みみっちー奴だな。これだからガキはやなんだ。だいたいどこ

におまえの肉だって書いてある。証拠は？ 証拠を見せろ！」

「自分が何言ってるのかわかってるの！ 子供でもそんなこと言わない！」

「うるせえ、ネコ娘みてえなツラしやがって！」

「してない！ 関係ない！」

「にゃーにゃーにゃーにゃー言ってるじゃねえぞ！」

「言ってる！」

「言ってるにゃいっ！」

「……。みやちゃん、ハリセン！」

「てめえ、俺を殺す気だな！」

光輔と忍が顔を見合わせる。

「焼肉屋にハリセンは持ってこないよね……」

「どう、なのかな……」

「しいちゃん、どうしよう。夕季、かなり目がいつちゃってる……」
雅がすぐるようなまなざしを向けた。「渡しちゃっても大丈夫かな？」

「なんで持ってきてんの、おまえ！」

「うん、光ちゃんシバこうと思って」

「俺！」 光輔が顔を引きつらせる。「なんか、俺にいじわるしないと生きていけないような理由でもあるの？」

「ん？ 別にないけど」

「……」

不思議そうな顔つきでぼそりと雅が呟いた。

「ねえ、なんであの二人、ケンカしてるの？」

「なんでだろうね。そんなにお肉食べたかったのかな、あの子」

「はは……」

忍と光輔が苦笑いした。

見かねた木場が間に入ろうとする。

「やめろおまえら、他の客の迷惑に……」

「迷惑はてめえのツラだ！ 岩石オープンみてえなツラしやがって

！」

「……」

硬直してしまった木場に忍が続く。

「夕季、やめな、みっともない……」

「みっともないのはこの人だよ。お姉ちゃんは黙ってて！」

「……」

桔平が鼻息を荒げ、夕季を睨みつけた。

「てめ、こんな立派な大人つかまえて、みっともないとは何ごとだ！」

「どこが立派！ 小学生みたいなことばかり言って！」

「心がピュアなんだ！ わかんねえのか！」

「言ってて恥ずかしくないの！」

「一点の曇りもねえ！」

「この酔っ払い！」

「酔っふあらってねーい！ んにやははは！ ……ふあーあ」

「みんな迷惑してるじゃない！ 帰れば！」

「嫌だ」眠そうに欠伸をしながら鼻毛をむしった。「まだババンビ食ってねえし。……ひつきしん！」

「ババンビ食べたら帰るんだね！ 絶対だね！」すさまじい剣幕で夕季が立ち上がる。両眼に炎を宿し、店中に響き渡る声で言い放った。「すいません、ババンビ一つ！」

光輔と忍の目が点になった。

「ババンビって何？」

「なんだろうね……」

「小鹿のババンビのことだよ、きっと」

「……」

自信満々の笑顔を受け流す光輔と忍。

「あれ？ 光ちゃん、スルー？ つっこみは？ 正直、不本意ー！」
不満げに訴えかける雅。「どうして？ あたし、何かした？ 言つてよ！ いけないところがあつたらなおすから！ 堕ろせて言う

ならそうするから!」

「……雅、メンドくさいから黙っててくんない」

「ええ……」 雅の頬が風船のように膨らんだ。「光ちゃんのくせに!」

「……」

レベルの低い言い争いはさらに続く。

「なんだ、てめえ、こないだケーキおごってやったろうが。どんだけ意地汚ねえんだ」

「汚いのはどっち。ぽろぽろぽろこぼして、まわりの人達、引いてたよ」

「ドン引きしてたのは、てめえが眉間にしわ寄せてケーキ食ってやがったからだ。せっかくおごってやってんのに、うまいのかまずいのかわかんねえぞ。パシティエにひつ礼だろうが。謝ってこい」

「謝らない。パシティエなんていない」

「二度とおごってやんねえからな」

「いい。一人で行けば」

「わー、この野郎、そういうこと言うか。せつねえだろ」

「自業自得」

「一人ぼっちでいると、ちょっぴりさびしいぞ!」

「木場さんに行けば」

木場の目が点になった。

「俺にふるな!」 きよろきよろと見回し、忍と目が合う。反射的に突き放した。「忍と行け!」

「ええっ!」 忍が木場を睨みつける。「私は甘いものはちよっと!」

「……」 木場が泣きそうな顔になった。

「ほらみろ、あとはおまえしかいねえだろうが!」

「他に友達いないの?」

「他に友達がいらないかだど?」 夕季をせせら笑うように見下ろす。

「いるわけねえだろ」

「やっぱり」

「何がやっぱりだ。てめえだっていねえくせに！」

「……。いる」

「嘘こけ、そいつの名前、言ってみろ！」

「……」夕季がちらりと雅を見る。「……みやちゃん
すると雅が大げさに目を見開いてみせた。

「ええ！ 知らなかった！」

「みやちゃん……」

夕季が悲しそうに眉を寄せた。

「ほれみろ、ほれみろ！」

「うるさい！」

「ああ、おまえはそんなんだから友達できねえんだ」

「そういうこと言うから嫌われるんだよ」

「な〜に〜！」

「こんな駄目な大人見たことない」

「ちょっと待て、へこむ、その言い方へこむ！」クリティカル・ブローが桔平の表情をゆがませる。「思わず食ったモン全部吐き出し
そうだ……」

「いっそ、その腐った性根ごと吐き出して、真人間に生まれ変われ
ば！」

「何！」

フロア全体が殺伐とした空気につつまれる。誰もが関わり合いに
なりたくない、顔をそむけていた。

ただ一人、恐れおののくように夕季を凝視し続ける雅を除いて。

「夕季、おそろしい子！」

「いや、それ変だし……」力なき光輔のつつこみ。「……言いたか
っただけやん」

「メクソとハナクソのケンカだね」忍達に顔を向け、あっけらかん
と雅が吐き捨てた。

「いや、あのな、みっちゃん……」

「みやちゃん……」

「いや、みっちゃん、乙女の口からハナクソとか飛び出しちゃいただけねえだろ。すっこり酔いも覚めるってばよ」

「ごめくん」てへっ、と笑う。「ほんとほはミミクソって言おうと思っただけど、桔平さんの顔見てたらつい出てきちゃったの」

「俺！俺がハナクソ！」

「うん」

「俺、メクソの方がいいなあ」

「駄目。メクソは夕季だから」

「いや、もったいねえだろ。メクソってツラじゃねえじゃん」ふんと鼻息を荒げ、胸を張る。「やっぱ俺の方がメクソだって。どう見たって俺の方がメクソにふさわしいツラだしな。ずばり、俺こそがミスター・メクソだ」

「ええ〜」不服そうに口をとがらせる。「またそういうわがまま言う。我慢してよ」

「嫌だ、俺、メクソがいい〜。メクソがいいいい〜！」

「しょうがないなあ、もう」夕季へと向き直った。「夕季はどっちがいいの？」

「どっちもいや……」

「わがまま言いやがって！」

「ねえ、わがままだよねえ」

「……」

驚愕のまなざしで光輔達が雅を迎え入れる。

おもしろそうに雅が笑った。

「仲いいんだね、夕季と桔平さんって」

そうかあ、という顔を向ける光輔。

「いてててっ！」

光輔らが振り返ると、夕季が桔平の腕をひねり上げていた。

「キメるな！こんなところでキメるな！」

「それ離せ！」

「夕季！……」忍が絶句する。

桔平の手には箸が握られていて、その先っぽにはしっかりと肉がはさみ込まれていた。ギシギシと骨を軋ませ、夕季が焼き網の上まで誘導していく。

「くっ！ 頼む、こいつだけは食わせてくれ」

「駄目。さっきからさんざん食べてるくせに。あたし一枚も食べてない」

「俺はどうなってもいい。だが、こいつだけは食わせてくれ。この特等和牛ステーキだけは……」

「駄目！」

光輔達が顔を見合わせてため息をつく。
忍が優しげなまなざしを光輔に向けた。

「光ちゃん、大丈夫？ なんだか元気ないみたいだけど」

「うん、大丈夫」

木場が光輔の皿に肉を差し入れる。

「あ、すいません……」

「よかったね、光ちゃん」

光輔が雅を恨めしそうに眺めた。

雑音にシャッターを下ろし、最初から四人しかいなかったかのよう
うに、しめやかに祝賀会は再開された。

「あ、ギブ、ギブ！ バカ、いてて！ 折れた！ マジ折れた！

ああ……、……。ぎゃあー！……」

店中の視線が注目する中、桔平の手から箸がポトリと落ちた。

第九話 『絶叫』 3（後書き）

日常をしっかりと描いた物語が好きです。もちろん、優れた非日常があつてこそですが。

それまでなんとなく惰性で観ていたようなものでも、何気ない一コマに触れることによって、評価が一変することがあります。ああ、なんかいいな、この輪の中に入ってみたいな、などと。いわゆる、ハマった瞬間でしょう。あまり共感が得られないことがわかっていうため、たとえすら出しませんが……

個人的には、クライマックス前の日常の出来がその作品の余韻を決定付ける、などと思っています。とはいえ、バーベキューや焼肉で数十枚というのは、自分でもアリえないと思っています……

自己満足におつきあいしていただき、誠にありがとうございます。た。

第九話 『絶叫』 4

格納庫に光輔ら三人のオビディエンサーが集合していた。

竜王を背に、技術者達の先頭に立って桔平が説明を始める。

「おまえらにはもう不要なものだという判断で、補助具のマウントパーツはすべて取りはずすことにした。計器類も必要なもの以外はとっぱらっておいた。もともと胴体部分はスカスカだったから、かなり広くなったはずだ。パツと見、感圧式の操縦桿にヘルス・チェッカーくらいだな。これで中でシェイクされてもケガする確率はぐっと減るはずだ。いずれ連絡用のサポート・ディスプレイなんかも追加する予定だ。データによると竜王の操縦は、その時の健康状態に左右されたり、精神疲労も激しいらしいんで、今までどおり武器の携行も併用していく方がいいだろう。インプ程度ならコイルガンやマシンガンでも充分だろうから、少しでも力のセーブになればというところだな」

「そんなもの持っていくと、邪魔になるだけだよ」

夕季がぶすりと突き刺す。

右手の包帯を隠しながら桔平が顔をそむけた。

「……まあ、そこら辺はおまえらの判断に任せる」

礼也が不思議そうな顔をする。光輔が困ったような様子で二人を眺めているのに気づいた。

「どうした、光輔」

恨めしそうに視線を向ける光輔。

「いや、別に……」

「？」

「他に何かあったら言ってくれ」

周囲を見回し、おそるおそる礼也が拳手した。

「なんだ、礼也」

「何でもいいのかよ」

「おお、言ってみろ」

「んじゃ、あのよ、ジュースホルダ付けてくんねえかな……」

「却下だ」

「何！」

「あってもいいと思う」

夕季の提唱に全員が注目する。

「乗ってみればわかるけど、冗談抜きで体力の消耗とか著しいものがある。水分補給だけでもできる時にする必要があると思う」

「……。わかった。前向きに検討する」

流れが沈静化したことを確認し、礼也が一拍おいて仕切り直す。

「あのよ、空いたスペースに音楽用のスピーカーとか……」

「却下だ」

「何！」

「あってもいいと思う」

「……」

「邪魔なものは極力ない方がいい。たとえばヘッドフォン一つにしても、異物があれば精神集中の妨げになるし、できれば音声でオンオフができるシステムに切りかえてもらった方がいい」

「……それは考えている。精神状態を落ち着かせるためのBGMとかもありかもな」

「……」

「……」

「……」二人を交互に見比べ、礼也が顎を引く。慎重にタイミングをはかるように切り出した。「あのよ……」

「却下だ！」

「何！」

「どうせテレビが観たいとか言い出すんだろうが。お見通しだ、てめえらの考えそうなことは！」

「そんな言い方しなくてもいいじゃねえか！ 勝手に決めつけやがって！」ナイフのようなまなざしで桔平を睨みつけた。「当たってるけどよ！」

光輔がぼそりと呟く。「てめえらって、俺も含まれてるのかな…」

「そんな居心地よくしてどうするつもりだ。竜王の中でお泊りでもする気か！」

「わかんねえだろうが！ ミッション中に戻れなくなることだってある！」牙を剥き出し、真っ向から立ち向かった。「続き見のがしちまったらどうすんだ！ あと女子アナの番組とか！」

「んなもん、ビデオに録っとけ！」

「ああ！ ぜってえ帰れるって自信あんのに、わざわざビデオ予約してくるアホがいるかって！」

「木場がそのアホだってんだ！」

「アホの話はどうでもいいって！」

「アホのくせにこまけえんだ、あいつは！」

「知るか！ 娯楽は必要だろうが！」

「てめえの意見は娯楽オンリーじゃねえか！ いい加減にしろ！」

「娯楽オンリーじゃねえ！ もっと大事なもんが…」

「冷蔵庫だろ、てめえ！」

「何で俺の考え全部わかんんだ！」

「俺だって不思議だ！」

似た者同士の潰し合いを冷やかな視線達が静かに見守る。

「だいたい、なんだ、てめえは。すっかりキャラ変わってんじゃねえか！」

「変わってねって！ 俺はもともとこんなキャラだったのが、人間不信で心がすさんでただけだ」

「信じられるか！ なんだ、その後付け設定みたいな説明は」

「ウゼえこと言ってんなって。雅に聞いてみる」

「あの子がまともなこと言うわけねえだろ！」

「そりゃそうだけだよお！」

「必要だと思う」

夕季の横入りに、げんなりしたように桔平が顔をそむけた。

「……ああ、そうだな。テレビがありや最新のニュースとか即座に観れるもんな。気になる選挙速報とかよ。不測の事態で身動き取れなくなっても、お泊りしながらアニメとか観てりゃ元氣も出てくるだろうし。腹減ったら冷蔵庫の中から……」

「そんなのどうでもいい」

「……」

「何！」

「細かい指示が必要な時、声だけじゃ伝わりにくいから。実際、判断に迷ったことも一度や二度じゃない。意思疎通のためだけにまたGoogleをするのも無駄だし。それにあれ、目が疲れるから」

「……て言うか、ディスプレイならさつき付けるって言ったんだけどな……」 桔平が悲しげに空を見上げた。「それに、おまえらの顔色をうかがうこともできるか……」

「……」

「あとのことはチーフクルーの朴さんに聞いてくれ。俺はもうドロインする……」

夕季と目が合い、桔平は逃げるようにその場を立ち去って行った。

「……」

「なんだよ、あの野郎。俺ばっか狙い撃ちしやがってよ」 夕季をちらと見る。「なんでおまえの意見ばっか通んだ。ヒイキだろ。おまえ、あのオッサンの弱みでも握ってんじゃねえのか。ひょっとしてあのケガ、おまえがやったんじゃないだろうな」

夕季が礼也を睨みつける。怒ったような顔が上気し始めた。

「マジか……」

「……」

「狂犬か、おまえは」

「うるさい。礼也に言われたくない」

「おまえ、マジで俺の腕も折るつもりだったな」

「……」

光輔一人がハラハラし続けていた。

「本当かよ、それ……」

格納庫と事務所を結ぶ通路の一角にある休息所で、清涼飲料水を飲みながら桔平が苦虫を潰したような顔になる。

向かい側で光輔が神妙な様子でそれに頷いた。

「覚えてないんすか。ババンビが食いたいつて言っていましたよ」

「なんだ、ババンビって」戦慄の表情を光輔に向ける。「そんな食いモン存在するのか？」

「夕季が頼んだら普通にビビンバがきてましたけど」

「マジか。……あいつもたいがいモノ知らねえ奴だな」

「その後泣きそうな顔で、ずっと下向いてましたよ」

「まあ、いた仕方ねえとこだな」

「桔平さんに恥かかされたって憤慨してましたよ、あいつ」

「なんだ、そりゃ。言いがかりじゃねえか。逆恨みもいいとこだろ」

「……。あゝみくまゝってどういう意味すか」

「何！ 鳳さんの得意技じゃねえか。なんでおまえが知ってたんだ。」

酔っ払って連発して夕季に白い目で見られたって、オッサンへこんでたぞ」

「確かに白い目で見てましたね。みんな」

「……」

苦々しげに首を傾げる桔平。

「記憶がねえんだよ。特等和牛ステーキ頼んだとこまでは覚えてるんだけどな」真剣な顔。「食った記憶がない。なんでだかわかんねえんだが、夕季に関節キメられてたのは覚えてる」

「その後すねて、わめき散らしながらトイレ行って、便器抱えて寝てるとこ店員さんが教えてくれて、木場さんが車まで運んでったんです」

「……なんだそりゃ。そんなみつともねえ酔っ払い、そうそういねえぞ。俺の知る限りじゃ、鳳さんくらいだ」

「そんならいいわ！　もういいわ！　とか言っていましたよ」

「俺がか？」

「はい」

「……。くそっ、言いそうだな……」

「ええ」

「朝起きたら、なんか腕が痛くてよ……。なあ、はたから見て俺の敗北ぽかったのか」

「ええ。て言うか、完敗ぽかったす。衝撃的な光景でしたよ。『ぎゃあー！』って叫んでましたから」

「マジか……」

「店の人達、固まっていましたよ。俺トラウマになりそうす」

「バカ野郎」ドスのきいた声。淋しそうに天を仰いだ。「こっちはすでにトラウマなんだってばよ……」

「大丈夫すか」

「大丈夫じゃねえ。まるで勝つ以外すべてが終わるダブルヘッダーの最終回に点が取れなくて優勝の望みを絶たれた状況で最後の守りにつく野球チームみたいだ」

「……なんか共感しづらい例えすね」

「当然俺は反対のチームを応援していたわけだが」

「それは言わなくてもわかります」

「そうか、そりゃなによりだ……」

「……。夕季の奴、かなり根に持ってますよ」

「……なんでだって。たかが肉のことくれえでよ。……やべ、涙が出てきそうだ……」口をへの字に結び、泣きそうな顔になる。「酔っ払って女子高生に関節キメられて、筋までやっちゃったなんてメックの奴らに知れたら、何言われるか。駒田や南沢の嬉しそうな顔が鮮明に浮かんできやがる。くそ、想像しただけで憎たらしい！　ジジイどもにもハッターきかなくなるじゃねえか。やっと足場固ま

ったとこだったのによお。あいつ、言いふらさねえだろうな」

「夕季は大丈夫だと思いますけど。……木場さんに相当ひどいこと言っていましたからね、桔平さん」

「……恨んでると思うか？」

「……たぶん。あと、雅も結構口軽いすよ」

「みっちゃんな。軽いな、ありゃ。……ぷかぷかだな」

「ええ。ぷかぷかです」

はあ、とため息をつく二人。

「くそ、わかってたのによお。あいつはやべえ匂いがしてたんだ。わかってたのに、やっちゃった。あああ、上向いてねえと、泣きそうだ……」

「しっかりしてください」

「……。なんでおまえ、そんなに俺に優しいんだ」

「気持ち、わかりますから。……俺もあいつに勝った記憶がないす」

「そうか」自嘲気味に笑う。「いつか勝てるといいな」

「無理すね。勝てる気しないす」

「そうか。無理か」

「ええ。ひよつとしたら、なんて、こないだまで思ってたんすけど、やっぱり無理す。あいつ、握力両方とも五十キロ以上あるんすよ」

「あの体型でか？」

「はい」

「……。……おまえは？」

「四十七、八くらい。左はたぶん四十ないす……」

「そうか……」淋しそうに笑った。「そーいや、すげえ力だったな。腹筋とか割れてたりしてな」

「それ、笑えないすね……」

「野郎、どんだけ連勝記録伸ばすつもりだ。おそらく次の獲物はおまえで決まりだ。首洗って待っとけ」

「いや、俺はやらないす」

「くそ、偉そうなジジイどもならまとめて蹴散らせるのに、なんで

あんな小娘一人に勝てねえんだ」

「……相性ですかね」

「いや、そいつを認めちゃったら、一生あいつの子分でいなきゃならねえ。したら、しの坊にも頭が上がりなくなる。俺はあいつらの奴隷だ。哀れな愛の奴隷だ。いや、この際愛は関係ねえ」

「その考えにいきついた時点で、すでに負けている感じがぷんぷんしてるんすけど」

「みっちゃんは素直でいい子なのによお。同じ女子高生で、なんであんなに違うんだろうな」

「……」

「むしろひそかに俺に憧れを抱いているふしさえうかがえるしな」

「……。気づいてないんすか」

「何がだ」

「相当いじわるされてますよ、雅に」

「……」 桔平の表情が凍りつく。記念撮影前のトランプタワーをくしゃみ一つで吹き飛ばされたような顔だった。

「……」

「……。……なんか気持ち悪くなってきたな……」

「……あ、俺の気のせいかもしれないす」

「……。いや、大丈夫だ。……薄々わかってたことだ。気を遣わないでくれ。今は逆につらい」

「そうすか」

「ああ。俺ならもう大丈夫だ」

「強いんすね」

「まあな……」

「なんてったらいいのかわかんないんすけど、……頑張ってください」

「ああ……。おまえもな」

「はい……」

二人そろって、くびつとジュースを飲み干した。

第九話 『絶叫』 4（後書き）

主観推敲と客観推敲って、あると思います。重箱の隅をつつくほどの勢いでチェックして、完璧宣言したにもかかわらず、アップした途端に気づいちゃうというあれです。いわく、服に身をまとうちやったり、こなきじじいをきなことじじいにしちやったり、頭が頭痛で痛かったり。え！ 戦国サバラって何！

『フラワー』と口に出して画面を見ながら『ハラワー』と打ち込んだ友人にはかなり癒されました。

第九話 『絶叫』 5

休息所の脇の通路を夕季は歩いていった。

「！」眉を寄せ、一瞬足を止める。自販機の前は大沼透の姿を見かけ、そ知らぬ振りで通り過ぎようとした。

大沼は厳しい顔つきで夕季に注目していた。

「何飲む？」

かまえるように夕季が顎を引く。

すると穏やかに微笑みながら大沼は言った。

「遠慮するな」

ガッツ！

「謹慎処分をくらったそうだな。すまない、俺達のせいなのに」

もてあまし気味の缶から顔を上げ、夕季が上目遣いに大沼を眺める。

ほぼ同等の体格の桔平に比べ、大沼には妙な威圧感があった。スキを感じさせないいでたちと、しっかりと鍛え上げられた体躯が余計にそう思わせているようだった。

「誰のせいでもない。自分が勝手にやったことだから」

「進藤さんから相当お小言いただいたんだろ。援助金にも影響するんじゃないのか」

「……。そっちは」

「ギリギリで首はつながった。柊さんのおかげでな」

「そう。よかった……。ですね」探るような視線を投げかけたまま、心のこもらないセリフをつなぐ。

その心境を察して大沼が笑いかけた。

「心配するな。もうエスは前とは違う。間違っても君や穂村君の命を狙うような真似はしない」

「……」

「柊さんのはからいでエスは部隊として存続することになった。同じメック・トルーパーの中の、鳳隊と木場隊という位置づけだ。だから安心しろと、お姉さんに伝えておいてくれ」

「……わかりました」

夕季が頷く。一旦目線をはずし、また大沼の顔を見上げた。

「……。最近、エスの人が、お菓子とかよくくれる」

「迷惑か」

「迷惑じゃないけど……」

「みな、君のことを命の恩人だと思っているからな。何か礼がしたくて仕方がないんだろう」

「……そんなのいいのに」

「そういうわけにはいかないだろう。感謝の気持ちもあるが、君達には心から申し訳ないと思っているはずだからな」

「どうして」

「ん？」

大沼がおもしろそうに笑った。

「なるほどな。忍に聞いていたとおりの人物だ」

「……。お姉ちゃん、何て言っていたの」

「筋金入りの意地っぱりで、不器用で、そして誰よりもまっすぐな心を持っている」

赤面する夕季。

「おまけに照れ屋だそうだ」

「……」

「あの時……」

ふいに大沼の表情が曇る。遠くを見つめるようなまなざしになった。

その神妙な様子に、まばたきもせずに夕季が注目する。

「本気で尾藤を殺す気だったのか」

ピクリと眉をうごめかせる夕季。目線を落とし、思い返すように

それを口にした。

「……わからない。桔平さんが止めてくれなかったら、ひよつとしたら……」

「あいつは最低の人間だ。殺されたとしても、それを誰もとがめたりはしないだろう。だが人殺しは人殺しだ。柊さんに感謝しなければな」

大沼は表情もなく夕季を眺めていた。自分自身の姿をそこに投影するように。

「俺達のもっとひどい過ちを犯すところだった。何を言われても仕方がない。言い逃れをするつもりもない。謝って許されるようなことではないことも承知しているが、どうか許してほしい」

「もういい。気にしてないから」

「本当にすまなかったと思っている。それなのに君は我々のために己の身を投げ出し、失いかけていた大切なものを取り戻させてくれた」

「……。大切なものって？」

大沼が柔和な表情になる。照れたような、自嘲するような素振りで、それでも夕季の視線をしっかりと受け止め、はつきりとそれを口にした。

「口にすることすらためらわれるような、恥ずかしい言葉だ。勘弁してくれ。だが、俺達はみな、それを持つことを誇りにしている。この恩は生涯忘れない。借りは必ず返させてもらう」

再び夕季が顎を引いてかまえる。真摯な様子で素直に過ちを認める大沼の気持ちがあくすぐったかった。その反面、メック・トルーパーのメンバーとは違う妙なよそよそしさを感じ、戸惑っていた。

「そういう他人行儀な言い方はやめろよ、大沼さん」

駒田の声に二人が振り返る。

その笑顔を確認し、夕季がほっとしたように胸を撫で下ろした。

大沼が放った缶コーヒーを受け取る駒田。

「あ、スンマセン」コーヒーを口に運びながら駒田がウインクした。

「そんなふうになんて言われちゃ、助けた甲斐がないよな、夕季」

「……」

「そうだったな」 何かに気づいた様子で大沼がにやりとする。「俺達は仲間なんだからな」

「そういうこと。な」

「……うん」

「今度メシでもおごらせてくれ」

「やった！」

「貴様じゃない」 跳び上がる駒田を冷たくいなし、涼しげなまなざしで夕季に笑いかける。そこにあるのは信頼だった。「古閑さんに言っただ」

ようやく缶のプルタブに指をかけ、夕季も安心したように笑った。「ゆうきでいい。みんな、そう呼んでるから」

「ああ、わかった」 嬉しそうにその顔を見続ける大沼。「何か食べたいものはあるか？」

「……」 ジュースをくびくびと流し込みながら夕季が考える。「……」

「焼肉」

「お、いいねえ」

「貴様は自分で行け」

「冷てえぞ、仲間なのに」

大沼が駒田を視界の外へと追いやった。

「他にリクエストがあれば言ってくれ。可能な限り応じる」

「……」 再び考えをめぐらせる夕季。缶に口をつけたまま、ぼそつと告げた。「桔平抜きで」

「ぶふっ！」 駒田がコーヒーを噴き出す。

大沼の顔がみるみる青ざめていった。

第九話 『絶叫』 5（後書き）

猫が好きだったりします。追えば逃げる、何もしなければ寄って来る、で、触ろうとすればまた逃げる。そのくせ、淋しがりやで時々すり寄って来たり。でもたいていしつこく触りすぎて嫌われます。それっぽい性格設定をトレースしたキャラクターはついヒイキしてしまいますが、実際にいたらやはり嫌われるでしょう。

呪いだと思っています。

第九話 『絶叫』 6

アスモデウスの仮面が陥没した。

陸竜王が正拳突きのかまえてナックル・ガードを引き戻す。バーン・クラッカーと呼ばれるその攻撃は、噴火口から高速で撃ち出されるマグマのようだった。

ぐらりとのけぞるアスモデウス。

「光輔！」礼也が振り返り、叫ぶ。「俺が盾を攻撃するから、その隙に奴を引き倒せ！」

『わかった！』

「夕季、おまえは上から首を切り落とせ！」

『了解』

全身を真紅に染め上げた陸竜王が、アスモデウスの左腕に連続してクラッカーを放つ。

間合いを確認しながら海竜王が後方に回り込んだ。

蛇の尻尾はすでに切り落とされていた。

右側の牛の首目がけて海竜王が高密度クローを射出する。

その時、光輔の視界がぐにやりとゆがんだ。

「！」

牛の首をかすめて彼方へ突き抜ける銀の爪。

金色に光る両眼で海竜王を睨みつけ、アスモデウスが毒槍をなぎ払った。

「よけろ、光輔！」

退こうとした海竜王の膝がガクンと折れる。回避のタイミングを逃し、その攻撃をまともに食らうこととなった。

凄まじい衝撃を受け、海竜王が百メートルも吹き飛ばされる。背中からアスファルトのロータリーへ叩きつけられ動かなくなった。

「光輔！ 大丈夫か！」

礼也の叫び声にも返るものはない。

大きな口を開き、アスモデウスが毒槍を海竜王に突き立てようとしていた。

「光輔ー！」

礼也の絶叫をかすめ、空から白い翼が駆け抜ける。

ビルとビルの谷間を斜めに貫き、間一髪、夕季が海竜王を救い出した。

「うおおー！」

右腕を振りかぶり、身長の上五倍以上も跳び上がる陸竜王。振り向いたアスモデウスの仮面に鋼の拳をめり込ませた。

陸竜王から降り立つ礼也の表情は厳しかった。

すでに光輔と夕季はそれぞれの機体から降りている。

へたり込むように地べたに座る光輔の姿が目に入った。

注視する夕季も気にせず、礼也は一直線に光輔の前まで歩いて行く。その勢いのまま、ぐいと光輔の肩をつかみ上げた。

「何やってんだ、てめえは！」

「……はは、ごめん」

「ごめんじゃねえだろ！ おまえ一人の問題じゃねえ！ 俺達の命もかかってんだぞ！ ぼけぼけして足引っ張ってんじゃねえって！」

「悪かったよ。今度から気をつける」

「今度があるなんて保証、どこにもねえんだぞ！ 何だ、そのふざけた態度は！」

「やめなよ、礼也」

礼也が夕季に顔を向ける。

礼也と同じ表情で夕季は続けた。

「見てわからないの。光輔、すごく疲れてる」

礼也が光輔の顔をまじまじと眺める。生気がなく、焦点の定まらないまなざしを泳がせていた。よくよく見ればその頬はこけ、顔色

も悪いことに気づく。

「夜更かししたとか、風邪ひいたとかいうレベルじゃない。明らかにおかしい」

「……。それがどうした。俺達や部活動やってんじゃねえ。死にたくねえんなら、体調管理くらいしとけて」

「そんな生易しいものじゃない。あたしもそうだったからわかる。竜王は肉体も心も蝕む。精神が不安定な時は特に。止めようとしてどうにかなるものじゃない。弱っている心をあつという間に、食らいつくそうとしてくる」

「……」礼也が眉を寄せる。怪訝そうに光輔を眺め、憤りのような言葉を吐き出した。「それでもやらねけりゃならねえんだ。あのバケモンとまともに戦えるのは、今のところ俺らだけだからな。お互いのためにも、これ以上の犠牲を出さないためにも、俺達は一人だって欠けることは許されねえ」

「礼也！」

「それとも、こいつの分までおまえがやれんのか。足手まといぶら下げながら余裕で立ちまわれるほど、てめえはすげえのかって」

ぎゅっと口もとを結ぶ夕季。礼也を睨みつけた。

「やっぱり礼也とは……」

「いいよ、夕季」

夕季の決意をかき消す光輔の声。

疲れた顔に無理やりの笑みをたたえた。

「俺やれるから。たいしたことない。昨日遅くまでゲームやってたから、寝不足なだけだって」

「光輔……」

「だいじょぶだよ。おまえの時とは違うから。俺、体力には自信があるしさ。ほんと、だいじょぶだって。一晚寝れば治るから……」

「……」

心配そうに夕季が光輔を見つめる。それから礼也へと視線を向けた。

礼也は複雑そうな表情のまま、二人のもとから去って行った。

人気のなくなった司令室別室で、一人桔平は難しい顔つきで資料とにらめっこしていた。

カツカツと近づく足音。

それに振り返ることもなく口を開く。

「腑に落ちねえ。何だか奴らに試されているみたいだ。スペック自体にもバラツキがあって、光輔や夕季に言わせれば、最初の奴ほどの力を持ったのはいないらしいしな。今俺達が戦っている相手は、ホンモノとは違う廉価版みたいなもんだ」

「……」

「何かあると考えた方がいい。今のうちに手を打つとくのが得策だ」
すると足音の主、進藤あさみは感情のともなわない様子でそれに答えた。

「で、どうすればいいのかしら」

あさみの問いかけを受け流し、桔平がその隣で立ちつくす大男をちらと見やる。黒いスーツを着た身の丈二メートルを越す金髪の偉丈夫は、サングラスをかけたまま一言も喋ろうとはしなかった。

「そいつがうわさの彼氏か？」

するとあさみが艶やかに笑った。

「そうとも言えるのかしら」

「……」

「冗談よ。シヨックだった？」

「……あのなあ」

「彼はウラジミル・カラシニコフ。メガル、ロシア支部の人間。名前くらい聞いたことあるんじゃない？」

「さてね」

「マスター・ドラグノフの戦友らしいわ。彼からあなたのことを聞いて、ぜひお手合わせ願いたいと、はるばるやって来た次第」

「お手合わせもくそも、俺はドラグノフには手も足も出なかったわ

けどがな。どうせこいつもスペツナズかなんだろ」

「元ね」

「元つったって物騒なことには変わりねえ。未来型サイボーグみてえなツラしやがって。木場よりでけえ奴見んの、久しぶりだぞ」

「ロシア支部なら木場主任も目立たないでしょうね」

「……。最近、ロシア支部はいうわさを聞かねえ。おっさんのやり方が気に食わねえ半勢力派が台頭してきているからな。ここにもかなりの数の間者がいるはずだ。奴さんら、どっちも狂信的な面が色濃い。風野派も反対派も相当無茶しかねえ」

「だから言ったじゃない。あなたも私も殺されるかもしれないって。確かに私達のことを快く思っていない輩も少なからず存在するみたいね」

「少なからず、な。……で、急遽、ボディガードが必要になったってわけか」

「そうとっていただけるのかしら？」妖しげに微笑んでみせる。「ちなみに彼のメガルへの忠誠は本物よ」

「忠誠ね。なんにせよ、迷惑な話だ」

桔平が目配せをする。それに頷くようにあさみがふっと笑った。

「はずしていただける？」

何も言わずにカラシニコフが退室して行く。

それを見届けてから、桔平が切り出した。

「いつ封印を解くつもりだ、あさみ」

「何の封印？」

「とぼけるな」ゆっくりと顔を向ける桔平。「ガーディアン封印に決まっているだろう。博士が砦埜島から持ち帰った、御神体のことだ」

「そう。知っていたの」当然のように受け止める。「残念ながらそれをどうしようとは今のところ考えてはいないわ。プログラムには三体の竜王だけで十分対応できているようだし。あんなものに乗せられて、ただでさえ余裕がないのに、これ以上余計なものを押

しつけて彼らを動揺させるようなことはしたくないから。彼らはまだ高校生なのよ」

「おまえの口から出る綺麗な言葉からは、まったく違った真意がうかがえるんだがな」

「失礼ね、柊副司令」値踏みするように微笑む。「どうしたの、その腕。階段から転げ落ちでもしたのかしら」

「酔っ払ってケンカしたただけだ」

「めずらしいこともあるものね。あなたにケガをさせるなんて、その人、アスモデウスより強いんじゃないの？」

「……」桔平が動きを止める。「……間違っちゃねえ」

「うちにスカウトしたいくらいだね」

「いや、その必要はねえし……」

「あら？　話が見えないけど。ぜひカラシニコフにも紹介したいわね」あさみの瞳が妖しく光った。「何か用？」

桔平が振り返る。

入り口に夕季が立っていた。

「許可もなくこんなところへ立ち入るなんて、感心しないわね」

「……」

「いや、俺が呼んだんだ」ふん、と鼻から息をもらす。「夕季、あっちへ行くぞ」

頷く夕季。

二人の後ろ姿をあさみは冷徹に眺め続けていた。

第九話 『絶叫』 6 (後書き)

ちっともSFじゃないです。いきなりですがSFってどのあたりまでを言うのでしょうか。て言うか、ロボットものってジャンルのに何？ 冒険もの？ ヒロイックもの？

リアル系ならSFで通るのですが、スパロボ系って敵の存在も含めてファンタジーの方が合ってるんじゃないかと。個人的にはサイエンス・ファンタジーなんじゃないかなとかねがね思っていました。ヒロイック・ファンタジーだとSF要素が薄そうだし、だいたいSFにならんし……

SFの99%を占めるであろう、サイエンス・フィクションとスペース・ファンタジー（オペラ）、実は結構苦手だったりします。

中には面白くて引き込まれてしまうようなものもありますが、星戦争、ダメです。

あくまでも主観なので、好きな人ゴメンなさい。

第九話 『絶叫』 7

「駄目だろ、勝手にこんなところに来ちゃあよ」

談話室で夕季にジュースを手渡しながら桔平が言う。

「なんか話でもあるのか？」

思いつめたような表情でジュースの缶を見つめ、夕季が静かにそれを切り出した。

「光輔のことで……」

「光輔がどうした」

「光輔、海竜王から降ろした方がいいかもしれない」

缶コーヒートのプルタブを開け、夕季の顔を眺めながらぐびっとやる。「何故だ」

「海竜王が光輔の命を吸いつくそうとしているかもしれない」

「は？」

「根拠はない。でもあたしはそんな気がした。健康な時や氣力が充実している時はきつとよくわからない。だけど、少しでも弱い部分をさらけ出すと、待ちかまえていたように一気に食らいつこうとする。そんな気がする。信じてもらえないかもしれないけど……」

「信じるも信じないも」空き缶をダストボックスに放った。「実際に乗ってるのはおまえらなんだから、おまえがそうだって言うんならそうなんだろう。俺達が口出せるところじゃねえよ」

「……」

「あいつはなんて言ってる」

「何も。たぶんよくわかってないと思う。こっちがそう言っても否定していただくからだ。でも光輔はあたしや礼也みたいに特別な訓練を受けてるわけでもない。気が張っている時は気づかなかったのかもしれないけど、少しずつ疲れが蓄積して行って、急激に今の

状態になったはず」

腕組みをする桔平。

夕季が右腕の包帯をちらりと見た。

「そりゃまた、あさみが喜びそうな話だな」

「え」

「いや、何でもない。わかった」ふうん、と大きく鼻から息を噴き出す。「前に朴さんに聞いたことがある。あくまでも仮説にすぎないが、竜王を動かすのにおまえらの精神力はかせないものらしい。だが、それ自体が動力源になっているわけじゃなくて、それによって吸い上げられた地球のエネルギーによって動いているんだってよ」

「地球のエネルギー？」

「ああ。何てったかな。霊エネルギー、ってったか。とにかく地球上に存在する、目に見えない力なんだそう。精神力はあくまでもポンプの役割にすぎないらしい。燃料は無限だから、電池切れはおまえらのポンプ切れ、まあ、疲労次第ってとこだ」

「……」

「おまえらが精神力を上げることができれば、理論上はいくらでもパワーアップ可能ということになる。だがポンプの力が弱ければ、逆に吸い取られちゃうのかもしれない。すでに個々の能力で栓は抜かれちまってるわけだから、理屈はあつてることになるな」

「……。当たってるかもしれない」

「魔獣やインプも同じ原理らしい。おまえらオビイに相当するものが、おそらくはコアと呼ばれている部分だろう。系統は違うがな。自律型ロボットとマニピレーター程の隔たりがある。どっかにスイッチが存在するんだろうが、操縦者がいなければ動けない竜王より、単体で兵器として活動できる奴らの方が完成度が高いのはわかるよな。本当に自分の意志で動いているかはあやしいところだが」

桔平の目を真っ直ぐに見つめ、夕季が頷いた。

「魔獣に対抗するために作られたレプリカ。そんな気がする。技術が違いすぎるけれど。次元の異なる文明はきっと生物や人間すらも

簡単に創造する。神の領域に近づこうとして踏み入れてはならない場所へ踏み込んでしまったのが竜王。でもそれはプログラムを仕組んだ文明からすれば、不完全なレプリカでしかない。子供の粘土細工と同じ。私達はその彼らが作った粘土細工すら満足に動かせない」「いいところついてんじゃねえか？」

「……」

「理解できねえモンを受け入れずに否定するだけなら誰にでもできる。ありえない現実に仮説を立て、真実に近づこうとしてこそ科学者だ。このぼんくらどもも、おまえくらい頭やわらかきや苦労しねえんだがな」

夕季が睨むように桔平を見据える。かすかに頬を赤らめた。

「まあ、俺達からすれば、竜王を作った文明も充分神の領域なんだがな」

「……」

「竜王一体で、大国の軍事力に匹敵するほどのパフォーマンスがある。海竜王単体で陸海の部隊を全滅させることも可能だろう。攻撃力だけなら陸竜王はそれ以上だ。空竜王が本気で飛びや、日本の端から端まで三十分とかからねえはずだし、最新のステルス機だって、チョウチヨが群れなして飛んでるくらいのモンだろうよ。俺達はそんなえげつねえモンを当たり前のように扱っている。感覚が麻痺しちゃってるのは否定できねえ」

言葉を失う夕季。確かに桔平の言うとおりでと思った。竜王のコクピット内にはシートや感圧式のステイック等、どこかで見たことのあるようなものがいくつも存在する。だが、それらを除けば得体の知れない物だらけであるのも確かだった。

内壁に外部の景色が映るメカニズムなら想像できないこともない。しかしすべての軸をカバーするカメラが取り付けられているわけでもない状態で、見たい物に瞬時に反応するそのシンクロ性は異常ですらある。カメラが操縦者の視線に追従するというよりは、内部から見た本体全周囲が、透明な材質で構築されているといった方がイ

メージに近い。

造ることはできる。だが誰もその理屈を説明できない。それは傲慢なテクノロジーの下請けを未開の部族に押しつけるようなものだろう。ただ造るだけ。理由など知る必要もないと言わんばかりに。

「何かを得るにはそれ相応の対価を払わなければならない。望む望まないはともかくとして、おまえ達は一夜にして一国の軍事力をも覆すほどの力を持ちしまった。どこぞの大統領だって、一人じゃミサイルのボタンすら押せねえってのにな。それがどういうことなのか、おまえならわかるよな」

夕季が小さく頷く。

「陸をたいらげ、海を割り、空を引き裂く三体の竜王。まるで世界を破滅に導くために差し向けられた使者のよう」

「おまえらがか？」

「！」

「冗談だ。真に受けるな」

「……」

「ま、それを阻止するためのプログラムだってな考えは、なしにしてくれよ」

「……わかってる」

「所詮道具なんぞ、使う奴次第だ。ほら、昔からよくあるだろ。悪の組織が作ったロボットを正義の味方が乗っ取って立ち向かうってやつ。ああいうパターンだと思っときゃ問題ない」

「……よくわからない」

ふっ、と桔平が笑う。

「突然宇宙人がやって来て、いじめられっ子がスーパーヒーローになれるような都合のいい話じゃない。何もかも持ってかれたとしても、ちっとも不思議じゃねえな」

「……」

「ま、おまえはとっくにその覚悟ができてるようだがな。どうせなら、生きる方にしておけ」

「？ 生きる方……」

「何があっても生き抜く覚悟だ。自分が死んだら悲しむ人間がいることをよく肝に銘じておけよ」

「……」

「ちったあ、もったいないとか思っつけてことだ」

「……」

「まあ、いい。また何かあったら教えてくれ。もし本当にヤバそうだったら何とかする」

「うん」眉を寄せ、上目遣いに桔平を眺める。「……それ、ごめん」
「？」右腕のことだと気づいた。「いや、いい。気にしてない。悪かったな、おまえの肉取っちまって」

「そんなのいい」

「また今度埋め合わせするからよ」

「いい。あたしも大人気なかったし」

「……あ、……まあ、なんだ……」

夕季が顔をそむける。

「今度、エスの人が焼肉おごってくれるって」

「そうか。よかったな」

「……。来れば……」

第九話 『絶叫』 7（後書き）

よく一時間くらいでばばと書き上げました、とか、聞きますが、自分的にはいつも仕上げて初稿の十倍以上の時間がかかっています。決して手間ひまかけたいわけではなく、たったこれだけの量でも読み返すと明らかにおかしいため、発酵期間も含め、単純に修正に時間がかかるのです。主観フィルターですらそうなのに、と思うと、どうしても勝負できません。結局そんなに変わってないので。

勢いに任せノーリタッチ版に近いものを晒したこともあるのですが、すぐに引き上げました。よくあるたとえば、真夜中のラブレターというやつです。もしくは、突然もよおして草むらに置き去りにされた己の分身でしょうか。夜が明けてみるとそれが意外とオープンビューで、行き交う人々の失笑をかつていることを知った時の屈辱感は、呪いとかそんな生易しいものじゃありません。当日深夜、回収大作戦決行です。せめてきれいにとぐろを巻く技術があれば……。

あると思います！

第九話 『絶叫』 8

山凌学園高校の屋上で光輔は腰を下ろしていた。膝を立てた足を肩幅で開き、両手で後方への体重を支える。

空を見上げれば青く高く澄み渡り、海へと臨むフェンス越しに入道雲が湧き立って見えた。

期末考查を終え、じきに夏休みだというのに、その心は晴れなかった。

ジリジリと焼けつくような陽射しが無抵抗な肌と心を焦がす。
ガチャリ……

扉の開く音に反応することなく、光輔は幾重にも交差する蟬の鳴き声に耳を傾けていた。

「ここにいたの？」

優しい声にわずかに心が呼び戻される。視線だけを向けると、雅の笑顔が覗き込んでいた。

「ああ、雅か……」

「雅か、じゃないよ。駄目だよ、授業さぼってちゃ」

「……おまえもじゃん」

「ピンポン。よくわかったね」

「……」

「何やってるの、こんなところで」

「うん」表情もなく、海岸線に視線を泳がせる。「キングサイズのオオクワガタ採ろうと思って……」

「いるわけないじゃん！ こんなところに」おもしろそうに笑った。

「あれ？ いないよ、ね？」

「……。そっちは」

「うん。アメリカンサイズのザリガニ採ろうかなって」

「そっか、頑張っつて」

「あれ！ つっこみは！ ねえ、つっこみはどうなってるの？ いねーよ！ って！ アメリカンサイズとか、言ってるこっちの方が恥ずかしいよ！ ん？ 一応のりつっこみ？」

「……」

「ごめん、うざかった？」

薄地のスカートをふわっと浮かせ、笑いかけながら雅が隣に座る。それを光輔は静かに眺めていた。

「はい」光輔にパックのコーヒー牛乳を手渡し、自分の分にストローを差し入れた。「夕季がここにいるんじゃないかって教えてくれたの。朝からずっとさぼってたんでしょ？」

「夕季が……」わずかに視線を揺らし、チュウと吸い込む。

「夕季、心配してたよ。なんだか光ちゃんの様子がおかしいって。

あの子、変わったよね」強い陽射しに眩しそうに目を細める。開襟シャツの胸もとをぱたぱたとはためかせ、太陽に手をかざした。「あつついね。どうせなら図書室とかにすればいいのに」

「……蒸し風呂じゃん」

「そっか、クーラー入れたらさぼってるのばれちゃうね。てゆーか、基本は保険室でしょ」屈託なく笑う。「もうすぐ夏休みだね。海行こっか、桔平さんに車出してもらって。しいちゃんもワンピースなら着ても大丈夫だって言ってたし。あ、夕季、来るかな？ 来ないよね、きつと。でも無理やり連れてっちゃおうよ。誕生日祝いやってあげるとか言って、騙してさ。そういうの大好き。そう言えば、光ちゃん、もう誕生日きたんだっけ？」

「……うん」

「ごめん、ごめん。うっかりしてたよ。なんだかいろいろとバタバタしてたから。今度、何かあげるね」

「そんなの、いいけど……」

光輔はずっと雅の顔に注目していた。心の内が読み取れず、困惑したように見続ける。

「やめてもいいんだよ」

何気なく発したその言葉が光輔の心をとらえた。

雅は決して笑顔を絶やさずに、まっすぐ海へと視線を向けながら続けた。

「光ちゃん、無理しすぎてる。みんなが求めてくるからって、そこまですなくてもいい」

「俺は無理なんか……」

「力を使うことだけが戦ってるっていう意味じゃないんだよ。力なんて持たなくても、もっとつらくて苦しい戦いをしている人だっていくらでもいる。みんな、自分達の大切なものを守るために、一生懸命戦ってる。もし光ちゃんがそれを選択したって、誰も逃げてるなんて思わないよ。逃げるのと守ることは違う」

「……。だったら、よけいにさ、今の俺にできることなんて、それくらいしかないんじゃないのかなって、……思う」

「わかってる。光ちゃんの性格は。やめられないんだよね。それが普通だと思ってるから」目線を伏せ、落ち着かないつま先を眺める。それから淋しそうに笑った。「でも、もし万が一のことがあったらどうしたらいいんだろうなって、あたしはいつも思ってる……」

「……」

「きっとみんな悲しむと思う。光ちゃんのために泣いてくれるよ。でも少ししたら忘れちゃって、代わりの人見つけて、それで思い出すこともなくなる。お兄ちゃんみたいに……」

「それでいいじゃんか」

はっとなり顔を上げる雅。

光輔は涼しげな表情で空を見上げていた。

「それでいいよ。そりゃ、忘れられたらちょっとは淋しいけどさ。りょうちゃんだって別に感謝されたくてやってたわけじゃない。みんなのことが好きだから。守りたいと思ったからだろ。それに、みんなが忘れても、俺はりょうちゃんのことずっと覚えてる。俺はりょうちゃんのこと絶対に忘れないから、だからそれでいい。人のこ

とはどうでもいい……」

「駄目だよ」

光輔が顔を向ける。

雅が真剣なまなざしを投げかけていた。

「そんなの駄目だよ。あたしはいや……」

「……」

「死んでいく人間が悲しみを全部自分で持っていていけるわけじゃない。必ず置いていくんだよ。後に残された人は、それを泣きながら拾い上げなければいけない。そうしなければいけないの。その方がずっと残酷だとは思わない？」

「……」

「人が死ぬとどうして悲しいのか知ってる？ その人に二度と会えなくなるからだよ。でももっと悲しくてつらいことがある。その人が死ぬってわかってるのに、何もしてあげられないこと。自分には何もできないのに、ただそれを見守ることしかないことだよ……」

雅が涙目になる。困ったように自分を見つめる光輔に気づき、慌てて顔をそむけた。

「ごめん。ちよつと感情入っちゃった……」強引に笑みを立て直す。

「ただ光ちゃんがいなくなるとやだになって、そう思っちゃっただけだから。だから……」

テンションを維持しきれなくなっていた。

「雅……」

雅を気遣うように複雑そうな表情を向ける光輔。

やらなければならぬことと大事なことは、必ずしも等価値ではない。とりわけ雅にとってのそれが、大切なものを失ってまで行う意味をもたないだろうことは充分すぎるほど伝わってきた。

そして、そんな雅の想いが決して軽いものではないことも、光輔はよく知っていた。

光輔の心が折れかけていた。

「こういう時…… 光ちゃんならどうしてほしい？」

「どうしてって……」質問の意図がわからずに雅の横顔に注目する。すると雅は空を見上げ、子供をあやすように続けた。

「慰めてほしい？ 励ましてほしい？ それとも、ほっというてほしいのかな」

「……。おまえはどうなの」

「あたし？」つま先を立てながら膝を抱え、淋しそうに笑った。「抱きしめてほしい、かな」

「……。この暑いのに？」

「暑いのにねえ」目がなくなるほどの笑顔を作り、雅が振り返る。ふいに何かを決意したような表情になった。「あのね、光ちゃん……」

その時、激しく扉が開け放たれた。

夕季だった。

「光輔、みやちゃん！ アスモデウスが東京に現れた！」

「……」

「東京には前からいただろ」

平然と言い放つ光輔。

それを振り払うように、夕季が緊迫した表情で二人に訴えかけた。「違う。それとは別の奴。今までにないくらいに巨大な個体が突然新東京総合駅の前に現れた。それに呼応するように、各地から二十体以上のアスモデウスが東京に集結して……」

第九話 『絶叫』 8 (後書き)

読んでいただきましたありがとうございます。

唐突ですが、雲のジウザ、好きです。自分の中の漢の理想像として確立していて、いろいろなキャラクターにトレースされているのは間違いないでしょう。かなり違っちゃってますが。いまだにレイやシンよりも弱いという原作者の発言が受け入れられません。個人的にはナントサイド最強です。

天真爛漫に毒を吐く女の子のモデルは、かつて某巨大掲示板で『〇起天使』の二つ名をいただいた某女子アナだったりします。あくまでベースですが。

バトルヒロインには常にザンボット恵子の血が流れていることは否定できません。

あいたたた全開でした。

第九話 『絶叫』 9

「ついに来やがったか……」

作戦準備でゴった返すメガル基地内の片隅で、ディスプレイを凝視しつつ、桔平が辟易したように声を押し出す。

画面の中にはこれまで対峙してきたサイズの倍以上はありそうなアスモデウスが、新東京総合駅の正面に鎮座していた。

石像状態の個体とは違い、毒々しい色彩を帯び、両眼を一定の間隔で光らせる。動く気配がないのがかえって不気味だった。その上空をゆるやかに旋回し続ける小型のアスモデウス達もまた、その目を爛々と輝かせていた。

遠巻きに距離を保ちながら監視を続ける国防省のヘリコプターや航空機。すでに付近住民の避難は完了し、四方を戦闘車両が包囲しつつあった。

「桔平さん！」

礼也の声に桔平が振り返る。

礼也を先頭に夕季、光輔が駆けつけるところだった。

「どうなってんだよ」

「……」苦虫を噛み潰したような表情を礼也へ向ける。「ガイア・カウンターがとんでもねえ勢いで反応し続けている。どうやらこいつが、ホンモノ中のホンモノらしい」

「本物って……」怪訝そうに眉をうごめかせる礼也。「俺らが戦ってきたモンは何だったんだ」

「斥候みたいなモンだろうな。様子を探るついでに軽くつついてみたぐらいのモンだろうよ」

「マジかって……」

「残念ながら」重々しく頷き、憤りを吐き出す。「ついさっき半

径十キロ以内の住民の避難が終了したところだ。よりにもよってあんな場所狙い撃ちしてきやがって。一日五十万近くの間人が出入りし、しかも国家の中枢機関がごっそり集まってる場所だ。これじゃ首都機能がストップしたのも同然だな。本部が入手した情報によると、二時間後に一斉攻撃を始めるそうだ」

「俺達を差し置いてか」

「在日米軍がイニシアチブを買って出やがった。それまで静観してきたくせにな。これをきっかけに政府とメガルに食い込んでくる腹だろう」

「俺達は？」

「黙って見てろってことだ。無論そんなつもりはない。奴らの作戦が通用しなければ、すぐにこっちで手を切り替える。とは言え、それだけの規模の軍隊が通用しない相手だとしたら、メックやエスでどうこうなるとも思えん。負担はすべておまえらにかかってくるぞ」

「んなの、わかってるって」

礼也の後ろで光輔も頷いた。それをじっと眺める桔平。

「これだけの数だ。正直どう手を打ったらいいのかわからん。メックにしてもバックアップにもならないだろうな。奴が向いている方角、わかるか？」

一泊置き、夕季が呟く。「……メガル」

夕季の目を見据え、桔平が頷いた。

「俺達がもっと早く対応していればよかったんだよな」

「いや、それは違う」

礼也のためらいを平然と受け止める桔平。

「ずっと奴に試されていたんだ。俺達の力を見極めるためにな。ここですべてを見切って、ついに腰を上げたってところだろう。黙って最後まで討たせてくれたとは到底思えないからな。仮に何もしなかったとしても、おそらく結果は同じだったろう。世間じゃ俺達が突っついたせいだとバッシングしてくる輩もいるようだがな」

「桔平、ヘリの準備は完了だ」

「おう」木場へ振り返り、桔平が表情を引き締める。「出撃は二時間後だ。おっさん達にも伝えておいてくれ。気合入れていくぞ」

「了解した」

それから桔平は、青白く覇気のない光輔の顔を眺めた。

「光輔、おまえは残れ」

「！」

「今度ばかりはシャレにならん。そんな状態じゃ一瞬でやられちゃう」

「そんな、俺……」

「光輔は連れて行く」

光輔を差し置いて礼也が前に出る。厳しいまなざしを桔平にぶつけた。

「礼也！」

「こいつの力が必要なんだ」夕季の声をさえぎり、続ける。「俺達が勝つためには」

「駄目だ」桔平が平坦に告げた。「今のこいつじゃおまえらの足手まといにしかならねえ。だったら行かない方がいい」

「そんなこと承知の上だって。それでもいいよりはましだ」

「礼也！」夕季が礼也の肩をつかむ。目をつり上げて噛みついた。

「自分が何を言っているのかわかってるの！ 光輔に死ねって言っているの！ 礼也だって光輔に助けられたじゃない！ それなのによくそんなこと言える！」

「だから何だ」冷淡なまなざしで夕季を見据え返す。「何度助けられたって、肝心な時に役に立たなければ同じことだ。ここでもし俺達が死んだなら、ただそれが先送りにされただけだろうが。それでもありがたがって涙を流せって言うのか」

「……」

「やめろよ、二人とも」

一触即発の二人に割って入る光輔。へつらうような笑みを浮かべ、何とかその場を収めようとした。

「いいよ、俺本当に大丈夫だから。礼也が言ってることが正しいよ。今まで頑張ってきたのに、ここでやらなかったら全部おじゃんなんだもんな。俺が行かなかったせいでおまえらまでやられたら、どのみちこの世界はここまでってことだし。だったらやらなくちゃ」

「でも、光輔！」

「夕季、ありがと。わかってるから、だから……」

「……」

不機嫌そうに夕季の手を払いのける礼也。

口をへの字に曲げ、夕季も顔をそむけた。

心配そうにそれを眺める光輔。

「やめろ、やめろ、バラバラじゃねえか、おまえら」

桔平の声に振り返る三人。

「これからおっぱじめようってのに、何だその無様ないがみ合いは。はなから負けフラグ立ってんじゃねえか。そんなんじゃ全員死んじゃうぞ。だったらやめちまえ、いっそ」

「いいのかよ、やめちまっても」

凶悪な礼也のそれを上回る眼光で、桔平が一步前へ出る。

「かまわねえさ。どうせ死ぬんだろ。だったらもつと気持ちよく死んでくれる奴らに命を託したいもんだ。メックもエスもこれで終わりだ。メガルもな。だがおまえらのせいじゃない。どうせ行っても行かなくても結果は同じなんだからな。もつともこの世界がなくなっちまえ、責めたくても誰もそれを責められないだろうがな」

睨み合う二人を止める術を光輔も夕季もたなかった。その声が聞こえるまでは。

「桔平……」

放心したような木場の声に全員が振り返る。

ディスプレイの中心で巨大アスモデウスが動き出そうとしていた。口を開け、不気味な咆哮を響かせる。耳を覆いたくなるような不快な叫びだった。やがて周囲を旋回し続けていたアスモデウス達が、一体、また一体と巨大アスモデウスの中に吸い込まれ、そのすべて

を取り込んだ時、両眼がこれまでにないほど激しく発光しだしたのだ。

小山のような全身から押し出され、辺り一面を白く染め上げる、画面すら正視できないほどの暴力的な光。

それはアスモデウスを中心に、数キロメートルの範囲を焼き払っていた。

いたる場所で巻き起こる爆発音と立ち上る豪炎。悲鳴もあげずに消滅するさまざまな車両やヘリの中には、報道機関をはじめとする民間人達も数多く含まれていた。

桔平達の目は画面の中で繰り広げられる地獄絵図に釘づけとなっていた。

第九話 『絶叫』 9（後書き）

ヒーローとかヒロインってこんなだったのかな、と長らく思っていました。女の子ばかりが活躍する物語では野郎の存在はひたすら薄っぺらく、また男の子ばかりのものでは女の子自体がないがしろ状態というのが、昨今のスタンダードですかね。確かにスポ根ものとかでは異性の立ち位置は微妙なところではありましたが、テーマが違いますし。やられっぷりのいいヒロインのピンチにギターとか弾きながら颯爽とかけつける主人公、という構図は、もはや時代が拒絶しているとは思えません。

現実には市場を動かしているのが腐った系の男女であることを考慮した場合、仕方ないことなのかもしれません。自分（充分腐ってます）も含め、あーだこーだ文句をつける輩はなかなかお金を出しませんし。

そんな自分の初漠燃えは、『マジンガーZ対暗黒大將軍』だったります。兜光児の覚悟とやられっぷりに心を震わせた後のグレートが登場には、それはもうちびりそうになったものです。今やどのジャンルを見渡しても、大きな男の子の心をゆさぶるようなものは絶滅種かもしれません。淋しい限りです。

とは言え、萌えも好きだったりします！ というメでいいのかよ、と……

それは時代を逆行するかのような光景だった。

かつて大空襲があったその地で、再び狂気の炎が街を焼きつくす。人類自らが招いた過去の愚かな戦争をあざ笑うかのごとくに。

アスモデウスの一撃は都心に大ダメージをもたらした。そして在日米軍の集中砲火はその被害をさらに拡大させていく。

円周の核となる地点で無傷で居座り続ける標的の手をわずらわせることもなく。

「奴ら、何がしたいんだ」大型輸送ヘリ内の臨時司令室で悪態をつく桔平。「これじゃどっちがプログラムだかわかったもんじゃねえ」アスモデウスの攻撃は一度きりで、それ以降はまるで動く気配もない。

その後の被害は、すべて人類の叡智である近代兵器がもたらしたものだった。

「桔平……」

木場に呼ばれ、桔平がディスプレイに目をやる。

アスモデウスが再び叫び声をあげるところだった。

二度目の攻撃のために。

凶悪なる光の放射がアスモデウスを中心に膨れるように広がる。

光の輪は一度目よりもさらに激しい輝きをとまってめくれ上がり、地上部隊だけでなく数十機もの軍用機を瞬時に消滅させていった。

残ったのは、焼け焦げた瓦礫を積み上げた廃墟だけだった。

「これ以上近寄れば俺達も彼らの二の舞になる」

「わかった」無線機を手に取り、全作戦機へ司令を送る桔平。「各機現地点でホバリングを維持。五分後に竜王を投下の後、その場で

待機だ。いつでも竜王を回収できるよう各自準備を怠るな」

回線を切り、ふんと息をついた。

「どのみちこんな鈍足じゃ、あの攻撃からは逃げられねえだろうがな……」

「国防省からの通信を傍受しました。米軍はすでに撤退を始めています」

「結局街を焼き払っただけか……」通信係からの報告を受け、目を細め、深く長い憤りを吐き出した。「うっぷんたまってただろうから、それでも喜ぶ輩はいそうだがな」

「不謹慎だぞ。何千という命が失われているのに」

木場にたしなめられ桔平が目線を落とす。

「不謹慎、だよな……。みんな死んじまうかもしれないってのによ」
「……」

「わけもわからず死んでいくのはいつも俺達手駒だ。わかってる奴らは何の危険もない場所ではぱっと反省会やって、その後ゴルフに行く相談だからな。奴らは失うことなんて怖れちゃいない。自分以外の選択肢は無限だと思ってやがるからな。自分さえ残りゃ何とかなる。自分さえ無事ならいい。これで駄目なら、次の手、次の手だ。ま、ここまできちまったらそんな悠長なこた、してらんねえだろうがな。今ごろ尻に火がついたお偉方は自分の保身で手一杯だろうよ」

「……それを今言ったところで何になる」

「別に。やっと、願いがかなったってのに、案外テンション上がんねえもんだなって思ってたよ」

「おい、何を……」

木場へ振り返り、桔平は自嘲気味につないでいった。

「ガキのころからひそかに憧れだったわけだ、地球防衛軍ってやつによ。全人類の希望と願いを背負って、一丸となった正義の心が悪の宇宙人や侵略者に立ち向かうんだぜ。そりゃカッコいいわな。だが実際はどうだ。こんな世の中だ、たてまえと必要悪さえありゃ地球は勝手に回ってく。奇麗ごとは一切役に立たねえ。それどころ

か、正義がどうの吠えてる奴は、いかれポンチだと思われて相手にもされねえ。言ってる自分がかなりイテえのもわかる。ま、人間が想像できるモンなんざ、わからねえ時が一番奇麗だってことなんだろうな。おまえみたいな怪獣役オンリーの奴にはわかんねえだろうが」

「だったら俺達がそれを守っていけばいいだけのことだろう」

「ああ！」不快そうに眉をゆがめる。「きたねえツラで恥ずかしげもなくぬかしやがって。恥ずかしすぎて聞いててヘドが出そうだ」

「……。おまえが必要悪なのはわかっているが、もう少したてまえを大事にできんのか」

「誰が必要悪だ！ 誰が！」

「おまえしかおらんだろ」

「どこがだ！ どこを切っても正義の味方やちゅうねん！ おい、キンタロー飴か、俺は！ ほうらポッキン！ いい加減にしとけ！

ボケ、カス！」

「……。そんな鼻毛の出た正義の味方を俺は知らんぞ」

「ちよっ、待て！ タンマだ！」

「何がだ……」何気なく振り返った木場の顔が青ざめる。「こんなところで抜くな、汚いだろ！」

「きたねえのはおまえのツラだ！ 我慢しろ！ 整形しろ！」

「いい加減にしろ！ こら！ その手で俺に触るな！」

「つれねえこと言うなって。そのツラで潔癖症はイテえぞ、実際」

「殺すぞ！」

「いや、殺すな、鼻毛くれえで……」

『桔平さん』

夕季からの呼び出しに応じる桔平。

基本的に無線連絡はオープンチャンネル方式で行われるが、作戦中はオビディエンサーの気を散らさないためと外部からの傍受を警戒して、必要な時以外は切断することとなっていた。空竜王からのそれは、マスター回線とは別に存在する個別回線が選択されていた。

「夕季、わかってるな」

『……うん』

「やばいと思ったらすぐに引き返して来い。いつでも礼也と接触できる位置にいろよ」

『わかってる』

「海竜王はここで降ろす。あいつが戦闘領域に入る前に全部見極めろ。おまえならできるはずだ」

『……。桔平さん』

神妙な様子で夕季が切り出す。

「何だ」

『光輔のこと、ありがとう』

「おまえなあ」あきれたように嘆息する。「こういう状況でそういうこと言ってるじゃねえよ。ビックリすんだろ。鳳さんも言ってたぞ。タマが縮み上がるくらいビビったって」

『……ごめん』

「だから、なんでこんな時ばっか素直なんだって、おまえは。普段はとってもクソ生意気なのになあ！　むしろ常にそうあることを心がけろ」

『……』

「わかった、わかった。言い過ぎた。俺が悪かった。ケーキでも何でもおごってやるから、無線で黙るのはやめてくれ。俺のデリケートな心臓がもたねえ。そのかわりこないだの店だから」ぼさぼさの髪をガシガシとかきまくる。「くそっ、給料前だったのに、妖怪アンテナがちっとも役に立たねえ……」

『何？』

「何でもねえ！　そのうち必ずカメラ取り付けてやるからな！　覚悟しとけ！」

『……いいけど』

「いいか、クソ生意気でもなんでもいいから、絶対死ぬんじゃないぞ」

『わかった』

桔平がふっと笑った。

『……。ねえ』

「んあ？」

『……あーみーまーってどういう意味？』

「やかましい！」

『……』

「無事帰って来たら教えてやる！ 覚悟しとけ！」

『……わかった』

無線を切り、桔平が、ふう、と一息つく。

「……」心配げに桔平を見守る木場。目を細め、うかがうように口を開いた。「おい、アメマーのことじゃ……」

「アメマーじゃねえ！ ボケ、カス、ハゲ！」

「……。おまえは根っからの悪党だな」

「どこがだ！ そのきたねえツラで偉そうにぬかすことを心から申し訳ねえと思え！ マジで！」

「マジで……」

窓の外から大地を見渡し、桔平が表情を正した。

「死ぬんじゃねえぞ、クソガキども……」

第九話 『絶叫』 10 (後書き)

読んでいただきましたありがとうございます。

もえのポイントって人それぞれだと思えます。ガ○ダム・シードを久しぶりに観る機会があったのですが、中立地帯で急襲された主人公達の間一髪の場面に現れた仁王立ちのバスターには、何度観てもカタルシス汁出まくりです。他にも多くの名場面があるはずですが、真っ先に思いつくのはその場面だったりします。パ○チラや魔乳もいいですけど、なんか、もうね……。

こんなことを言う傾向がバレてしまうのですが、そればかりだとゲップが出てしまうので、不本意ながらどたばたを入れ……る振りしてむしろ好きで入れています。

ちなみにパ○チラも嫌いじゃありません。

そろそろ引越して、またへたこきそうです……

第九話 『絶叫』 11

燃え上がる夕陽に焼かれ、輸送ヘリの後部ハッチから空竜王が飛び立つ。白き翼を紅く染め、別の機体からダイブした陸竜王を背中から抱えて駆け抜けた。

『光輔』

二体から遅れて出撃しようとした光輔を桔平が引き止めた。

『あくまでもおまえは、あいつらのバックアップだからな。簡単に考えてんじゃねえぞ。最後にぎりぎりのところで奴らを救うのがおまえの役目だ。それまでじっと我慢の子だ』

「……」

『光輔、聞こえてんのか』

「……聞こえてますよ」

『ならいいが、くれぐれも勝手な行動は禁物だ。わかったな』

「わかりました……」

大型のパラシュートを広げ海竜王が降下する。足もとから圧縮空気を展開し、アスモデウスから十キロメートル以上も離れた地点に降り立った。

避難区域はさらに拡大し、中心部から半径三十キロメートル以内の領域がその対象となっていた。都内全域の住民が先を争うように逃げ惑う。誰もが他人を押しつけ、踏みつけ、突き飛ばした。我先と救いを求め、自らパニックの原因を作り出していることを理解するものは一人もいない。この恐怖にかられた集団心理こそが、プログラムのもたらした最大の被害なのかもしれない。なかった。

廃墟と化した高層ビルの陰に隠れ、礼也がアスモデウスの様子をうかがう。

時々瞬きのように両眼を発光させるが動く気配はない。

陸竜王の十倍はありそうな小山を見上げる礼也。体積ならば三千倍以上。それがどれだけの比重でどれだけの重量があるのか想像すらできなかった。

『礼也』

桔平からの無線を受け、わずかに気をゆるめる礼也。

『今回ですべて終わらせようと思うな。あくまでも目的は偵察だ。対策を練って出直すためのな』

「わかってるって。……！」

その時、尻尾の蛇と視線が合致した。いつの間にか陸竜王のすぐそばまで接近していたのだ。

途端にぼこぼこと湧き立つ無数の悪魔の表情。

全身のあらゆる箇所から、取り込まれただけの顔と目が現れ、一斉に礼也を睨みつけた。

『おい、礼也、どうした。聞いてるのか。正面からやり合おうなんて考えるんじゃないぞ』

「……。同じことを奴らにも言ってみてくれて」

『礼也！』

無線を解除する間もなく礼也が陸竜王を急発進させる。

数瞬前まで陸竜王がとどまっていた場所は、無数の光の矢によって塵芥すら消滅していた。

それはレーザーのようであり、炎のようであり、溶解液のようでもある、また水のようにもあつた。

存在する目と口すべてから、それらは撃ち出されていた。

「シャレにならねえって！」

足底の高速ローラーで小刻みに、そして急激に体勢を変えながら、土砂降りのシャワーの中を滑り抜けて行く。陸竜王が通り抜けた跡は何も残らず、掘り起こされた大地の上にコンクリートやアスファルトの破片が乱雑に散らばるだけだった。

「くそっ！」ひたすらしのぎ、避けることしかできない。

横滑りした足もとを狙われ姿勢が乱れる。バランスを崩しながら

もナツクル・ガードを撃ち放ち、焼け焦げた高層マンションの壁に取りついた。蛙のようなかまえから全身のバネを使って跳ね上がる。跳躍の後、遅れて訪れた反発力と、死のシャワーにより建物が倒壊した。

着地地点を待ち受けるように襲いかかる猛威を回避できずに、陸竜王が地面に打ちつけられる。

間髪入れず強襲する蛇の頭。

「くっそ！」

「礼也ーっ！」

空から空竜王が駆け下り陸竜王を救い上げた。その直後、挟り取られたような大穴だけがぽっかりと穿たれる。

大地を噛み砕き、すぐさま反転する蛇の頭。鞭のようにしなり空竜王へ狙いを定めると、目にも止まらぬ速さでその背中に襲いかかった。

「ああああーっ！」

夕季の悲鳴とともに放り出される二体の竜王。

陸竜王はビルの中心に身を埋め、空竜王は無防備にアスファルトに叩きつけられることとなった。

すさまじい衝撃を受け、刹那夕季の意識が飛ぶ。はっと我に返った時、目の前に現れたのは大口を開けた大蛇の頭だった。

「くっ！」

逃げる間もなく食いつかれる。蛇の口は空竜王の右膝にガッチリと噛みつき、それを持ち上げるや、人形のように振り回し始めた。

「ああーっ！ あああーっ！……」

脳を上下左右に振られ、何もできずに悲鳴だけをあげ続ける夕季。ようやく立ち上がった礼也も、無限の弾幕の前に前進すら阻まれていた。

『くそっ、夕季ー！』

『ああああーっ！』

「どうした、礼也！ 夕季！」

桔平の懸命な呼びかけにも、二人は応じることすらできない。

「万事窮すか。仕方ない、行くぞ」

「行くぞって、おまえ……」青ざめた顔を桔平に向ける木場。「今の俺達では近づくだけで奴の餌食になるぞ」

「だからってほっとけるか！ 嫌ならてめーらみんな今すぐ降りろ」決意のまなざしに炎を宿す。「俺一人でも行く」

蛇の尻尾が空竜王を高く掲げる。そのままアスモデウスの仮面の前まで持ってきて静止した。

仮面の口が裂けるように大きく展開する。口腔では高出力のエネルギーが急速に収束しつつあった。

バチバチと弾け散る白い火花が夕季の表情を妖しく映し出す。

それは竜王をも一瞬で焼きつくす、悪魔の劫火だった。

「くっ！」夕季がアスモデウスを睨みつける。瞬きすらせずにその狂猛なまなざしに抗い続けていた。徐々に目がなれ出してはいたが、焦点合致までは今しばらくの時間を要するようだった。

バチッ！

アスモデウスの仮面が淡い光を帯び始める。チャージの完了が近いことを告げていた。

「夕季ー！」

夕映えの虚空にこだまする礼也の悲痛な叫び声が、巨大な影に吸い込まれていく。

否。

それは礼也の絶叫をかすめ、アスモデウスの巨体に突き刺さったのだ。

「！」

振り返る礼也。

アスモデウスの真正面から、海竜王がクローを射出した体勢で大地を踏みしめていた。

蛇の首筋に挟り込まれた銀の爪が鈍く輝く。

そのわずかな時間かせぎが夕季に機会をもたらした。

三……

二……

一！

焦点と平衡感覚を取り戻し、夕季が蛇の目にフェザー・ブレードを突き立てた。

グエエエッ、とうめくも、蛇の口は固く閉じたまま開かない。

すかさず自らの手で片足を切り落とし、空竜王が脱出を試みる。

その直後、仮面から膨大なエネルギーが放出された。

天空目がけて放たれた光の矢が分厚い雲の塊を貫く。茜色のスクリーンが渦を巻きながら跡形もなく消し飛んでいった。

ケエエエッ！

アスモデウスが右手の槍を差し上げる。頭上高くまで振り上げるや、海竜王目がけ一気に打ち下ろした。

かわす余裕はない。右腕に添えた左手のクロウを突き出し、海竜王が咄嗟に攻撃を受け止めようとした。

「光輔！」

身を乗り出す夕季の眼前で、海竜王はアスモデウスの槍もろとも地中深くめり込んでいった。

「光輔、光輔ーっ！」

「くっそ！」

触角を甲虫の角のごとく押し広げ、狂ったようにバーン・クラッカーを撃ち続ける陸竜王。出力をマックスまで高め真紅へと変貌した体躯を晒し、アスモデウスの矛先を完全に受け入れようとしていた。

「夕季、光輔を早く！」

『わかった！』

陥没した大地に空竜王が降り立つ。装甲版がベコリとへこみ動かなくなった海竜王を抱きかかえると、すぐさま空へと飛び立った。

「夕季、礼也、作戦は中止だ！」無線機越しに桔平が叫び続ける。

「早く逃げろ、そこから逃げろ！」

安全区域に降り立ち、弾かれるようにコクピットから飛び降りる夕季。両膝を立てた状態で上半身だけを起こした海竜王によじ登り、変形したハッチを力任せにこじ開けた。

ぐったりとうなだれる光輔の姿を確認し、血走ったまなこで呼びかける。

「光輔、光輔っ！」

光輔からの返答はない。外傷は確認できなかったが、顔をのぞきこむと鼻腔と口内からだらりと血が流れ出ている。

懸命に呼びかけ、ゆさぶってもその意識は戻らなかった。

「光輔っ、しっかりして、光輔！……！」

光輔が呼吸をしていないことに気づき、夕季が絶句する。

「光輔っ！ 光輔ーっ！」

夕季の絶叫が大都市の荒野に響き渡った。

了

第九話 『絶叫』 11 (後書き)

ご無沙汰しております。やはり引越しでへたこきまくり、そして真っ最中です。かつてガッコの先生は家に帰るまでが遠足だという名言を残しましたが、物を整理するまでが引越したとは教えてくれませんでした。長年の愛着に見切りをつけ、取捨選択の雨あられの末に何度も部屋を行ったり来たりしながら、カミソリの入る隙間もなく荷物を押し込む。ぎちぎちのスライドパズルをダンボール単位で行うようなものです（しかも立体！）。重武装のままガチで階段百往復、休日が終わるたびにそれはもう疲労が蓄積し続けていきます。二度引越しをすれば年寄りはずっと寝込むだろうという噂は、単なる都市伝説ではないと実感しました。

忘れずにのぞいていただけの方々には感謝の気持ちを一気にしゅつ、まだまだ練り込みが足りないなどと考えている次第です……

第十話 『決戦!』 OP

見覚えのある背中を光輔は追いかけていた。

振り返るその顔に目が釘づけになる。

陵太郎だった。

「りょうちゃん!」

呼びかける光輔に、陵太郎は笑うこともなく再び背を向けて歩き始める。

「りょうちゃん、待ってよ。……!」

陵太郎の隣にもう一人見知った顔、光輔の姉ひかるの顔が見えた。ひかるもまた無表情のまま、光輔に背中を向け立ち去ろうとした。

「待ってよ、姉さん!」

光輔が二人を追って走り出す。だがその背中では近づくどころか、ますます遠ざかるばかりだった。

「待ってよ。俺も連れてってよ。姉さん、りょうちゃん!」
手を伸ばしても届かない。

二人の姿は闇の彼方に消えかけていた。

「待ってよ、りょうちゃん! 姉さん!……!」

何かに阻まれ足もとを見やる。

光輔の足首を白く細い手がつかんでいた。

「はなせ!」

恐怖にかられ、その手を蹴りつける光輔。

「はなせ! はなせ! 俺はあの人達と行かなきゃいけないんだ! はなせよ!」

肉が裂け、骨が碎ける。しかしどれだけ血まみれになっても、それが光輔を解放することはなかった。

まるで地の底へと引きずり落とさんとせんばかりに。

「う、あああっ！」青ざめた表情で地を這うように身をよじる。
その時、光が光輔を照らした。
顔を上げ、降りそそぐ光の眩しさに光輔が目を細めた。

「ぐはっ！」

むせかえる勢いで弾かれるように光輔は目を覚ました。
息苦しく荒い呼吸がいつまでも収まらない。しばらく呼吸困難が
続き、苦しさから涙が止まらなかった。

やがてぼやける視界の先に見知った顔を認める。

夕季だった。

「夕季……」

身を乗り出し心配そうに光輔を覗き込む夕季の表情は、迷子にな
った子供のようなだった。

「なんで……」

光輔の声を聞いた途端、夕季はほっとしたように表情を緩めてみ
せた。すぐに顔をゆがめ涙を滲ませる。口の周りが赤く染まってい
た。

海竜王のコクピットから落とされる薄明かりの下、脱力したよう
にペタンと座り込み、夕季が顔を伏せる。

暗くて光輔からははっきりと確認できなかったが、唇を噛みしめ、
むせび泣いているようにも見えた。

訳もわからずに、震える夕季の姿を眺める光輔。口もとの血をぬ
ぐい、ようやく自分の置かれた状況を理解した。

「そうか……。……俺、死んで……」

うつろなまなざしで静かに穏やかに広がる薄暗い空を仰ぎ見る。
果てもなく澄み渡る藍色のキャンバスに一閃の星屑が流れ落ちて
いった。

第十話 『決戦!』 OP (後書き)

その作品にシンボリックなシーンがどれだけあるかが、自分のな良作基準になります。平たく言うところある場面を一枚絵として抜き出した時、そこに作品の世界観や特徴が象徴的にあらわれているかという感じです。

あいたた覚悟で暴露すれば、ファーストガンダムで例えると、ザクのコクピットをビームサーベルで貫いたり、グフの手首を下から潜り込んで切り落とす場面。赤ズゴがジムの腹を貫くところは Teppan すぎ。ナデシコだと初回に艦首の上でエステバリスが雄々しく伸び上がるシーン。五人揃ってゴレンジャー! クララが立った! いやーん、まいっちゃんぐ! ゼータガンダムはしっかり観たことありませんが、オープニングで白煙からぬうつと現れる場面(確か)は結構身震いがしてきます。エヴァンゲリオンやバガボンドはそんなシーンの宝庫ですね。

で、何が言いたいのかと言えば、……そんなシーンを一話に最低一箇所は意識しているつもりですが、なかなかうまくいかないもんだな、と……

ちなみに流れ星は下から上へ流れることもあります。だって宇宙なんだから。

第十話 『決戦!』 1

病院のエレベーターから神妙な顔つきで桔平が現れる。

足を止めた病室のプレートには穂村光輔の名が見て取れた。

対面の壁に身を預けるようにもたれかかる夕季の姿に目線に向け、安堵の表情で桔平が、ふっと笑いかけた。

「息止まってたんだってな。ビビッたろ」

ゆっくりと夕季が顔を上げる。疲れ果て生気のないまなざしで恨めしそうに桔平を眺めた。

「おまえが心肺蘇生しなかったら、ガチでヤバかったってよ。竜王にもAEDくらい積んどいた方がいいかもしれないねえな。冷蔵庫やテレビも大事かもしれないねえが。おまえらの命の方がもっと大事だ。よく頑張ったな、夕季」

ふいに口もとをゆがませる夕季。込み上げる想いに押され、涙がじわりと滲み出した。

「どうした。おまえみたいな肝っ玉でも、知ってる奴が目の前で死ぬのは怖いかな？」

「……怖いに決まってるじゃない」

「そうか……」

桔平が夕季の頭をガシガシと撫でた。

ノックの音に風野守人は目線だけを向けた。

「開いている。入れ」

ドアを開け、薄笑みを浮かべたあさみが入室する。

厳しい表情を変えずに受け入れる風野に対し、まるで臆することもなく、あさみは極めて事務的にそれを切り出した。

「今回の作戦について報告に来ました」

「それならば必要ない」かたわらの報告書に目をやった。「もうすべてわかっている」

「現場からの声は何より重要なものではありませんか？」

もっともらしいあさみの言葉に風野が顔をそむける。

「やる前からすでにわかっていたことを何故報告する必要がある」

「聞き捨てならない言葉ですね」じろりと見やる。「命懸けで戦っている彼らが聞いたらどう思うでしょうか」

深く息を吐き出す風野。

わずかに眉をうごめかせ、あさみは淡々とつないでいった。

「米国の提唱で多国籍軍が編成されることが決定しました。一週間後には世界中から軍隊が押し寄せ、関東は彼らに踏み荒らされることになるでしょう。それを許せば日本は日本でなくなる。でも仕方がないことなのですね」

「……」

「もう一つ懸念があります。私達の手で解決できることですが」

「……何だ」

「プログラムが何故日本だけを標的にするのかを疑問視する声が世界中であがっています。憶測にすぎませんが、我々が彼らに何かをしたのではないか、と」

「竜王のせいでこの国が危機に陥ったとも言いたいのか」

風野の目を見据えながらあさみが頷く。

「今さらどうにもならないのでしょうか、わざわざ彼らに付け入る余地を与えてしまったようなものです」

「……」

「今後メガルがこの追及からまぬがれることはないでしょう。たとえ彼らの作戦が失敗したとしても」

「……」

「お聞きにならないのですね」

「……あれのことは君に任せたはずだ」

「ええ、存じております。私の真意を知らながら博士がそれをゆだ

ねられたことも」

「……」

「あらためて申し上げておきます。何があるうと、私はあれの封印を解くつもりは毛頭ありません」口もとから笑みが消え失せ、冷淡なまなざしで凧野を睨みつける。「あれは世界を滅ぼす。私は断固それを阻止するつもりです。それでもよろしいのですね」

「ああ」重々しく頷いた。「かまわん……」

凧野が顔をそむける。

激しい憎悪をぶつけ続けるあさみから逃げ出すように。

光輔の病室に入っていく桔平と夕季を雅が出迎えた。

「夕季……」涙を浮かべ笑いかける。「ありがとう、光ちゃんを助けてくれて……」

「そんな……」バツが悪そうに顎を引く夕季。「助けられたのはあたしの方だから。光輔が来てくれなかったら、きつと……」

「辛気くせえツラしてんな！」

桔平がバンと夕季の背中を叩く。尻込みする夕季を引っ張ってきいたのは桔平だった。

「いいじゃねえか、どっちも助かったんだから。力の入れすぎで肋骨折っちゃったんだからチャラだろ。肺に刺さってたらトドメ刺してたところだったけどな」

「……」

「そうだね。ちゃらだよ」指で涙をぬぐい、嬉しそうに雅が笑う。

「そうだよ。骨折るくらいの勢いで頑張ってくれたってことだもんね」

「……」

「光輔、命の恩人連れてきてやったぞ」

桔平の声に目線だけを向ける光輔。

「ああ、ありがと、夕季。助かったよ……」起伏のない声。「やっぱりおまえすごいよ。何でもできちゃうんだな。俺なんかとは大違

いだ」

「……。必死だっただけ……」

「必死なんてあばら骨何本も折られちゃありがた迷惑だけどな、がっはっは！」桔平が夕季の背中をバンバンと叩く。「隙見せりやすぐ骨折ろうとしやがって、まったく気が抜けねえ。ポキポキポキ死こいてやってんのに、恨まれちゃ割に合わねえだろうけどな。これがほんとの骨折り損のくたびれもうけてやつか。な、夕季」

「……うるさい」

「……」光輔が想いをめぐらせる。「礼也は？」

「あいつなら自力で脱出した。たいした野郎だ」

「そうか。よかった……」

「アスモデウスもあのまま何もしないで居座り続けてやがる。多国籍軍がどうたらこうたら言ってやがったが、そんなもんじゃ奴を倒せやしねえ。最後は俺達に泣きついてくるはずだ」

「……」

「早くよくなれよ、光輔。おまえがいなきゃ始まんねえ。しっかり静養して、またリベンジだ」

「だって日本のアメマーだもんね」

「いや、アメマーじゃねえぞ、みっちゃん。あーみーまーだ」

「どういう意味？」

「……」夕季の耳がピクリと反応する。

「何だよ、みっちゃんも知んねえのか。あのな……」

「桔平さん」

光輔の呼びかけにさえぎられ桔平が顔を向けた。

「んあ？」

桔平から顔をそむけ、光輔が力のない声を絞り出した。

「俺、海竜王から降りようと思っています……」

広大な部屋の入り口でその長身の男、火刈聖宜は直立の姿勢で微

動だにしなかった。

大窓から射し込む光の加減で、重厚な黒檀の机を隔てて椅子に座る男の表情がよく見えない。両脇には秘書と屈強なSPの姿が数名見てとれた。

やがてちらと目線だけをくれ、男がぞんざいに告げる。

「わかってているな、火刈。我々の目的はあくまでもメガルの孤立化だ。そのためなら多少の犠牲はいとわない」

「多少、ですか」

表情も変えずに火刈が合いの手を入れる。

「そうだ。周辺諸国とは常に優位な立場で外交を進めつつ、支援を仰ぎ機をうかがう。そのためならばたとえ非合法であれ、核を持ち込むことも許容範囲内だ。ただし、あくまでも国民の納得をえられる形でだな」

「メガルさえコントロールできれば、すべてが我々の手中ということになりますからな。世界中がこの国の方角を向くことになる」

「そうだ。それでこの国は安泰だ」

「国が、ですか。それとも」眩しさにわずかに目を細める。

「どういう意味だ」

男の顔つきに変化が浮き上がる。

不快そうに睨みをきかせる男に対し、火刈もこの部屋に入ってから初めて表情を和らげてみせた。

「いえ、他意はありません」

「……」

畏怖するように注目し続ける男達に不敵に笑いかけながら、火刈は眩い陽射しをさえぎろうと手を伸ばした。

「むしろこの国を正しい方向に導くためには、今が絶好の機会と言えるでしょう」

まるで光をつかもうとせんばかりに。

第十話 『決戦!』 1 (後書き)

笑っていると人が寄ってきます。怒っていると寄ってきません。でも笑っていると色々と面倒なことや嫌なことを押しつけられますが、怒っていると気を遣われて何もしなくてすみます。

見る人は見ている、とよく言いますが、それで報われたことは理不尽さとの割合で言えば、百対一以下でしょう。どっちが得なのかわからなくなってきました。損得で物事を計り始めた時点で、それはもうダメ人間ガチですが。

そんなメッセージが作品には散りばめられています、というのは嘘っパチです。ただ言いたかっただけです。

第十話 『決戦!』 2

桔平が動きを止める。その言葉が信じられずに聞き返した。

「何だって?」

一呼吸置いて話し始めた光輔の声は、弱々しくはあったが心からの叫びだった。

「俺の考えが甘かったんです。覚悟してたつもりだったのに、きつとどこか軽く考えていたんだと思います。まさか死ぬはずがないって。何があっても自分だけは大丈夫だろうなって。でもわかったんです。あんなのに勝てっこない。こんな目にあって、また平気な顔で戦うことなんてできない。行けば必ず死ぬってわかってるのに、どうして行かなければいけないのになって。俺は夕季や礼也みたいに強くなれない。これ以上やれば足手まといになって、きつとみんなに迷惑かける」

「何言ってるんだ、おまえ……」

「怖かったんです。すごく。わけもわからないまま、あの時死んでいたのかもしれないって思ったら。自分もそうだし、反対に夕季や礼也がそうなっていたらって考えたら、怖くて、怖くて……。目の前に死にそうな人がいたら、きつと俺、夕季みたいに冷静ではいられない。うろたえるだけで何もできない。誰かが死ぬのを黙って見ていることしかできない。りょうちゃんの時みたいに……。もう、あんな思い二度としたくない。俺は、夕季とは違う……」

「何が違う!」

桔平の怒鳴り声に光輔の体がすくむ。ゆっくりと顔を向けた。

「夕季とおまえの何が違うって言うんだ。こいつが好きこのんであんなおっかねえモンと戦っていると思うてんのか! おまえ、こいつがどんな気持ちでおまえのこと……」

「いいよ、桔平さん」

怒りがおさまらない桔平をなだめに入る夕季。疲れたように笑ってみせた。

「あたしもその方がいいと思う。桔平さんだってわかってくれたじゃない」

「だがな、夕季。俺はこいつがこんな腰抜けだとは思わなかった。

陵太郎の弟分だからって無条件にこいつを信じてきた自分に腹が立つ！」

「光輔は腰抜けなんかじゃない」

夕季の優しいげな声に光輔の心が揺れた。

目を向けると穏やかに見つめる夕季のまなざしがあった。

「光輔は勇気がある。あたしなんかよりずっと。光輔のことを悪く言う人間はあたしが許さない」

「夕季……」

桔平の勢いを削ぐ夕季の楔。

「よく言ってくれたね、光輔。もっと早くそうしてほしかったけど、あたしも言い出せなかった。いつかこうなるんじゃないかって気がしてたのに、止めなきゃってずっと思ってたのに何もできなくてごめん。光輔はもう充分すぎるくらいやってくれてる。そんな顔しなくていい。もっと胸を張って自分がいるべき場所へ戻ればいい。光輔はあたし達とは違う」

夕季が光輔ににっこりと笑いかける。それは光輔が見たことのない顔であり、何度も自分をつつみ込んでくれたかけがえのない記憶そのものだった。

「光輔、今までありがとう。後のことはあたし達に任せて。助かってよかった。早く良くなるといいね……」

＊

「桔平さん！」

無線機を手にも、夕季は救いを求めるようなまなざしで光輔を見続
けていた。

息もせずにぐったりと横たわる光輔を前に、夕季は何もできずう
ろたえるばかりだった。

焦って視線だけをうろうろと泳がせる。

「桔平さん！ 夕季。助けて！ 光輔が息してない！ どうすれば
いいの！ 教えて、早く！ ……。そんなの、覚えてない！ ……
うん、……うん。……わかった、やってみる。……。異物って！
……血がたくさん出てる。え！ うん、気道……。まだ切らないで
！ お願い！ 絶対切らないで！ ……うん……」

桔平からの指示で心肺蘇生を試みる。過去に一通りのレクチャー
は受けていたが、パニックに陥った現状においては自らの判断で実
行する余裕などなかった。

逢魔が時の空はいつになく澄み渡っていたが、常ならば街の至る
場所から突き刺さるきらびやかな明かりがまるでなく、海竜王のコ
クピットから落ちる補助ライトの薄明かりだけが頼りだった。

口の中から指で異物を取り出し気道を確保しようとする。固形物
は見当たらなかったが思いのほか出血がひどく、口腔から血だまり
がなくならなかった。それがどこから流れ出ているのかも確認でき
ない。

それでも夕季には悠長なことをしている時間はなかった。

瞬きも忘れ、唇を合わせて口内の血を吸い出し、ベツと吐き出す。

「うっぐ！ ……」 血の匂いでむせて涙目になった。「がはっ、むぐ
……」

『おい、どうした、夕季』

状況がわからず心配する桔平に、はあはあと息をあらげ、ようや
く夕季はかすれた声を絞り出した。

「……何でも、ない」

光輔の胸に両手を重ね、心臓マッサージと人口呼吸を繰り返す。

「早く、早く、息して、お願い……」

『夕季、落ち着け。焦らずに確実にやるんだ、いいな。じきに救護班が到着するからな』

桔平の声も耳に届かない。震えが止まらず、焦りばかりが心を押しつぶそうとしていた。

「息して、お願いだから。しっかりして！」涙声で訴えかける夕季。血走ったまなこのまま、頬の涙をぬぐい取った。「お願いだから、息して！」

『おい、夕季。焦るな。落ち着いて……』

「そんなのわかってる！」

『……』

「わかってる……。……死ぬな、光輔。お願い、死なないで……。……息して。死ぬな、死ぬな、死なないで……」

どれだけの時間が流れたのかわからない。それを夕季は、ほんの一瞬のできごとのように感じていた。

もっと時間があれば。

もっと時間が欲しい。

とめどなくあふれ出る涙をぬぐう余裕すらなくなり、ひたすらそれだけを望んでいた。

両手に力を込め、ぐいぐいと光輔の胸を押す。何度も何度もそれを続けた。唇を重ね息を吹き込む最中にわずかに心が折れかける。最悪の結果が脳裏をよぎり、嗚咽が込み上げた一瞬だけ行為が中断しかけた。だがすぐに気持ちを立て直し、睨みつけるように息吹を注入し続けた。

「！」

光輔の指先がピクリとうごめく。

全身がかすかに痙攣するのを確認し、夕季がそっと離れた。破裂せんばかりの勢いで跳ね上がり、光輔が意識を取り戻す。ぜえぜえと苦しうにあえぐさまを、夕季はただ眺めるだけだった。

やがて、放心する夕季を滑稽なものを見るように、光輔が素っ頓

狂な声を発した。

「夕季……。なんで……」

精も根もつき果て、へたり込む夕季。

『おい、夕季、どうした！ 光輔は！ おい、夕季、返事をしろ！』
状況報告を求め続ける桔平に応答する気力もなかった。

震えも止まらぬまま、夕季は子供のように、うつくうくと泣き続けるだけだった。

『夕季……』

＊

「本当にあれでよかったのか？」

病室を出るや桔平が口を開く。

夕季が頷いた。

夕季の記憶の中では今も光輔の命が生死の境をさ迷っていた。

「光輔が死ぬかもしれないって思った時、すごく怖かった。不安だった。本当にこのまま目を覚まさないんじゃないかって。お姉ちゃんの時も……」

遠く想いをめぐらせる夕季に、桔平はかける言葉が見つからなかった。

「あんな思いをするくらいなら、自分がそうなた方がいい」

「バカやろ、自分の命が一番だろ」 あきれたように吐き捨てる。「命あつてのものだねだ。自分の命を粗末にする奴には、何も守れねえぞ。同じこと何回も言わせんな」

「……自分しかない世界なんて、なんの意味もない」

「いい加減にしろ」

「……」

「そういうことをしれっと言うんじゃねえ。口にただけで消えてなくなるぞ。大事なモンは引き出しの奥にでもしまっとけ」

「……」

「おまえの発言はいちいち心臓に悪い。まったく、揃いも揃って似たようなことばっかほぎやがって。そういう恥ずかしいモンはなあ、誰にも見られないようにそのひん……、小さな胸の奥にこそつとしまつとくもんだ」

「……」口をへの字に曲げ、夕季が桔平を見上げる。「今、貧乳つて言おうとした」

「……全然」

「絶対言おうとした」

「バカ野郎、言いがかりはよせ！ 俺はおまえのことを貧乳だとか思ったことは一度もねえぞ！ 勝手に決めつけてんじゃねえ！」

「だって……」

「いいか、世の中に絶対なんてねえんだ！ 俺はな、貧相な胸だなおまえは、って言おうとしただけだ！」

「……」

「危なかったが崖ツプチで踏み止まったからギリギリセーフだ。別にへこむことはねえからな。おまえのせいじゃねえし、遠目で見りゃ何とかごまかせるレベルだから安心しろ。ただ、しの坊や波野ちゃんと比べたら数段見劣りするってだけだ。特に波野ちゃんはずバ抜けてやがる。ボン、キュッ、ボン、ボン、だ。ボン、ボン？……。なんにせよ、聞けばパンツの色だって教えてくれる。毎日教えてくれる。時たまメチャクチャ機嫌悪い時もあるが、それでもちゃんと教えてくれる。望めば形まで教えてくれる。絵に描いてくれる。パースもディテールも正確だ。大事な書類の裏とかにボールペンで描いてくれたこともあった。もうすっかり取り返しがつかねえぞ。しかも決してローテーションをつかませねえ。ケタ違いにたけえそのプロ意識には、この俺をして脱帽だ。それを確かめる手段はねえが、そこはそれ大人の世界だ、野暮は言うな。それ以上足を踏み外せばセクハラだが、ギリギリセーフだな。むしろ俺が攻め込まれてる感じだ。まったく気の休まる暇もねえ。だってよ、なんの気なしに聞いて、いきなりヒモパンタイプのTバックがどうたら言われてみる、

そんなん仕事どころじゃねえぞ。腰砕けだ。その後、お一ついかがですか、とか言われて、紅茶のティーパック渡された日にゃ、真っ白に燃えつきるわ、マジで。ある意味パワハラみてえなもんだ。小悪魔なんてレベルじゃねえ。ありやすでにメドゥーサの領域だな。いやいや、おまえにそこまでは求めてねえからな。おまえはすぐに手を出すのをなんとかしろ。てかな、比べたって仕方ねえぞ。奴らは完全体だからな。おまえみたいなのびしろはもうねえし。うん、おまえももうねえか……。ちなみにみっちゃんはガラパンオンリーらしい。あのぶらぶらっとする開放感がたまんねえそうだ。ポジシヨンは落ち着かないけどね、だってばよ。俺は腹を冷やさねえために中学に上がるまでブリーフにランニング入れて寝てたつてのに、今時の女子高生は先の展開が読めねえ。たまにアイスの食いすぎで陣痛がきて学校休んじまうらしいし、メシ作るのがメンドくさいとすぐおごってメール入れてきやがるし、あれで不細工だったら顔面にパンチくれてやるところだ。いや、勘違いすんなよ。男はああいうウザ可愛い妹タイプに弱いもんだ。むしろ何も反応がねえと淋しくてそわそわしてきちまう。そんなもんだ。決して俺が特別なわけじゃねえ。そうやって俺を睨むのは勝手だが、覚えておけ。大人になりゃこんなことは日常茶飯事だ。俺もちっせえちっせえ言われながら、歯を食いしばって耐え忍んできた。氷のように冷たい世間の風も、路地裏で流れ星を見ながらいつも俺達頑張ってきた。ハンパじゃないんだ。確かに木場の方がちよっぴりでけえが、それは体が俺よりも二まわり以上でけえって理由がある。ゴリラえもんだからってことで、決して優れているわけじゃねえ。勘違いするな。形も悪い。見たらがっかりすることうけあいだ。鼻で笑うぞ。比率からいけば、むしろ俺の方がクオリティは高い。ここがポイントだ。重要だ。おまえももうのびしろは期待できねえだろうが、だったら形で勝負すりゃいい。少なくとも俺はそうしてきた。まだ手は出すんじゃない！ 貧乳がどうした。鳳さんなんか頻尿だぞ。訓練中でもすぐトイレ行きやがる。頻尿よりや貧乳の方がいいだろ。仮にも乙

女なんだからよ。乙女が頻尿じゃ、そりやただけねえぞ。いや、頻尿が悪いつて言ってるわけじゃねえからな。俺だって冬場に缶コーヒー飲むと、発動まで三十分もたねえことはざらだ。むしろションベンがよく出るのは体にいいことだと思え。つまりは俺が言いたいことはそれだ。要するにもっと自分を大事にしろってことだ。ションベンは我慢するな。で」ぐいっと夕季を睨めつける。「何か言いたいことがあるなら言ってみろ」

「……」氷のまなざしを桔平の心臓に突き刺す。「ケーキ、おごれ
ば」

「……。給料日の後でいいか？」

「……いいけど」

第十話 『決戦!』 2 (後書き)

交差点で普通に止まると、歩行者は当たり前の顔をして歩いて行きます。ツンデレで言うところ、ツンの反応です。でも急ブレーキをかけて止まると、頭を下げながら申し訳なさそうに足早に横断してくれます。(真似しないでね)

世の中色々間違っています。

ちなみに横断歩道で待っている時に車が止まってくれないと噴火するほど腹立たしいのに、自分が運転している時にはまず止まりません。みんな大嫌い! でも本当に嫌いなのは私……とか思ったことは一度もありません。

そんなメッセージが作品には散りばめられて……

お寄りいただきましてありがとうございます。

第十話 『決戦!』 3

メック・トルーパーの待機所兼事務所で、桔平と木場は難しそうな顔をつき合わせ腕組みをしていた。

「そうか、彼がそんなことを言ったか……」

木場の声に頷く桔平。

「彼には他のメンバーのような積み重ねがない。覚悟はしているつもりだったのだろうが、本能で恐怖を感じ取ってしまったのだろうな」

「まあな。相手が悪すぎた。タイミングもな。調子がいい時はコクピットの中にちよつとしたシールドみたいなのもできるって話だが、かなりいろいろとケズられてたみたいだからな。夕季に言われるまで俺もそんなこと気にもとめなかった。我ながらやっちゃったと思う。鼻毛大臣に借りた裏ビデオ観てる時にいきなりお袋が帰ってきたの思い出すぜ。ちくしょうっ、思い切りひっぱたきやがって、クソババアめ!」

「……」木場が不快そうな顔を向ける。「絶対大丈夫だって言ったよな、おまえ。俺はそれを信じて……」

「仕方ねえだろ、美容院の予約の日にち見間違えたってんだからよ」
「自分のミスを棚に上げるな。おまえはいい。あの状況じゃ、どう考えても先輩の俺の責任だろうが。おかげで俺の信用までガタ落ちだ」

「ちいせえこと言ってんなって。世の中にゃ絶対なんてねえんだ」
淋しそうに目を伏せる。「十が七に見えただけだ……」

「……。気づけなかった俺達の責任だろうな」

「そりゃ無理ってもんだ」

「!」

「俺もおまえも集中してたからな。完全無防備状態だったしよ」

「……。いや、光輔の話だ……」

「なんだ、まぎらわしい。まあ、だな。夕季が言うように、ろくに訓練もなしにここまでやってこれたのが奇跡みたいなもんだったのかもしれねえ」

「そうだな」

「無理もねえか。考えてみりゃあいつらもまだ十六かそこらのガキんちよだ。遊びたい盛りだろ。それをあんなモンに乘せられて、大人でも尻込みしちゃうようなバケモンと戦わされるんだ。腰が引けて当然ってとこか。あいつらがすごすぎて、俺達はそれを忘れちまっただんだな」

「いつの間にか彼らの力をあてにしすぎていたのは否定できん。本当に腹を決めなければならぬのは我々の方なのにな。彼らにこれ以上を求めるのは酷というものだ」

「だな……」ふうと息を吐き出す。「あいつを守ってくれて陵太郎に頼まれてたのに、気がつきや守られてたのはこっちの方だ。勢いとはいえ、あんなこと俺が言えた義理じゃなかったんだよな。またなんか持って謝りにでも行ってくつかな」

「くれぐれも慎重にな」

「わかってら」物憂げに窓の外へ目をやる。強烈に射し込む陽射しと耳障りな蝉の鳴き声が苛立ちを募らせた。「このまま……」

「？」

木場の方を見ようとせず、桔平が気弱な声を吐き出した。

「このまま動かないでいてくれるんなら、こっちもへたに触んねえ方がいいかもしれねえな」

「アスモデウスのことか？」

「おお。モノとしての次元が違いすぎる。人間が考えつく理論じゃ、あいつを分解する法則にはたどりつけねえかもしれねえ。たとえば核でもな。天変地異が妖怪のせいだったって、空に向かって豆鉄砲撃つようなもんだろ。それに、あいつは何もせずに、ただそこにいた

ただだからな。先につついたのは俺達の方だ」

「……おまえらしくないもの言いだな」

「俺もそう思う。だがな、そんな気にもなってくる。結局いろんなテリトリーに土足で踏み込んで荒らしてきたのは、いつも俺達人間の方だ。いつだってそうだ。そうして俺達は大地や空の怒りを買ってきた。この星の怒りを買ってきた。全部自分達が蒔いた種だ」

「……」

「奴らはこの星そのものだ。この星の怒りだ。海や地面に核をぶっぱなしても、地球が真つ二つに割れることはない。針の先にも満たない小さな穴があくだけだ。だがその小さな穴をいくつかあけるだけで、俺達は簡単に自滅する。殺虫剤まかれた害虫みたいにな。もし奴らを認めることで自分達の大事なモンが守れるのなら、それでいいとさえ思えるようになってきやがった。そううまくはいかねえだろうけどな……」

「おい」

「んあ？」 木場に呼びかけられ、腑抜けた顔を向ける。

「心にもないことを言うな」

「……。わかってんよ、バーカ」

再び顔をそむけた桔平を木場は心配そうに見守っていた。

「だがな、桔平」

「おう？」

「実際問題、どうするつもりだ。彼の代わりはいるのか。交替のオビディエンサーは」

「んな話、これっぽちも出てきやしねえ」

「何をしている。もともと陵太郎の時も第二候補者まで話がいつていたはずだろう」

「あさみにその気がねえんだから、しゃああんめえが。礼也の時もそうだったが」

「そうか……」

「あさみの持ってたリスト盗み見しといたから、とりあえず候補者

には連絡をとってみる。メガ・テクノロジーで技術者やってる奴らしいが、アメリカ在住だからな、うまく折り合いがつけばいいが」

「わかった。頼んだぞ、桔平」

「おうよ」

木場も深く息を吐き出す。

「あまり考えたくはないが、不測の事態に備えてもっと多くのオビイを育成しておく必要があるな」

「育成つつたって、シミュレーションでどうにかなるモンでもねえしな。いつそうなたっておかしかねえのによ。礼也はともかく、夕季だってそうだ。もとの坊を見返してやろうと意地張って頑張ってたようなもんだからな。誤解が解けた今、いつおめかしや男に目覚めて、やだもー、こんなのやってらんない、とか言い出だしても全然おかしくねえ」

「……。おかしいだろ、それは。彼女がそんなことを言うはずがない」

木場が真顔で受け答える。

それが桔平の坎にさわったようだった。

「やだもー、ゴリラえもん、冗談すら通じずー、いたいー」

裏声で揶揄するように言う桔平に戸惑いの表情を向ける木場。

「おい、桔平」

「やだぼー、ごわいー、やべてよー。痛ゴリラ、最低！」

「……」

「やだもー、史上最低ー！」

「史上……」

「やだもー、ゴリラえもん加齢臭出まくりー、鳳さんと同じにおいー、くっさー、オホッ、ゴホ……」

むせるまでそれ続ける桔平に、木場が怒りと感情をあらわにした。

「なんだと！……」野太い声を真っ直ぐに押し出す。「やだもー！この野郎、こ、この糖尿予備軍！」

「はあんっ！」

眉間に皺を寄せ、二人が睨み合った。

「！……やだもー！ このゴリ公、センスなっすいんぐか！」

「！……やだもー！ この野郎、ぶっとばされたいのか！」

「やだもー！ このゴリゴリ君、パソコンの中がエグい写真でパンパンなくせしやがって！」

「やだもー！ この野郎、それはおまえが勝手に入れたやつだぞ！」

「やだもー！ このゴリリン、だったら消せばいいじゃないの！」

「やだもー！ この野郎、それは、ええと……」

「やだもー！ このエロガツパ、しの坊にバラしてやる」

「それだけは勘弁してくれ！」

「やだもー！ 勘弁しな〜い」

「……やだもー！ それじゃ俺もメックの奴らにこないだの焼肉屋でのこと全部バラしてやる。便所でチャック全開のまま酔いつぶれてたこととか」

「それだけは勘弁してくれ！」

「やだもー！ おまえしだいだ。俺の車の中でゲロ吐きやがって！」

「やだもー！ マジか！ ちくしょう、仕方ねえ」

「やだもー！ 取引成立だな」

「やだもー！ んじゃ金貸してくれ」

「やだもー！ 断る。何が、んじゃだ」

「やだもー！ 今月マジでヤベえんだっての！」

「やだもー！ 自業自得だ！」

「やだもー！ ケチ！」

「やだもー！ 知るか！」

「やだもー！ えーとな、えーと……」

「やだもー！ あんな……」

次弾に窮し、膠着状態のままただ睨み合う桔平と木場。

ガタン、という物音に慌てて振り返った。

花瓶を抱えた忍が戦慄するように立ちすくんでいた。退いた拍子

に机にぶつかる。

「ぶおっ！ おまえいつからいた！」

「おい、忍！ これは……」

「あ、あの……」困惑したように二人を見比べる忍。おろおろと泣きそうな顔を伏せた。「すみませんっ！」

「何がだ！」ドンと花瓶を置き逃げるように去って行く忍に木場が手を伸ばした。「何がすみませんなんだっ！」

届かないその手のひらが、虚しく空だけをつかむ。

「……桔平」

「やだぼ……」

メガル基地内の童王格納庫では礼也と夕季が睨み合っていた。

「そんな勝手を許したのか！」

興奮し息を荒げる礼也。

「そんなことで奴を倒せると思ってんのか！ 甘っちょろいにもほどがあるって！」キツと口もとを結び、背中を向ける。「光輔のところに帰ってくる」

後ろから夕季が呼び止めた。

「行ってどうする気」

「説得する。承知しなかったら、首に鎖つけてでも引っ張り出してやるって」

「そんなことして何になるの！ 光輔はもう乗らないって決めたのに。無理やり連れてきたって、いい結果が出るわけない」

「だから、そんな悠長なことを言っている場合じゃねえって言うてんだ！ 俺らがやらなきゃこの世界はなくなるかもしれないんだぞ。一人でも協力が必要な時に、そんなわがまま許されるかって！」

「あたし達がその分頑張ればいい」

「わかんねえのか！ おまえもあの化け物を目の前で見てきたんだろが。奴の恐ろしさをガッツリ味わったはずだ！ おまえ一人が頑張ったって、知れてんだよ！」

悔しそうに唇を噛みしめる夕季。ギッと礼也を睨みつけた。

「だからって、光輔をまた巻き込もうっていうのなら許さない」

「どう許さない」ぐいっと夕季に顔を近づける礼也。「俺を叩きのめすのか。そんなことができるのか、おまえに。今度は本当に容赦しねえぞ」

獣の呼吸をあらわにし、なおかつ冷たく押し込んでくる礼也の迫力に夕季が顎を引く。口を真一文字に結び、まなざしにそれまで以上の力を込めた。

「……。おまえにだってわかってんだろ。俺達だけじゃどうにもならないって」恫喝をやめ、諭すような口調に変わる礼也。「このままじゃ駄目なんだ。俺達は負ける。これじゃ陵太郎さんのかたきだつてとれっこねえ……」

「いい加減にすれば！」

ふいに感情をあらわにした夕季に、礼也がゆっくりと顔を向ける。「かたき、かたきって、そればかり。自分のことばかり。そんなにかたき討ちがしたいのなら、一人で行けばいい」

激高し肩を怒らせながら夕季が去って行く。

その姿を礼也は表情もなく見つめていた。

「お、夕季はいないのか？」

桔平の声に礼也が振り返る。

桔平の横には雅の姿があった。

「今、国防省から通達があった。俺達はもう手を出すなってよ」

「……」

「夕季にもいてほしかったんだがな。まあいい」桔平が重そうな口をこじ開ける。「おまえだけでも見ておいてもらいたいものがある……」

第十話 『決戦!』 3 (後書き)

オダギリジョーと友人にメシをおごる夢を見ました。オダギリジョーはちゃんとごちそうさまと言ってくれたのに、友人は何も言ってくれませんでした。あいつはダメだと思いました。今度文句言ってやろうと思ってます。おまえが俺のことを普段からそういうふうに思っているからそうなるんだろが！と言われたら、おまえが俺にそう思わせているのが問題だろうが！とねじふせてやるつもりです。

そんなメッセージはもちろん散りばめていません！
どうもありがとうございます。またお越しく下さい。

第十話 『決戦!』 4

巨大エレベーターのカウンターが目まぐるしく階数を刻みつける間中、礼也は何も言わず、ずっと二人の背中を眺め続けていた。

メガル本部別棟地下五十階。そこは限られた者しか立ち入ることを許されない、極秘中の極秘領域だった。先も見通せないほど広大な敷地の延長は闇に埋もれ、薄気味の悪さと相まって真夏だというのに冷氣すら感じさせる。

そこへ桔平は礼也と雅を連れ出していた。

目を見開いたまま動くことすら忘れてしまった礼也に気づき、桔平が口火を切る。

「驚いたろ。こんなものが存在するなんてな」

おそろおそろ振り返る礼也。

「……これは」

「ガーディアンだ」

「ガーディアン……」

戸惑いの表情を隠せずにひたすらそれを見続ける礼也。隣では雅が落ち着いた表情でその様子をうかがっていた。

ガーディアンと呼ばれる人形の石像を足もとから礼也が見上げる。一つの岩から切り出したような巨神像の高さは、ゆうに五十メートルはありそうだった。下からでは腹部より上のディテールはよく読み取れない。薄明かりのため輪郭すら浮かび上がらないせいもあったが、目の届く範囲でさえ特別な装飾もないシンプルな造形であったことから、それが単に人のシルエットを象った岩のようなものであろうとは推測できた。

「……何なんだよ、こりゃ」

ようやく礼也が言葉を絞り出す。それに頷いて桔平が説明をし始

めた。

「正直言って何なのかはまだはっきりわからん。だがこれがプログラムに対抗するための切り札だってことは確かだ。アスモデウスの発動と同時に、風野博士が砦埜島から慌てて持ち帰ったものだ。奴らに破壊される前にな。おそらく、こいつがパンドラの箱だろう」

「パンドラの箱……」

「こいつを探し出し謎を解明することが、プログラムの発動キーだったのかもしれないってことだ。俺達は奴らに認められた。滅ぼすに値する文明だと。竜王だけでなく、こいつを取り返すためにプログラムはメガルへ集中する。いや……」認めたくない言葉を飲み込む。「こいつは全部メガリウムでできている。アメリカもロシアも、世界中の先進国すべてが、喉から手が出るほど欲しがっていたレアモンだ。こいつをかすめ取るために数知れない情報戦が繰り広げられてきた。メガルなんていつでも潰せるのに、大国と呼ばれる連中が犬つころのように尻尾振ってすり寄ってきたのも全部そのためだ。だが砦埜島に隠蔽していたこいつを独断で占有したことで、メガルは世界中を敵にまわした。はっきりとな」

「……。なんだ、メガリウムってのは」

「不可能を可能にするワイルドカード、ってとこか。人間が考えつくことで、できないことはない」

「はあ？」

「おまえ、産まれたばかりの赤ん坊がプロレスラーに勝てると思うか？」

「……んなの無理に決まってるんだろが」

「じゃあ不可能だ」

「はあっ！」

「おまえは正しい。一般的な常識があれば誰だってそう答えるに決まっている。だがな、もし漠然としたイメージじゃなく、明確にそのプロセスを想像できるのなら、それも可能になるかもしれない」

「……。何言ってるんだ、あんた」

「勝手にリミッターかけてるうちは、こいつは石の塊でしかないとことだ」

「？」

まるで意味を理解できずに礼也が首を傾げる。

「まあいい。わかって方がどだい無理な話だ。大事なものは、もはやどちらが先にしかけたのかとか、何のための攻防かなんて、考察する意味すらないってことだ。今となっては俺達はこのつを守っていくしかない。内や外のあらゆる敵からな。こいつの情報は竜王の時と同様、竜王の感応システムを介しておまえ達の方が詳しく知ることが出来るはずだ」

「……。でも俺達は何も知らない」

「ああ……」目を細めガーディアンを見上げる桔平。申し訳なさそうにつないだ。「まだ封印が解かれていない。それまでは単なる石像にすぎない」

「封印……。それはどうやって解くんだった」

「……。十三年前、博士は三体の竜王とともに何枚かの石版を砦壱島から持ち帰った。ヒエログリフみたいなやつだ。あるものはガイア・カウンターの解析情報だったり、別の一枚にはオリハルコンの精製方法が記されていたりする。その中の一つにこいつを起動させるキーがあるはずなんだが、それを知っているのは博士と司令官の進藤だけだ。俺達には何も知らされていない」

「……」

「俺が必ずその封印を解いてみせる。それまではおまえらだけでふんばってくれ」

決意の表情でガーディアンへと向き直る礼也。

その横顔を雅は心配そうに眺めていた。

「今から簡単な説明だけはしておく。現時点でわかっていることはまだほんの一部だけだから、そのつもりで聞いてくれ。……ん、なんか言ったか、みっちゃん」

「ううん」桔平に顔を向け、雅が力なく笑う。「何も言ってないよ」

「そうか……」

桔平が礼也への説明を始める。

雅は淋しげに眉を寄せ、再びガーディアンを静かに見上げた。

『お願い。もう少しだけ、待って……』

心の中で、そう呟きながら。

薄暗い病室で光輔は一人テレビに見入っていた。上半身を起こし、顔を横に向けている。

画面の中では遠巻きにアスモデウスを臨みながら、戦々恐々と中継し続けるリポーターの姿が映し出されていた。

直径六キロメートル以内を焦土と変えた悪魔の業火。

他人を押しつけ逃げ惑う人々の様を何度も流し、それに乗じた暴動や火事場泥棒の様子も沈痛な面持ちで語られる。

そのすべてがアスモデウスのせいだとまとめられた。

中枢機能が麻痺した首都のかわりに、多くの都市が暫定政府の候補地として名乗りをあげていた。大阪、名古屋、仙台、福岡。そこにあるのは、たてまえにうたわれるような助け合いや犠牲的な精神ではない。混乱沈静後の待遇と、自治体としての優位な位置取りが透けて見えていた。

国を取り巻く諸外国のスタンスはさらに淡々としたものだった。

多国籍軍派遣を全世界的に報じる一方で、スポーツの国際大会と権威ある映画祭は予定通り開催されることが伝えられた。

現状に蹂躪され、わけもわからずに逃げ惑う輩を除き、誰も己や、ましてや他人のこと、自分達が未来をつなげていかなければならないその世界のいく末を愁い、そして憂う者はいなかった。

室内に照明が灯る。

雅だった。

「電気くらいつけてよ。目が悪くなるから」小物入れの上にゲーム機を置く。「ゲームここに置いとくね。あんまりやりすぎちゃ駄目だよ」

光輔はずっとテレビを見続けていた。やがて振り返ることもなく、ぼそりと呟く。

「こんなふうに見えてたんだな」

「ん？」

「こんな感じで、今まで人ごとだと思って見てたんだな、みんな。まさか自分が危険な目にあうなんて、全然考えもせずにさ。自分だけは何かあっても大丈夫だって勝手に信じて……」

「……光ちゃん」

「夕季に怒鳴られると思った。何、情けないこと言ってんだって、すごい目つきでまた睨みつけられてさ。でもあいつ、笑ってた……」
目を細め、雅が悲しそうな表情で光輔を見つめた。

「俺、夕季があんなふうに笑うの初めて見た。あんなふうに泣くのも。自分勝手なこと言ったの俺の方なのに、あいつあんなに優しい顔でさ、もう戦わなくていいって。俺、そのつもりだったんだけど、ほっとしたはずなのに、なんでだろ、すごく苦しくて、つらくて……」

光輔の肩が震え始める。やがて嗚咽が部屋中を隙間なく埋めていった。

眉を寄せ静かに雅が近づいていく。そっと光輔の体を抱きしめた。
「あれでよかったんだよ。誰に頼まれたわけでもないのに、光ちゃんはずっと一人で頑張ってきたんだもの。みんな光ちゃんに感謝してる。夕季も礼也君もわかってるよ、きつと。桔平さんだってわかってくれる。誰も光ちゃんのこと責めたりしないよ。だから、もう自分を責めないで」

「うっぐ……、ぐっ」

「頑張りすぎだよ。光ちゃんのくせに……」

子供を慰めるように、つつみ込むように雅が光輔に覆い被さる。

「ねえ、光ちゃん。来週、花火大会、観に行こっか」

光輔の背中を優しく撫でながら、雅は穏やかな声でそう囁いた。
「俺には逃げるなって言いたくせによ……」

病室の外で壁にもたれながら、ふう、と礼也が息を吐き出す。そして焦点の定まらないまなざしを薄暗い通路の天井へと泳がせた。

第十話 『決戦!』 4 (後書き)

SF的考証ってやつがどうも苦手です。なのでいろいろトンデモ武器とか設定とか出したいのに、躊躇してしまいます。

例えば今やロボットアニメではお馴染みのレールガン。現実的には携行武器として扱うにはかなり困難な状況でしょう。どの部分から煮詰め、小型化し、解決すればいいのか、皆目見当もつきません。レールガンが当たり前なら、それを無効化する素材や塗料、塗るだけでミサイルすらものともしないような硬質コーティング剤があってもおかしくないし。

その技術が当たり前になった時代のバックボーンを想像するのはもっと困難です。フェラーリの走行性能を遥かに凌駕する(かつ安全な)軽トラックがママチャリ並みのコストで生産できるほどの近未来を想定した場合、その他の環境はどれほど現在と違っているのだろうか、と。その時電子レンジは千円くらいで買えて、なおかつ味っ子並みの調理機能を備えているのか、とか。或いはレンジ自体が必要なく、蓋を開ければ勝手に調理が始まる使い捨て容器とか。はたまた必要な技術以外はほとんど進化しないのか、などと。

数1で理系からドロップアウトしたほどその手の思考能力が乏しくせに、考え出すと切りがないし、もう眠れません。だからなまあたたかく見守って下さいということ……

第十話 『決戦!』 5

夕季は教室の窓際の席で同級生達の他愛のない会話に耳を傾けていた。

「それってメモリ足りないんじゃないか？」

「メモリ？ それで処理が速くなるのか？」

「ああ、たぶんな」

「いくらくらいするの」

「三、四千円くらいで買えると思うよ。明日買いに行く？ 着いてつてやろうか」

「今、金ないんだよな。今度小遣い入ってからにするか……」

夕季が空を見上げる。澄み渡る青空が彼方で海と融けあっていた。明日から夏休みだというのに向に心は晴れなかった。

「アスモデウスのせいで物価上がったら値上がりするかもよ」

「げげ、マジか？ アスモデウスうぜえな」

「うぜえよな。昨日ビデオ予約してたのに、夜中に急に特番入りやがってさ。ショックだよ。あのアニメ、コンプ中だったのに」

「一週遅らせてやるんじゃない？」

「だといいいけどさ。時間ずらしてこっそりやられたらたまらないって。例の文化祭のとこだぜ」

「ありがちな。どっちみち地震速報とか台風とか平気で乱入してくるしな」

「あれも勘弁してくれ！」

「あのチャンネルだったら大丈夫なのにな」

「アニメ全部あそこに引っ越せて」

夕季が彼らに顔を向ける。どこにでもいる十六歳の少年が二人、楽しそうに会話を交わしていた。

彼らの脳内のアスモデウスは単なるテレビの中の事象にすぎなかった。ついこの間までは同じ脅威に追われ逃げ惑っていたというのに、自分達に関係ないと知ればよその国の戦争のように感じているのだろう。ましてやこの世が滅びるかもしれないという憂慮などは、微塵もうかがえなかった。明日があるという保証すらないのに。政府から用無し認定されたとはいえ、今こうして普通に学校に来ているのも夕季は妙な感じだった。

「明日から夏休みだしさ。今度一緒にアキバとかおダイバとか行ってみないか？」

「お、いいねえ。でもさ、アスモデウスが片づかないと正直ヤバイだろ。ものっそ近所みたいだし。てか、駅とかなくなっちゃって、行く手段ないじゃんか」

「だよな。迷惑な話だ。夏休み中になんとかならないかな」

「無理ぽいだろ」

「無理ぽいか、やっぱ」

「そう言えばさ、あのロボットってさ、乗ってるのって、やっぱ自衛隊かな」

何気ない一言に夕季の心が呼び戻される。

黙って二人に注目した。

「昨日の特番？」

「うん。画像ガビガビだったし少ししか映ってなかったけどさ、あれじゃ駄目だろ」

「アメリカ軍かもしれないぜ」

「無人かもな」

「どうだろな。サイズからしたらそんな感じだよな。十メートルくらいか？」

「もつとないだろ。細いから機械詰め込んだら人乗るとこない感じだな。パワード・スーツにしちゃデカイような」

「遠隔操作だからあんな無茶苦茶できるのかもな。実際乗ってたら怖くてあんな突っ込めないって」

「いかにもアメリカ軍のオッサンぽいよな」

「たぶんな」

「じゃあさ、案外日本のカリスマゲーマーが操縦した方がうまかったりしてな」

「それ俺も考えた。パターンとかいろいろ知ってそうだし」

「なんか単調なんだよな。あれじゃ、やられるって。モンスター、スキだらけなのに」

「しょうがねえじゃん。アメリカ人おおざっぱなんだから」

「いや、あっちのゲーマーって、シャレにならないらしいぞ」

「何にしても、もっと研究しろっての」

「やり込みが足りないって」

「おい……」

夕季が見ているのに気づき、二人が目をそらせる。

こそこそと小声で続けた。

「なんでこっち睨んでんの」

「ヒマなんだろ。誰もかまってくれないから」

「なんで相手にされないかわかんないのかな」

「空気読めないからだろ。浮いてるのわかってないよ、絶対」

「絶対だな。なんか俺ら見下されてる感じだし」

「無意識だと痛いな」

「痛いな」

ため息をもらし、夕季がまた空を見上げる。遠くに入道雲が見えた。

「古閑さん」

同級生に名前を呼ばれ、夕季が振り向く。

その女生徒は遠慮がちに様子をうかがいながら夕季に告げた。

「あの人が用があるって」

指さす方角に目をやる。

篠原みずきの顔が見えた。

「何？」

みずきに近寄って行く夕季。無言の圧力にみずきが一步退いた。やがて意を決したように切り出す。

「穂村君のこと知らない？　ずっと学校休んでるの。何だか最近休みがちだったし、下宿先に電話してもいないって言うだけだし……」じつとみずきの顔を眺める夕季。

「……。さあ」

みずきが目を伏せた。

「そう……」はああ、と息を吐き出すみずき。ツートールの先端が力なく垂れ下がった。「古閑さん、穂村君と仲良さそうだから知ってるかなって思ってた……。ありがとう……」

背中を向けたみずきを夕季が呼び止めた。

「ねえ」

期待もせずに振り返るみずき。

「光輔、今、体調崩して入院してる」

「！　ほんとに？」

夕季が頷いた。

「わけありであまり大ごとにしたくないみたいだから、他の人には言わないで」

こくんと頷くみずき。

「……。今日、一緒に行く？」

「いいの？」

「うん。じゃ、病院で待ち合わせして」

「うん」嬉しそうに笑った。

桐嶋楓は目の前に差し出された五千円札を見て目を丸くした。

「それ、こういうこと、加藤君」

バツが悪そうに笑みを浮かべる同級生。媚びるような調子でそれを告げた。

「だから、これ霧崎君に返しておいてほしいんだ。ラケットの代金、先生が霧崎君から預かってたみたいでさ」

「……」

「霧崎君からこれ受け取ったの、桐嶋さんだろ。俺頼んでないよね？ だから頼むよ」

あきれたように加藤を眺める楓。ふと切なそうに眉を揺らした。階段を上っていく楓。その途中で何人もの生徒達とすれ違う。あつる者は逃げるように、またあつる者達は後ろを振り返りながらこそそこそと何ごとかを囁き合っていた。

屋上への扉を開く楓。

清掃時間なのにそこには誰もいなかった。一人の生徒を除いては。うん、と自分に言い聞かせ、楓が近づいて行く。

「霧崎君」

それに答えることなく、礼也は空を見続けていた。どっかりと腰を下ろし壁にもたれかかる。

気を取り直して楓が要件を進めようとした。

「これ、返すから」

加藤から受け取った五千円札を礼也の目の前に突き出す。

「池田先生が加藤君にお金を渡し忘れていたらしいの。だから、これ返します」

「……なんだそりゃ」

「……。疑ってごめんなさい。悪かったと思っているから」

「なんで加藤が来ないんだよ」

ぼそりと礼也が呟く。

口もとを結び、楓がぎゅっと拳を握りしめた。

「……勝手なことをしたのは私だから。加藤君に頼まれたわけでもないし」

「そうか……」 気のない返事を繰り返した。「ま、いいけどよ、どうでも……」

「……」 持っていた紙袋の中に札を入れ、礼也のそばに置く。「じゃあ、そういうことで」

「おい」

逃げるように立ち去ろうとしたところを礼也に呼びかけられ、足を止める楓。

「……何」

「なんで、俺にカランできやがんだって」

「……。別にからんでいるわけじゃない。私は生徒会長として少しでも学校の雰囲気をよくしようと思ってるのだから」

「ほんとはいなくなればいいと思ってるのにな」

「……。そんなこと、思って……。あ……」かつて礼也に口走った己のセリフが鮮明に蘇る。「……ごめんなさい」

「なんで謝んだ」

「……ひどいこと言ったから」

「なんか言われたっけか。覚えてねえって」

「……」

「おまえ、いい加減にしとけって」

「……。何が」

「そういうガラでもねえくせによ」

「何……」

ふいをつかれたようにドキツとなる楓。心臓の鼓動が高まっていた。

それさえ知らず、礼也は静かなトーンで続けた。

「あんなの予測できねえって。ビックリすんじゃないか。普通おまえみたいなのはシマシマとかが妥当なんじゃないのか？ ま、正直結構似合ってたのが一番不本意なわけだがよ」

それが下着のことだと気づき赤面する楓。キツとなって振り返った。

「最低！ 謝って損した！」

捨てゼリフを残し楓が駆け去って行く。

ふう、と深く息を吐き出す礼也。自分に言い聞かせるように呟いた。

「わかってるって、んなこた……」

楓が置いていった袋に目をやる。フレールと書かれたパン屋のも
のだった。ごそごそと中をさばくるとメロンパンを一つ取り出し、
パクリと食いついた。

「……。うめーじゃねえか……」

その時、校内に緊急放送が響き渡った。

第十話 『決戦!』 5 (後書き)

自分の字が読めません。すごいアイデア思いついて、車の中とかで書きなぐると、その時はわかってるのにしばらくすると読めなくなります。すぐに打ち込まないと駄目です。興奮しているので漢字を使わないでいるとよけいわかりません。いろんなパターンを当てはめても解析できずに結局諦めることもザラです。自分で書いたのになあ! 蛍の墓の人がかなりの悪筆だったと聞きますが、写植屋さんというのはシャンポリオン以上の解読能力があるんじゃないでしょうか。ちなみにゆっくり書いても同じ汚さでした。「何、これ、字? 読んでもらおうって気がないの?」と自分に突っ込みを入れます。

風呂場で思いついた時は忘れないように連呼です。「おまんじゅう、おまんじゅう、おまんじゅう!」でもだいたいシャンプーしている時あたりに口の中にお湯が入ってグヘツとなって忘れてしまいます。覚えていれば絶対傑作ができたのに!

きっと他の人もそうだと思います。脳内に浮かんだすべてを文字にできれば、この世は傑作だらけでしょう、か……

後書き欄を汚しつつ、今回もお読みいただきましてありがとうございます。ございました。

第十話 『決戦!』 6

全世界に激震が走った。

人類の未知なる敵が進軍を始めたのだ。

高層ビルをなぎ倒し、路面を切り裂き、橋を叩き折り、触れるものすべてを砕き、消し去り、低空を浮遊しながら一直線にアスモデウスが前進する。その頭上には空を覆いつくさんばかりの白インプの大群が続き、地面から無限に湧き出る黒インプの軍勢が絨毯のように波うち捲れあがり大地を席卷した。海をかすめれば白波と同化した青インプの連なりが海平線を押し上げつつ追従する。見渡す限りの空間を埋めつくした三色のコア。その妖しげな光が通り過ぎた跡には塵芥すら残さず、魔獣達の白昼の行軍は深い暗闇を伴い、見る者に恐怖と悪夢を刻みつけていった。

対策本部では気象予報図のような進行予想シミュレーションがたちに作成され、わずかでもその可能性が憂慮された地域には速やかに避難勧告が発令された。

山凌市も例外ではなかった。

公の発表こそ控えられたものの、その進路はほぼ確定されていた。山凌市、さらに細かく計算すれば、メガルを目標とするものと。

否、メガルこそが彼らの敵と特定されたのだと。

山凌学園高校の地下には約二万人の人間が収容できるシエルターがあった。メガルの要請で作られたものである。同様に市内の各所に小中規模の地下避難所が設置されていた。

夕季の前でのん気な会話を続けていた生徒らも、先を争うようにその場所にすべり込む。

だが今度ばかりは、それすらも安全とは言えなかった。

到達まで約三時間。同時にそれが人類に残された最後の時間だと

いうことを理解できた人間は今はまだいない。

基地内の更衣室でダークレッドのバトルスーツに着替え、礼也が竜王の格納庫へ向かう。

辺りには他の人影は見あたらなかった。

胸のポケットから一枚の写真を取り出し眺める。

陵太郎や雅と一緒に撮ったもの。礼也のお守りだった。

写真の中の陵太郎に語りかける。

「待っててくれてのも今さら虫がよすぎんだろ……」自嘲気味に笑った。「ま、いいけどよ。一人のが気楽だって……。うっし！」覚悟を決め礼也が歩き出す。

「！」

通路の奥に見知った姿があった。

夕季だった。

夕季はすでに白色のバトルスーツを着込み、何か想いふけるように壁にもたれかかっていた。礼也の顔を認めるや、そっぽを向く。「てめえ、何やってんだ、こんなところで」ぶっきらぼうに吐き捨てる。

夕季がかすかに眉を動かした。

「……別に」

「ったくよ。無理してついて来んなって」

「ついて行くわけじゃない。勝手に行くだけ」夕季もぶっきらぼうに返した。「礼也とは絶対に一緒に行かない。絶対別々……」

「絶対って何だ、絶対ってなあよ！」

「うるさい……」

夕季を見下ろし、鼻で笑ってみせる礼也。

「へっ、別にあんたのためにいくんじやないからね、ってか」

「……」切なそうに礼也を見上げた。「バカなの？」

「はあああっ！ ふざけんな、てめえ！」

「……うるさい」

礼也がふっと表情を和らげる。

「素直じゃねえな、おまえも」

「……。礼也に言われたくない」

「わかってるって、んなこたあ」

二人が並んで歩き出した。

病室で光輔が振り返る。

穏やかに見つめる雅の姿があった。

「雅……」

すでに外出着をまとい、光輔は部屋を出る直前だった。

「用意できた？」

「……」

「他の人達、もうほとんど避難しちゃったよ」

「……ん、ああ」

「ニュース、観た？」

「……うん」

「そっか」悲しそうに目を伏せ、笑う。「……やっぱり行くんだよね」

光輔が頷く。

「ねえ」瞳がなくなるほどの笑みを作り、ほがらかな口調で雅が問いかける。「もし光ちゃんが行かなかったら、この世界はなくなっちゃうのかな」

眉一つ揺らすことなく、光輔は雅の顔を真っ直ぐに見つめ返した。「きつと何も変わらないと思う。今までどおり、困る人と何も関係なくすごしていく人達にわかれるだけで。でもひょっとしたら夕季や礼也がいなくなるかもしれない。しいちゃんも桔平さんも木場さんも、俺が知っている人達がみんないなくなるかもしれない。雅も。だったら、そんな世界なら俺はいらない。おまえと同じだよ。俺にとってみんなの命は何よりも大切だから」

「そっか……」

雅がふっと笑った。じわりと涙を滲ませる。

「わかってたけどね。何だか光ちゃん、あたしよりお兄ちゃんの血が濃いみたい。光ちゃんだけじゃなくて、礼也君も夕季もしいちゃんも、ひかるちゃんも……」

口には出さないものの常に雅が孤独を感じていたことは、光輔にもひしひしと伝わってきた。

「いつもそうだったんだ。あたしだけ、みんなと違ってたと思ってた……」

「そんなことない」

光輔の声にはっとなる雅。

光輔の顔にはすでに迷いはなかった。何をすべきかを知り、誰を守るのかをはっきりと心に刻みつけていた。

「俺、ちゃんとわかってるから、雅のこと。みんなだってきつとそうだ。きつとわかってる……」

雅が嬉しそうに笑った。

「頑張ってるね」

頷く光輔。

「光ちゃん、花火大会あさってだからね。あたし浴衣出したんだ。だから、必ず帰ってきてね……」

夕季と礼也が足を止める。

格納庫の前でメック・トルーパーのメンバーが勢ぞろいしていた。口火を切ったのは鳳だった。

「遅いぞ、おまえら。いつまで待たせる気だ！」

呆然となる二人。

駒田と南沢がつないだ。

「夕季、絶対に帰って来いよ」

「おまえがいなくなると鳳さんが実の娘を失うより悲しむからな」
「厳しい顔つきで二人を睨みつける鳳。口の両端を泡で一杯にしな
がらぶちまけた。」

「同じだ。悦子と夕季は顔も形もうり二つだ！ どっちが上だとか決められるわけがないだろう」

「おまえの体重八十キロもあるのか？」

駒田を見据えたまま、夕季がぶんぶんと首を振った。

「礼也」

礼也が顔を向ける。

木場の真剣なまなざしがあった。

「きっとこれが最後の戦いになるだろう。メックもエスも総力戦だ。行くな、とは言えん。だが身の危険を感じたら迷わずに離脱しろ。

我々が必ずおまえ達を生かす」

「今さら何言ってるんだって」

「む！……」

「俺達が逃げる時はメガルが消滅する時だろ。だったら逃げたって意味ねえし」

「それでも俺達はおまえらを逃がす！」

鳳の声に振り返る礼也と木場。

「明日全員死のうが、地球がなくなろうが、今日はおまえらを逃がす！ それがおまえ達の意地だ！」

「どんな意地だ、そりゃ……」

あきれたように礼也が笑う。

木場も同じように笑った。

「わからん。とにかく今日はそうする」

「おまえらがキが俺達より先に死ぬのは許さん。一日でも多く生きろ。その後は知らん。好きにしろ」

「おっさんキャラ変わったよな」いわく駒田。

「すでに酔っ払ってんじゃないか」いわく南沢。

鳳が二人を睨みつけた。

「おまえらは俺より先に死ね！」

「死ねって何だ！ 命令なのか！」

「そんな命令聞くか！ 俺にはかわいい子供がいる！ それに口や

かましい奥さんもいる！」

「知ったことか！ 俺達はアーミーマーだ！」

「知らねえって。ふざけんな、オッサン」

「何だよ、アーミーマーって」

「なんだ、知りてえのか、おまえら」

「いや、別に知りたくねえし」

「どうせ昭和のギャグかなんかだろ」

「黙って聞け！ いいか、アーミーマーってのはなあ……」

夕季の耳がピクリと反応する。

「おい、アメマーの……」

「バカ野郎！ アメマーじゃねえ、木場！」

これから死地へ向かおうとする集団であるはずなのに、悲壮感はまだで感じられなかった。弛緩ではない。己が運命をしっかりと受け止め、一步でも前進しようとする姿勢がそうさせたのだ。

桔平はずっとその様子を陰から見守っていた。

それぞれのうちに秘めた決意に気づき眉を寄せる。

つかつかと歩み寄り、笑顔で出迎える面々の一人一人と目を合わせた。

「てめえら、一人も死ぬんじゃねえぞ。死んだら俺が半殺しの目にあわせるからな。それと死ぬまでねちねち悪口攻撃だ」

通路をちらと気にし、振り返ることなく桔平はその場から去って行った。

南沢に顔を向ける駒田。

「……今のつつこんだ方がよかったのか？」

「……なんか中途半端すぎて正解がわからなかったな。キレがなかったってのか」

「んじゃ、いつもどおりだな……」

「そうだな。いつもどおりだ……」

「あいつがこんな祭りごとに参加しないなんておかしいな」鳳がいぶかしげに眉を寄せる。「腹でもこわしたのか？」

「変わってしまったのかな、お偉いさんになって」

南沢の何気ない呟きに反応したのは木場だった。

「そんなわけあるか。あいつはどんな華やかな場所にいても、堂々と胸を張って雑草でいられる男だ」 厳しい表情でその背中を見送り続ける。少しだけ口もとをゆるめた。「また何か悪いことでもたくらんでいるんだろう……」

雅は一人、静まり返った病院の待合室にいた。

表情を曇らせ携帯電話に語りかける。

「桔平さん。……雅です。……うん、私にも協力させてほしいの。うん、わかってる……」

そのまなざしは、窓の外、遠く空の彼方へと導かれていた。

第十話 『決戦!』 6 (後書き)

セリフまわりを中心に精度が悪そうなところをちょこちょこ直したりしています。ゆうてもあんま変わってないのでこそっと。効果がないのは当たり前、いじりすぎて一回転、さらにドン! なんてもザラです。

そんなのは可愛い方なのですが(?)、ちょい前にすごいミスが発覚してしまいました。現時点で露呈する類のものではありませんが、もしこの先があれば、やっちゃったかな、という感じのやつです。このマンガの舞台は当初埼玉県という設定でしたが作者都合により東京都ということになりましたのであしからず、というレベルの後出しです。

第一話から異世界に飛んじったり、登場人物全員アメリカ人にしちゃったり、あれ? なにこれ? あたし男になってる! とかいうほどスペクタクルな展開ではありませんが、もしそうだったらと考えると逆になんだか今よりはるかに面白そうだと思う失禁しそうです。

ですがそれはまた次回の講釈で……

第十話 『決戦!』 7

アスモデウスは地上からわずか数十メートルの高度を保ったまま、山凌市目ざして死の行軍を続けていた。触れるものすべてをなぎ倒し、焼き払い、率いる地獄の軍勢が支配するエリアに接近した軍や報道関連の航空機及び車両は、グンタイアリの襲撃をうけた獲物のように瞬時に食いつくされていった。

そこに集う無力な人々は、畏れ、哀しみ、祈りの中、互いを抱きしめることしかできない。

時を同じくして、アメリカ軍を中心とする多国籍軍が山凌市に集結しつつあった。

彼らのオペレーションは当初遠距離爆撃や長距離ミサイルでターゲットを陽動し、本土から約三千キロメートルの海洋上で核攻撃を施す算段だった。がしかし、雪だるま式に膨れ上がったインプの大群を掌握するに至り、日本を含む主要各国による特殊回線を通じての首脳会議が臨時に執り行われ、大量殺戮兵器の利用が満場一致の採択をもって承認されたのである。

その責任は彼らによって特定された危険思想国家にすべて押しつけられる。

そしてそれがもたらす結果は、アスモデウスの消滅の有無に関わらず、メガルと山凌市の壊滅、並びに特定国家の排除を意味していた。

「そろそろだな……」敵を正面から臨む海岸道路で礼也が呟く。並んで立つ竜王の胸部のハッチを開け、礼也と夕季が来たるべき時を待つ。

「俺がリクリュウで引きつけてやっから、おまえはスキ見て攻撃し

たらすぐに逃げろ」

「わかってる」

礼也の顔に注目しながら夕季が頷いた。

「前みたくビビッてフリーズしてんじゃねえって」

「……わかってる。……自分だってビビッてたくせに」

「はあっ！」

着信に気づき、夕季が携帯電話を取り出す。

忍からだった。

「もしもし……」

忍が退院してからは、二人は宿舎の同じ部屋で一緒に暮らしていた。

カーテンに手をかけ、窓からどんよりと曇った空を見上げながら、忍が涼しげに笑う。

「何か食べたいものある？ うん……。そんなものでいいの。わかった、いっぱい作っとくね。……うん。行ってきな。……。しっかりね、夕季。待ってるから……」

司令室で波野しぶきのスタンドマイクを取り上げ、桔平がメックの尻を蹴り上げる。

「いいか、一発でも核を使わせちゃったらおしまいだ。これから化け物が来るたびにカジュアル感覚でぶっ放す流れになるだろう。世界に至るところで、核保有国のすべてがだ。これじゃ核戦争となんら変わらねえ。人類滅んでしかるべし、だ。もう一度おさらいしてくぞ。奴らは現在陸地から一旦海上に出て、ここへ一直線に向かっている。メガルまでの到達時間は約二十分とこだ。多国籍軍の先陣を切るアメリカ軍の到着までおおよそ一時間弱。それまでにケリをつけるぞ。沿岸から二キロの距離まで奴を引きつけ、九十六箇所、に割り振ったポイントから特装車の遠距離コイルガンで順次攻撃し、奴をその場で足止めする。攻撃後は速やかに離脱して次のポイントへ移動だ。勝手にルート変えんじゃねえぞ。ダブったら即アウトだ。

とにかく安全に確実にスキをつくことを心がける。一人のミスは全員の失敗につながる。スタンドプレイは他の奴らの足を引っ張るだけだということをよく肝に銘じとけ。あとのことは現場の判断にゆだねる。頼んだぞ、鳳さん、木場。以上！」

マイクを置き、ふうと深く長い息を吐き出す。

「最後は竜王次第、か……」

無人の特設スペースを見上げた。

しぶきにちらりと目をやる。金髪の坊主頭がきらめいていた。

「ねえ、その頭……」

「似合いませんか？」

「いや……」正面の海岸線を見据える。「……俺も一度それやってみたいと思ってた」

「恐縮です」

「なんて言うの？」

「ゴールデン・ボールです」

「ゴールデン……。日本語にしない方がいいね」

「そうですか？ サッカーボールにたとえてヴィクトリーを呼び込もうという願いが込められているのですが」

「あ、そうなんだ」

「ではゴールデン・エッグにします」

「ああ、そっちのがいいかも」

「日本語で言うと、金玉子になりますね」

「いや、金の玉子だろ」

「金玉子です」

「……あ、そう。どうしてもゆずれないわけだ」

「はい。ジャックと豆の木に出てきたあれにたとえて、お金持ちになりたいという願いが込められています」

「あ、そうなんだ……。そういや俺も、昔はゴールデン・キックの格闘で恐れられたもんだけどな」

桔平がエア・シュートを放つ。

「日本語で言う和金蹴りですね」

「いや、直訳にもほどがあんだろ、波野ちゃん……」

「サッカー部だったんですか？」

「うんにゃ。中高と野球部だった」

「ではやっぱり金蹴りですね」

「いや、まあ、結果的にそうなったことはあったけどさ……。ま、普通の野郎ならドン引きするところだが、この柊桔平さんはそんなよそこらのおぼこいイケメンとは一味も二味も違うからな。ビクともしねえ。そんなところも全部ひくるめて女心をガッツリ受け止めるだけの度量がある」

「そうですか。さすがですね。男前です」

「おうよ。男前だ」

「これでイケメンだったら完璧ですね」

「……。うん……」

「……」

「……」

場内アナウンスの乱入中、無言で見つめ合う二人。

「……」

「……」

「キンタマ！」

「ひいっ！」

「……ゴ」

「……。今のはちよっぴりやばかった。かなりやばかった。いやいや、明らかにフェイントかけるとこ間違ってたんだろ、波野ちゃん」

「恐縮です」

「なんちゅうフリーダムな……」

「ヘケケケケケケ！」

「気持ち悪！ 何、その着信！」

「艶やかに笑い、頷く。「サタンローズです」

「……。……ロボ？」

「サターン、ローズー、です」

「いや、言い方は別にいいから……」

「恐縮です」

ヘケケケケケケ！

「……。あのさ、今日の……」

「秘密です」

「え！」

「勝負ですから」

「……あ、勝負なんだ」

「はい、勝負です」

「あそ。ふうん……」

「どこへ行かれるのですか？」

「ん？」しぶきに呼び止められ、意味ありげに笑う。「俺も勝負パ
ンツに履きかえてくる」

「ああ」ポンと手を叩く。「わかりました。例の赤いやつですね」

「いや、そういうの俺、持ってねえから……」

「それでキンタ……」ヘケケケケケケ！「マをぎゅっと引き締めよ
うというわけですね！」

「……。今普通に言っちゃったよね……」

「恐縮です」

携帯電話をしまう夕季を眺め、礼也がおもしろそうに笑った。

「おまえ、そんなものが好きだったのか？」

「……」むっとした表情で礼也を見上げる。

「案外、ガキっぽいんだな」

「うるさい」じろりと睨みつけた。

「俺や、てつきりおまえのことだからババンビとか言い出すんじゃない
ねえかと思ってたぜ」

「！」「くわと目を見開き、礼也を睨みつける。「誰に聞いた！」

「誰って、おまえよ……」

「わかった！ あいつだ、絶対！」眉間にしわを寄せ、ギリリと奥歯を噛みしめた。「桔平めっ！」

「いや、雅だろ、普通よ……」

「……」バツが悪そうに顔をそむけ小声を出す。「自分だってメロパンが好きなくせに」

「ああんだあ！」

突然礼也の表情が陰しくゆがむ。目をつり上げ、マシンガンのように吐き出した。

「ありゃ別格だろうが。トーナメントで言やあシードみてえなモンだったの。ここ一番って時にあれ食うと爆発的な力が湧いてくんの知らねえか！」

「知らない」

「ハンパねーぞ！ マジで。さっきも食ったばかりだって。おかげでメツチャクチャみなぎってんだっての。試しにおまえもやってみな、悪いこた言わねえから」

「いい。あれあまり好きじゃないから」

「んだと！ このクソガキ！」

「どっちが」

「やってらんねえわ、もうよ」壁パンチ。「ってえなっ！」

「……」横を向き、照れ臭そうに夕季がぼそりと告げる。「暇なら礼也もくれば」

「いや、やめとく」ぶすつと答え、それからやりと口もとをつり上げた。「おまえら姉妹は凶悪だからな。二人がかりで関節キメラれたらたまんねえ」

再び不機嫌な顔になる夕季。

「……。もう二度と誘わない」

「あっはっはっ！」おもしろそうに礼也が笑った。「何わけわかんねえこと言ってるんだかな、俺たちやよ。死ぬ確率のがたけえだろ、実際」

「……かもしれない」

「おいこら、普通、こんな時に縁起悪いこと言うな、とか言うんじゃないのか」

「……。何言ってるの、さっきから一人で」

「はあっ！ つまんねえ野郎だな。てめえはもう黙ってる！」

「……」無表情にぶすりと夕季。「みやちゃんに言えば」

「あのな。あいつがいじわるなの知ってんだろが」

「だから言った」

「てめえもたいがいだな。知ってたけどよ」

「……。ひねくれ者」

「んだと、てめえ！」

「礼也……」

「なんだ？」心配そうに自分を見つめている夕季に礼也が気づく。

「わかってるって。死んでたまるか。そうそう思い通りにはならねえよ」

「礼也！」

「本気にすんなって。あっはっは！」

気分を害し、夕季が口をへの字に曲げた。

「やっぱり折っとけばよかった……」

「え、何だって？」

「何でもない。行く」

「おう」

ハッチを閉じる二体。

空竜王が空高く舞い上がった。

スクリーンを隔て、邪悪な影が次第に形を整え近づきつつある。

全高六十メートルの異形が暗闇を従え、猛り狂う黒き海を割って礼也の視界に飛び込んできた。

雲のごとく立ちのぼり、波を起こし、土を掘り返すように、無数のインプの群がぼこぼこ湧き上がる。その身の丈は以前にも増して高く、大きく、それぞれが竜王と同サイズか上回るものばかりだった。

まなざしを正し、口もとをキッと結んで礼也が頷く。スクリーンに貼りつけた陵太郎の写真に目をやった。

「すぐそっち行くなって……」

竜王の格納庫に向かう光輔の前に一人の男が立ちはだかる。

大沼透だった。

「どこへ行くつもりだ？」

冷たい口調で大沼がたずねる。それに答えることもなく、光輔は先を急いだ。

大沼の声が後ろから追いかけてきた。

「柊さんから止められている。君を一人で行かせるな、とな。君は何をしに行く気だ。死ぬためか。それとも自分ならばあの化け物を倒せるとでも思っているのか」

立ち止まる光輔。振り向きもせずに大沼に告げた。

「そんな力、俺にはありませんよ」

「なら何故行く」

「夕季達の手助けをしたいだけです。何もできないかもしれない。でも少しでもみんなのために何かしたいんです」

「怖くないのか」

「怖いに決まってるでしょう。あいつらだって、きっとそうだ……」

「そうか……」重々しく頷き、表情を正した。「残念だがこのまま君を行かせるわけにはいかない」

「……」

「今トレーラーを用意させる。少しだけ待ってくれ」

大沼が笑った。

「心配するな。俺は柊さんの言ったことを守るだけだ。君を一人で行かせるな、そう聞いたただだからな。俺と一緒に行くのなら文句あるまい……」

海竜王のコクピットの中で精神統一を始める光輔。

活目するや、炎を宿したまなざしで海竜王の心魂を睨みつけた。

「今から俺がおまえを従える。無理やりにも従わせてみせる。あの化け物を倒すために。みんなを守るために……」
海竜王の内部が眩いばかりの光につつまれた。

第十話 『決戦!』 7 (後書き)

スカパーでK1甲子園を観ていて腑に落ちないジャッジが。もともとアンチ属性が強く、メジャーなものにかなり濃いフィルターをかける癖があるので、おそらくは公平な判定なのでしょう。がしかし、やはり自分的にはここでこの選手が早々に敗退するとテレビ的にまずいのかな、という大人の事情を勘ぐってしまいます。だとすればそういう負け方をした選手はあらかじめ、おまえは判定になったら絶対勝てないからKOだけを狙っていけ、とセコンドに言われてたりして。なるほど、そういった事情なら、そう言えば負けた選手の方がアグレッシブに戦っていたような気がしてさらに納得。

こんなことを言うと関西方面の人達にバッシングされそうですが、今度だけは内○に勝って欲しいです。その後で亀○が何十回防衛してもいいから、今回だけは勝たせてあげて。だってアンチから見ても明らかに○田の方が強そうだから……

また関係ない話で恐縮です。次回もこれに懲りずにお越し下さい。

第十話 『決戦!』 8

大空を斜めに切りつける疾風が、銀色のコアを持つ人形の群を大気ごと引き裂く。空竜王が駆け抜けた跡には、消滅した魔物達がとどまった空間だけが残った。鋭角に軌道を変え、点と点を結ぶように空竜王が空間を断裂させていく。暗雲立ち込める暗き天空のキャンバスは、見る見るうちに太陽の輝きと蒼穹によって光を取り戻していった。

返す刀で海を目ざす。

海面すれすれで上体を起こし、白銀の翼を大きく広げ加速を重ねた。衝撃波と巻き上げた水しぶきで荒れ狂う海流を真つ二つ割りながら、空竜王が青くゆらめく群体目がけて突進する。うねるように水面を切りつけると、数え切れないコアが弾け飛び、邪悪な光の消え失せた表層には、また鮮やかなマリンブルーが蘇った。

手当たり次第に繰り出される拳撃で周囲の敵を一蹴し、陸竜王が両足で大地に根を張る。地球を砕かんばかりの勢いで拳を突き立てると、地表からの衝撃により、陸竜王を中心に並べられたドミノが円を押し広げるがごとく、黒インプの集団は消滅していった。

我先と土へ還る赤き一つ目の異形達。

密集する群塊目がけてナックル・ガードを撃ち放つや、その軌跡上に存在するモノらは跡形もなく消えてなくなった。

もう片方の拳も繰り出し、両腕を引き戻すタイミングでワイヤーに導かれた炎の塊が周辺の魔物達をなぎ払う。距離を縮め、時には交差し、時には接触し、激しく火花を散らしながら触れる物すべてを消滅させるその一連の攻撃は、さながらアメリカン・クラッカーのようでもあった。

大地を覆いつくした黒き絨毯は、またたく間に陸竜王の視界から

消え去り、再び緑と土が陽の光に照らし出される。

水面を覆った油の層を器の外へと追いやるように、アルコールがスチロールを溶かすように、それらは人類の支配するエリアから次々と押し戻されていった。

桔平は無人の通路を足早に通り返けようとしていた。このまま進めば進藤あさみのいる別室へ到達する。

光の射し込まぬ通路で物陰からじっと息をひそめ、その様子をうかがう人影があった。

桔平の位置からは確認できない。

が、ふいに足を止め、桔平はその人影に向かって投げかけたのである。

「出てこいよ。丸見えだぜ」

通路の反対側の角で待ち受ける影の主が戸惑いを見せる。そつと下ろした拳銃の存在を、桔平は見抜いていたのだ。その銃口が己の背中に向けられていたことも。

「もうそろそろいいんじゃないか」振り返り、にやりとする。「ミスター」

すると影の正体、ウラジミル・カラシニコフがのそつと巨軀を露にした。

二体の竜王に負けじとメックとエスも総攻撃を開始した。トレラーに懸架されたロングレンジのコイルガンを遠方から撃っては退く。陸や空のインプ達が穴を穿つようにその空間から消滅していった。

それでもアスモデウスの外皮には傷一つつけることすらかなわず、竜王の援護目的で攪乱するのが精一杯だった。

その時、海上に浮遊しながらとどまり続けるアスモデウスの、全身から浮き上がる数百にもものぼる目が一斉に光を放つ。

爆発でも発光でもない光の照射は、触れるものを容赦なく蝕んで

いった。

太陽のような輝きに、木場が特殊サングラスの上から手をかざす。

「……何だ、これは」顔をしかめ、こめかみから汗が流れ落ちた。

「話にならない……」

地獄の劫火が周辺数キロメートルを瞬時に炎上させた。木々を、民家を、放置された車両を、打ち上げられた船舶を、そこに配置されたものすべてを否応なく紅蓮の炎に巻き込んでいく。

豪炎の合間を縫うように、陸竜王が踊り出た。

雑魚を蹴散らし、アスモデウスへの道を一直線に切り開く。

数百メートルの距離を隔てても、その腐臭と熱気は顔をそむけたくなるほど生々しく伝わってきた。生物としての動、無機物としての静、兵器としての圧、この世にあるものの虚と実をすべてあわせ持ち、また無であるかのようにそこにただ存在し続ける。言葉を交えなくとも触れずとも、向かい合うだけでうかがい得る怒り。己への怒り。他者への怒り。それを創り上げてしまったことへの怒り。そのわずかな対峙で理解し合えたのは、互いが相容れぬモノ同士であるということだけだった。

「どう崩す……」

両足を開き正拳突きのかまえて陸竜王がナックル・ガードを撃ち放つ。

鼻先をかすめ即座に引き戻されたそれを宣戦布告として受け入れた悪意の塊は、陸竜王へ怒りの咆哮を叩きつけた。

空から舞い降りる一陣の風がアスモデウスの視界の隅から斜めに切り抜ける。

いくつかの目と口が潰れ、歯車が激しく軋むような悲鳴とともにどす黒い体液を放出した。

追いつがる弾幕を空竜王が全速力で振り切る。

降りかかる影にアスモデウスが数知れぬ視線を向けた。

太陽を背に、陸竜王が空高く跳び上がっていた。

拳を肩の後ろまで振りかぶり、勢いもろとも股間でうごめく竜の

側頭部を打ちつけると、その片側の目玉が碎けて弾け飛ぶ。

悶絶する竜にはたかれるベクトルで後方へ跳び、空中で一回転しながら陸竜王が再び正面へ降り立った。

同じくして、赤く黒くそして毒々しい巨大なコウモリの羽を広げ、狂ったようにアスモデウスが突進を開始した。

全身のダクトから圧縮空気を吐き出し、決して退路を選ばず、陸竜王は砂地を蹴ってそれを迎え撃つ。

波打ち際で二つの激しい憎悪がぶつかり合った。
グガガガガ！

大口を開き陸竜王を噛み砕こうとする竜の顎。それよりも一步早く、陸竜王はその口内へと滑り抜けていた。

「礼也ーっ！」夕季の絶叫。

陸竜王を丸飲みし、口を閉ざす竜の頭。

しかし礼也の心に焦りはなかった。すべてが計算どおりだったのだから。

「思った以上にあっちいな……」竜の舌の上で踏みとどまり、顔中あぶら汗にまみれ、歯を食いしばりながらも笑い続ける礼也。不安を認めたくないためか、誰にも届かない言葉をせわしくつなぐ。「ま、これっくらい、まだまだ序の口だな！」

膝をつき左腕で上顎を支えながら、礼也が右の拳を喉の奥目に向けて渾身の力で撃ち放つ。それを引き戻すことなく、陸竜王は全身を真紅へと変貌させた。

竜の口内で小爆発が起き、喉の内側が沸き立つ熱気とともに焼かれる。百を超えるアスモデウスの口が一斉に悲鳴をあげた。

ギラリと光る牛と羊の両眼。仮面の咆哮とともにそれまで以上の膂力で陸竜王を噛み砕こうとした。

「礼也っ、逃げて！」

「どうやって、逃げろっての……」

夕季の叫び声を冷静に受け止める礼也。かすかに焦りの色が浮かび上がる。それでも今にも押しつぶされようとするその時まで、取

り憑かれたように笑い続けた。

「真っ赤なカブトムシ、なめんじゃねえって！」

「くっ！」空竜王のコクピットの中、感応スティックを握りしめ、夕季が歯がみする。無限のシャワーの前にアスモデウスに近づくことすらできない。

遠方ではメック・トルーパーの車両もすべて足止めされていた。それ以上近づけば確実に死の領域に足を踏み入れることになるためだった。

『木場』

鳳からの無線を木場が受ける。

「わかってている……」車内ディスプレイを凝視し、ごくりと生唾を飲み込んだ。「俺が行く」

『待て、木場！』

「俺が駄目なら、次は頼む」

『おい、こら、木場！ 待て！……』

通話を終え、覚悟を決めた表情で木場が特殊ゴーグルを装着した。その時、竜の眼前に水柱が立ちはだかる。

海面を突き抜けて飛び上がった黒きシルエットは、陽の光にきらめく飛沫を従えながら、銀色のクロード竜の隻眼を貫いた。

「……」

絶句し立ちつくす木場へ、鳳が問いかける。

『おい、木場、あれは……』

その勇姿を見据え、木場が頷いた。

「海竜王だ……」

司令部別室へと続く通路で桔平とカラシニコフが対峙する。

サングラス越しに読み取れるほどの驚きを露呈するカラシニコフへ、桔平は意味ありげな笑みを投げかけた。

「いいのかよ、こんなところで油売って」

するとカラシニコフは平静を装いながらサングラスを黒スーツの

胸ポケットへと収納した。桔平よりも十以上は歳が上であろうか。落ち着いた表情で目の前の若き日本人を見据える。

「あなたは司令室から出るなという命令を受けていたはずではないのか」

流ちような日本語で告げる。そのトーンも落ち着き払っていた。歳相応と言うよりは、修羅場をくぐり抜けてきた歴戦のつわもののみが持ちうる深みと表現した方がしっくりくる。

「司令官殿に急用があつてな」

「どんな用件だ。私が伝えておこう」

「いや、いい。直接交渉する」腕時計を差し向ける。「電池の交換で千円も取られちゃった。経費で落としたいんだが、あんたじゃ無理だろ、そんな高度なかけひき」

無然と自分を見続けるカラシニコフに桔平はふっと笑ってみせた。

「そんなくだらん理由でここを通すわけにはいかん」

「理由なんざどうでもいいだろ。あんたにとって問題なのは、俺が予定より早くここに来ちゃったってことだろうからな」

「……」

「進藤あさみはいるか？」

「……」

「いや、まだ生きているかって聞いた方がいいのか？」

「……」

突然カラシニコフが桔平につかみかかる。その体格からは想像もできない素早い動きだった。

間一髪でかわし、桔平が命からがら口笛を吹き鳴らす。

「おっと！ いきなりかよ」

「私は何人だろうとここを通すなと司令から命令を受けている。たとえ副司令の君でもだ」

「だからってそのタックルはまずいだろ。確実に人死に出るぜ」ぐるりと体を返し、右手で桔平の右手首をつかむ。左腕を蛇のように這わせ、肩まで一気に絡みついた。

「く！」

不敵なカラシニコフの顔がかすかに笑ったように見えた。

「ち、あと少しだったのに」

すさまじい熱気の中、朦朧とした意識の渦にのまれかけた礼也が無理やり笑みを浮かべる。

「やっぱ、見積もり甘かったか……」

その時、背後から射し込む光の眩しさに目を細め振り返った。

「……んだ？」

『礼也！』

夕季の叫びがつかの間の炎を呼び戻す。

「どうした、夕季。何があった」

『光輔……』

「何！」

両腕で竜の口を押し広げる、妖しく輝く琥珀色の光が礼也の視線をとらえる。

礼也は見た。

太陽の光を背負った漆黒の巨人のシルエットを。

礼也は聞いた。

大地を、空を、海を揺るがす王者の雄叫びを。

「礼也ーっ！ 大丈夫かーっ！」

闇を照らす一對の輝きが、今混沌たるこの世界に光をもたらそうとしていた。

第十話 『決戦!』 8 (後書き)

田中マー君がカッコイイと思います。理由は、実力があってなお、今時イケメンじゃないから。ハニカム王子も嫌いではありませんが、韓流スマイルの似合わないマー君の方をより応援したくなります。天狗になってしまうと痛々しい限りですが。今年は監督がアレな人なんで、来年こそは優勝投手になってほしいっす。

とかゆつという、自分が作り出すキャラクターてのは、やっぱりイケメンとか美少女ばっかになってしまるのは、持たざる者のサガなのでしょう。ちなみに女子アスリートは美少女ばかりでも全然気になりません。

なんでこんなこと言い出したかと言うと、風邪引いて思考回路がまともじゃないからです。熱で大事な部分がオカされているからです。そんな、男子ビーチバレーという競技自体が本当に必要あるのかとか、なんとかレーサーがチート扱いになって全身の十パーセント以上を覆う競泳水着の着用が禁止になればいいとか(女子だけ)、ブルマがもつとも体操着として機能的にも健康面でも優れたものであることが全世界的に証明されろとか(当然女子だけ)、女子バレーのユニフォームがブルマしか認められなくなれとか、そんなちっとも考えたことありません。不純すぎます。そんなこと言うてるのは友人の変態カメラマンだけです。でも競泳で日本人の選手しか勝てないような状況になったら、全身水着マジで禁止になりそうな気はしますね。

壊れかけですからなにとぞお目こぼしを……

第十話 『決戦!』 9

蒼穹を切り裂きながらアスモデウスの頭上を飛び続ける空竜王。執拗につきまとう全包围攻撃の前に、夕季はなす術がなかった。

眼下では竜の口の中へ膝から割り込もうと奮闘する海竜王の姿が映る。

自身を傷つけることのないアスモデウスの怒涛の攻撃が、海竜王を駆逐すべく覆い被さろうとしていた。

「光輔っ!」

一旦射程圏外まで飛び上がり、夕季が神経を研ぎ澄ませる。雑念を振り払うように、ビシッ、ビシッと縦軸を中心とするロールを重ね、集中力を高め続けた。鷹の目と化した視覚でフィールドの隅から隅までを網羅し、鮮明に映し出す。攻撃の一つ一つを目で追いつとらえ、常人では到底処理し切れぬほどの膨大な情報量を竜王のサポートを得てすべて脳漿へ刻みつけた。

引き抜かれるような急激な降下に移るや、死地に飛び込み、一撃、二撃とやり過ぎす。横滑りとバレルロールを複雑に組み合わせ、カミソリ一枚分のすき間を縫うがごとく、空竜王は間隙をくぐり抜けていった。

もしその動きを目で追うことができたのなら、誰もが瞬間移動を思い浮かべたに違いない。時おりかすめる飛沫だけがかすかに表層をなめていったが、矢継ぎ早に押し寄せる波状攻撃を見切り、紙一重でかわし続けた。

目まぐるしく視野中を駆けめぐる超視覚が、無限とさえ思えるパターンの中に不確定な一つの法則を導き出す。

数十手先、空竜王と海竜王を結ぶ直線に、ほんの刹那、何一つ妨げるものがないルートが浮かび上がったのである。

その塵のようなチャンスを夕季は見逃さなかった。

緩やかに流れる時空の中で、囁くようなカウントダウンが始まる。

……

三……

二……

一！

白銀の輝きを放ち、影すら追いつかぬほどのスピードで空竜王が降下していく。翼を焦がし、身を削りながらも、一直線に竜の鼻の面に降り立ち、取りついた。片膝をついたその真下には、竜の口腔を押し広げんとする海竜王の姿があった。

激しくのたうち回る竜から振り落とされぬよう、足もとへ両腕のブレードをアンカーよろしく深く突き立てる。間髪入れず円錐を描くように大きく翼を広げ、全身シールドと化した空竜王が上方から海竜王を覆い隠した。

「く！」

歯を食いしばり、ひたすら夕季は未曾有の集中砲火を受け止め続けた。幾重もの悪辣な攻撃をともに浴び、しだいに傘状に展開した翼が赤黒く変色し始める。徐々に空竜王の外殻が解け始めていた。『夕季！』

「光輔、早く」灼熱のコクピット内で唇を噛みしめ、夕季が呻くように声を押し出す。「長くはもたない」

『……。わかった！』

光輔がまなざしに力を込める。大気を引き裂く絶叫とともに、ミシミシと音を立て、竜の口が海竜王の身長分ほども開いていった。

「ち！」

カラシニコフの速攻の前に桔平は防戦一方だった。

右腕をとられ、圧力に負け片膝をつく。

「さすがだな、かたがドラグノフそっくりだ」関節を決められ、苦悶の表情のままにやりと笑ってみせる。「切れは数段劣るがな」

「……。奴にシステムを教えたのは私だ」

「どおりで」

「……」

「彼に教わっていたら、あんたももちっとましになってただろうになって……」

「時間稼ぎはそれくらいにしろ」

「！」

体重をかけるカラシニコフに圧迫され、桔平の上半身が前方向へ沈み出す。そのまま肩を砕き折ろうと、カラシニコフが力を加えた。が、その直後、元ロシア特殊部隊の英雄は信じがたい事実遭遇することとなった。

勝利を過信することもなく、ただ作業の一環として眼前の敵へとどめを刺しにかかる。その時、予想を上回るタイミングで桔平の体が深く沈み込んだのだ。

左手を床へつき、右膝を支点に桔平が右半身を内側へねじ入れる。カラシニコフに押される勢いさえも利用し、不自然な体制から強引に右肩を引き抜いたのだった。

ゴリツという鈍い音とともに、桔平がひるがえる。

不測の事態にも、訓練を重ねたエリート兵の肉体は咄嗟に反応したものの、桔平のスピードはそれすらも凌駕するものだった。

左の掌底をカラシニコフの眉間へ突き入れる。ガードのため死角ができたと見るや、桔平は躊躇なく股間を蹴り上げた。

カラシニコフの表情にわずかな戸惑いが浮き上がる。だが苦痛をものともせずに進出した偉丈夫を待ち受けていたのは、凄まじい速さと勢いで到来する、悪夢のようなバック・ブローだった。

桔平の裏拳が精悍なカラシニコフの顔面にめり込む。鼻先から上唇へかけて陥没させた巨躯がぐらりと揺れた。

右腕をぶら下げた状態で、桔平がカラシニコフの膝を駆け上がる。左足のつま先を鳩尾へ挟り込ませ、それを踏み台にしてさらに跳び上がった。

桔平の放った右膝蹴りがカラシニコフの顎を砕き割る。

それからわずかなタイムラグの後、カラシニコフは血を吐きながら艶やかで硬質な床へと倒れ伏していった。

肩で息をしながら、動かなくなったカラシニコフを桔平が静かに見下ろす。

「システムか……。あれとイスラエルのだけは二度とごめんだ」

三たびゴールデン・キックが炸裂したのは、カラシニコフの取り出した拳銃を通路の反対側まで蹴り飛ばした時だった。

「ぐう……」

冷たい床に這いつくばったまま、カラシニコフが粉々に砕けた右手をわなわなと震わせる。

音もなく背後へと歩み寄り、桔平がカラシニコフの左腕を捻り上げた。

カラシニコフを拘束したまま、だらりと垂れ下がった右腕に目をやる。

「やっそこ傷も治ったってのに、夕季の野郎……」

壁際まで誘導し、コンクリートの柱へ己の右肩を力任せに打ち当てた。

「うがあっ！」ゴリツという耳障りな音がして、桔平が顔をしかめる。痺れの残る右手を何度も握ったり開いたりした。「これじゃ女子高生に脱臼させられたみてえじゃねえか、くそっ！」

八つ当たりのように桔平がカラシニコフの背中を力任せに蹴りつけた。

無防備状態で頭から崩れ落ち、再び床へと叩きつけられるカラシニコフ。ざっくり額が割れ、鮮血が流れ出した。苦痛にゆがむその表情からは相当なダメージが見てとれた。

「悪いな。今、いっぱいいいだよ。手加減している余裕ねえんだ」カラシニコフの左肩をガッチリ決めたまま、まだ握力の戻らない右腕を恨めしそうに眺める。「いまいち力、入んねえし」

「いつからだ」

「んあ？ そりゃ焼き肉屋で……」

「いつから私を疑っていた」

「……。疑ってたわけじゃねえ」

「では何故」

「誰が悪党なのかを最初から知っていたただけだ……」

『礼也、早く逃げろっ！』

「光、輔……」 光輔の絶叫を受け、ほうけたように眩き、礼也がわずかに表情を和らげる。「なんでてめえは毎度毎度そういうおいしい登場しやがる。天然か？ うらやましいって……」

『礼也、早くしろ。夕季がもたない！』

「んだと！」

頭上に衝撃を感じ、顔を向ける。上顎の上で起きているそれを、礼也は容易に想像することができた。

「ざけんな、んなろーっ！」

片腕でメガトン級のプレスをしをしながら、もう片方のナックル・ガードを口外へと射出する。海竜王の脇を抜けていったそれは、風を切りながら街道の落石防止用の壁面へと突き刺さり、内部の鉄筋と融合して、カメレオンが舌を引き戻すように陸竜王を外の世界へと引き抜いていった。側面にカエルのように取りつき、跳ね返る。遅れて訪れた反動でコンクリートの壁が崩壊した。その勢いを維持したまま再び竜の口もと目がけて跳びかかっていた。

時を同じくして、海竜王をくわえたままアスモデウスが空へと飛び上がる。

振り落とされ落下する空竜王を抱きかかえ、陸竜王が海面を蹴り上げた。

「夕季、大丈夫か！」

『……』

「夕季！ おい、どうした、返事しやがれて！」

『……』

「おい、夕季！ 夕季！」

『……。……。暑い』

「……。へっ、ざまあみやがれ」

『誰のせいでこんな目にあったと……。』

「知るかっ。メロンパン食つとかねえからだ」

『……。すごく頭が悪そう』

「んだあっ！」

礼也がほっと胸を撫で下ろす。すぐに表情を引き締め、アスモデウスへ振り返った。

「光輔ーっ！」

巨大で邪悪な影が地上へ降り立とうとしていた。

第十話 『決戦!』 9 (後書き)

以前から不思議に思っていました。ロボットアニメなんかで実行部隊の一兵士が司令室やブリッジを自由に出入りしたりするのを。唯一無二のエース・パイロットは別格なのでともかく、特殊な状況下であることを考慮しても、拾われたばかりの少年達が当たり前のようにベテランクルー達に入り混じっちゃうのっておかしいような。零細企業ならありえますが、工場長やバイトの学生が社長室に入りびたるようなものじゃないかと。どこ行っても機密バリバリだし、食堂の皿洗いかしかやらせらんねーしょ。

もともと下品な男が司令室にいるというイメージはできていました。不自然ですが、任命ならば許される範囲かな、と。市長や知事がブレインとして助役を任命する感覚ですかね。

何やら破綻しまくっていますが、またお読みいただきましてありがとうございます。

第十話 『決戦!』 10

「残念だったな。筋書き通りになんなくって」

カラシニコフを組み伏せたまま、桔平が意味ありげに笑ってみせた。

「……。何の話だ」

「とぼけんたって」

カラシニコフの心の内を見透かすように語り始める。

「切迫した状況下でガーディアン封印解除を求めて司令官のもとへと訪れた副司令官、つまり俺は、それが無理だとわかると力づくで司令官から解除キーを奪い取ろうとした。キーを奪われまいと抵抗した司令官は持っていた自分の拳銃で副司令、めんどくせえな、俺を殺害しようとしたが、逆に銃を奪い取られて俺に殺されるハメになった。銃声を聞いて駆けつけた他の奴らが見たのは、ケガを負いながらも俺の息の根を止め、傷つきのうち回るあんたの姿だった。どさくさに紛れて解除キーは紛失。あんたの証言から、こんな危険な連中にメガルの実権を任しておけねえってな感じで、それ以降のイニシアチブはガーディアンの管理も含めて全部ロシア支部が握る流れになる。そんなところだろ、ロシアの描いた筋書きは。多少強引だが、力技で押し切れないシナリオでもない。ただし、いくつかの計算違いがなけりゃだかな」

「……」

「一つはアスモデウスの動きが予定より早かったこと。できれば多国籍軍の作戦が展開されてからのどさくさに便乗したかったはずだ。とは言え、計画を遂行させるためにはこの機をおいて他にない。解除キーを持つ人物が進藤あさみであることをつきとめたまではさすがつてとこだが、まだそれが何なのか、どこにあるのかまでは特定

できなかっただろうしな」

「……。我々の情報収集能力を侮っているようだな。そんなことなどどつくに……」

「嘘つけよ。だから進藤には手が出せなかったんだろうが」

「……」

「そんなこんなで俺を利用しようと思いついたんだろう。進藤あさみが俺を遠ざけようとしていることはわかっていたが、それでもあんたは俺が必ずやってくると思っていた。そこまではドンピシャだ」

「……。ならば……」

「あんたは最大のミスをおかした。ミスリードしてやつに引っかけっちまったんだ。いいセンいつてただけだな。選択と行動は同じだが理由が違う。進藤あさみが俺を呼ばなかったのは俺を恐れていたからじゃない。俺があんたにハメられることがわかっていただけだろう。あんた、俺とあいつが反目し合っていることを額面どおり受け取っちまったようだな。ま、何言ってるのかよくわかんねえだろうがよ。正直、言ってる俺にもよく理解できねえ。なんせ、俺とあいつはぐちゃぐちゃのどろどろだからな」

「……。殺せ」

覚悟を決めた様子でカラシニコフがぐもった声を押し出した。表情一つ変えずに桔平が受けて答える。

「殺しゃしねえよ。あんたにはメッセンジャーになってもらわなきゃなんねえからな」

桔平がカラシニコフの肩へ膝を押し当てる。口をへの字に結び、力を込めるや、ゴギツと鈍い音が辺りに響いた。

が、カラシニコフもまた、わずかに眉を寄せただけで呻き声一つもらさずにそれを受け止めた。

「あんたの役目は終わりだ。とっとと国に帰んな」

「甘いな」

「あん？」

「腕一本、足一本あれば、私は君の命を狙うことを諦めないだろう。」

この命のある限り」

「そんなぐしゃぐしゃの手でか？」

「愚問だ」

「……」あきれたように桔平が鼻で笑う。「だったら、今度は左の肩はずして見せてやろうか。こっちは右みたいにクセがついてねえから、うまくはまるかわかんねえけどな」

「……」

「そんな次は足、最後は顎の骨か。こいつはつれえな。肉が食えなくなる。だがな、何度来たっておんなじだ」桔平の語気に殺気が宿る。「あんたじゃ俺を殺すことはできない」

どの戦場においても決して臆したことがなかったカラシニコフの鋼の心が、背中越しに薄ら寒いものを感じ取った。

「これ以上の野暮はしたくない。察してくれ」

「……」

「無茶やりすぎて軸がずれまくりや、風野派の連中だって快く思わねえだろ。あんたらの忠誠はよくわかった。だがよその国の出る幕じゃねえ。こっちはこっちでやらせてもらう。そう、あっちのお偉方に言っと思ってくれ」

「……。貴様、本当にそれでいいと思っているのか」

「何がだ」

「とぼけるな。貴様にもわかっているはずだ。このままでは遠からずメガルは崩壊する。今のプロフェッサーはかつての彼ではない。我々の崇拜した理想もビジョンもない。このままでは、いずれ世界の破滅を呼び込むだけだ」

「……」カラシニコフを解放し、桔平が遠くを見つめるまなざしになった。「なこた、百も承知だ」

「……」

「早く医者行った方がいい。肩よか内蔵の方がヤバそうだ」

のっそりとカラシニコフが立ち上がる。左肩を押さえ、桔平と向き合うことを避けるように顔をそむけた。

「君の目的は何だ」

よろよろと歩き出したカラシニコフを直視できずに、桔平も冷え切ったコンクリートの壁へと目をやる。

「あんたらと同じだ。そう伝えといてくれ」

「………承知した」

海竜王を引き連れたまま、アスモデウスは海岸へ降り立とうとしていた。

引きずる片足を砂地にからめ、両腕を押し出すように海竜王が竜の口を突き放す。両足で二本の長い線を描き、湿った黒砂をめくり上げながら、アスモデウスと真正面から向かい合う構図で踏み止まった。

巨大な槍を振り下ろすアスモデウスの姿を確認し、空竜王を地に降ろした礼也がロケットのようにダッシュした。

「くそっ！」

「光輔ー、逃げてーっ！」夕季の悲痛な叫び。

だが海竜王はそこから逃げ出すことなく、クロスさせた両腕でアスモデウスの槍を受け止めようとしたのだ。

「やめろ、光輔！」

比較も馬鹿らしいほどの質量と膨大なエネルギーに打ち伏せられ、海竜王の全身が波打ち寄せる砂面にめり込んでいく。

「くそ！」

「光輔……」

最悪の結末にうちひしがれる礼也と夕季。が、その後、二人は再び信じられない光景を目の当たりにすることとなる。

地面から先だけが突き出た二本の爪が、巨大な槍を押し上げたのだ。

ぬめりときらめく黒い影が、その両眼に妖しげな輝きを伴いながら、こともなげに立ち上がったのである。

「ふざけんな、てめえは！」

グンと伸び上がり、五十メートルもの跳躍すらこともなげに、赤黒い砲弾と化した陸竜王が無表情で巨大な仮面を殴りつける。そのインパクトがアスモデウスの巨体をぐらりとよろめかせた。

地面から抜け出し、大きく振り上げた超硬質のクローを竜の眉間に突き立てる海竜王。

二体の竜王の渾身の一撃を受け、けたたましい絶叫を撒き散らし、アスモデウスが初めて人類の前に退いた。

「てめ、何パワーアップしてやがんだ！」

海竜王を見やり礼也が吐き捨てる。

すると嬉しそうに光輔が笑った。

「もたもたしていられないんだよ。あさって雅と花火大会に行く約束したからさ。礼也も行く？」

「行くかっての、んなモン！」

アスモデウスにとつては槍の先ほどのサイズでしかない、まるでおもちゃのような小さな二つの人がたを、数百の邪悪な視線が睨みつける。透明な旗を揺らめかせ、それまでの無防備なかまえから鉄壁の防御へと移行した。

疲れはてたように嘆息し、礼也が自嘲気味に垂れ流す。

「ったく、やってらんねえって。まるきりかなわねえ。体はズタボロ、心は折れまくりだ。でもよ」そのまなざしが強い光を放つ。「なんでだか、まったく負ける気がしねえ。一ミリもだ」

「ははっ……」

「こりゃ、ノッかってくつかねえだろ」

凜とした面差しで光輔が頷く。

それを受け、礼也がおもしろそうに笑った。

「うっし！　いくって！」

「おっし！」

決して振り返ることもなく、並び立つ二人の連係攻撃が炸裂した。

第十話 『決戦!』 10 (後書き)

あいかわらずの細切れ展開です。スピード感の出るカット割りを狙ってみましたですが、なんだか慌しいだけになってしまいました。これまで自分なりにセンテンスごとにアクセントとかつけてたつもりですが、この書き方だと前後との差別化がほとんど出来ていないような気がします。いわゆる、二、三回とばしても全然大丈夫、という流れです。今まさに○ンピースの連載がそんな感じで、毎週読んでいても何が何やらよくわからないのですが(個人的についていけないだけ……)、マン喫とかでまとめて読めば間違いなく面白いです。ドラゴン・ボールとかも連載当時はつねにイラッとしながら読んでいました。そんなスケール違いを引き合いに出してどうすんだってことです。痛、イタタタ……

第十話 『決戦!』 11

司令官専用の特別室に足を踏み入れる桔平。

そこに風野の姿はなく、一人あさみが机へ向かいディスプレイの様子をじっとうかがっていた。

「よう」

「……。何か」

「探しモンを届けにきたんだがよ」

右肩を押さえ、拳銃を差し出す。カラシニコフから取り上げたあさみの物だった。

「そう。よく見つけたわね」

「まあな。引出しの奥に引っかかってやがった。お袋が掃除してて……」

「用が済んだのなら早く持ち場に戻りなさい」

「戻るさ。おまえがガーディアン封印さえ解いてくれたらな」

「何を言っているのかわからないわ。私に言うより、直接博士と交渉したらどう？」

「ずっとぼけんのもいい加減にしとけ」

「……」

「今しかないんだ。プログラムを倒すには、今、ガーディアンを投入するしかない」

「……。残念ながら、ご期待にそえそうもないわ」

「だったら、力づくでもそってもらうだけだ」

「そう。ならば……」机上の拳銃を手に取り、銃口を桔平へと向ける。「こうするしかないわね」

「俺が弾を抜いたとは考えなかったのか？」

「抜かないわ」じっと桔平を見据え、その瞳に悲しみの色をたたえ

る。「あなたは抜かない。私がこうすることを知っていたとしても」
「だったら話は早い」左腕から時計を取り外した。「二つに一つだ」
「無駄よ」苦痛にゆがむ表情で、それでも淡々とあさみが告げる。
「私はあれの封印は解かない。何があっても」

「……」

「ガーディアンを解き放てば取り返しのつかないことになる。この世界が悲しみにつつまれる。それだけは避けなければならない」
もはや含むような笑みも氷の壁もない。表情に憂いを宿し、心からの言葉で桔平と向かい合っていた。

「おまえは間違っている。自分でもわかっているんじゃないのか……」

「私は間違っていない！」

あさみが感情を露にする。

それは誰も目にしたことがない姿だった。ただ一人、桔平を除いては。

「あの男が何をしたのかわかっているの！ あの男は……」

「己の野望のためにおまえの家族を殺した、か」

「！」

言葉を失うあさみ。哀れみを帯びたまなざしを向け続ける桔平から目が離せなかった。

「メガル文明の発見者にしてメガル・プロジェクトの創始者でもある樹神博士は、そのすべての実権を盟友であるおまえの父親、進藤教授へ託す旨を記して息を引き取った。おそらくないのはプロジェクト旗揚げ当初からの主要メンバーであり、樹神博士に粉骨碎身つくしてきた風野博士だ。もとより名誉を独り占めするつもりだった博士は、自分の預かり知らぬところで樹神博士の意志を引き継いだ進藤教授が邪魔になった。だから同行していたおまえの兄さんもろとも、彼らを砦埜島で事故に見せかけて殺した。そう言いたいんだろう」

「……」

「たとえそれが真実だとしても、博士は今の世界に必要な人間だ。おまえ達と同じ必要悪だ。どんなにびつな形であれ、現状のパワーバランスが崩れればこの世界の破滅は必至だろう。復讐をしたければ勝手にすればいい。だが私怨で世界を滅ぼす気か。おまえと同じ悲しみを世界中の人間に押しつけるつもりか。それじゃ何も変わらない」

「違う！ 世界を滅ぼすのは竜王よ。あの男のエゴで世界が滅ぶ。竜王さえいなくなれば、アスモデウスはもとの場所へ還るはず」

目を血走らせ懸命に訴えかけるあさみ。それを静かに眺め、桔平はかぶりを振った。

「還らない。おまえは火刈に騙されている。奴らの目的はメガリウムだ。人類を絶望と破滅に導く狂気の力がほしくて、おまえを利用してゐるにすぎない。あいつは独裁者だ。この国を自分の思い通りにすることしか考えていない。いつかおまえも切り捨てられる。尾藤のようにな」

「言いたいことはそれだけ」

「……」

あさみの目が据わる。すでに冷静さを取り戻していた。

桔平の眉間をポイントし、絶縁状をつきつける。

「残念ね。あなたまであの男の思想に感化されていたなんて」

「撃ちたきゃ撃て」

「！」

「俺には何が正しくて、何が間違っているのかわからない。だが、いい加減うんざりしてきた。このままおまえがボロボロになってのたうち回る姿を見続けるくらいなら、ここですっぱり断ち切るのも悪い選択じゃない」

「……今さらあなたの命一つで、私の心が動くとも思っているの」「そいつは俺の知るところじゃない。もしおまえがそれで変われるのならまだ救いがある。変わらなければ、木場が俺の後を引き継ぐだろう。鳳さんや夕季や光輔達もな」

「……。あなたが死ねば、彼らは私を疑う。私を引きずり下ろそうと本気で立ち向かってくる。最後の一人になるまで。そう言いたいのか？」

「そんなとこだ」

「私がそんな脅しに屈するとても……」

「耐え切れねえよ、おまえじゃ」

「……」

「おまえはそんなに強くない。そんなこと、自分だってわかってんだろ」

「……私にはすでに選択肢はないと言いたいようね」

「まあな。どっちにしろ淋しい想いはさせねえ。腐れ縁だからな。俺が最後までつき合ってやる。とりあえず、先に行って待ってるわ」

「……。あなたが一番の悪党かもしれないわね」

「そんなことわかってたろ、昔っから」悲しげに目を伏せ、腕時計をあさみに差し出す。「こいつは返す。電池は替えたばかりだ。安モンなのによく動くわ。まさかこっちより長持ちしちまうとは思えもしなかったがな。いらなかったら夕季にでもやっというてくれ。ついでにあのバカに言っとけ。命は捨てるものでも拾うものでもない、つなぐモンだってよ」

ギッと桔平を睨みつけ、あさみが静かに銃を下ろす。

「……。もう少し、スマートにできなかったの……」

「……」

「あまりにも白々しいと、興が冷める」

「……。わりいな、俺の才能じゃここいらが限界だ」

「……つき合わされる身にもなってほしいわね」

「ぬかせ。ダイコンに限ってすぐ脚本にケチつけやがる。グダグダ言う前に自分の表現力を磨いとけ」

「……。メガリウム計画の成功が現在のメガルの礎となった。そして続く竜王計画、ガーディアン計画も、遠からず成就しようとしている。でもそこにある真実をいったいどれだけの人間が知っている

というのかしら」

「……。何が言いたい」

「本当の意味での三大計画を理解している人間はごくわずかしかない。竜王計画とガーディアン計画が一つなぎのプロジェクトであることすら、あなたは知らないはず」

「！」

桔平の目を見据えながら、左薬指からリングを抜き取るあさみ。それを机の上に置くと背中を向けて部屋から出て行こうとした。

「勝手にすればいい。私はもう知らない。責任はとってもらうから覚悟しておいて」

「ああ、わかってる。俺がおまえから力づくで奪い取っただけだ」あさみの背中を追いかける桔平の視線がしだいに下りていく。「ありがとう、あさみ」

「……」ショートカットが淋しげに揺れた。「気乗りのしない警護をさせてごめんなさい。感謝しています」

「札を言われるようなことはしてねえ。そのための特例人事だしな。それに……」顔を上げ、涼しげに笑った。「いや、何でもない」

「……」足を止め、あさみが静かに問いかける。「あなたの目的は何」

「何だったかな。忘れちゃった」

「ごまかさないで」

「言っただけでわかりやしねえよ」

「！」

「口にただけで消えちゃうような、ちっぽけなもんだからな」

「……」

ドアノブに手をかけ、一度は飲み込んだ言葉をあさみが口にする。「アスモデウスは単なるテスト・プログラムにすぎない。それに続く本当の脅威が押し寄せてきた時、私達は自分達の無力さを嫌でも思い知らされることになる」

「今でも充分思い知らされてんだがな」

「……メガルの新たなプロジェクトが進行している。あなたの知らない、世界を破滅へと導く悪魔のプロジェクト。それを止められるのは私達だけだということを覚えておいて。パンドラの箱を閉じられるのは、私達だけだと……」

光輔ら三人はアスモデウスと一進一退の攻防を続けていた。
海岸から先への進撃を何とか阻む。

メック・トルーパーは遠巻きにその様子を見守るだけだった。

「くっ……」

膝をついた海竜王を、一斉に襲いかかる死のシャワーから空竜王が救い出した。

「大丈夫、光輔！」

『……ああ、大丈夫。ちよつとくらくらするけど……。……』

「光輔」

『……。……』

「礼也、光輔の様子がおかしい。まだ体調がよくないみたい！」

両拳のクラッカーで攻撃をしのぎつつ、夕季の呼びかけに礼也が答える。

「俺が奴を引きつけておくから、おまえは光輔をメックのところまで運んでやってくれ」

大きく跳び上がり、ハンマーのようにナックル・ガードを蛇の尾へ叩きつけた。

『わかった……。』言葉を飲み込む夕季。『礼也、すぐに戻って来る。無茶しちや駄目だから』

「今さら無茶もクソもねえだろ」

『……。』

「わかった、わかった。無茶はしねえ。約束する。だから余計な心配はやめろって」

『……約束だから』

後方へ大きく退き、コクピット内で礼也が悪態をつく。

「まったく、てめえの方が無茶苦茶だってこといい加減気づけて」
『え、何』

「何でもねえ。早く……！」

その時、礼也の脳裏に流れ込む意識があった。

それは陸竜王から直接語りかけられるようであり、或いはずっと以前から知っていた記憶のようでもあった。

『礼也、今……』

夕季の呟きに振り返る。

「ああ、おまえもか」

『……俺も……』

『光輔』

「封印が解かれたのか……」

『え、封印って何？』

状況が飲み込めず戸惑いを隠せない二人へ向け、重々しく礼也が頷く。

「おい、ガーディアンを集束させるぞ」

『え？ 集束……』一泊置き、夕季もすべてを理解したようだった。

『わかった』

「光輔、もうしばらく辛抱しろ。ガーディアンさえ集束すれば、後は俺達に任せてくれりゃあいい」

『……わかった。何とか頑張ってみる』

「行くぞ！ 俺に合わせろ！」

『オッケー！』

『了解！』

直後、三体の竜王が光につつまれる。この世のすべてを鮮やかに浮き上がらせた激しい光の放射は、輝きを増しながら天空目がけて突き抜けていった。

赤と黄と青の三色の光の矢は上昇を続け、空中で集束しさらに光量を上積みしていった。

その眩さに木場達が目を細める。が、アスモデウスの暴力的な光

とはまるで逆の、優しく暖かな光だった。

希望の光。見る者すべてが、おそらくはそう形容したであろう。

光の円からしだいに露となる勇壮なる姿。

それは全長五十メートルを超す巨大な人がたのシルエットだった。

「あれは……」

司令室の最後列でディスプレイの映像を凝視したまま硬直してしまったしぶきが呟く。

その背後からのっそり現れた桔平が淡々と答えた。

「ガーディアンだ」

「ガーディアン……。あれが……」

「ああ。俺達の最後の砦だ……」

第十話 『決戦!』 11 (後書き)

ここへきて、ようやくメガリユーオーの登場です。前にもどこかで触れたような気がしますが、本来のタイトルです。なんとかかんとかメガリユーオー、絶倫禿人メガリユーオー3、みたいな感じで。当初コンセプトでは一話目から三人揃って会敵、その流れでメガリユーオー登場、ワンパターンかつライトな学園スパロボハーレム(?)でした。「おい、敵が来たぞ!」「明日からテストなのにぬね〜!」「だからって点数は甘くないわよ! (美人教師)」「とほほほー!」みたいなノリの。ですがプロットの段階でタイトルから連想できるものが当面何一つなく、タイトル変更した次第です。

3は別にいらなかったのですが、その時たまたま観ていたザンボッ○やらダイ○ーんやらのフィードバックでノリでつけてしまったのでしよう。こじつけ以外の何ものでもなく、今思うと必要ないですね。ちなみにタイトルとかサブタイとかあらずじとか、めっちゃ苦手です。ついでにペンネームとかも。しかし、十話のラスト近くまで引っ張ってようやくと主役メカ初登場って(それ何てダン○ーガ?)……

第十話 『決戦!』 12

地響きを立て大地に降り立つ巨大な影。その姿は陸竜王のフォルムを色濃く踏襲していた。ダークレッドを基調にブラウンと鮮やかなグリーンで彩られ、ブラックとシルバーのアクセントを織り交ぜる。さらなる装甲を施しディテールを増したシルエットからは、酷似ではないもののその血脈を充分に感じさせた。甲虫類の角のごとくそびえ立つ攻撃的な頭部の突起。その下から睨みつける両眼は赤く激しく光り輝く。胸部の装飾部分には黄橙色の光を宿し、全身に走り抜けるラインは青く発光していた。

叩きつけるようなアスモデウスの咆哮すらものともせず、ガーデイアンは大地を蹴って眼前の敵に挑みかかっていった。

静まり返る司令室の中、桔平が嫌悪するようにディスプレイを睨みつける。

同じく、ディスプレイの中の救世主に釘づけとなるしぶきをちらと見やった。

「まるで子供が考えたようなカッコいいロボですね……」

「ロボだか何だかわかったもんじゃねえがな」右肩を押さえ、桔平が不敵に笑ってみせた。「あれで瞬殺されちまったらおもしろすぎんだろ？」

「でしたら」桔平を振り返ろうともせず、しぶきが意味ありげに微笑む。「私達は笑ったまま最期を迎えられますね」

「すつとぼけたことぬかしてねえで、いい加減白状しちまえよ」

「はい?……」

二人の空間に不穏な空気が立ち込める。

「……」

「……」

「だから今日の色……」

「それだけはお答えできません」

「……。じゃ、メアド……」

「それもお答えできません」

「……。副司令命令でもか」

「はい」

「……このままじゃ死んでも死に切れねえ」

桔平を見上げ、しぶきがいたずらっぽく笑った。

「ずいぶんごゆっくりなさっておられましたね」

「……」

「肩、どうかされましたか？」

「んあ？ 焼き肉屋で猫に噛まれただけだ」

「そうですか。それは災難でしたね」

「おおよ、どうもメス猫とは相性が悪い。白熊なら焼いて食っちゃもうとこだが」

「そう言えば」ぽんと手を叩く。「局長も猫口っぽい感じですよね」

「……」

「？」

桔平もぽんと手を叩いた。

ケエエエーと威嚇し、アスモデウスが全身から死のシャワーを撃ち放つ。が、それらはすべてガーディアンの装甲に何の痕跡も残さず弾かれ消滅した。

振りかぶり力任せに殴りつけるガーディアンによって、アスモデウスの羊の顔が陥没する。

「よっしゃ、次！ ……？」

急激なパワーの低下を感じ取り、礼也が眉間に皺を寄せた。陸竜王のコクピット内と同じ環境で振り返る。右側に光輔、左には夕季が横一列に並ぶように配置されていた。

「何かあったのか、夕季」

同じく空竜王の中にいながらにして、実在しない集中コクピット内ですぐ隣の礼也へ夕季が顔を向ける。

「礼也、光輔の意識が飛んだ」

「何！」

右側へ視線を配る二人。そこには感応スティックを握りしめたまま、頭をたれる光輔の姿があった。

「光輔、光輔、しっかりしろ！」

「光輔！」

声は返らない。

礼也がギリと歯がみした。

『ポジションチェンジだ！』

桔平のがなり声が二人の耳を突き抜ける。

『礼也、夕季への依存度を上げろ。少しは光輔の負担が減るはずだ』

「仕方ねえ！」

「どういう意味！」

『ケンカは後にしろ、てめーら！』

「わかってるって」

「ポジションチェンジって、どうすれば…… あ、そう、か……」

『とにかく光輔と入れ替わることをイメージしろ。礼也はサポートだ』

「あいよ！」

「わかった！」

再び光玉につつまれるガーディアン。全体的にボディカラーの明るみが増し、黄と青の光の位置が入れ替わっていた。

「ガーディアンのスPEEDが上がったようです」

しぶきが桔平に振り返った。

「防御力は落ちるが今の光輔に負担をかけ続けるよりはましだ」拳を握りしめる。「一気にたたみかけろ、クソガキども！」

アスモデウスの全身が白色の光を帯びる。ガバツと開いた仮面の

口から撃ち出されたそれは、街をまるごと焼きつくすほどの膨大なエネルギーの塊となりガーディアンへと襲いかかった。

「礼也！」

夕季が身を乗り出す。光輔と夕季の配置が入れ替わっていた。

「ざけんな！ 狼牙拍！」

両足を前後に開き、ガーディアンが胸もとで二つの拳を激しくぶつけ合わせる。真紅の輝きを放つその中心部にアスモデウスの攻撃が集中し、バチバチと弾ける光の太い束が圧力となってガーディアンを押し潰そうとした。

辺り一帯が白濁した光の渦に巻き込まれる。凄まじいまでのエネルギーの洪水は空間を断裂しながら脇へ逸れ景色を削り、地に幾重もの穴を穿ち、天をも貫く柱となって吹き上がった。

それでもガーディアンは一步も退くことなく、大地に踵を埋め、ひたすらそのプレッシャーを受け止め続ける。

やがて狂気の光は吸収されるように勢いを失い、巻き起こる砂塵の後に無傷で立ちそびえる紅の巨人のシルエットだけを浮き上がらせた。

結んだ両拳を頭上高く掲げ、ガーディアンが太陽を背負い跳び上がる。アスモデウス目がけて振り下ろされた拳の先から光がほとばしり、弾き飛ばしたその巨体を追いかけるように光の残像が荒れ狂う海面を二つに割った。

「夕季、臥竜偃月刀だ」

「……」一瞬の間を経て、礼也からの意識を読み取ったように頷いた。「わかった」

雲を切り裂き手もとに集束する雷撃は、激しくスパークしながら縦に長く伸びて、ガーディアンの身長ほどもある長刀へと形を変えた。

「ぶっ殺す！」

懐深くかまえガーディアンが大地を蹴り上げる。踊るように切りかかるや、瞬く間にアスモデウスの全身を切りつけていった。

司令室全体が興奮のるつぼと化していた。そこにいる者全員、誰はばかることなく奇声をあげ、メガホン状に丸めた重要書類を拳とともに突き上げる。

その中でも最後列の二人の熱狂振りはとりわけ際立ったものだった。

「押しています。優勢です、ガーディアンが！」しぶきが上気した顔でまくしたてる。「押しまくっています！」

「よし、いけ！」肩の痛みも忘れ、鼻息荒い桔平のボルテージもマックスへと達する。「押して、押して、押しまくりまくれー！」

「押しマクリマクリステイですね！」

「おう、押しまくりまくりすていだ！……え！何て！」

「赤ふん効果ですね！」

「いや、だから、そういうの持ってねえし！」

「そうですか！ 私も勝負をかけたかいたったというものです！」

「何色だ！」

「それは無理です！」

「無理か！」

「はい！」

「おし、一氣にカタつけろ！勝負だ！」

「いけ！
頑張れ！」

「頑張れ！ やっちまえっ！」

「もう少し！」

「もう少しだ！
今だ！」

「そこっ、そこっ！」

「そこかつ！そこだなつ！」

「そう！　そこ！　ああ〜ん！」

「ああーん！
……。
……ああーん？」

「失礼いたしました」

へけけけけけけけ！

「気持ち悪っ！」

「恐縮です！」

瞬く間に両腕と悪魔の翼を切り落とされるアスモデウス。凍りついた仮面が悲痛なる不協和音を奏で、死に物狂いでガーディアンを吹き飛ばした。

「アスモデウスが海の方へ逃げていきます」

「逃がすな。ここで仕留めろ！」

しぶきの声をかき消す桔平の絶叫。

前のめりの夕季と礼也がアスモデウスを追いかける。

「逃げられる！」

「逃がさねえって！」

臥竜偃月刀を投げつけるガーディアン。それはアスモデウスの背中から腹部を貫き、竜の頭を真つ二つに叩き割った。

スピードを半減させながらも力ない咆哮を絞り出し、アスモデウスがなおも逃げようとする。

「夕季！ 弾効蒙衝打、いくぞ！」

「……何、そのネーミング」

「うっせえ、ほっときやがれ！ いくって！」

「わかった！」

ガーディアンが両腕を胸もとでクロスさせる。腕を後方へ振り払う勢いで、胸を張るように前へ突き出した。

「いけーっ！」

二人の絶叫とともに、胸の装飾部分から厚みのある光熱線が一直線に対象目がけて収束していく。

その膨大な熱量によってアスモデウスの全身がみるみる赤黒く変色する。ぼこぼここと沸騰するがごとく表皮が沸き立ち、めくれ上がり、数百の目や口が先を争うように破裂していった。

両側面の牛と羊の首が弾け飛び、裂けんばかりに開かれた口腔が断末魔の悲鳴をあげる。二歩、三歩と歩いた後、悪夢の巨魁は海面

にめり込むように倒れ伏した。

アスモデウスがピクリとも動かなくなっても、ガーディアンはかまえを解かない。

やがてその巨大な質量は海岸の砂に埋もれ、また海に面した部分は海水へと還り始めていった。

「アスモデウス活動停止……」

メガル司令部内に訪れる沈黙。

桔平がしぶきのディスプレイを覗き込んだ。

「カウンターは！」

「カウンター反応は……、ありません。消滅しました。……」一拍置き、慎重にそれを口にする。「……我々の勝利です」

「やった！」

「やったぞ！」

「勝ったぞ！」

一斉に湧き起こる歓喜の渦。

桔平が深く息を吐き出す。

「ようやく一回戦突破ってところか……」かたわらの椅子にどっかと座り、遠く海の彼方へと視線をやった。「……。次は……」

淡い光をまとい、ガーディアンが三つの光に分離する。

散開の後、再びそれぞれの竜王へと形を戻していった。

着地ももどかしく、空竜王から慌てて飛び出す夕季。うずくまっている海竜王のもとへと一目散に駆けつけた。

「光輔！」

外部パネルを開き特殊なコードを入力すると海竜王のハッチが静かに跳ね上がる。夕季がコクピットの中を覗き込んだ。

光輔は顔を伏せたまま微動だにしなかった。

夕季の表情が不安に染まる。

「光輔、光輔ー！」

その呼びかけにゆっくりと顔を上げる光輔。

「……夕季」

「光輔、大丈夫！」

「……。なんとか……」夕季を見て力なく笑った。「腹減ってんだけど、何か食うモン持ってない？」

目に涙を浮かべ、ほっと胸を撫で下ろす夕季。

「……知らない。早く出てくれば」

「出ていきたいのはやまやまなんだけど、力入らなくて……」

「世話焼かせないでよ」

夕季が手をさしのべ、光輔がそれにつかまった。

「悪い……」

引っ張りあげる夕季の足もとがふらつく。バランスを崩し、光輔が夕季にのしかかっていった。

「うわっ！」

「……」

光輔を上二人が抱き合う形となった。思わずそろって顔を赤らめる。

「……。何だよ。おまえもふらふらじゃんか」

「うるさい！」

「……。やっぱり睨むんだな、おまえって。ま、その方がほっとするけど」

「……。うるさい」

「あ、またあばら折れたかも」

「大丈夫、光輔！ ごめん……」

「嘘だけど」

「……。光輔っ！」

「す、す、すいません……」

「……」ふいに夕季が真顔になる。「どうしてまた来たの。もうやめるって言ったのに」

「あ、うん……」ばつが悪そうに後頭部をかく。「言い忘れたこと

があつてさ」

「……。何を？」

「うん……」卑屈な笑みを浮かべる。「な〜んちゃって、とか……」

夕季が口をへ字に曲げる。何も言わず光輔の耳をつねり上げた。
「だだだだっ！　ちぎれるっ、ちぎれちゃうって！」目尻に涙を
滲ませる。「やめて、ロールケーキおごるから！　だだだ！」

「……」

「……」

「……二つ」

「へ？　……わかった、二つおごる！」

夕季が光輔を解放する。

「ははっ……」

涙をちよちよ切らせ、光輔が、ふっ、と笑ってみせた。

それにつられるように夕季も笑った。

「夕季ー！　光輔ー！」

礼也の声に振り返る光輔と夕季。

礼也は全速力で走り寄り、その勢いのまま二人の間に飛び込んで
来た。

三人の頭を合わせるようにぎゅっと抱きつく礼也。

先に不快感をあらわにしたのは夕季だった。

「何っ……」

続く光輔。

「やめろ礼也、気持ち悪い……」

二人の肩に顔をうずめたまま礼也が力強く言い放った。

「俺達の勝ちだ！」

「……」

「……」

もう一度、今度は想いを逃がさぬように、噛みしめるように、ゆ
っくりとそれを口にした。

「俺達の、勝ちだ……」

顔を見合わせ、夕季と光輔が嬉しそうに頷き合った。

ふと海岸へ目線を移す夕季。

そこにはアスモデウスの痕跡はかけらもなく、暮れかかる夕陽に照らされたオレンジ色の波が静かに打ち寄せているだけだった。

第十話 『決戦!』 13

メガル本部はお祭り騒ぎの真っ最中だった。

帰還する三体の竜王とメック・トルーパーを職員総出で出迎える。あさみと風野の姿だけがそこには見あたらなかった。

デッキに降り立った光輔らのもとへ桔平が歩み寄って行く。

「よくやった、おまえら。ご褒美に焼肉おごってやる」後ろの木場に振り返った。「木場が」

涙で充血した両目をカッと見開く木場。「な!」

「メンドくせえな」ぼそりと礼也。「メロンパンでいいって」

「な!」桔平が木場へ振り返った。「あんなこと言ってやがるぞ、あいつ」

「いや、俺は一向にかまわんが……」

「せっかくの木場の好意をてめえは! もうジュースホルダ付けてやんねえからな」

「それは付けとけて……」

「もういい! もういい、光輔、夕季、こんな奴ほっというて行くぞ!」

「……」光輔、微妙。「桔平さん、あの店出入り禁止らしいすよ」

「え! マジか?」

「マジだ」

桔平と木場が情けない顔を見合わせる。

夕季がぼそつと呟いた。

「甘いものが食いたい……」

部屋に戻った夕季を笑顔で出迎える忍。

「お帰りなさい」

「ただいま」夕季も嬉しそうに笑った。

「やったね。さすがが妹。立派、立派」

「……。あたしだけじゃないから」

「謙遜しなさんなって。ほんとにすごいと思うよ。照れんな、照れんな」

「別に照れてるわけじゃ……」

「それに比べてあのバカどもは……」

「……。誰？」

「え？ あ、何でもないない。ごはん、すぐに温めるから、先にお風呂入ってな」

「……うん」

ふと思いついたように忍。

「そう言えばあんたもうすぐ誕生日だったね。何か欲しい物ある？」

「いい。別に」

「遠慮しなさんなって。買ったげるから言ってみな、今一番欲しいもの。新しいケータイ？ 前にデジカメ欲しいとか言ってたかったつけ」

「……」熟考モードの夕季。

楽しそうに忍が覗き込んだ。「何？」

「……メモリ」

「……。ああ、カード？」

「カー、ド？」

「あれでしょ。ケータイの中とかパソコンの外に挿すやつ？」

「……。パソコンの中に挿すやつ」

「はあ？」

雅が笑顔で光輔を出迎えた。涙ぐむ雅に笑いかける光輔。

「光ちゃん、お帰りなさい。お疲れ様」

「ああ。何とか帰ってこれた……」

「よかった。光ちゃん帰ってこなかったらどうしようかと思ってた

んだ」

「あ、うん……」

「じゃ、さっそくだけど花火の場所取りお願いね」

「ええ〜！」

「あれ、何それ」

「いや、こっちが何それなんだけど……」

建物の陰から礼也はその様子をうかがっていた。

ふっと笑い、立ち去ろうとするところへ雅の声が追いかけてくる。

「礼也君も、お疲れ様」

背中を向けたまま礼也が手を振った。

「ねえ、ちょっと待って」

「……？」

「礼也君、場所取りっ！」

「……」

二日後、メガル本部の大広間を使い、祝勝パーティが開かれることとなった。

マイクを握りしめ、すでに上機嫌の桔平。

「あゝ、テスト、テスト。みんな、よくやった。今日はとことん食って飲んで騒いで吐け〜！ 暴れて、暴れて、暴れまくれ。暴れまくりすていだ！ 俺が許す。俺があ……！」

料理を取りに来た、制服姿の夕季と目が合う。

「……」

「……」

小動物のようにこそと桔平が逃げていった。

大沼が木場に不思議そうな顔を向ける。

「何かあったんですかね？」

オレンジジュースをグイと飲み干す木場。

「さあな。！……」グラスを取りに来た忍と目が合い、小動物のようこそと逃げた。うにこそと逃げていった。

「何かあったのか？」

「知らないっス」

テーブルのジョッキビールを忍がグビッと飲み干した。

「……」

メック隊員達の集まるテーブルでは、恒例の『鳳順一郎裸踊り』が始まろうとしていた。

料理皿を片手に礼也に近づいて行く夕季。

「それお酒でしょ」

夕季同様、高校の制服姿のまま、ワインをラッパ飲みしながら礼也が上気した顔を向けた。

「知るかっ。こっちゃん、成人まで生きてられる保証だっ。ねえんだ」夕季のソーセージをつまみ食いする。「うめえな、この野郎。こんなモンに金かけんだったら、俺らに臨時ボーナスよこしやがれっ。賞状一枚と五千円分の図書カードっ。なめすぎだろ、実際。おい、てめえ、買え！」

「八掛けなら買ってもいい」

「はあ！ ふざけんな、こら！ 足もと見てんじゃねえぞ！」

「じゃあいらない」

「はあっ！ ……仕方ねえ」

あきれ顔の夕季。ふと眉を寄せ、心の片隅につかえていたしこりを口にした。

「……ねえ」

「あ？」

「……。あたし達、いったい何と戦ってたんだろう……」

「ああん！」ワインボトルを片手にじろりと夕季を睨めつけた。「なもん、悪モンに決まっ。てんだろ。俺らから大事なモンぶんどって、先っちょから尻尾まで悪いモンの塊だっ」

「……。そうとは言い切れないかも」

「んだあ！」

「あいつらは戦いが終わると、海に還り、土に還る。この星の中へ

融けて還っていく。ひよっとしたら、彼らの方が人類よりも先にこの星で何かを手にしていたのかもしれない。あたし達が彼らの大切なものを奪ってしまったのかもしれない……」

「んなの関係あるかって」

「！」

「誰がどんな理由で来ようと、俺らは俺らの大事なモン守るだけだつて。今さらどっちが先だとか、優先だとか、んな綺麗ごとと言えるような歴史刻んでねえだろ、俺達やよ」

「……」

「てめえ一人だけ汚れてねえってんなら別だがな。さんざん好き勝手やらかして、山削って、海汚して、エコだ何だ言たつて、今さら原始人に戻るわけじゃねえ。てめえらが生きてく分にはかえられねえだろが。生きるために肉だって魚だって食う。植物だって野菜だって育ってんだから命あるみてえなモンだろ。で、奴らがありがたがって俺らに食われてるってのか？ なわけねえだろ。食われるやつらにとっちゃ、殺生もなんも変わんねえって。害虫だって人間襲うためにそこに巣作ってるわけじゃねえ。逆に人間が自分らの都合悪いモン勝手にそう決めつけて攻撃してるだけだ。やられる方にとっちゃ、どんな理由があつたって理不尽なことにかわりねえ。俺らだっておんなじだろ。食われたくねえから、死にたくねえから必死にもがく。そんだだけだ」

「……」ずっと礼也に注目していた夕季が眉を寄せた。「そうだね。そんな綺麗ごと言ってるような余裕、今のあたし達にはない」「たりめえだつて。ぶってんじゃねえぞ。おぼこいツラしてん奴に限って乱れまくるモンだつての」

「……何それ」

「ああ、一から説明してほしいのか！」

「知らない」切なそうに礼也の顔を見上げる。「何だか頭悪そうだから」

「おう、おう！ てめえはバケモンに氣い遣う余裕があんならもっ

と目上の人間うやまえって!」

「目上じゃないし」軽蔑のまなざし。「酔っ払い、嫌いだから」
「ああっ!」

後悔するような顔つきで夕季がそっぽを向く。

そこへ忍が抱きついてきた。

「ゆききいいい」

べろんべろんだった。

露骨に顔をしかめる夕季。

「臭い……」

「顔真っ赤だぞ、あんた」

「大事なお話があります!」二人を見下ろし、してやったりと言わ
んばかりに微笑む。「何を隠そう、今私はお酒を飲んでいるのです
!」

「いや、わかってるって」

「だから赤くて臭かったんだよ。照れてるわけじゃなかったんだな、
これが」

「だからわかってるってよ」

「びっくりした?」

「びっくりだわ……」

「やめてよ、お姉ちゃん。まだお酒とか飲んじゃ駄目でしょ」

「いいの、いいの、かたいこと言いなさんなって。あんたも飲め飲
め。あたしがあ、許すマスカラー!」

夕季の頭をくしゃくしゃとかきまわす。髪止めでまとめた部分が
アンテナのように盛り上がった。

「あ、アホ毛。萌え〜! 夕季萌え〜!」

「やめてってば。いい加減にして」

口をへの字に結び、夕季が忍を突き放す。

すると忍の唇がわなわなと震え出した。

「……そんなふう言われちゃうと、お姉ちゃん悲しくなっちゃう
な……」

「あ、ごめ……」

「悲ぴーっ！ まんもす悲ぴー！ しの坊ショックー！」

「……」

「お、やってんじゃん、れーや。許すマス！」

「ろれつまわってねえぞ」

「だけど子供のくせにお酒飲むのは感心しませんな。許しません！
そこになおれば！」

「今、許すつつたじゃねえか……」

「だーいじょうぶ！ 後でちゃんと学校に言っというてやつから心配
すんなってばよ」

「……あのな」

「お姉ちゃん、いい加減にした方が……」

「ほおれえ！」

ビール瓶を掲げ、夕季の頭からドバドバと浴びせかける。

「ああー、もう！」

肩を怒らせ夕季がフロアから出て行った。

「監督、優勝おめでとうございませうす！」バンザイの後、トロンとした目つきで礼也を見つめる。「うい、マスター、あたしもワイン
！」

「誰に言っただって……」

「なかったらいいちこかドンペリでもいいです！」

「ドンペリつつうか、ドン引きだって。飲みすぎだろ」

「ビール二本飲んだだけだよーん」

「んで、それかよ」

「その前に中ジョッキで三杯と大ジョッキ五杯と芋焼酎をボルトで
三本。あと高そうなお酒をマスで何杯か飲んでマス。さあ、全部で
どんだけ飲んだでしよー！」

「致死量だろ……」

「やだもー、おっす、オラ、ドンペリとか聞くとわくわくすっぞ！
ねえかあ、そんないいモン！ 飲んでみてえー！」

「……すげえ垂れ流しっぷりだな。そんなみつともねえ酒乱、マンガにも出てこねえぞ」

「おぼこいツラしてる女に限って乱れまくるモンだったの。ぶってんじゃねえわよ！」

「……いや、確かにそうだがよ」

「別にあんたはメロンパンでも食ってればいいんだからね！」

「言われなくても食うって……」

「今のみための、ツンドレってんだよ。知ってた？」

「何だ、ツンドレって……」

「ツンドレだって！ 何それ？ おかしい！ 酔いどれかつ！」

「あんたがな……」

「飲めば飲むほどつらくなる！」

「つらいんだったらやめとけよ」

「酔拳！」

「いや、そりゃ酔拳じゃねえ」

「あたしが酔拳で礼也の首の骨へし折るから、れーやは『痛ええ』って叫んで」

「それで俺に何のメリットがある」

「もうっ！」

「真顔でぶち切れてやがる理由を言えって……」

「ひっく！ ういゝ、きぼち悪……。あれゝ、光ちゃんはどうしたの？」

忍の何気ない一言。

ん、と礼也が顔を向けた。

「あいつは来ねえよ」

「なんで」

「花火大会行くんだと」

「花火たいかい？」

「おう。雅と一緒にだって」

「で、れーやはやけ酒なんだ。きゃはははゝ、……うっ！」

「何わけわかんないこと言ってんだって。ぶっ壊れすぎだぞ、酔っ払いが」

「酔っ払ってねえですよ！」へべれけ。「あゝみゝまゝ！」

「……」

グビ、とワインを注ぎ込む礼也。

ふいに忍が真顔になった。

「やっぱり、降りるんだってね、光ちゃん。残念だね、結構いいチムだと思ったのに」

「……」

「仕方がないよ」

タオルで頭を拭きながら夕季がやって来た。

「あいつが決めたことだから」

「……」

じつと夕季の顔に注目する忍。

「しむらうしろ」へべれけモードでまたビールを頭からかけた。

「ビールをあビール！なんちってさーっ！」

「ああああー！せっかく洗ってきたのに！」

「んにあはははー！ひつくしんっ！……うぼっ、なんかきた……」

……おえぷ……」

街では恒例の花火大会が催されていた。

赤、青、黄、様々な大輪の花の輝きに感嘆の声がもれる。

たった二日前まで人類が破滅の危機にさらされていたとは到底思えないほどの、ゆるやかさをかもし出していた。それは到底思

そこにあるのは平和そのものだった。

その意味を特別なものととらえる人間はごくわずかにすぎない。それが当たり前であると認識し続ける限り、この世界に本当の平和は訪れないのだろう。

だが、それは今はまだどうでもいいことだった。

川べりに腰を下ろし、光輔と雅は並んで星空を見上げていた。

色とりどりの光の花が夜空に連続して広がる。それは祝砲のように遠く彼方まで鳴り響いた。

第一部完

第十話 『決戦!』 13 (後書き)

どうにかこうにか、第一部として終了することができました。情報開示としてはかなりシブチンで、全体の二、三割くらいかなあ、というところですよ。

このあと二部、三部と勝手に続いていくわけですが、文化祭あり、夏休みあり、クラス替えあり、初恋のお兄ちゃん出えの、クリスマス大会ありいの、ロボはどこへいった! だの、オヤジギャグ満載のゆるゆる王道学園コメディ展開? が…… (みんな死んじゃったり、生き返っちゃったり、裸で空を飛んじゃったり、戦士達の戦いはこれからも続いちゃったり……)。

また露呈する機会があれば、懲りずにお目通しのほどをお願い申し上げます。

長々とおつきあいいただきまして、誠にありがとうございました。

EDは『君のために○を』 (積恥……)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4886c/>

プロジェクト・メガル3

2010年10月8日13時29分発行